

# 袖ヶ浦市東上泉遺跡・文脇遺跡

—主要地方道千葉鴨川線（袖ヶ浦市高谷）県単道路改良事業  
埋蔵文化財発掘調査報告書3—

令和2年2月

千葉県教育委員会

そでがうらしひがしかみいすみいせき ふみわきいせき  
袖ヶ浦市東上泉遺跡・文脇遺跡

—主要地方道千葉鴨川線（袖ヶ浦市高谷）県単道路改良事業  
埋蔵文化財発掘調査報告書3—





## 序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの諸活動に加え、平成25年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第33集として、主要地方道千葉鴨川線道路改良事業に伴って実施した袖ヶ浦市東上泉遺跡ならびに文脇遺跡の発掘調査報告書です。調査では、旧石器時代から中・近世に至る多数の遺構・遺物が検出されました。このうち旧石器時代では、2つの文化層から石器が出土し、弥生時代から古墳時代については、竪穴住居跡をはじめとする遺構や遺物が多数検出されるなど、当該地区の様相を知る上で貴重な成果が得られました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

令和2年2月

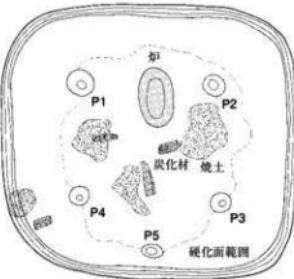
千葉県教育庁教育振興部  
文化財課長 大森 けい子



## 凡　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部君津土木事務所による主要地方道千葉鴨川線（袖ヶ浦市高谷）県単道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県袖ヶ浦市野里字船作1,370ほかに所在する東上泉遺跡（遺跡コード229-026）ならびに、同市野里1,519-1の一部ほかに所在する文脇遺跡（遺跡コード229-036）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、平成23年度～平成24年度は千葉県県土整備部の委託を受けて公益財団法人千葉県教育振興財團（以下、財團）が、平成25年度～令和元年度は千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、実施期間、担当者等は、本文中に記載した。
- 5 本書の執筆分担は次のとおりで、編集は大谷弘幸が行った。  
第1章、第2章第1節・第3節1～5、第3章、第4章第2節：大谷弘幸  
第2章第2節、第4章第1節：矢本節朗  
第2章第3節6：落合章雄
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、袖ヶ浦市教育委員会、袖ヶ浦市郷土博物館、千葉県県土整備部道路整備課、同君津土木事務所は多くの方々から御指導、御協力を得た（敬称略）。
- 7 本書で使用した座標は日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位は全て座標北である。
- 8 本書で使用した地形図は下記のとおりである。  
第1図：国土地理院発行 1/50,000 地形図「姉崎」 平成19年  
第2・5・122図：袖ヶ浦市発行 1/2,500 袖ヶ浦市地形図No27・32 平成5年  
第4図：国土地理院発行 1/25,000 地形図「上総横田」「姉崎」 平成19年  
9 図版1の遺跡周辺航空写真は、京葉測量株式会社による平成元年1月29日撮影のものを使用した。
- 10 掘図のスケールは、竪穴住居跡1/80、土坑1/40、溝状遺構・石器分布図1/100、土器復元実測図1/4、土器断面実測図・土製品1/3、石器実測図4/5、金属製品1/2、錢貨1/1を基本とし、その他必要に応じて示した。
- 11 掘図の竪穴住居跡平面図中に使用した破線及びトーン等は、右図のとおりである。また、そのほかのトーン及び記号の用例は、各図又は本文中に示したとおりである。遺物実測図中、纖維入りの縄文土器は断面に黒丸のマークを入れた。須恵器は断面を黒塗りとした。弥生土器・土師器の赤彩はその部分を赤く塗って表現した。
- 12 本書で使用した遺構番号は、全て遺構種別記号と3桁の数字の組合せにより付し、平成23年度の調査から平成26年度の調査まで連番とした。遺物への注記は調査時の遺構名で行っている。
- 遺構種別記号は次の通りである。

S I : 竪穴住居跡 S K : 土坑 S D : 溝状遺構 S X : ピット群





# 本文目次

## 第1章 はじめに

第1節 調査の経緯と方法..... 1

1 調査の経緯と経過..... 1

2 調査の方法..... 4

第2節 遺跡の位置と環境..... 5

1 遺跡の位置と地理的環境..... 5

2 周辺の遺跡と歴史的環境..... 5

## 第2章 東上泉遺跡

第1節 調査の概要..... 9

第2節 旧石器時代..... 14

1 周辺地形と基本層序..... 14

2 概要..... 16

3 第Ⅰ文化層..... 19

4 第Ⅱ文化層..... 69

5 その他の石器..... 81

第3節 純文時代以降の遺構と遺物..... 87

1 堅穴住居跡..... 87

2 土坑..... 112

3 溝状遺構..... 126

4 ピット群..... 132

5 遺構出土遺物..... 132

6 上層出土石器..... 134

## 第3章 文脇遺跡

第1節 調査の概要..... 139

## 第4章 まとめ

第1節 旧石器時代..... 141

第2節 純文時代以降..... 142

## 写真図版

報告書抄録..... 卷末

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置.....	1	第35図 第4ブロック出土石器6.....	48
第2図 調査区割と調査年次.....	3	第36図 第5ブロック器種別・母岩別分布.....	50
第3図 グリッド配置図.....	4	第37図 第5ブロック出土石器.....	51
第4図 東上泉遺跡・文脇遺跡と周辺の遺跡.....	6	第38図 第6ブロック器種別分布.....	53
東上泉遺跡		第39図 第6ブロック母岩別分布.....	54
第5図 東上泉遺跡上層確認トレンチ配置図.....	10	第40図 第6ブロック出土石器1.....	55
第6図 東上泉遺跡上層遺構配置図.....	11	第41図 第6ブロック出土石器2.....	56
第7図 遺跡周辺地形と下層調査状況.....	13	第42図 第6ブロック出土石器3.....	57
第8図 調査周辺地形と基本層序.....	15	第43図 第6ブロック出土石器4.....	58
第9図 旧石器時代遺物分布状況.....	17	第44図 第6ブロック出土石器5.....	59
第10図 第1ブロック器種別分布.....	20	第45図 第7ブロック器種別・母岩別分布.....	61
第11図 第1ブロック母岩別分布.....	21	第46図 第7ブロック出土石器1.....	62
第12図 第1ブロック出土石器1.....	22	第47図 第7ブロック出土石器2.....	63
第13図 第1ブロック出土石器2.....	23	第48図 第8・9・10ブロック器種別分布.....	65
第14図 第1ブロック出土石器3.....	24	第49図 第8・10ブロック出土石器.....	67
第15図 第1ブロック出土石器4.....	25	第50図 単独出土器種別分布.....	68
第16図 第1ブロック出土石器5.....	26	第51図 単独出土石器.....	68
第17図 第2ブロック器種別分布.....	28	第52図 第11ブロック器種別・母岩別分布.....	70
第18図 第2ブロック母岩別分布.....	29	第53図 第11ブロック出土石器.....	71
第19図 第2ブロック出土石器1.....	30	第54図 第12ブロック器種別・母岩別分布.....	72
第20図 第2ブロック出土石器2.....	31	第55図 第12ブロック出土石器.....	73
第21図 第2ブロック出土石器3.....	32	第56図 第13ブロック器種別・母岩別分布.....	75
第22図 第2ブロック出土石器4.....	33	第57図 第13ブロック出土石器1.....	76
第23図 第2ブロック出土石器5.....	34	第58図 第13ブロック出土石器2.....	77
第24図 第2ブロック出土石器6.....	35	第59図 第13ブロック出土石器3.....	78
第25図 第2ブロック出土石器7.....	36	第60図 第14ブロック器種別・母岩別分布.....	80
第26図 第3ブロック器種別・母岩別分布.....	38	第61図 第14ブロック出土石器.....	81
第27図 第3ブロック出土石器.....	39	第62図 その他の石器.....	82
第28図 第4ブロック器種別分布.....	41	第63図 SI-001と出土遺物.....	88
第29図 第4ブロック母岩別分布.....	42	第64図 SI-002.....	89
第30図 第4ブロック出土石器1.....	43	第65図 SI-002出土遺物.....	90
第31図 第4ブロック出土石器2.....	44	第66図 SI-003と出土遺物.....	91
第32図 第4ブロック出土石器3.....	45	第67図 SI-003' と出土遺物.....	92
第33図 第4ブロック出土石器4.....	46	第68図 SI-004と出土遺物.....	93
第34図 第4ブロック出土石器5.....	47	第69図 SI-005.....	93

第70図	SI-006と出土遺物	95	第98図	SK-013A・B	119
第71図	SI-007と出土遺物	97	第99図	SK-014と出土遺物	119
第72図	SI-008と出土遺物	98	第100図	SK-015	121
第73図	SI-009と出土遺物	99	第101図	SK-016A・B・C	121
第74図	SI-010と出土遺物（1）	101	第102図	SK-017と出土遺物	121
第75図	SI-010出土遺物（2）	103	第103図	SK-018	121
第76図	SI-011と出土遺物	103	第104図	SK-019と出土遺物	123
第77図	SI-012	103	第105図	SK-020	123
第78図	SI-013と出土遺物	105	第106図	SK-021・022・023・024と出土遺物	123
第79図	SI-014	105	第107図	SK-025・026	125
第80図	SI-015と出土遺物	107	第108図	SK-027	125
第81図	SI-016と出土遺物	107	第109図	SK-028	125
第82図	SI-017と出土遺物	108	第110図	SK-029	125
第83図	SI-018と出土遺物	110	第111図	SD-001	127
第84図	SI-019と出土遺物	110	第112図	SD-002・003と出土遺物	128
第85図	SI-020	111	第113図	SD-004	129
第86図	SK-001	113	第114図	SD-005Aと出土遺物	129
第87図	SK-002	113	第115図	SD-005B	129
第88図	SK-003	113	第116図	SD-006・007	130
第89図	SK-004と出土遺物	113	第117図	SD-008	131
第90図	SK-005	115	第118図	SX-001と出土遺物	133
第91図	SK-006	115	第119図	上層遺構外出土遺物	
第92図	SK-007A・B・C・Dと出土遺物	115		（土器類・金属製品）	134
第93図	SK-008A・B	117	第120図	上層出土遺物（石器類）	135
第94図	SK-009	117		文脇遺跡	
第95図	SK-010	117	第121図	文脇遺跡土層断面図	139
第96図	SK-011	117	第122図	文脇遺跡確認トレンチ配置図	140
第97図	SK-012と出土遺物	119			

## 表 目 次

第1表	縄文時代以降遺構一覧表	12	第7表	第I文化層第4ブロック組成表	41
第2表	第I文化層石材別器種組成	18	第8表	第I文化層第5ブロック組成表	52
第3表	第II文化層石材別器種組成	18	第9表	第I文化層第6ブロック組成表	53
第4表	第I文化層第1ブロック組成表	27	第10表	第I文化層第7ブロック組成表	60
第5表	第I文化層第2ブロック組成表	36	第11表	第I文化層第8ブロック組成表	66
第6表	第I文化層第3ブロック組成表	37	第12表	第I文化層第9ブロック組成表	66

第13表	第Ⅰ文化層第10ブロック組成表	66	第20表	掲載土器観察表	136
第14表	第Ⅱ文化層第11ブロック組成表	69	第21表	掲載土製品観察表	138
第15表	第Ⅱ文化層第12ブロック組成表	73	第22表	掲載金属製品観察表	138
第16表	第Ⅱ文化層第13ブロック組成表	74	第23表	掲載銭貨観察表	138
第17表	第Ⅱ文化層第14ブロック組成表	79	第24表	掲載石器観察表	138
第18表	第Ⅰ文化層属性表	83	第25表	掲載石製品観察表	138
第19表	第Ⅱ文化層属性表	86			

## 図版目次

図版1	遺跡周辺航空写真	SI-012
	東上泉遺跡	SI-013
図版2	H23年度調査区（南東から）	SI-014
	H23年度調査区（南から）	図版7 SI-015
図版3	H23年度調査区全景（1）	SI-016遺物出土状況
	H23年度調査区全景（2）	SI-016、SK-017
図版4	H23年度調査前状況	SI-018
	47AF-38ほか（南から）	SI-019
	47AG-42ほか（南西から）	SI-020
	46AF-85断面（北から）	SK-011
	46AG-50断面（東から）	SK-012遺物出土状況
	47AG-01（南から）	図版8 SK-012
	47AG-00ほか（北西から）	SK-013
	47AG-00ほか（東から）	SK-014遺物出土状況
図版5	47AG-00ほか（南東から）	SK-014
	SI-001	SK-015
	SI-002	SK-016
	SI-003	SK-018
	SI-004	SK-019
	SI-005	図版9 SK-020
	SI-006遺物出土状況	SK-021～024
	SI-006	SK-025・026
図版6	SI-007	SD-002・003
	SI-008	SD-004
	SI-009	SD-006
	SI-010	SD-007（1）
	SI-011	SD-007（2）

- 図版10 旧石器時代石器（1）
- 図版11 旧石器時代石器（2）
- 図版12 旧石器時代石器（3）
- 図版13 旧石器時代石器（4）
- 図版14 旧石器時代石器（5）
- 図版15 旧石器時代石器（6）
- 図版16 旧石器時代石器（7）
- 図版17 旧石器時代石器（8）
- 図版18 旧石器時代石器（9）
- 図版19 旧石器時代石器（10）
- 図版20 旧石器時代石器（11）
- 図版21 上層出土遺物（1）～遺構出土～
- 図版22 上層出土遺物（2）～遺構出土～
- 図版23 上層出土遺物（3）～遺構・遺構外出土～
- 図版24 上層出土遺物（4）～遺構出土～
- 図版25 上層出土遺物（5）～遺構出土～
- 図版26 上層出土遺物（6）～遺構出土～
- 図版27 上層出土遺物（7）～遺構外出土～  
上層出土遺物（8）～金属製品～
- 図版28 上層出土遺物（9）～石器～  
文脇遺跡
- 図版29 第1トレンチ（西から）  
第6トレンチ（北西から）  
下層第1グリッド断面（南から）



# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の経緯と方法

### 1 調査の経緯と経過（第1図）

千葉県県土整備部は、袖ヶ浦市上泉地区、野里地区における主要地方道千葉鴨川線のバイパス新設工事を計画し、事業区域内の路線線上に所在する埋蔵文化財の有無について、千葉県教育委員会に照会した。当該用地内は東上泉遺跡ならびに文脇遺跡を縦断することから、遺跡の取扱いについて千葉県教育委員会と千葉県県土整備部との間で慎重な協議が重ねられた。その結果、現状保存が困難な部分については、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることになった。東上泉遺跡の調査は平成23年度・平成24年度には財團法人千葉県教育振興財団（現・公益財團法人千葉県教育振興財団、以下原則「財団」）に委託して実施され、平成25年度・平成26年度には千葉県教育委員会が実施した。また、文脇遺跡の調査は令和元年度に千葉県教育委員会が実施した。

整理作業は、平成29年度から千葉県教育委員会が行い、令和元年度に報告書刊行となった。

発掘・整理作業の組織、期間、内容、担当者等は、次のとおりである。



第1図 遺跡の位置 (1:50,000)

発掘調査 平成23年度 東上泉遺跡（2） 財団法人千葉県教育振興財團実施

調査研究部長 及川淳一 中央調査事務所長 白井久美子

調査期間 平成24年1月10日～平成24年3月2日

調査面積 規模 3,424m<sup>2</sup> 確認調査 上層340m<sup>2</sup>／3,424m<sup>2</sup>

本調査 上層1,360m<sup>2</sup>

調査担当者 上席研究員 森本和男

平成24年度 東上泉遺跡（2）－2 公益財団法人千葉県教育振興財團実施

調査研究部長 関口達彦 調査2課長 橋本勝雄

調査期間 平成24年11月1日～平成25年1月11日

調査面積 規模 3,424m<sup>2</sup> 確認調査 下層229m<sup>2</sup>／3,424m<sup>2</sup>

本調査 上層885m<sup>2</sup> 下層323m<sup>2</sup>

調査担当者 主任上席文化財主事 加藤正信 山田貴久

平成25年度 東上泉遺跡（2）－3 千葉県教育庁教育振興部文化財課実施

文化財課長 湯淺京子 副課長 金丸誠 発掘調査班長 蜂屋孝之

調査期間 平成25年9月2日～平成25年10月2日

調査面積 規模 3,424m<sup>2</sup> 本調査 下層330m<sup>2</sup>

調査担当者 主任上席文化財主事 加藤正信

平成26年度 東上泉遺跡（3） 千葉県教育庁教育振興部文化財課実施

文化財課長 永沼律朗 副課長 金丸誠 発掘調査班長 蜂屋孝之

調査期間 平成26年10月17日～平成26年10月30日

調査面積 規模 184m<sup>2</sup> 確認調査 上層184m<sup>2</sup>／184m<sup>2</sup> 下層8m<sup>2</sup>／184m<sup>2</sup>

本調査 上層184m<sup>2</sup>

調査担当者 主任上席文化財主事 香取正彦

令和元年度 文臨遺跡（8） 千葉県教育庁教育振興部文化財課実施

文化財課長 大森けい子 副課長 高梨俊夫 発掘調査班長 大内千年

調査期間 令和元年6月17日～令和元年6月28日

調査面積 規模 1,450m<sup>2</sup> 確認調査 上層145m<sup>2</sup>／1,450m<sup>2</sup> 下層8m<sup>2</sup>／1,450m<sup>2</sup>

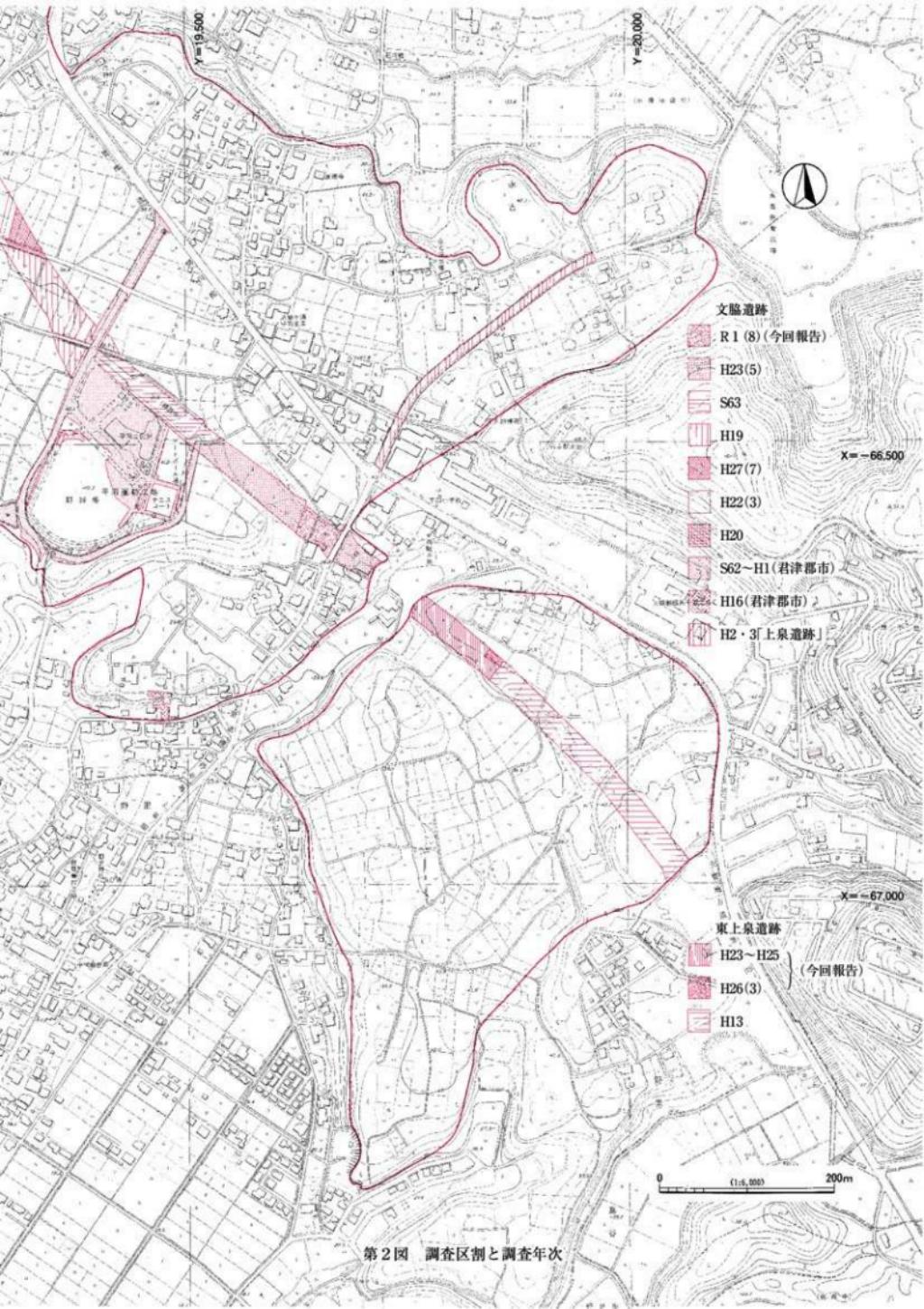
調査担当者 主任上席文化財主事 大谷弘幸

整理作業 平成29年度 千葉県教育庁教育振興部文化財課実施

文化財課長 萩原恭一 副課長 島立桂 発掘調査班長 山田貴久

整理内容 水洗・注記、記録整理の一部

整理担当者 主任上席文化財主事 高梨友子



第2図 調査区割と調査年次

**平成30年度** 千葉県教育庁教育振興部文化財課実施

文化財課長 古泉弘志 副課長 加納実 発掘調査班長 山田貴久

整理内容 記録整理～原稿（下層）

記録整理の一部～拓本の一部（上層）

整理担当者 主任上席文化財主事 矢本節朗（下層）・大谷弘幸（上層）

**令和元年度** 千葉県教育庁教育振興部文化財課実施

文化財課長 大森けい子 副課長 高梨俊夫 発掘調査班長 大内千年

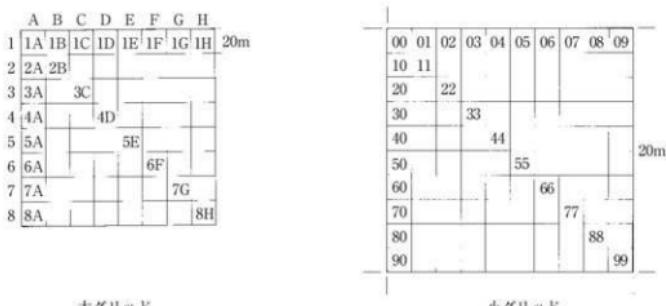
整理内容 拓本の一部～報告書刊行（東上泉遺跡）

記録整理～報告書刊行（文脇遺跡）

整理担当者 主任上席文化財主事 大谷弘幸

## 2 調査の方法（第3図）

東上泉遺跡ならびに文脇遺跡の発掘調査にあたっては、昭和62年度～平成元年度に財團法人君津郡市文化財センターにより調査された地区や、昭和63年度に財團法人千葉県文化財センター（現・財團）により調査された地区など、両遺跡の既調査区も包括するようなグリッド設定を行った。日本測地系座標IX系のX = -65.800m、Y = 19.200mを起点として、20mごとに南に1、2、3…、東にA、B、C…X、Y、Z、AA、AB、AC…とする20m四方の大グリッドを設定し、数字とアルファベットを組み合わせて1A、1B、1C…のように呼称した。さらに大グリッドの中には、それぞれ2m四方の小グリッドを設定し、起点となる北西隅を00とし、東に1の位を増して01、02、03…、南に10の位を増して10、20、30…とし、00から99までの番号を付した。これにより、大グリッドと合わせて「1B-12」のように表示することとし、遺構・遺物の位置はこの方眼網に基づいて記録した。なお、東上泉遺跡に位置する47AG-00は、日本測地系座標でX = -66.720.0000、Y = +19.820.0000であり、世界測地系変換値ではX = -66.364.2112、Y = +19.526.2488、北緯35°24'05"、東経140°02'53"である。また、文脇遺跡に位置する41Y-00は、日本測地系座標でX = -66.600.0000、Y = +19.660.0000であり、世界測地系変換値ではX = -66.244.2084、Y = +19.366.2519、北緯35°24'09"、東経140°02'47"である。



第3図 グリッド配置図

発掘調査は、はじめに上層の確認調査と本調査を実施した。確認調査は、幅2mのトレンチを対象面積の10%程度を目途に設定して、遺構や遺物の検出状況を把握し、本調査範囲を決定して本調査を実施した。なお、東上泉遺跡（3）については、隣接するこれまでの調査成果から対象地全域に遺構が展開することが予想されたため、確認調査を行わず全域本調査範囲とした。本調査に当たっては、表土除去後遺構覆土の土層観察用のベルトを設定して掘り下げ、土層断面や平面図などの記録を作成した。

上層本調査が終了したのち、2m×2mのグリッドを設定して下層の確認調査を行った。また、遺物の集中が認められた範囲については、本調査を実施した。

なお、東上泉遺跡の基本層序については第2章第2節に、文脇遺跡の基本層序については第3章第1節に明示した。

このほか、遺構番号ならびに遺構種別記号は、凡例に示したとおりである。

## 第2節 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の位置と地理的環境（第4図）

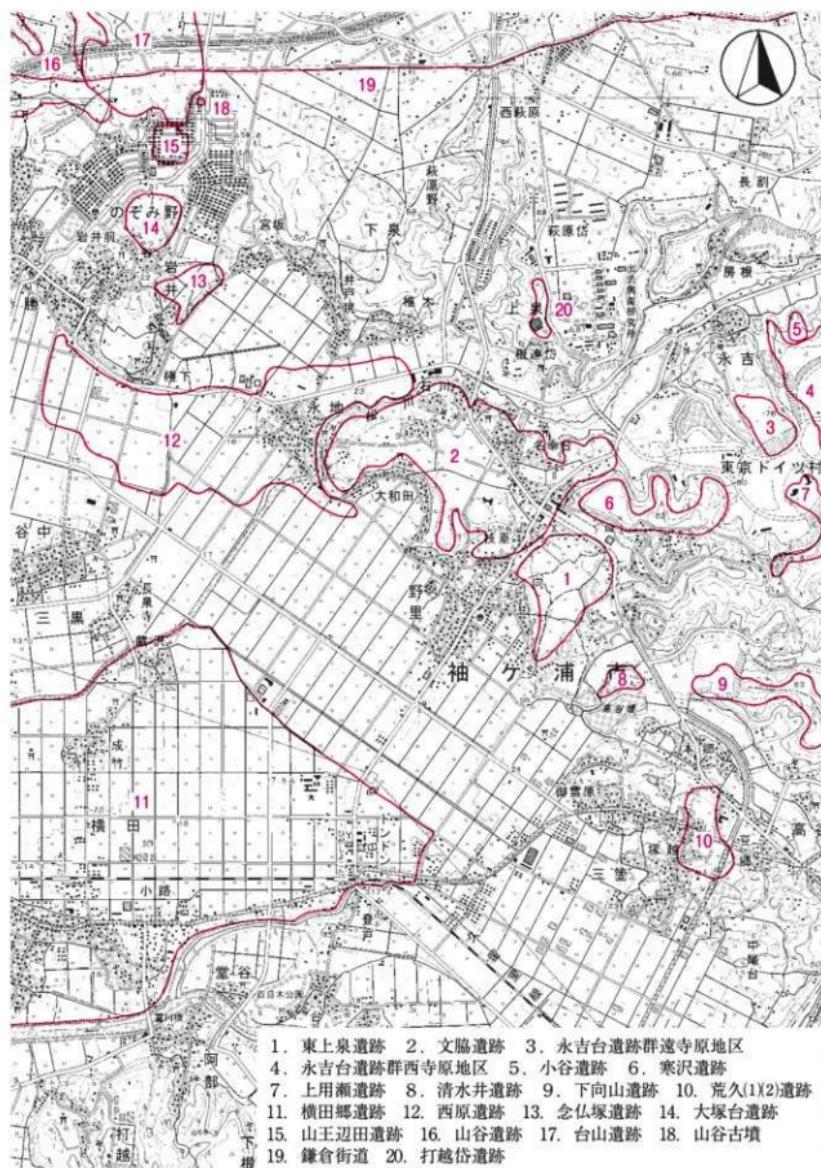
本遺跡の所在する袖ヶ浦市は、東京湾に面した房総半島西側のはば中央に位置している。市域は北部から東部にかけては市原市と、東部から南部にかけては木更津市と境を接している。その地形は、市中央部を流れる小櫃川によって形成された沖積地と、同河川を挟んで南北に広がる台地とに分けられる。沖積地北側の台地は下総台地の南縁部に当たり、養老川と小櫃川によって浸食された台地部分は袖ヶ浦台地と呼ばれ、標高30m～60mを測る。小櫃川は清澄山系を水源に、幾筋もの支流を交えながら蛇行を繰り返し、房総丘陵を開析しつつ北流する。その先、袖ヶ浦市堂谷付近に至って流れを西に変え、広大な沖積地を形成しながら東京湾へと注ぐ。この小櫃川周辺の沖積地は、現在でも肥沃な田園地帯をなしている。

東上泉遺跡ならびに文脇遺跡は、小櫃川が流路を西に変える屈折点より3kmほど北東に位置する台地上にある。北西側は小櫃川の支流松川によって画され、北東側は比高差40mを測る急峻な丘陵部へと続く。両遺跡の所在する台地は、ほぼ平坦でまとまった広さをもつ河岸段丘低位面で、標高は40m～41mを測る。また、沖積地との比高差は20m前後である。東上泉遺跡と文脇遺跡は同じ台地上に隣接して所在し、幅45m、深さ9mほどの浅い谷によって隔てられているものの、地理的・歴史的にも両遺跡は密接な関係を有するものと考えられる。

### 2 周辺の遺跡と歴史的環境

ここでは東上泉遺跡と文脇遺跡を中心として、調査の行われた遺跡に照らして周辺地域の歴史的環境を述べることとする。

旧石器時代の遺跡は、近年の発掘調査の増加により、徐々に検出事例が増加しつつある。東上泉・文脇遺跡の東側、松川の上流左岸に位置する小谷遺跡<sup>[1]</sup>からは、Ⅲ層下部から頁岩製スクレイパー、頁岩製石錐など56点の石器が出土した。隣接する永吉台No.2遺跡<sup>[2]</sup>からも、12か所に及ぶ石器集中地点が検出され、521点の石器が出土している。石器集中地点の出土層位もⅢ層3か所、Ⅲ層・Ⅳ層1か所、Ⅳ層・V層6か所、V層1か所、VI層1か所と立川ローム層上部のまとまった資料となっている。また上用瀬遺跡<sup>[3]</sup>では、出土した槍先形尖頭器の中央稜線付近に着柄時に使用されたと考えられるタール状の付着物が確認でき、石器の使用方法を推定する貴重な資料となっている。東上泉・文脇遺跡の南側に位置する清



第4図 東上泉遺跡・文脇遺跡と周辺の遺跡 (1:25,000)

水井遺跡<sup>[4]</sup>からは、Ⅲ層～Ⅶ層の範囲で黒曜石製ナイフ形石器2点を含む16点の石器が出土し、荒久(2)遺跡<sup>[5]</sup>からは、珪質頁岩製ナイフ形石器1点、頁岩製彫刻刀形石器1点を含む19点の石器が、Ⅲ層～Ⅳ層を中心に出土している。また、東上泉・文脇遺跡の北側、松川の右岸台地上に位置する打越岱遺跡<sup>[6]</sup>では、Ⅳ層～V層から頁岩製ナイフ形石器1点を含む13点の石器が出土した。さらに北に位置する台山遺跡<sup>[7]</sup>からは915点もの石器が出土しており、なかでもIXa層の第1文化層からは、ナイフ形石器13点を含む921点もの石器が出土し、立川ローム層下部の貴重な資料となっている。

繩文時代早期になると遺跡が散見されるようになり、打越岱遺跡から撫糸文期の堅穴住居跡が1軒検出されたほか、上用瀬遺跡<sup>[8]</sup>から、条痕文期の堅穴住居跡が2軒検出されている。また、小谷遺跡、上用瀬遺跡、寒沢遺跡<sup>[9]</sup>、清水井遺跡、下向山遺跡<sup>[10]</sup>、荒久(2)遺跡、打越岱遺跡から、陥穴や炉穴が検出されている。特に上用瀬遺跡からは、比較的狭い調査面積にもかかわらず、炉穴が77基も検出され特筆される。このほか君津地域以南の特徴として指摘される当該期の礫群も小谷遺跡、上用瀬遺跡、打越岱遺跡から検出されている。前期になると遺跡数は減少し、文脇遺跡から関山期1軒、諸磯期3軒の堅穴住居跡が検出された以外は遺構の検出は見られない。また、該期の遺物が出土した遺跡も文脇遺跡以外では小谷遺跡、上用瀬遺跡<sup>[11]</sup>、清水井遺跡と少ない。前期末葉から中期になると遺跡数はさらに減少し、上用瀬遺跡から十三菩提式土器と五領ヶ台式土器が若干出土した程度で遺構の検出は認められず、この地域の特色ともなっている。後期になると僅かに遺跡数が増加し、上用瀬遺跡、寒沢遺跡、下向山遺跡、念仏塚遺跡<sup>[12]</sup>から遺物が出土し、続く晩期では上用瀬遺跡、清水井遺跡、台山遺跡から晩期終末の遺物が出土しており、小規模な遺跡が散在する傾向を示す。

先の上用瀬遺跡、台山遺跡からは、晩期終末に統いて弥生時代中期中葉の遺物も出土している。いずれの遺跡も沖積低地から離れた比較的標高の高い台地上に立地し、水稻耕作技術受容期の集落立地と生業の関係を考える意味でも興味深い資料を提供している。中期中葉になると、文脇遺跡の所在する台地の西側直下の低位段丘上に位置する西原遺跡<sup>[13]</sup>から二重の環濠が検出されている。堅穴住居跡は発見されていないが、低位段丘上には集落が展開するものと想像される。また、松川の上流域に所在する小谷遺跡からは、狭い台地上から6軒の堅穴住居跡が検出され、ベンガラ入りの壺などが出土した。小櫃川右岸の荒久(1)(2)遺跡<sup>[14]</sup>からは、中期末葉～後期初頭の所産と考えられる方形周溝墓が22基検出され、銅鏡やガラス玉が出土したほか、清水井遺跡からは後期前葉の堅穴住居跡3軒、方形周溝墓が5基検出されている。また、松川の対岸に位置する念仏塚遺跡からも後期前葉の堅穴住居跡が3軒検出された。後期後葉～古墳時代前期初頭になると急速に遺跡数は増加し、小谷遺跡や打越岱遺跡のような小規模な遺跡のほか、43軒の堅穴住居跡を検出した寒沢遺跡、73軒の堅穴住居跡を検出した下向山遺跡のように、近接した範囲で規模の大きな集落を営む遺跡も見られるようになる。

このように古墳時代前期初頭までは、広範囲にわたって大規模な集落が展開し、これに伴い円墳や方墳が各地に造営されたほか、松川の右岸に位置する山王辺田2号墳<sup>[15]</sup>や山谷古墳<sup>[16]</sup>のような初期の前方後方墳や前方後円墳も営まれるようになる。しかし、時代が下るに従って遺跡数は減少し、中期になると文脇遺跡で8件の堅穴住居跡が検出されたほかは、上用瀬遺跡で1軒、念仏塚遺跡で2軒確認されたのみとなる。また古墳も愛宕古墳群<sup>[17]</sup>で円墳5基、東上泉遺跡で円墳1基が検出されたのみである。このような減少傾向は後期になるとさらに顕著となり、松川左岸では文脇遺跡で堅穴住居跡が1軒検出された以外に、愛宕古墳群、東上泉遺跡、荒久(2)遺跡で古墳が確認されたのみとなる。これに対して松川右岸

では、念仏塚遺跡で4軒、大塚台遺跡<sup>[118]</sup>で1軒の堅穴住居跡が検出されたほか、山王辺田遺跡<sup>[119]</sup>から該期の古墳が確認されるなど、若干の遺跡の集中が認められる。

奈良・平安時代になると、再び遺跡数・遺跡規模の増大化が認められる。松川の上流左岸の永吉台遺跡群<sup>[120]</sup>からは、古代寺院を伴う遠寺原地区、土器生産遺構が発見された西寺原地区、台地の先端部に位置する小谷遺跡で、総数堅穴住居跡200軒、掘立柱建物跡8棟が検出され、8世紀後半から10世紀前半にかけての、地域開発の拠点となる集落と考えられる。また、仏教を中心とした集団が、地域の新たな開発に大きく関わっていたことを示していると言えよう。このほか寒沢遺跡や清水井遺跡など、瘦せ尾根上に小規模な集落を営む遺跡が出現するほか、打越岱遺跡のように墓域としてのみ利用されている遺跡も現れる。小櫃川右岸の沖積地に立地する横田郷遺跡<sup>[121]</sup>では、地形図や小字名などを基に条里制水田の復元も行われている。また、遺物では西原遺跡<sup>[122]</sup>から出土した呪符木簡が注目され、人々の精神世界を知る貴重な資料となっている。

中・近世の遺跡の調査事例はそれほど多いとは言えないが、近年次第に増加しつつあると言える。東上泉・文賜遺跡の南側に位置する荒久（2）遺跡からは、現道千葉・鴨川線と軸線を同じくして掘立柱建物跡や地下式坑、方形土坑などが検出され、15世紀代を中心とした遺物の中には「カーンマーン」の墨書きを持つカラケも出土していることから、近くにある真言密教寺院・延命寺との関連が指摘されている。また、市原市との市境を東西方向に走る伝承鎌倉街道<sup>[123]</sup>に沿った山谷遺跡<sup>[124]</sup>からも、13世紀～15世紀にかけて営まれた集落跡が検出された。また、横田郷遺跡については、発掘調査と文献資料の双方から歴史景観復元への取り組みがなされている。

- 注1 大崎紀子 1992 「小谷遺跡発掘調査報告書」 財團法人君津都市センター  
2 抽ヶ浦市 1999 「永吉台No.2遺跡」「抽ヶ浦市史 資料編1 原始・古代・中世」  
3 小沢 洋・福葉理恵・井上 賢 2000 「上用瀬遺跡II」 財團法人君津都市文化財センター  
4 大崎紀子 1993 「清水井遺跡」 財團法人君津都市文化財センター  
5 小林清隆 1998 「抽ヶ浦市荒久（2）遺跡」 財團法人千葉県文化財センター  
6 野口行雄・小沢 洋・光江 章 1989 「打越岱遺跡」 財團法人君津都市文化財センター  
7 小久賀隆史・渡辺修一・新田浩三 2002 「東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書10－抽ヶ浦市台山遺跡」 財團法人千葉県文化財センター  
8 福葉理恵 1996 「寒沢遺跡・寒沢古墳群・安宿古墳群・上用瀬遺跡」 財團法人君津都市文化財センター  
9 注8と同じ  
10 黒澤聰 1994 「下向山遺跡」 財團法人君津都市文化財センター  
鳥海 章・西原崇浩 1998 「山王台遺跡・下向山遺跡」 抽ヶ浦市教育委員会  
11 安藤道由・福葉理恵 2001 「上用瀬遺跡III」 財團法人君津都市文化財センター  
12 光江 章 1987 「念仏塚遺跡」 財團法人君津都市文化財センター  
13 伊藤伸久 1999 「西原遺跡II」 財團法人君津都市文化財センター  
14 注5と同じ  
小林清隆・高梨友子 1999 「一般国道410号埋蔵文化財調査報告書－抽ヶ浦市荒久（1）遺跡・三箇遺跡」 財團法人千葉県文化財センター  
15 抽ヶ浦市 1999 「付編 山王辺田古墳群」「抽ヶ浦市史 資料編1 原始・古代・中世」  
16 注15と同じ  
17 注8と同じ  
18 土原治雄 1997 「抽ヶ浦市大塚台遺跡」 財團法人千葉県文化財センター  
19 注15と同じ  
20 豊巻幸正・篠生 衛 1985 「永吉台遺跡群」 財團法人君津都市文化財センター  
21 篠生衛ほか 1995 「上總国郡莊横田郷の莊園調査報告」「千葉県史研究」第3号 千葉県  
22 桐村久美子 1997 「西原遺跡」 財團法人君津都市文化財センター  
23 大谷弘幸 1994 「西上総地域の古道跡—いわゆる鎌倉街道を中心として—」「研究連絡誌」第41号 財團法人千葉県文化財センター  
24 井上哲朗 2001 「東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書9－抽ヶ浦市山谷遺跡」 財團法人千葉県文化財センター

## 第2章 東上泉遺跡

### 第1節 調査の概要

今回報告する調査地点は、平成13年度に千葉県教育振興財團によって調査が実施された地点（報告書既刊）の北西隣接地に位置する（第2図・第5図～第7図）。南北約700m、東西約520mの広さをもつ東上泉遺跡の北東部分に相当し、遺跡を南北に分断する東西方向の幅約40m、深さ約7mの浅い谷の北側に当たる。現況の標高は41m前後で、畑地として利用されていた。また、畑地造成のためか調査区の南西側が1段低く整形されている。発掘調査は、平成23年度と平成24年度に財團によって実施された後、平成25年度と平成26年度に千葉県教育委員会が実施した。遺跡コードは229-026で、調査年次により枝番が付されている。以下、年度ごとに調査と成果の概要を述べる。

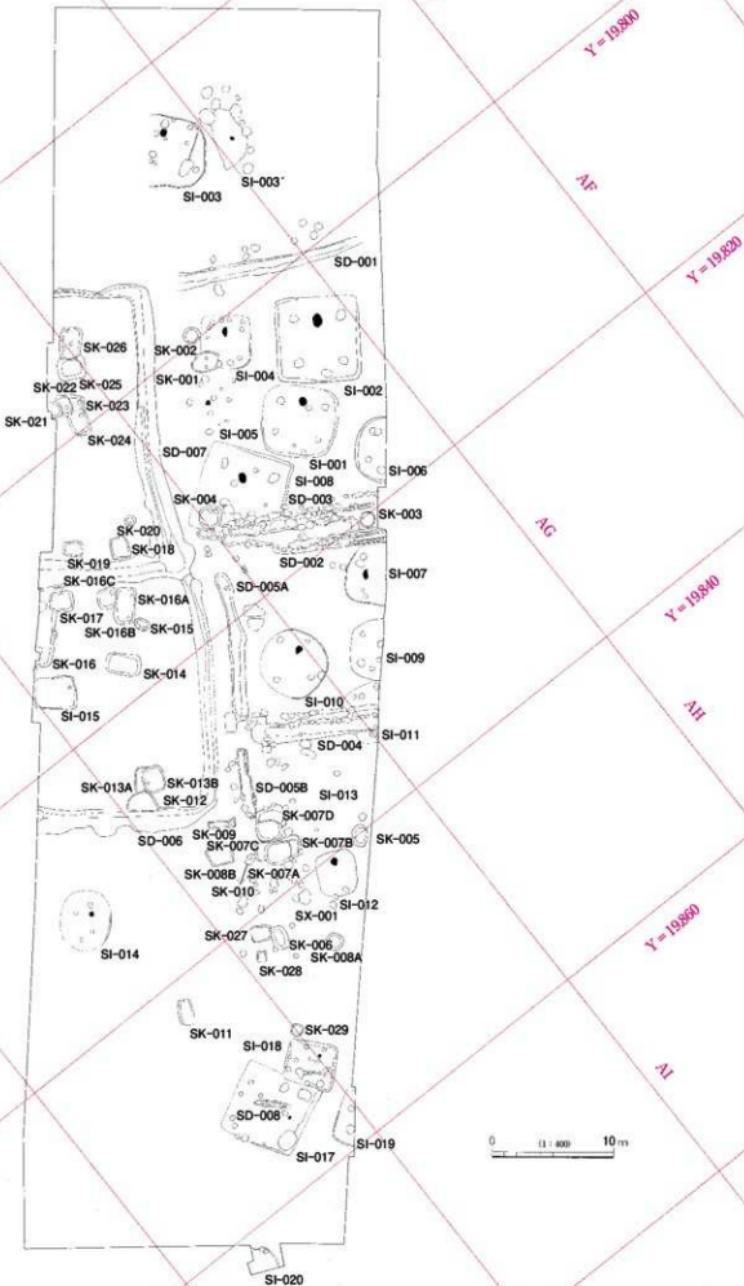
**平成23年度：**平成13年度既調査区の北西側に隣接する調査区の確認・本調査を実施した。調査対象面積は3,424m<sup>2</sup>で、340m<sup>2</sup>の確認トレンチを入れて確認調査を行ったところ、主に調査区の中央部で弥生時代や古墳時代の遺構・遺物が検出され、2,245m<sup>2</sup>について本調査が必要と判断した。そして、そのうち東側の1,360m<sup>2</sup>について上層本調査を実施し、残り885m<sup>2</sup>については次年度に実施することとした。遺跡コードは229-026(2)とした。

**平成24年度：**前年度に調査を行わなかった上層885m<sup>2</sup>についての本調査を実施した。遺跡コードは229-026(2)-2とした。また、「その1」として、対象面積3,424m<sup>2</sup>のうち上層の調査が前年度中に終了した範囲2,539m<sup>2</sup>について、157m<sup>2</sup>の確認グリッドを入れて下層確認調査を行ったところ、主に調査区の中央部分でVI層～V層及びIV層～X層で遺物の広がりが確認され、398m<sup>2</sup>の下層本調査が必要と判断した。続けて「その2」として、西側に隣接する上層本調査の終了した885m<sup>2</sup>について72m<sup>2</sup>の確認グリッドを入れて下層確認調査を実施したところ、連続するように遺物が出土し、255m<sup>2</sup>について下層本調査が必要と判断した。合計653m<sup>2</sup>のとなった下層本調査必要範囲のうち、東側の323m<sup>2</sup>のみ下層本調査を実施し、残り330m<sup>2</sup>については次年度に実施することとした。

**平成25年度：**前年度に調査を行わなかった下層330m<sup>2</sup>についての本調査を実施した。遺跡コードは229-026(2)-3とした。

**平成26年度：**平成13年度調査区と平成23～25年度調査区に挟まれた184m<sup>2</sup>について、上層確認・本調査と下層確認調査を行った。なお、上層確認調査は調査対象面積が狭小なため、調査対象範囲全域の表土を除去して調査を実施した。下層については、上層遺構から旧石器の出土があったものの、8m<sup>2</sup>の確認グリッドからは遺物は出土せず、確認調査で終了した。遺跡コードは229-026(3)とした。





第6図 東上泉遺跡上層造構配置図

第1表 繩文時代以降遺構一覧表

調査年次	調査コード	遺構番号	種別	時期	新旧関係(新>旧)	グリッド	備考
H23 (2)	SI-001	竪穴住居	古墳前期	-	46AF-24.25.34~36.43~46.53~56.65		
H23 (2)	SI-002	竪穴住居	古墳前期	-	45AF-92.93.46AF-02~04.10~15.20~24.31~34		
H23 (2)	SI-003	竪穴住居	古墳前期	-	46AE-02~04.11~14.22~24.33		
H23 (2)	SI-003	竪穴住居	古墳前期	-	45AE-82~85.92~95.46AE-04.05		ピット・印のみ
H23 (2)	SI-004	竪穴住居	古墳前期	SK-001>SI-004	46AE-49.59.46AF-30.31.40~42.50.51		
H23 (2)	SI-005	竪穴住居	古墳?	-	46AF-52.61~63.71~73		ピット・印のみ
H23 (2)	SI-006	竪穴住居	弥生後期	-	46AF-17.27.28.37~39		
H23 (2)	SI-007	竪穴住居	古墳前期	SD-002>SI-007	46AQ-41.50~52.60~63.71.72		
H23 (2)	SI-008	竪穴住居	古墳前期	SD-003・SK-004>SI-008	46AF-55.56.64~67.73~78.83~88.94~97.47AF-05~06		
H23 (2)	SI-009	竪穴住居	古墳前期	-	46AG-63.64.73~75.83~85		
H23 (2)	SI-010	竪穴住居	弥生後期	-	46AG-91~93.47AG-01~04.11~14.22.23		
H23 (2)	SI-011	竪穴住居	古墳前期	SD-004>SI-011	46AG-85.86.94~97.47AG-05~07		ピット・硬面化・印のみ
H23 (2)	SI-012	竪穴住居	古墳?	-	47AG-49.59.47AH-30.31.40.41.50.51		
H23 (2)	SI-013	竪穴住居	古墳前期	SD-005・SK-007>SI-013	47AG-25~29.35~38.44~48.54~58.65.66		ピットのみ
H24 (2)	SI-014	竪穴住居	古墳?	-	48AG-25.26.34~36.44~46.55.56		
H24 (2)	SI-015	竪穴住居	古墳前期	-	47AF-87.88.96~98.48AF-07		
H24 (2)	SI-016	竪穴住居	古墳前期	SK-017>SI-016	47AF-63~65.74~76.85.86.96		
H26 (3)	SI-017	竪穴住居	古墳前期	SD-008>SI-018>SI-017	48AH-06.07.15~17.24~28.34~38.45~47		
H26 (3)	SI-018	竪穴住居	古墳前期	SI-018>SI-017	47AH-95~97.48AH-04~07.15.16		
H26 (3)	SI-019	竪穴住居	古墳前期	-	47AH-97.98.48AH-08.09.18.19		
H26 (3)	SI-020	竪穴住居	古墳?	-	48AI-51.60.61		H13年SI-007と同構
H23 (2)	SK-001	土坑	中・近世?	SK-001>SI-004	46AF-50.51.60.61		
H23 (2)	SK-002	土坑	中・近世?	-	46AF-59.60.46AF-50		
H23 (2)	SK-003	土坑	中・近世?	-	46AF-49.46AG-40.50		
H23 (2)	SK-004	土坑	中・近世?	SK-004>SI-008	46AF-95.96.47AF-05.06		
H23 (2)	SK-005	土坑	中・近世?	-	47AG-29.39.47AH-20.20		
H23 (2)	SK-006	土坑	中・近世?	-	47AH-70.71.80.81		
H23 (2)	SK-007(A)	土坑	中・近世	SK-007A>SK-007B	47AG-58.59.67~69		
H23 (2)	SK-007(B)	土坑	中・近世	SK-007A>SK-007B	47AG-57~59.67.68		
H23 (2)	SK-007(C)	土坑	中・近世	-	47AG-57.58.67		
H23 (2)	SK-007(D)	土坑	中・近世	-	47AG-46.47.56.57		
H23 (2)	SK-008(A)	土坑	中・近世?	-	47AH-62.63		
H23 (2)	SK-008(B)	土坑	中・近世?	-	47AG-76.77.86.87		
H23 (2)	SK-009	土坑	中・近世	-	47AG-66.75.76		
H23 (2)	SK-010	土坑	中・近世?	-	47AG-67.68.77.78		
H24 (2)	SK-011	土坑	中・近世?	-	48AH-20.21.30.31		
H24 (2)	SK-012	土坑	中・近世	SD-006>SK-012	48AG-83.84.93		
H24 (2)	SK-013(A)	土坑	中・近世?	SK-013A>SK-013B	47AG-82.83		
H24 (2)	SK-013(B)	土坑	中・近世?	SK-013A>SK-013B	47AG-72.73.82.83		
H24 (2)	SK-014	土坑	中・近世	-	47AF-58.59.67~69		
H24 (2)	SK-015	土坑	中・近世?	-	47AF-47.48		
H24 (2)	SK-016(A)	土坑	中・近世	SK-016C>SK-016D>SK-016A	47AF-36.46		
H24 (2)	SK-016(B)	土坑	中・近世	SK-016C>SK-016D>SK-016A	47AF-46.47.56.57		
H24 (2)	SK-016(C)	土坑	中・近世	SK-016C>SK-016B>SK-016A	47AF-45.46.55.56		
H24 (2)	SK-017	土坑	中・近世?	SK-017>SI-016	47AF-64.65.74.75		
H24 (2)	SK-018	土坑	中・近世?	-	47AF-24.34.35		
H24 (2)	SK-019	土坑	中・近世	-	47AF-43.53		
H24 (2)	SK-020	土坑	中・近世?	-	47AF-23.24		
H24 (2)	SK-021	土坑	中・近世?	SK-021>SK-022・SK-023	47AE-18.28		
H24 (2)	SK-022	土坑	中・近世?	SK-021・SK-023>SK-022	47AE-18.19		
H24 (2)	SK-023	土坑	中・近世?	SK-021>SK-023>SK-022・SK-024	47AE-08.09.18.19		
H24 (2)	SK-024	土坑	中・近世	SK-023>SK-024	47AE-19.47AF-10		
H24 (2)	SK-025	土坑	中・近世	SK-023>SK-026	46AE-97.98.47AE-07.08		
H24 (2)	SK-026	土坑	中・近世	SK-025>SK-026	46AE-96.97.47AE-06.07		
H23 (2)	SK-027	土坑	中・近世?	-	47AH-80.81.90		
H23 (2)	SK-028	土坑	中・近世?	-	47AH-81.90		
H26 (3)	SK-029	土坑	中・近世?	-	47AH-94.48AH-04		
H23 (2)	SD-001	溝状遺構	中・近世	-	45AE-99.46AE-09.18.19.28.29.37.38.47.48,		
H23 (2)	SD-002	溝状遺構	中・近世	-	45AF-71.80.81.90.46AF-00.10		
H23 (2)	SD-003	溝状遺構	中・近世	-	46AF-59.69.78.79.88.89.46AG-40.41.50.51.60		
H23 (2)	SD-004	溝状遺構	中・近世	-	46AF-39.48.49.58.59.68.69.77.78.86~88.96.97,		
H23 (2)	SD-005(A)	溝状遺構	中・近世	-	46AG-95~97.47AG-05.06.14~16.23~25.33~35		
H23 (2)	SD-005(B)	溝状遺構	中・近世	-	47AF-08.09.18.19.47AG-00.01.10.20~22.31~33		
H24 (2)-2	SD-006	溝状遺構	中・近世	SD-007>SD-006	47AG-44.45.54~56.66		
H24 (2)-2	SD-007	溝状遺構	中・近世	SD-007>SD-006	47AF-15~18.25~29.34~36.39.44.45.53~55.62~64.73,		
H24 (2)-2	SD-007	溝状遺構	中・近世	SD-007>SD-006	47AG-20.30.31.40~42.52~54.63~65.74.75.83~85.93.94,		
H24 (2)-2	SD-007	溝状遺構	中・近世	SD-007>SD-006	47AF-04~04.11~13.20~22.31		
H24 (2)-2	SD-007	溝状遺構	中・近世	SD-007>SD-006	46AF-56.57.66~69.75.76.78.79.85.89,		
H24 (2)-2	SD-007	溝状遺構	中・近世	SD-007>SD-006	47AF-01~03.13~17.25~27		
H26 (3)	SD-008	溝状遺構	中・近世	SD-008>SI-017	48AH-26.39		
H23 (2)	SX-001	ピット群	中・近世	-	47AG-39.58.59.68.69.78.79.88~90,		
H23 (2)	SX-001	ピット群	中・近世	-	47AH-51.60.70.71.80~82.91		

第7図 造跡周辺地形と下層調査状況



## 第2節 旧石器時代

### 1 周辺地形と基本層序

#### (1) 地理的環境（第7図）

遺跡周辺の地形を第7図に示した。

東上泉遺跡は清澄山系を源流とする小櫃川が、北流から西流に転じる地点より約3km北東に向かった右岸台地上に位置する。台地は小櫃川によって形成された沖積層に面し、更新統上部の南総1段丘堆積層と呼ばれる新規段丘堆積層が発達し、その上層に閑田ローム層が堆積する「立川面」に比定されている。遺跡の立地する台地は小櫃川支流の松川の南側に当たり、小櫃川本流に向かう南北方向から北東方向に入る支谷により文脇遺跡と分かれれる。調査対象地は東上泉遺跡の北部に位置し、北西側から東側へと曲がる支谷が台地北側を区画し、さらにこの支谷から分かれた南東側に向かう小支谷が台地南側を区画している。

#### (2) 基本層序（第8図）

調査は道路計画線に沿って舌状台地の先端部から南東方向に約120mにわたって行われ、旧石器時代の土層堆積状況は一部調査対象地に斜面部を含むことから一様ではない。ここでは、舌状台地に沿った調査対象地の北西～南東ラインと、旧石器時代遺物が検出された台地中央から南の小支谷に向かった南北ラインの土層柱状図を作成した。なお、調査対象地の大部分で表土層から立川ローム軟質ローム（第Ⅲ層）までの層が、畑の耕作による擾乱、あるいは整地による削平を受けており、Ⅲ層以上の立川ローム層の堆積状況は明確ではない。調査区北側の台地平坦部では、立川ローム第2黒色帶下部層（Ⅸ層）が比較的厚くⅩa層～Ⅹc層に分層されているが、台地先端部や旧石器時代遺物集中区の台地斜面部では層が薄く、Ⅸ層の分層は行われていない。最も層序の安定していた46AG-50グリッドを基本層序とした。

#### 基本層序

Ⅲ 層 黄褐色ローム土 いわゆる「ソフトローム」層である。第11・14ブロック土層断面でⅢ層の下部が確認されている。Ⅲ層の波状帶はあまり発達せず、V層にまで及んでいない。

IV 層 明褐色ローム土 いわゆる「ハードローム」層の最上層である。第11ブロック46AG-90グリッド付近の土層断面では、IV層とV層が識別されているものの、他地点の土層記載では「IV層～V層」と記録されており分層されていない。上部はソフトローム化していると想定される。

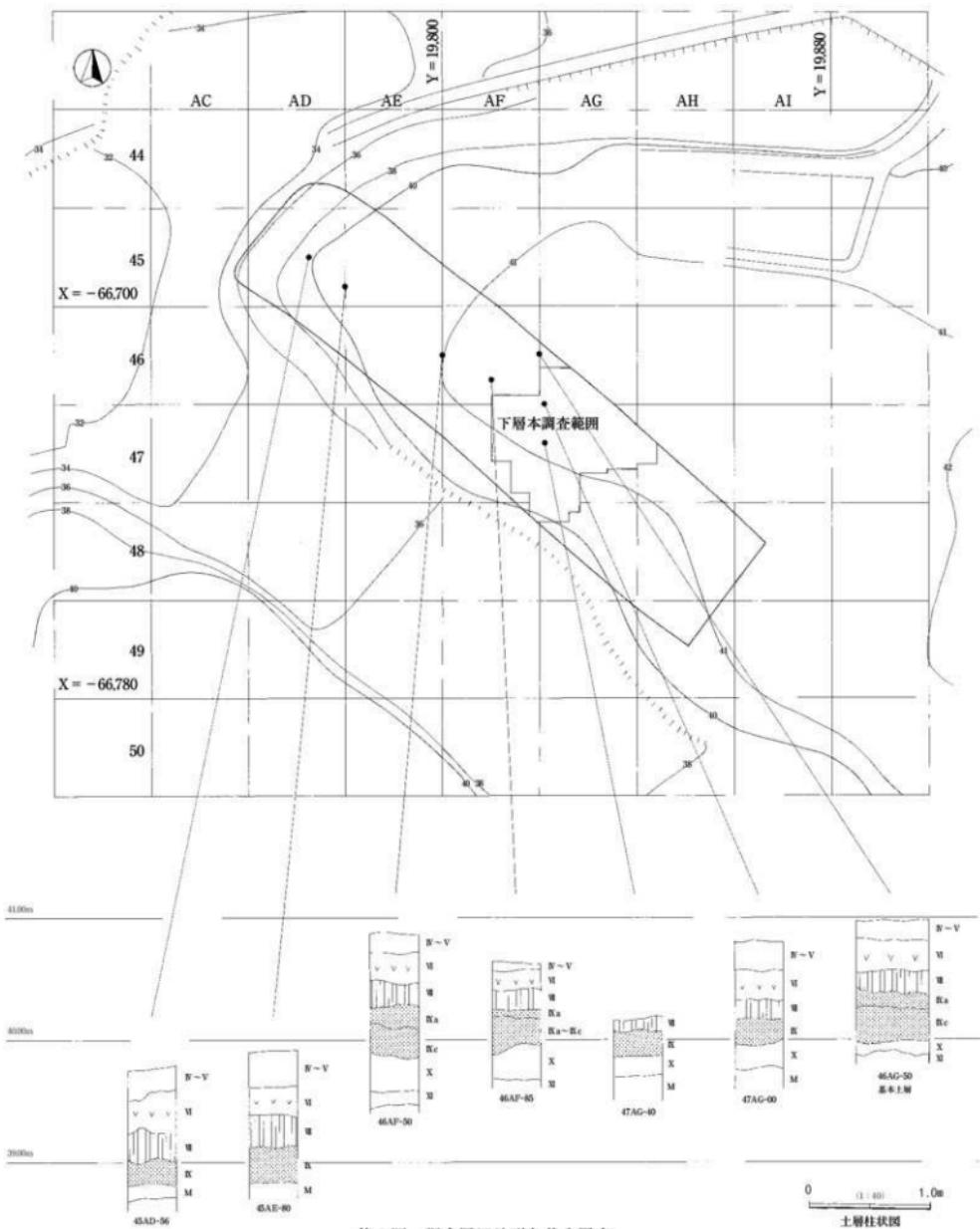
V 層 暗黄褐色ローム土 立川ローム第1黒色帯に相当する。第11ブロック土層断面で確認されている。わずかに黒みを帯びる。層厚は15cm～20cmである。

VI 層 明黄褐色ローム土 AT（姶良丹沢火山灰）を包含する層である。層厚が20cm～30cmあり、平成13年度調査区の基本層序VI層（層厚15cm～20cm）と比較してもやや厚い。写真観察からはATの下降拡散が著しいように見受けられる。

VII 層 暗褐色ローム土 第2黒色帯上部に相当する。VI層より暗色化している。45AD-50グリッドでは粘性が強い層となっている。層厚は20cm～30cmである。

IXa 層 黒褐色ローム土 第2黒色帯下部上半に相当する。VII層より黒味が強く、赤色スコリアを含む。

IXb 層 黑褐色ローム土 第2黒色帯下部の間層に相当する。46AF-85グリッドの土層記載では、「IX



第8図 調査周辺地形と基本層序

b層～IX c層」の表記があるものの、分層されておらず、層としては不明瞭である。

IX c層 黒褐色ローム土 第2黒色帯下部下半に相当する。IX a層より黒味が強い。黒色スコリアを多く含む。IX層全体の層厚は20cm～30cmである。

X 層 黄褐色ローム土 立川ローム最下層。層厚は10cm～30cmである。台地先端部ではX層が確認されず、IX層の下層がXI層となっている。

XI 層 暗黄褐色・暗灰褐色ローム土 武藏野ローム最上層。粘性が強くやや軟質化する。色調は暗黄褐色～暗灰褐色に変化が見られる。旧石器時代遺物集中地点の斜面部ではXI層が識別されず、X層下部が水分を含むいわゆる「水付きローム」化していた。X層を取り込んで「水付きローム」が確認された層序では、M層と表記した。

## 2 概要

旧石器時代の遺物集中地点は、調査終了時で6か所、石器単独出土地点が1か所となっている。各遺物集中地点は、調査区中央部南東側に集中して分布している。また、立川ロームIX層～X層とVI層～VII層の2つの出土層位からなる石器群の存在が把握された。これらの遺物集中地点は、平面分布・垂直分布の状況、母岩分類、石器群の構成内容等の検討から、14か所のブロックと2か所の単独出土地点で構成されることが判明した。それぞれのブロックは出土層位、石器群の特徴から2つの文化層を設定して報告する。旧石器時代調査のブロック分布状況を第9図に示した。また、第Ⅰ文化層、第Ⅱ文化層の石材別器種組成を第2表・第3表に示した。

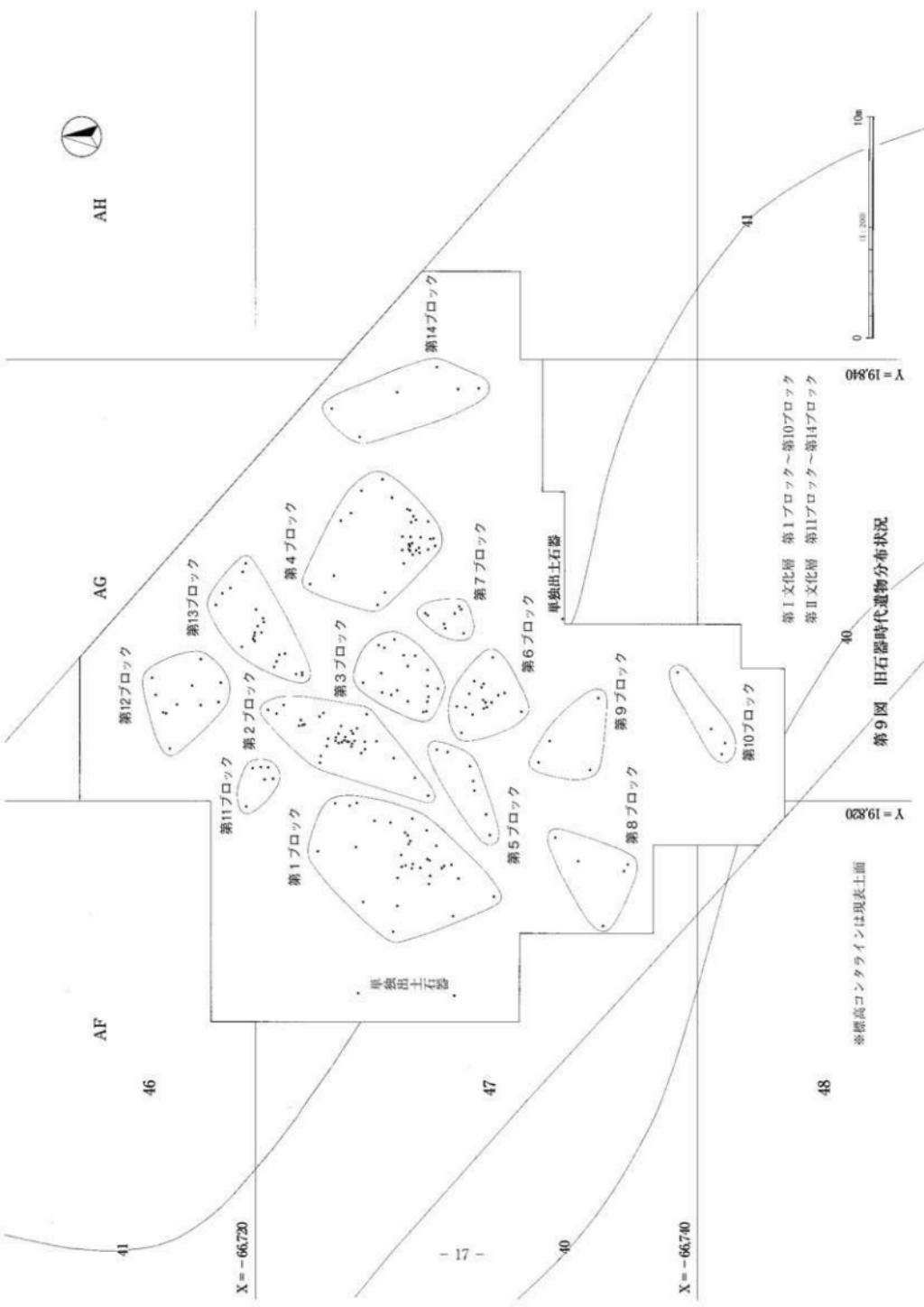
**第Ⅰ文化層** 立川ロームIX層（第2黒色帯下部）～X層上部に出土層位がある石器群で、石器群の出土レベルが集中する産出層準はIX層下部（IX c層下部）～X層上面にある。石器出土総数は175点である。10か所のブロックが集中して分布しており、旧石器時代本調査区の中央部から南端部に弧状に分布する1か所のブロック群として把握される。第1ブロック～第10ブロックが相当する。

主要な器種は、局部磨製石斧、打製石斧の石斧類が複数点存在し、ナイフ形石器、台形様石器が各1点出土している。剥片類は、石刃あるいは石刃状剥片が特徴的に見られる。石材は、珪質頁岩B、黒色頁岩が主体を占め、石刃状剥片、各種剥片類を生産しているが、少数石材の緑色岩、ホルンフェルス、ドレライト、安山岩等が石斧類の母岩、黒色安山岩がナイフ形石器、台形様石器の石材となっている。

**第Ⅱ文化層** 立川ロームVI層～VII層（第2黒色帯上部）に出土層位がある石器群で、石器群の出土レベルが集中する産出層準はVI層下部～VII層上面にある。石器出土総数は45点である。4か所のブロックのうち旧石器時代本調査区の北側に3つのブロックがまとまって分布し、1つのブロックが離れて東端に分布している。

主要な器種は、ナイフ形石器、楔形石器、敲石類である。石材は、黒色頁岩、チャート、珪質頁岩Bが主体を占め、楔形石器をはじめ両極技法により剥片類を生産している。少数石材の黒曜石はナイフ形石器の石材となっている。

なお、発掘調査時においては、同一平面上に重なる2つの文化層が存在すると理解されたが、垂直分布の状況、母岩分類、接合資料等の検討から2つの文化層が重複しているような状況は把握できなかった。



第9図 旧石器時代遺物分布状況  
単体出土石器は現表土面

48

X = -66.740

Y = 193.80

40

Y = 194.80

10m  
0

第Ⅰ文化層 第1ブロック～第10ブロック  
第Ⅱ文化層 第11ブロック～第14ブロック

41

第10ブロック

第9ブロック

40

第8ブロック

X = -66.720

47

第7ブロック

第6ブロック

47

40

第5ブロック

第4ブロック

47

第3ブロック

47

第2ブロック

47

第1ブロック

47

単体出土石器

46

X = -66.720

46

第12ブロック

第13ブロック

第14ブロック

46

AG

第11ブロック

46



AH

珪質頁岩類の石材分類、石材名について記載する。

珪質頁岩A：珪質頁岩Bに分類される以外の珪質頁岩を全て珪質頁岩Aとした。黒色頁岩を除く頁岩類、「チョコレート頁岩」と呼ばれる頁岩類、各種珪化岩類を包括する。

珪質頁岩B：房総半島の旧石器時代の石器石材として特徴的に検出されている「白滝頁岩」、あるいは「嶺岡産頁岩」と呼ばれる珪質頁岩。表面が赤褐色・明褐色で、内部が灰オリーブ色、灰色、灰白色となるもの。

**第2表 第I文化層石材別器種組成**

器種	ナイフ形 石材	使用頻度 石器	使用頻度 有孔片	磨片	使用頻度の ある剥片	石核	打製石斧	打製石斧 研磨片	台形塊	研磨石	二次加工の ある剥片	溝片	敲石	縫合	点数計	重量計 (g)	点数比 (%)	重量比 (%)			
チャート															6	1379.60	6.37%	22.7%			
フレライト	1 109.97	1 0.61													1	0.29	1.7%	2.7%			
トロマ石					1 224.40										4	29.85	2.8%	4.2%			
ホルンフェルス	1 81.14					3 175.24	1 1.58								3 126.62	2 16.36	1 34.01	11 406.95	6.29%	7.2%	
砂岩				2 13.40		1 872.12	84.94	2 17.31						6	12.85	7 255.91	20 382.90	11.43%	6.54%		
玄武岩						1 392.20									1	332.20	0.87%	5.5%			
珪質頁岩A				2 18.77											2	7.18	1 190.99	2 5.59	7 182.13	4.09%	3.07%
珪質頁岩B		1 10.04	4 70.25	7 276.40											55 362.64			67 711.33	38.29%	11.84%	
黒色安山岩	1 9.00		1 13.75	1 61.49					1 5.75						5 47.69			9 136.42	5.14%	2.3%	
黒色頁岩			2 26.20	1 45.27	2 635.7				1 35.40	1 10.04	11 933.96					19 244.69	10.29%	4.91%			
黒曜石															1	0.39			1 0.30	0.87%	0.01%
砂質															2 517.24	B 517.96	10 1055.20	5.71%	17.24%		
石灰岩					1 448.73										3 19.16	4 465.89	2.39%	7.76%			
花崗岩															1 22.09		1 22.09	0.87%	0.37%		
板岩															3 70.15		3 70.15	1.71%	1.11%		
綠泥岩		1 73.00	6 23.04												2 27.98	9 124.08	5.14%	2.07%			
総計	1 9.00	3 314.17	7 28.69	2 671.13	1 0.04	11 142.32	10 737.28	1 8.72	7 213.85	3 18.00	1 5.75	1 36.49	1 10.04	88 692.91	3 967.83	34 2214.05	1 34.01	175 4006.17	100.00%	100.00%	

各組成表の器種欄は、左側を点数、右側を重量(g)としている。(以下同様)

**第3表 第II文化層石材別器種組成**

器種	ナイフ形 石材	使用頻度の ある剥片	石核	打製石斧	二次加工の ある剥片	剥片	敲石	楔形石器	縫合	点数計	重量計 (g)	点数比 (%)	重量比 (%)	
チャート			2 202.60		2 20.53	2 11.16				2	189.44	8 423.73	17.78%	15.16%
ホルンフェルス				1 30.51						1	27.87	2 58.38	4.44%	2.09%
安山岩										1	30.65	1 30.65	2.22%	1.10%
珪質頁岩A					1 1.44					1	1.70	2 3.14	4.44%	0.11%
珪質頁岩B	1 14.48					4 8.95		1 5.01		6	28.44	13.33%	1.02%	
黒色安山岩		1 61.34				2 3.87					3 65.21	6.67%	2.33%	
黒色頁岩		1 16.08		1 10.71	8 21.53		1 10.45			11	58.77	24.44%	2.10%	
黒曜石	2 3.86					2 3.96					4	7.82	8.89%	0.28%
砂岩						1 22.71	2 509.19			2	1484.88	5201.678	11.11%	72.13%
石英斑岩										1	27.71	1 27.71	2.22%	0.99%
流紋岩										2	75.23	2 75.23	4.44%	2.69%
総計	2 3.86	1 14.48	4 280.02	1 30.51	4 32.68	19 72.18	2 509.19	2 15.46	10 1837.48	45 2795.86		100.00%	100.00%	

### 3 第Ⅰ文化層

#### 第1ブロック（第10~16図、図版10・11）

出土状況 下層本調査区西側で、ブロック群の西端に位置しており、調査区北西側に広がる舌状台地の南西斜面部に当たる。北東側にやや離れて第2ブロック、南東側に第5ブロックが分布する。ローム層の堆積状況は南北方向に傾斜している。

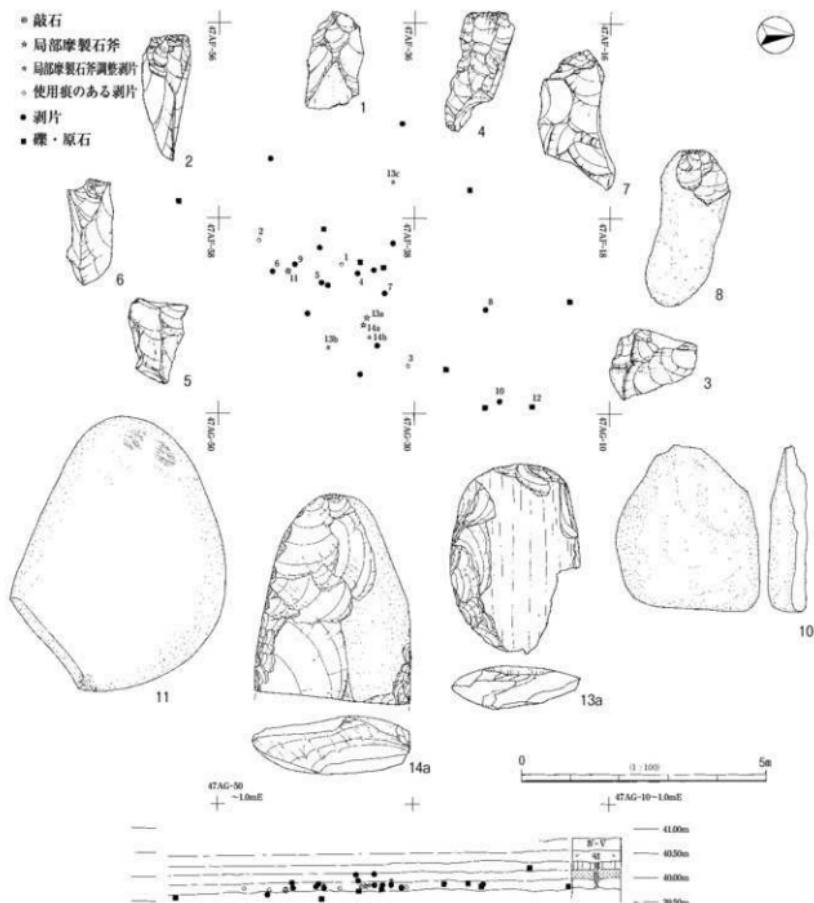
遺物総数は36点であり、その分布は南東端にやや集中しており、北東から南北方向にかけて扇状に散漫な分布を示す。

平面分布範囲は、47AF-18・19・27・28・29・37・38・39・47・48・57グリッドに位置し、南北8.0m、東西6.8mの北東～南西方向に長い楕円形状の分布を示す。垂直分布では約70cmの高低差がある。第10図の土層断面は、ブロック検出範囲の10m～4.0m東側に位置しているため、実際よりも20cm程度低いⅧ層～XII層に出土位置が投影されているが、調査時の写真観察等から判断して、出土層位はⅦ層～X層上部に相当し、産出層準はIX層下部～X層上面に集中すると推定できる。

母岩別資料 23母岩が認められる。主要母岩は、珪質頁岩B2（9点）が集中部の南寄りに、緑色岩1（3点）、ドレライト1（2点）と黒色頁岩1（2点）が集中部の北寄りに分布している。珪質頁岩B2からは、石刃状の縦長剥片が多く生産されている。緑色岩1、ドレライト1は局部磨製石斧と局部磨製石斧調整剥片が生産され、ブロック内で接合する。黒色頁岩1の2点は、それぞれ第6ブロック、第4ブロック・第6ブロックとブロック間接合している。

出土遺物 主要な器種は、局部磨製石斧2点、局部磨製石斧調整剥片3点、使用痕のある剥片4点、敲石1点、剥片15点であり、他は礫・原石が11点となっている。

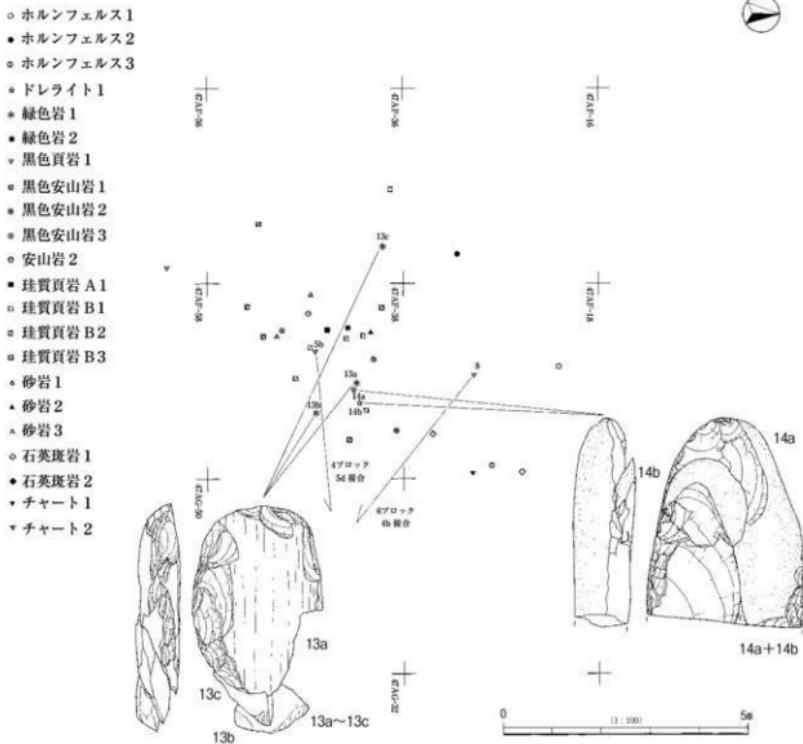
1～3は使用痕のある剥片である。1は平滑な自然面と内部が明褐色（7.5YR5/8）とオリーブ黄色（5Y6/3）が縞状に入る単独母岩の珪質頁岩A1である。両側縁が並行し下縁を持つ縦長剥片の左側縁から下縁部にかけて刃こぼれ状の折れと微細剥離痕が連続する。背面構成を見ると左右に打点を移動し、同一打面から連続した縦長剥片を作出していることが理解される。2は自然面が赤褐色（5YR4/6）、明褐色（7.5YR5/6）で、内部が灰オリーブ色（5Y5/3）～灰色（5Y5/1）の珪質頁岩B2を母岩とする。母岩の色調がやや赤味を帯びるのは、被熱した可能性がある。先端が尖る背面左側縁に微細剥離痕が疎らに見られる。3は自然面に細かな爪形状の裂痕がある灰色（N5/0）の黒色安山岩2を母岩とする。横長剥片素材の下端部に微細剥離痕が疎らに見られる。4～10は剥片である。4～6は珪質頁岩B2を母岩とする。いずれも同一打面から連続的に剥片剥離された縦長指向の強い剥片で、4・5は石刃状剥片と呼べる。石核や接合資料がないため明確ではないが、同一母岩と考えられる自然面が背面に残る他の剥片の観察から、亜角礫状の河床礫素材に平坦な打面を設定して剥片剥離が進行したことが理解される。7は自然面が紙やすり状の灰色（N5/0）の黒色安山岩1を母岩とする。線状打面の縦長剥片であるが、背面構成から求芯的な剥片剥離手法も認められる。8は黒色頁岩1を母岩とするもので、第6ブロックの資料と接合する。背面に広く自然面を残す縦長剥片である。他にも黒色頁岩1母岩では、第4ブロック・第6ブロックと接合する剥片が存在し、第9ブロックの項で後述する。9は自然面が紙やすり状の灰色（N4/0）の黒色安山岩3を母岩とし、背面は自然面を残した横長剥片であり、楕円礫状の原石が想定される。10は単独母岩の自然面が平滑なホルンフェルス3を母岩とする。亜角礫を長軸方向に剥離し、背面が自然面となる扁平な縦長剥片を作出している。石斧製作に関連した初期段階の半截礫的な剥片と思われる。



第10図 第1ブロック器種別分布

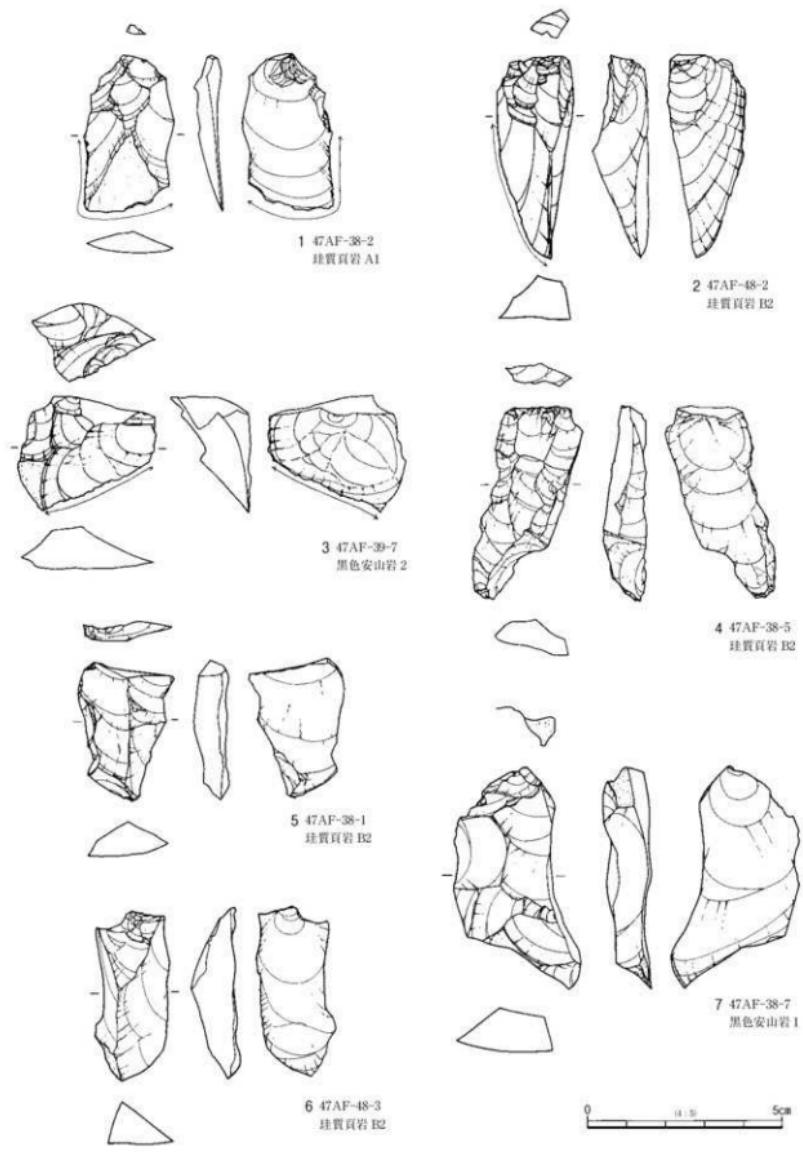
11は敲石である。扁平梢円礫の下端部に敲打痕と、上面側に約1cmの直線的な浅い刻みが2か所集中する。12は原石としたが被熱しており、平坦な裏面と側面の稜部分に周縁を巡るような煤状の付着物が看取される。

13a～13c・14a+14bは局部磨製石斧と局部磨製石斧調整剥片の接合資料である。13a～13cは、自然面・内部とも緑灰色(5G6/1)・暗緑灰色(5G3/1)の交互縞状の地に、灰白色(N8/0)が縞状に入る



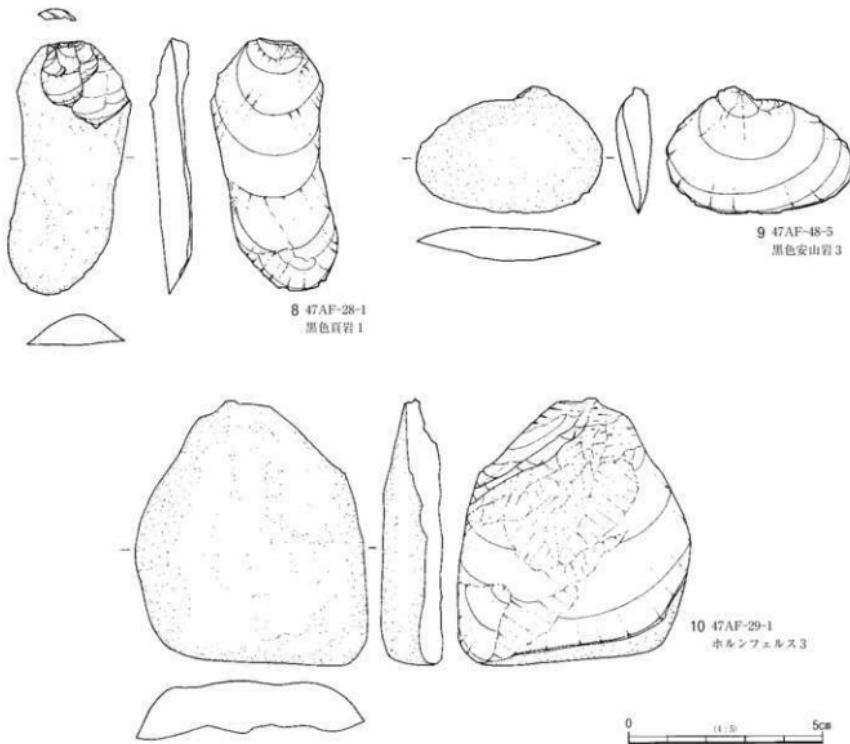
第11図 第1ブロック母岩別分布

緑色岩1を母岩としている。剥離工程順に資料を見ていくと、13aの裏面先端部方向から13bの横長剥片が剥離されている。13bの背面構成を見ると、13cから続く調整加工が見られることから、13bの剥離に先行して器体裏面の右側縁下端部の調整が行われていることがわかる。13bの主要剥離面側には摩耗した刃部端部が認められることから、器体の刃部更新調整であることが理解される。13b剥離後、裏面右側縁下半部の再調整が進行している。さらに裏面左側縁下半部の調整が行われ、器体を大きく抉る平坦剥離痕と同一打撃で13cが剥離される。13cはその加撃で欠損した破片である。その後も13aの表面左下端部、裏面右下端部で刃部を円形にするような階段状の細部調整が行われるが、途中で放棄されている。14a・14bは、自然面・内部が明緑灰色(75GY8/1)で、新鮮な面が暗緑灰色(7.5GY3/1)のドレライト1を母岩とする。器体の剥離状況を見ていくと、まず表裏両側縁から大きな平坦調整が行われ、その部位で平坦剥離、階段状剥離による細部調整が行われている。その後、表面上半側に幅広平坦加工が行われ、14bが剥離される。

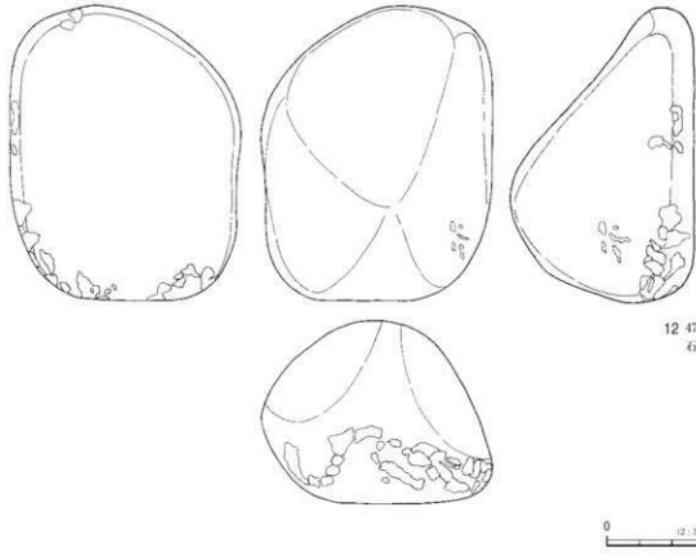
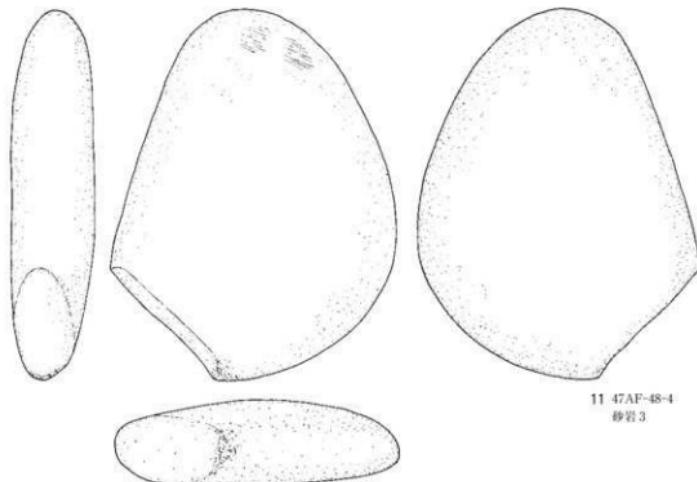


第12図 第1ブロック出土石器1

さらに表面左上半側面からの平坦加工、上端部からの長軸方向の平坦剥離が認められる。14aは中央部で横断方向に欠損しており、その製作工程は判然としないが<sup>4</sup>、14aの器体に摩耗痕が見られないことや、器体上半部の平坦加工が片側縁にしか及んでいないなど粗い整形段階に止まることから、石斧の刃部更新の接合資料ではなく、局部磨製石斧の製作初期段階の調整加工を示す接合資料と考えられる。おそらく側縁下半部分の調整加工段階で、器体が横断方向に欠損したものであろう。

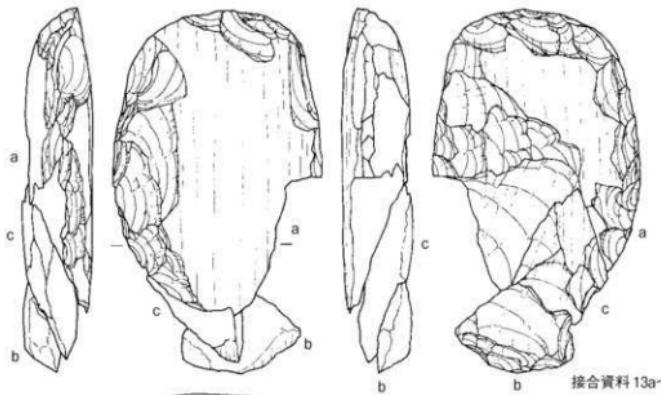


第13図 第1ブロック出土石器2

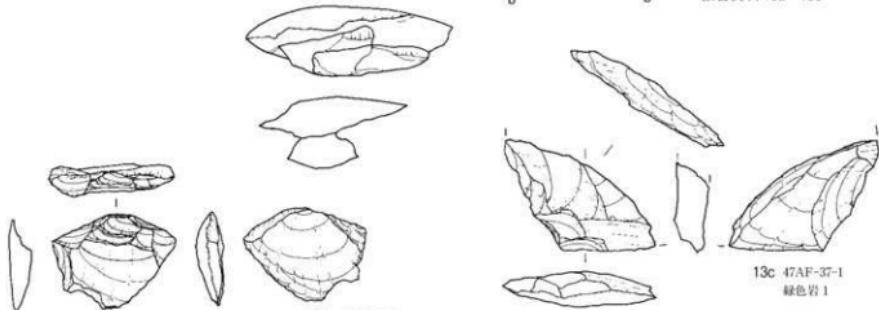


第14図 第1ブロック出土石器 3

0 5cm  
(2:3)

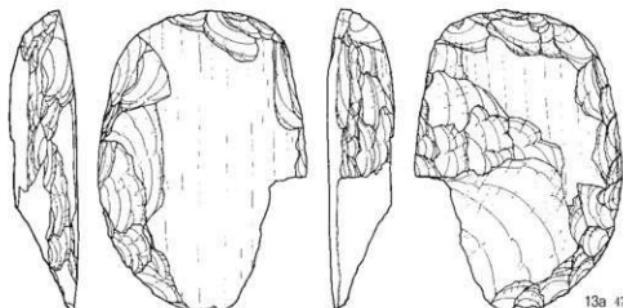


接合資料 13a～13c



13b 47AF-39-2  
緑色岩 1

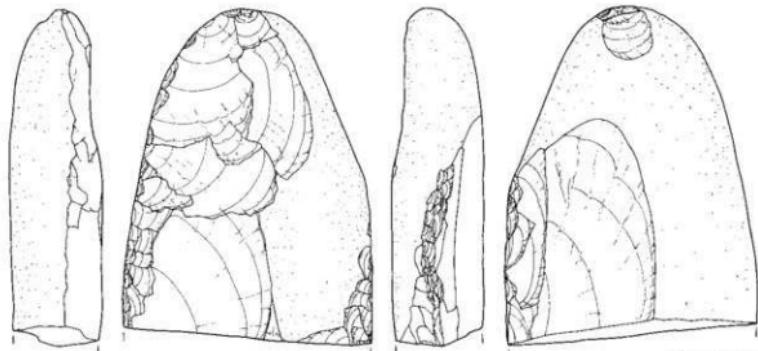
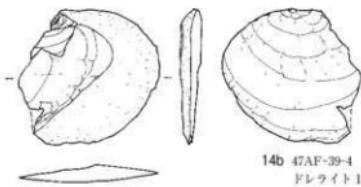
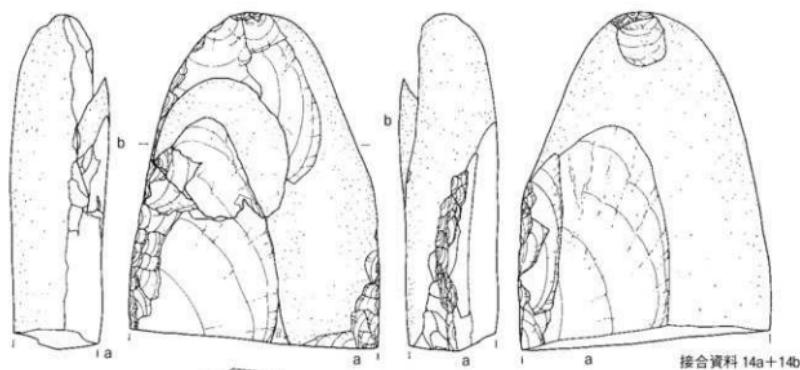
13c 47AF-37-1  
緑色岩 1



13a 47AF-39-6  
緑色岩 1



第15図 第1ブロック出土石器 4



0 (1:3) 5cm

第16図 第1ブロック出土石器5

第4表 第I文化層第1ブロック組成表

岩種	母岩番号	局部磨製石斧 等調整剖片	原石	使用度の ある剖片	剥片	敲石	塊	点数計	重量計 (g)	点数比 (%)	重量比 (%)
チャート	チャート1						1	18.3	1	18.3	2.78
	チャート2						1	19.14	1	19.14	2.78
	チャート集計						2	37.44	2	37.44	5.56
ドレライト	ドレライト1	1 159.97	1 5.61						2 165.58	5.56	11.50
	ドレライト集計	1 159.97	1 5.61						2 165.58	5.56	11.50
ホルンフェルス	ホルンフェルス1						1	11.87	1	11.87	2.78
	ホルンフェルス2						1	4.49	1	4.49	2.78
	ホルンフェルス3			1	82.43				1 82.43	2.78	5.72
ホルンフェルス集計				1	82.43			2 16.36	3 98.79	8.33	6.66
安山岩	安山岩1						1	12.73	1	12.73	2.78
	安山岩2			1	0.68				1 0.68	2.78	0.05
	安山岩3						1	56.65	1	56.65	2.78
安山岩集計				1	0.68			2 69.38	3 70.06	8.33	4.87
珪質頁岩A	珪質頁岩A1			1 4.59					1 4.59	2.78	0.32
珪質頁岩A集計				1 4.59					1 4.59	2.78	0.32
珪質頁岩B	珪質頁岩B1			1	0.73				1 0.73	2.78	0.05
	珪質頁岩B2			2 16.39	7 58.83			9 75.22	25.00	5.22	
	珪質頁岩B3				1 9.22				1 9.22	2.78	0.64
珪質頁岩B集計				2 16.39	9 68.78			11 85.17	30.56	5.91	
黒色安山岩	黒色安山岩1				1	16.42			1 16.42	2.78	1.14
	黒色安山岩2			1 13.70					1 13.7	2.78	0.95
	黒色安山岩3				1 13.86				1 13.86	2.78	0.96
黒色安山岩集計				1 13.70	2 30.28			3 43.98	8.33	3.05	
黒色頁岩	黒色頁岩1			2 31.06					2 31.06	5.56	2.16
黒色頁岩集計				2 31.06					2 31.06	5.56	2.16
砂岩	砂岩1						1	2.38	1	2.38	2.78
	砂岩2						1	4.62	1	4.62	2.78
	砂岩3				1 341.81				1 341.81	2.78	23.74
砂岩集計					1 341.81	2	7	3 348.81	8.33	24.22	
石英斑岩	石英斑岩1			1 446.73					1 446.73	2.78	31.02
	石英斑岩2						1	10.19	1	10.19	2.78
石英斑岩集計				1 446.73				1 10.19	2 456.92	5.56	31.73
緑色岩	緑色岩1	1 73.06	2 14.45						3 87.51	8.33	6.08
	緑色岩2								1 10.15	1 10.15	2.78
緑色岩集計	1 73.06	2 14.45						1 10.15	4 97.66	11.11	6.78
総 計	2 233.03	3 20.06	1 446.73	4 34.68	15 213.23	1 341.81	10 150.52	36 1440.06	100.00	100.00	

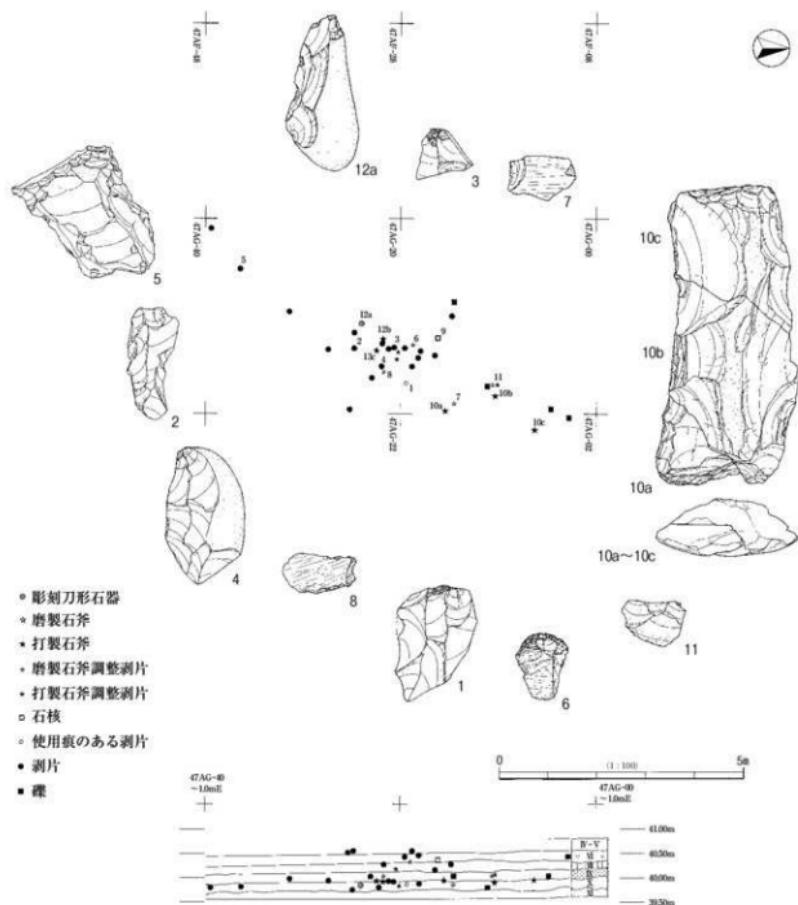
## 第2ブロック（第17～25図、図版12～14）

出土状況 下層本調査区やや北側で、ブロック群の北端に位置しており、調査区北西側に広がる舌状台地の南西斜面部に当たる。南北側にやや離れて第1ブロック、南側に第5ブロック、東側に第3ブロックが分布する。ローム層の堆積状況は南西方向に傾斜している。

遺物総数は38点で、その分布は北東から南西方向を長軸として中央に集中部があり、北東方向と南西方向では散漫に分布する。

平面分布範囲は、47AG-01・02・10・11・21・30グリッドに位置し、南北7.3m、東西4.1mの北東～南西方向に細長い楕円形を示す。垂直分布では約83cmの高低差がある。第17図の土層断面は、ブロック検出範囲の西に3.0m離れた地点での土層柱状面のため、やや高位のIV層・V層～X層に出土位置が投影されるが、遺物取り上げ層位、調査時の写真観察等から判断して、中心的な出土層位はIX層下部～X層上部に求められる。

母岩別資料 25母岩が認められる。主要な母岩は、珪質頁岩B 6（4点）が集中部に、安山岩5（3点）、黒色頁岩3（2点）が集中部北西側に、珪質頁岩B 5（3点）が集中部と南西側に1点離れて、ホルンフェルス4（4点）が集中部の北東寄りに分布している。ホルンフェルス4・安山岩5・黒色頁岩3では、それぞれ石斧製作に関係した接合資料が認められ、ホルンフェルス4はブロック内で接合する。安山岩5・黒色頁岩3は、それぞれ第6ブロックとブロック間接合している。珪質頁岩B 4は第7ブロックの石核と



第17図 第2ブロック器種別分布

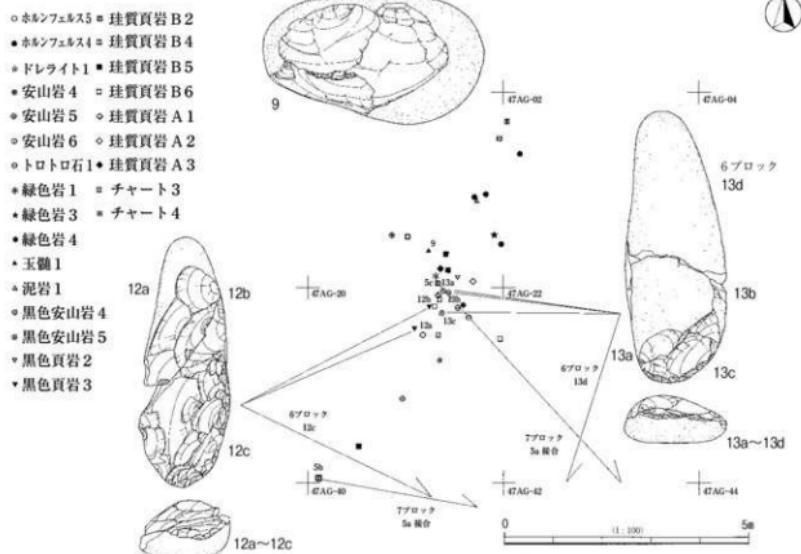
接合する。この接合資料については後述する。

出土遺物 主要な器種は、石斧3個体（5点）、彫刻刀形石器1点、石斧調整剥片3点、局部磨製石斧調整剥片3点、使用痕のある剥片1点、剥片20点、石核1点であり、他は櫛4点となっている。

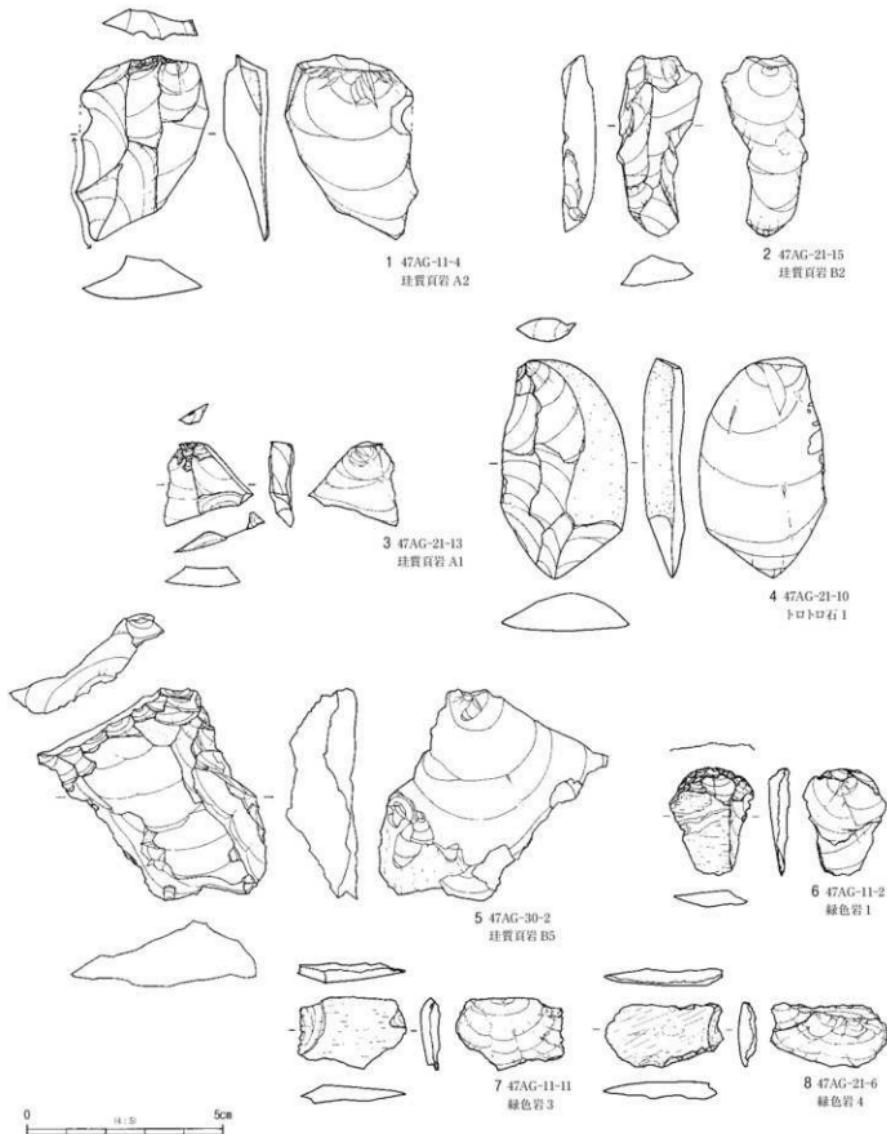
1は使用痕のある剥片である。自然面が平滑な褐色（10YR4/6）で、内部が明黄褐色（2.5YR6/6）の珪質頁岩A2で、単独母岩である。平坦打面で先端が尖る縦長剥片の背面左側縁に微細剥離痕が連続する。

2～5は剥片である。2は1ブロックで多数出土した珪質頁岩B2を母岩とするもので、先端がやや細い背面に主要剥離面方向と対向する剥離痕をもつ石刃状剥片である。3は珪化の強い灰オリーブ色(7.5Y6/2)の珪質頁岩A1の単独母岩である。4はトロトロ石1を母岩とする縦長剥片であり、小振りな楕円窓の石核素材から剥がされている。5は自然面が褐色(10YR4/6)で、内部が鈍い黄橙色(10YR6/4)、灰オリーブ色(7.5Y6/2)、灰白色(7.5Y7/1)が縞状になる珪質頁岩B5を母岩とする。背面左上側面の打面を45°右に転移して、石核の作業面を更新するような厚みのある剥片と理解される。6～8は局部磨製石斧調整剥片である。6は緑色岩1を母岩とし、第1ブロックで検出された局部磨製石斧と同一母岩である。刃部端部の側縁から調整している。7は自然面・内面ともオリーブ黄色(7.5Y6/3)の緑色岩3である。8は自然面と内部がオリーブ黄色(7.5Y6/3)で、自然面には暗緑灰色(5G3/1)と灰白色(N8/0)が縞状に入る緑色岩4である。色調や縞状構造のあり方から、緑色岩1とは別母岩と判断した。9は単独母岩の玉髓1の石核である。珪化度の強い拳大よりやや小さい楕円窓の長軸方向の平坦な自然面を打面として、打点を左右に移動して幅広な剥片を作出している。

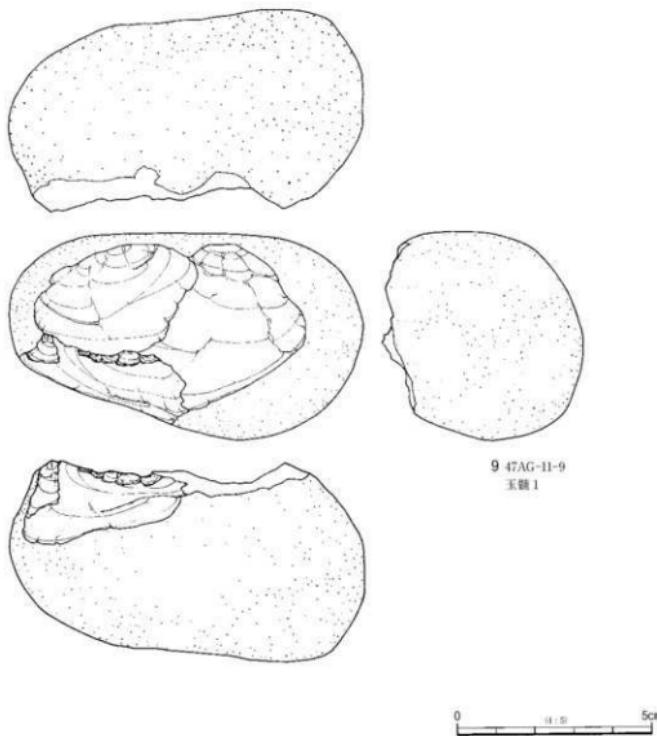
10a～10cはホルンフェルス4を母岩とする打製石斧の接合資料である。表裏面に自然面が確認され、扁平長楕円窓を素材としている。左右側縁から幅広な平坦剥離、基部・末端部から縦長平坦剥離の後、縁辺に細部加工が施されている。また、表裏面に対して水平方向の板状構造(石の目)が発達して、平坦剥離末端部は急角度に剥がれている。器体端部には厚みを減ずるためか、長軸方向から抉りこむような調整が集中している。10aは表面左端部からの加撃で折れている。器体にはその後の加工が見られないことから、この段階で同時に10b・10cが分割されたものかもしれない。研磨痕は認められず、器体の厚みを減



第18図 第2ブロック母岩別分布



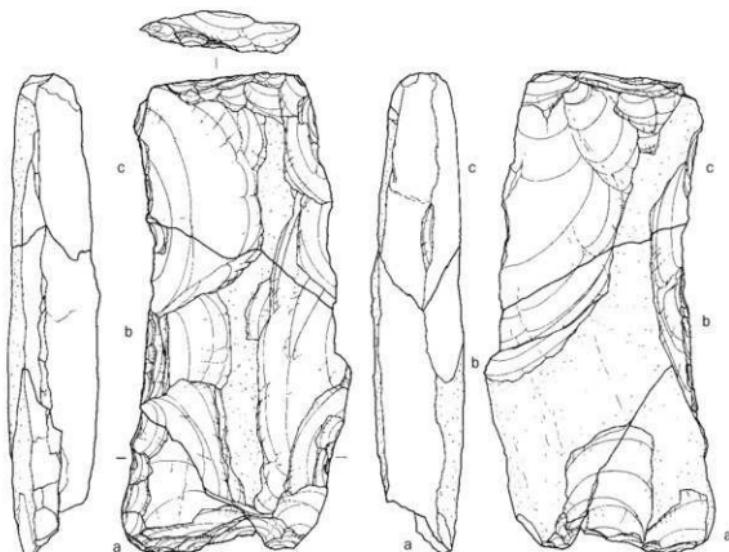
第19図 第2ブロック出土石器1



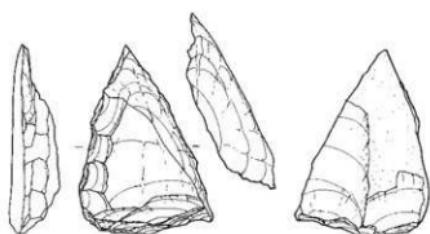
第20図 第2ブロック出土石器2

じる加工や刃部形成のための加工段階で3分割に欠損していることから、石斧製作の初期段階の未成品と判断される。11は同一母岩の打製石斧調整剥片である。打面は線状打面となっているが、器体のどの部位の調整加工かは判然としない。

12a～12cは自然面が平滑で明オリーブ灰色(2.5GY7/1)、オリーブ灰色(2.5GY5/1)、内部が淡黄色(2.5Y8/3)、新鮮な面がオリーブ灰色(2.5GY5/1)、暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)の黒色頁岩3を母岩とする。打製石斧の製作に関連した接合資料であり、第6ブロックとブロック間で接合する。下半部に最大幅を持つ棒状楕円窪である。素材をやや斜めに分割する表面右側縁からの横長剥片を作出後、この剥離面の器体縁辺下半部を巡るように平坦加工が施される。表面末端部から左側縁中央にかけては細かな急角度調整が連続する。12aは表面右上半部に調整加工が行われた際に剥離が突き抜けて、12aと12b・12cが分割されている。12aは、背面左側縁に細部加工が認められる。上端に平坦な面が設けられ、この面を打面として器体小口から3か所に打点を移動した長軸方向の楕状剥離痕が数条見られるが、いずれも短い剥離痕に止まっている。12aは彫刻刀形石器と器種認定したが、楕状剥離面を彫刻刀のように使用するため



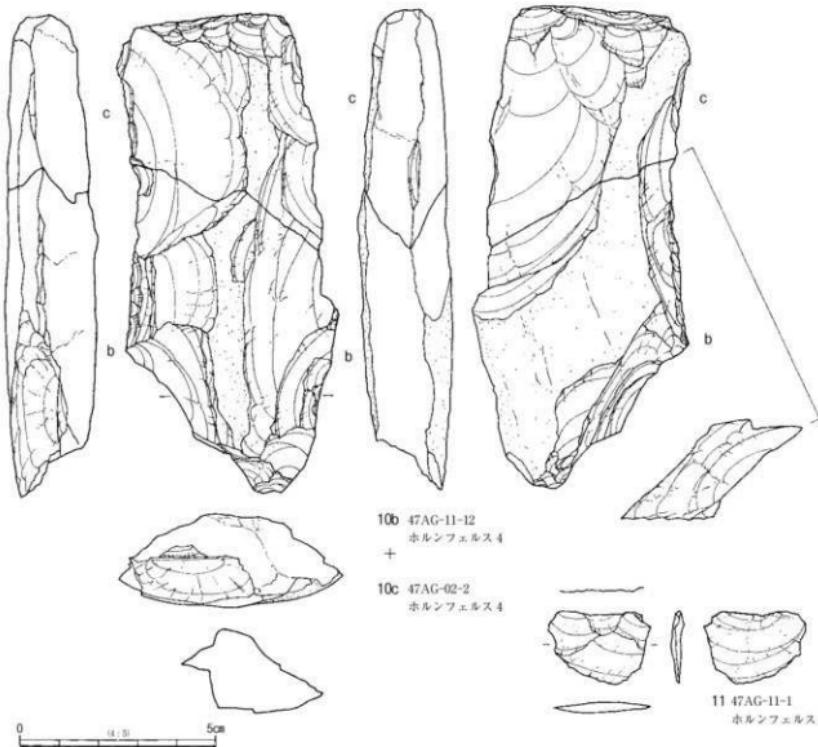
接合資料 10a~10c



10a 47AG-11-3  
ホルンフェルス 4



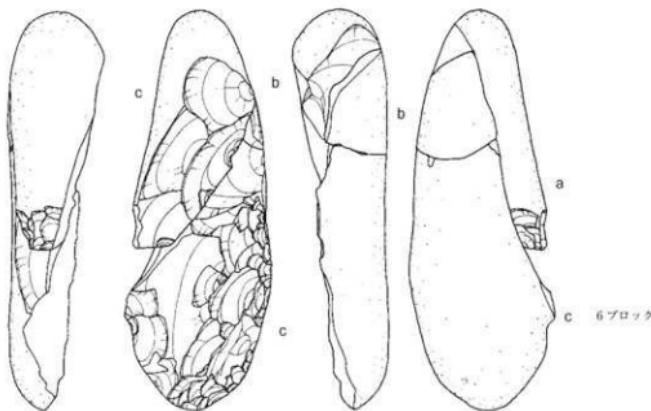
第21図 第2ブロック出土石器 3



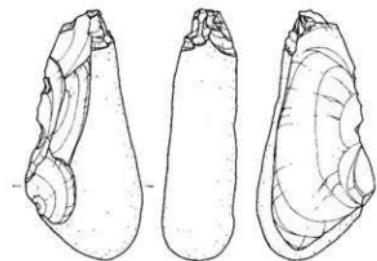
第22図 第2ブロック出土石器4

の調整加工なのか、別の器種に転用しようとして自然面を除去しようとした調整加工なのか判然としない。ただし、石斧製作において半截、分割した礫素材の自然面と主要剥離面との縁辺を小口方向に剥片剥離する手法はしばしば認められるので、そうした剥離手法に類似したものかもしれない。12b+12cは尖った上端部を折り取るように加工した後、表面右側縁で抉るような平坦加工が行われ、この時に12bと12cは横断方向に分割した可能性が高い。12cでは、この分割面からさらに細部加工が行われている。

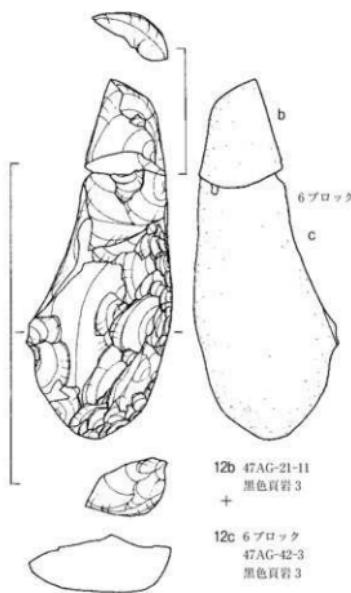
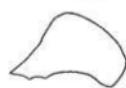
13a～13dは自然面と内面がにぶい黄橙色(10YR7/4)、新鮮な面が灰色(7.5Y4/1)の安山岩5を母岩とする。12と類似した打製石斧の製作に関連した接合資料であり、第6ブロックとブロック間で接合する。最大幅を下半部にもつ扁平棒状礫を素材としている。器体表面下端部方向から2回ほどの平坦加工が施され、表面左側縁から素材を半裁するような平坦加工によって13aが作出され、次に表面右側縁からの平坦加工によって13bが作出されている。その後、表面下端部から右側縁下側の縁辺にかけて急角度細部調整が連続する。この段階まで13cと13dは接合していたと考えられるが、表面右側縁に13bの主要剥離痕を



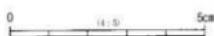
接合資料 12a～12c



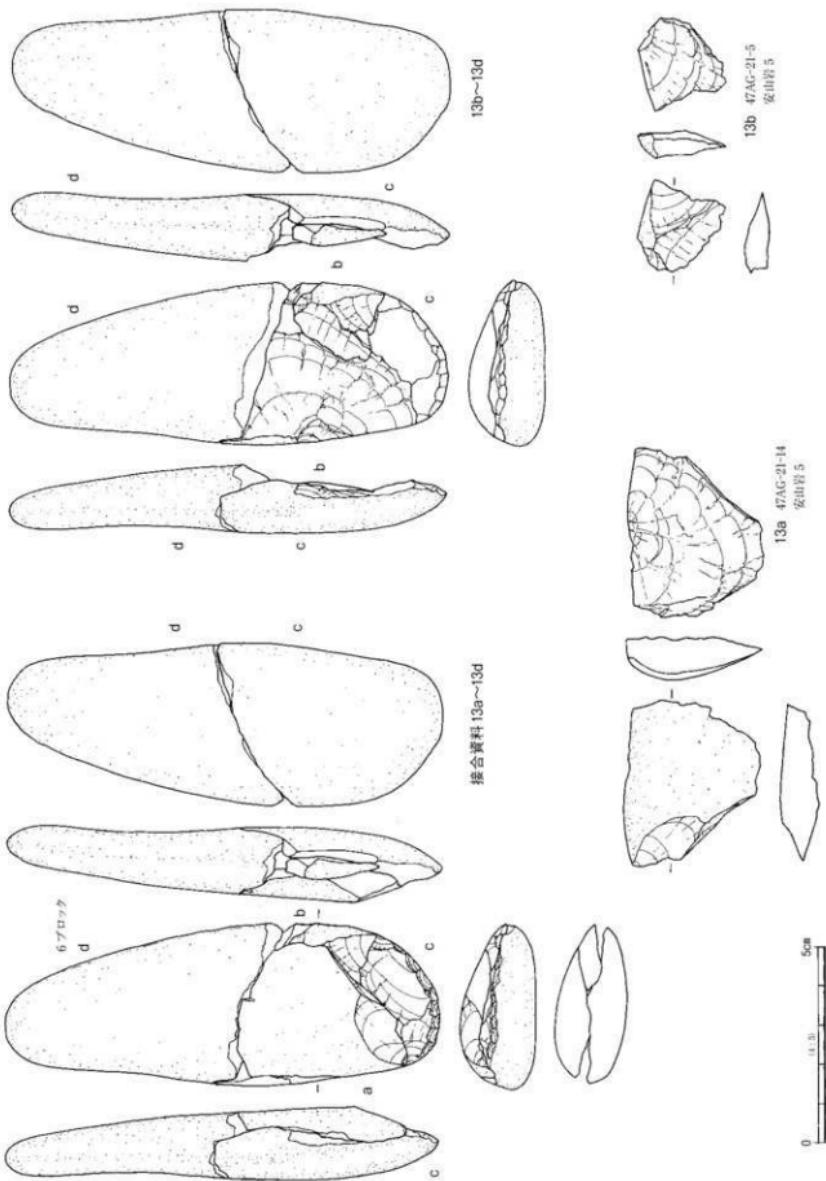
12a 47AG-21-8  
黒色頁岩 3



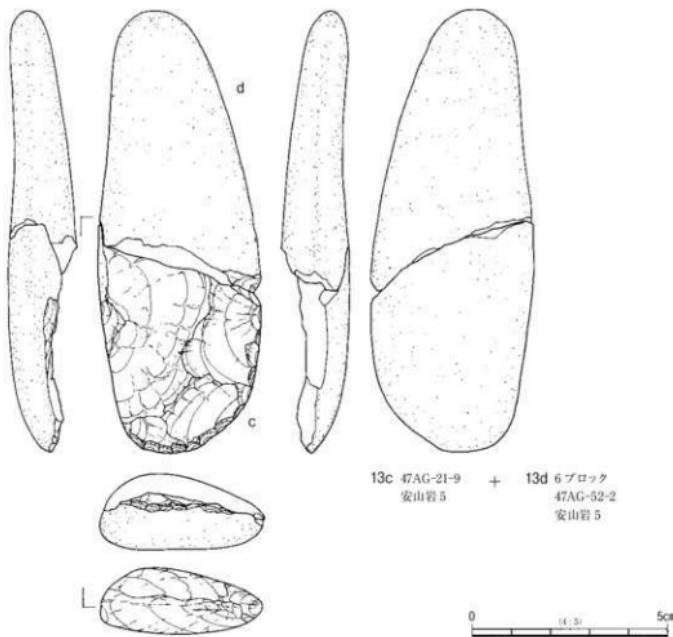
12b 47AG-21-11  
黒色頁岩 3  
+



第23図 第2ブロック出土石器 5



第24図 第2ブロック出土石器 6



第25図 第2ブロック出土石器7

第5表 第I文化層第2ブロック組成表

器種	母岩番号	開削磨製石 使用面の あら削片	石核	打製石片	打製石片 磨整削片	磨削刃形 石器	剥片	塊	点数計	重量計 (g)	点数比 (%)	重量比 (%)		
チャート	チャート-3						1 28.76	1	28.76	2.63	1.37			
	チャート-4						1 103.00	1	103.00	1.63	0.15			
チャート							2 1063.76	2	1064	6.63	0.02			
ドレライト	ドレライト-1						1 0.29	1	0.29	2.63	0.02			
ドレライト	集計						1 0.29	1	0.29	2.63	0.02			
トロロコ石	トロコ口61						2 18.69	2	18.69	5.26	1.02			
トロロコ石	集計						2 18.69	2	18.69	5.26	1.02			
ホルンフェルス	ホルンフェルス-2.4			3 175.34	1 1.58		4 176.92	10	53	9.65				
	ホルンフェルス-2.5						1 1.58	1	1.58	0.30	0.1			
ホルンフェルス	集計			3 175.34	1 1.58		5 180.06	13.16	9.82					
安山岩	安山岩						1 0.68	1	0.68	2.63	0.04			
	安山岩5			1 33.37	2 17.11		3 50.48	7.89	2.75					
	安山岩6						1 0.41	1	0.41	2.63	0.02			
安山岩	集計			1 33.37	2 17.11		5 51.57	13.16	2.81					
玉髓	玉髓1			1 332.20			1 32.20	2	32.20	2.63	18.12			
	玉髓			1 332.20			1 32.20	2	32.20	2.63	18.12			
珪質頁岩A	珪質頁岩A1						1 2.96	1	2.96	2.63	0.13			
	珪質頁岩A2			1 14.18			1 14.18	1	14.18	2.63	0.77			
	珪質頁岩A3						1 4.82	1	4.82	2.63	0.26			
珪質頁岩A	集計			1 14.18			2 7.18	3	21.36	7.89	1.16			
珪質頁岩B	珪質頁岩B2						1 6.78	1	6.78	2.63	0.37			
	珪質頁岩B4						2 8.86	2	8.86	2.63	0.46			
	珪質頁岩A5						3 56.63	2	56.63	7.89	2.99			
	珪質頁岩B6						3 11.89	1	11.89	10.53	0.65			
珪質頁岩B	集計						10 83.82	10	83.82	26.32	4.57			
黑色安山岩	黑色安山岩4						1 5.89	1	5.89	2.63	0.32			
	黑色安山岩5						1 2.16	1	2.16	2.63	0.12			
黑色安山岩	集計						2 8.05	2	8.05	5.26	0.44			
黑色頁岩	黑色頁岩2						1 0.98	1	0.98	2.63	0.05			
	黑色頁岩3			1	7.54	1 35.45	2 2.91	2	35.45	2.63	1.31			
黑色頁岩	集計			1	7.54	1 35.45	1 0.98	1	35.45	7.89	2.40			
泥岩	泥岩1						1 22.09	1	22.09	2.63	1.20			
泥岩	集計						1 22.09	1	22.09	2.63	1.20			
緑色岩	緑色岩1						1	2.63	1	2.63	0.14			
	緑色岩3			1 2.53			1	2.53	1	2.53	0.14			
	緑色岩4			1 2.51			1	2.51	1	2.51	0.14			
緑色岩	集計			3 7.71			3 7.71	7.89	0.42					
総計				3 7.71	1 14.18	1 332.20	6 216.25	3 18.69	1 35.45	20 122.60	40 1086.53	30 1833.50	100.00	100.00

切るように抉れた剥離痕が観察され、この衝撃により13c+13dの器体は長軸に対して横断方向に分割されて欠損している。13dは第6ブロックから検出され、剥片剥離の進行状況から当ブロックから搬出されたと考えられる。12a~12c、13a~13dの接合資料は石斧製作の初期段階で器体を大きく欠損していることから、製作を途中で放棄した石斧未成品と判断される。

### 第3ブロック（第26・27図、図版14）

**出土状況** 下層本調査区中央で、ブロック群の中央やや東側に位置しており、調査区北西側に広がる舌状台地の南西斜面部に当たる。北西側に第2ブロック、東側に第4ブロック、南西側にやや離れて第5ブロック、南側に第6ブロック、南東側に第7ブロックが分布する。ローム層の堆積状況は南東方向に傾斜している。

**遺物総数** 19点で、その分布は北東から南方向を長軸として中央部に空白部があり、その周りにややまとまっている。

平面分布範囲は、47AG-22・23・32・33・42グリッドに位置し、南北3.4m、東西3.2mの北東-南西方に向いやや長い楕円形状を示す。垂直分布では約78cmの高低差がある。第26図の土層断面は、ブロック検出範囲の6m~3m西側に位置しているため、遺物出土位置はVI層~X層に投影されているが、遺物取り上げ層位や調査時の写真観察等から判断して、出土層位はIX層下部~X層上部に出土集中レベルが求められる。

**母岩別資料** 13母岩が確認できる。主要な母岩は、珪質頁岩B2（4点）が南西側と北東側に1点離れて、珪質頁岩B6（3点）が北東側に、安山岩8（2点）が南西端に分布している。珪質頁岩B2はすべて剥片であるが、1点が第6ブロックの核石と接合する。

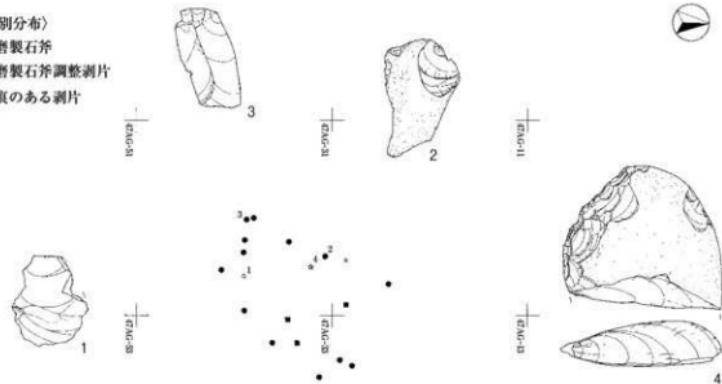
**出土遺物** 主要な器種は局部磨製石斧1点、局部磨製石斧調整剥片1点、使用痕のある剥片1点、剥片13点であり、他は砾3点となっている。

第6表 第I文化層第3ブロック組成表

器種	母岩番号	局部磨製石斧	局部磨製石斧 調整剥片	使用痕のある 剥片	剥片	塊	点数計	重量計 (g)	点数比 (%)	重量比 (%)					
チャート	チャート5				1	3.58	1	3.58	5.26	1.89					
チャート	集計				1	3.58	1	3.58	5.26	1.89					
トロトロ石	トロトロ石1				1	10.04		10.04	5.26	5.29					
トロトロ石	集計				1	10.04		10.04	5.26	5.29					
ホルンフェルス	ホルンフェルス6	1	81.14				1	81.14	5.26	42.75					
ホルンフェルス	集計	1	81.14				1	81.14	5.26	42.75					
安山岩	安山岩7					1	14.22	14.22	5.26	7.49					
安山岩	安山岩8			1	4.95	1	0.75	2	5.70	10.53	3.00				
安山岩	集計			1	4.95	1	0.75	1	14.22	19.92	15.79	10.49			
珪質頁岩A	珪質頁岩A4					1	0.33	0.33	5.26	0.17					
珪質頁岩A	集計					1	0.33	0.33	5.26	0.17					
珪質頁岩B	珪質頁岩B2				4	37.08	4	37.08	21.05	19.53					
珪質頁岩B	珪質頁岩B3				1	9.25	1	9.25	5.26	4.87					
珪質頁岩B	珪質頁岩B4				1	8.02	1	8.02	5.26	4.23					
珪質頁岩B	珪質頁岩B5				1	4.92	1	4.92	5.26	2.59					
珪質頁岩B	珪質頁岩B6				3	3.72	3	3.72	15.79	1.96					
珪質頁岩B	集計				10	62.99	10	62.99	52.63	33.18					
黒色頁岩	黒色頁岩4				1	10.94		10.94	5.26	5.76					
黒色頁岩	集計				1	10.94		10.94	5.26	5.76					
緑色岩	緑色岩3			1	0.88			0.88	5.26	0.46					
緑色岩	集計			1	0.88			0.88	5.26	0.46					
総計		1	81.14	1	0.88	1	4.95	13	84.72	3	18.13	19	189.82	100.00	100.00

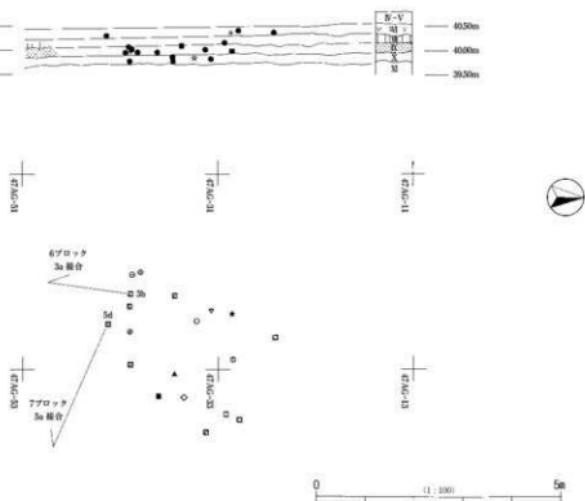
（器種別分布）

- 局部磨製石斧
- 局部磨製石斧並調整剥片
- 使用痕のある剥片
- 剥片
- 磨

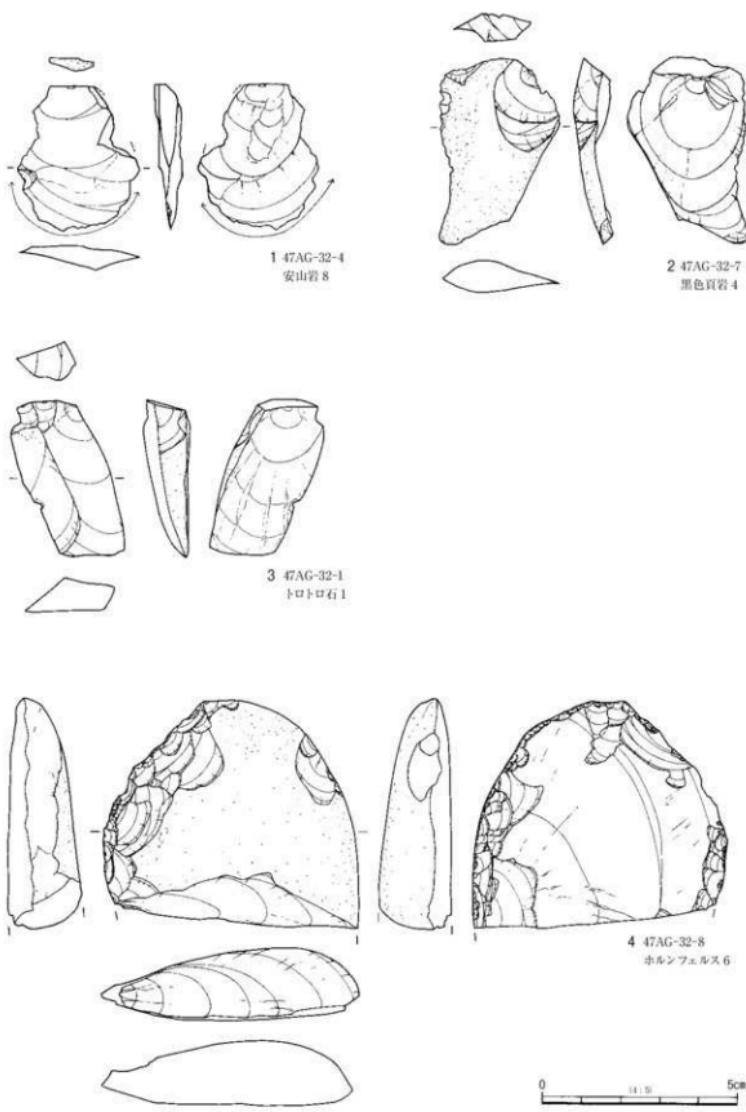


（母岩別分布）

- 緑色岩 3
- ホルンフェルス 6
- トロトロ石 1
- 安山岩 7
- 黒色頁岩 4
- 珪質頁岩 A 4
- 珪質頁岩 B 2
- 珪質頁岩 B 3
- 珪質頁岩 B 4
- 珪質頁岩 B 5
- 珪質頁岩 B 6
- ▲ チャート 5



第26図 第3ブロック器種別・母岩別分布



第27図 第3ブロック出土石器

1は自然面と内面がにぶい黄橙色(10YR7/4)の安山岩8を母岩とする。下半部が幅広となる形状の下端部に刃こぼれ状の微細剥離痕がみられる。2・3は剥片である。2は自然面と内部が浅黄橙色(10YR8/4)の黒色頁岩4を母岩とする。背面に広く自然面を残し、平坦打面で先端が尖る形状の綫長剥片である。3は自然面と内部が灰白色(N7/0)、新鮮な面が灰色(N5/0)のトロトロ石1を母岩とする。側面に自然面を残し、平坦打面で背面に腹面と同一方向からの剥離面が見られる。4はホルンフェルス6を母岩とする局部磨製石斧である。楕円碟から剥離された扁平な横長剥片を縦位に用いており、背面は自然面で構成される。主要剥離面左側縁と背面左側縁に平坦加工と急角度調整が顕著に見られるが、表裏面とも素材面が広く残っている。左側縁からの加撃により器体の横断方向に欠損したと考えられる。刃部側と考えられる器体が未検出のため明確ではないが、加工状況から石斧製作の初期段階のものであり、石斧未成品と判断される。

#### 第4ブロック(第28~35図、図版15・16)

出土状況 下層本調査区東側、ブロック群の東側に位置しており、調査区北西側に広がる舌状台地の南西縁辺部に当たる。西側に第3ブロック、南西側にやや離れて第7ブロックが分布する。ローム層の堆積状況は南方向に傾斜している。

遺物総数は32点である。北西から南方向を長軸として南端に集中部があり、そこから北側方向に1点ずつが離れて分布する。

平面分布範囲は、47AG-14・15・16・24・27・35・36・45グリッドに位置し、南北4.6m、東西5.7mの北東-南西方向にやや長い楕円形状を示す。垂直分布では約65cmの高低差がある。投影すべき土層断面がブロックから8m以上離れているため、土層断面投影図の作成を断念した。47AG-00グリッドでの土層柱状断面ではVI層～X層に投影されるが、遺物取り上げ層位や調査時の写真観察等から判断して、IX層に出土集中レベルが求められる。

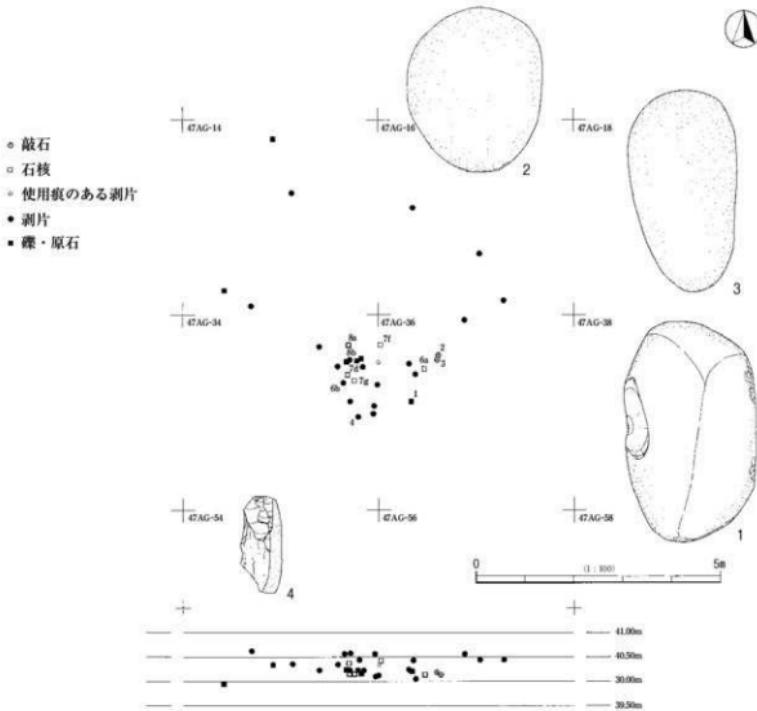
母岩別資料 13母岩が認められる。主要な母岩は、珪質頁岩B7(14点)が南端集中部西側と北西端、北東側に離れて1点ずつ、珪質頁岩B9(4点)が南端集中部東側に、珪質頁岩B8(2点)・安山岩11が南端集中部北側に、安山岩10が西端と東端に離れて分布している。珪質頁岩B7・8・9の母岩には、それぞれ石核と剥片の接合資料が存在し、ブロック内での母岩消費が顕著である。黒色頁岩1は、第1ブロック・第6ブロックとブロック間接合する。この接合資料は後述する。また、砂岩5・珪質頁岩A5は敲石であり、南端集中部の東端に近接して検出され、トロトロ石2は原石で、南端集中部の南東端に検出されており、特徴的なあり方を示す。

出土遺物 主要な器種は、敲石2点、原石1点、剥片19点、石核5点であり、他は礫5点となっている。

1は長楕円碟のトロトロ石2を母岩とする原石である。表面左側縁に幅広な平坦加工痕が見られるが、長軸上下端部に浅い敲打痕、右側縁部には細かな敲打痕が連続するため、敲石の用途を兼ねるものかもしれない。

2・3は敲石である。2は砂岩5を母岩として、下端部で打撃部位をずらした敲打痕が顕著に見られる。3は珪質頁岩A5を母岩として、下端部にキザミ状の敲打痕が認められる。

4は珪質頁岩B7を母岩とする剥片である。背面には平坦な節理面と右側に自然面を残す綫長剥片である。

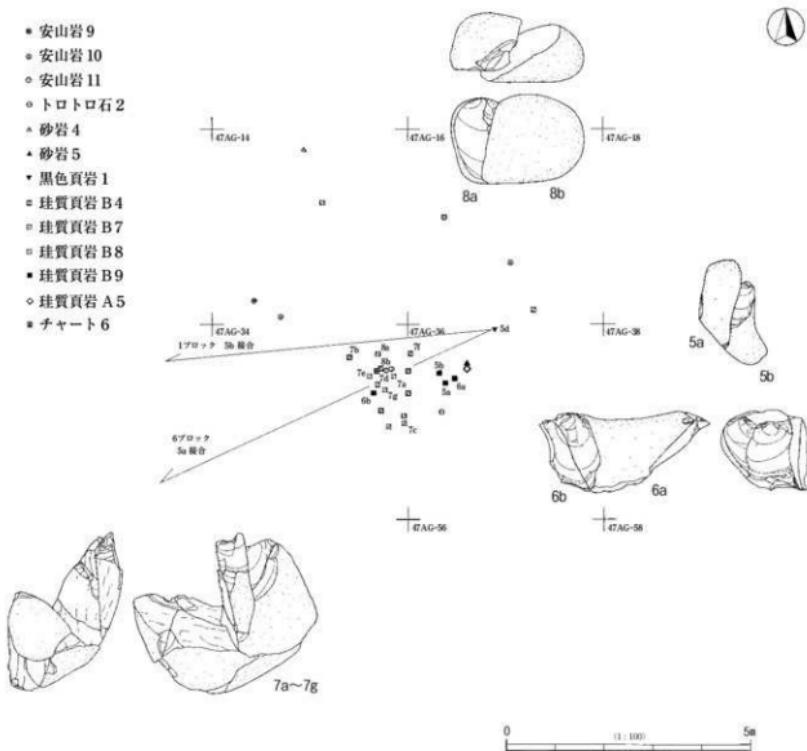


第28図 第4ブロック器種別分布

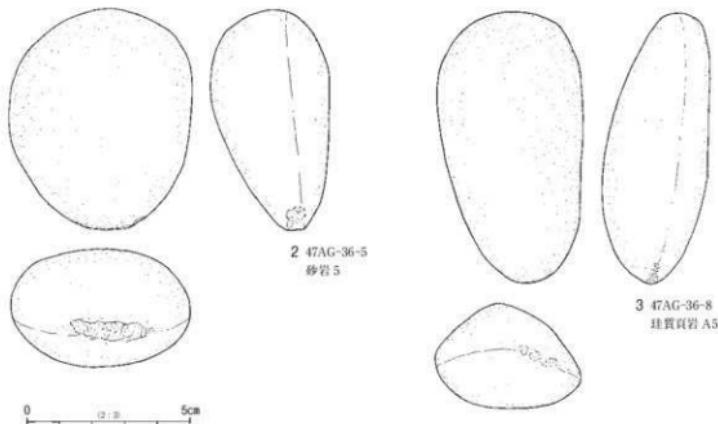
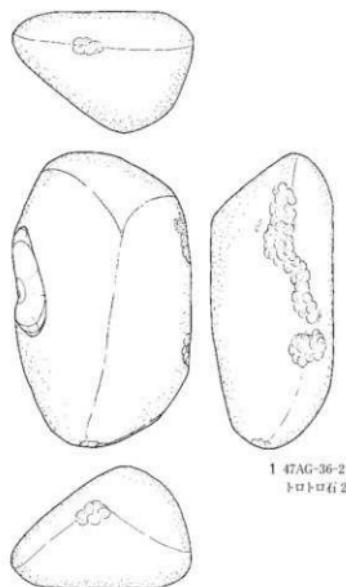
第7表 第I文化層第4ブロック組成表

器種	田畠番号	原石	石核	剥片	敲石	塊	点数計	重量計 (g)	点数比 (%)	重量比 (%)
チャート	チャート6					1 274.87	1 274.87	3.13	20.54	
チャート	集計					1 274.87	1 274.87	3.13	20.54	
トロトロ石	トロトロ石2	1 224.40					1 224.40	3.13	16.77	
トロトロ石	集計	1 224.40					1 224.40	3.13	16.77	
安山岩	安山岩10		2 3.74				2 3.74	6.25	0.28	
安山岩	安山岩11					2 118.36	2 118.36	6.25	8.84	
安山岩	安山岩9					1 53.27	1 53.27	3.13	3.98	
安山岩	集計		2 3.74			3 171.63	5 175.37	15.63	13.10	
珪質頁岩A	珪質頁岩A5				1 150.59		1 150.59	3.13	11.25	
珪質頁岩A	集計				1 150.59		1 150.59	3.13	11.25	
珪質頁岩B	珪質頁岩B4			1 8.34			1 8.34	3.13	0.62	
珪質頁岩B	珪質頁岩B7	3 102.73	11 45.08			14 147.81	43.75	11.04		
珪質頁岩B	珪質頁岩B8	1 29.82	1 37.55			2 67.37	6.25	5.03		
珪質頁岩B	珪質頁岩B9	1 61.95	3 20.67			4 82.62	12.50	6.17		
珪質頁岩B	集計	5 194.5	16 111.64			21 306.14	66.63	22.87		
黑色頁岩	黑色頁岩1		1 29.54				1 29.54	3.13	2.21	
黑色頁岩	集計		1 29.54				1 29.54	3.13	2.21	
砂岩	砂岩4					1 2.15	1 2.15	3.13	0.16	
砂岩	砂岩5					1 175.43	1 175.43	3.13	13.11	
砂岩	集計					1 175.43	1 2.15	2 177.58	6.25	13.27
總計		1 224.4	5 194.5	19 144.92	2 326.02	5 448.65	32 1336.49	100.00	100.00	

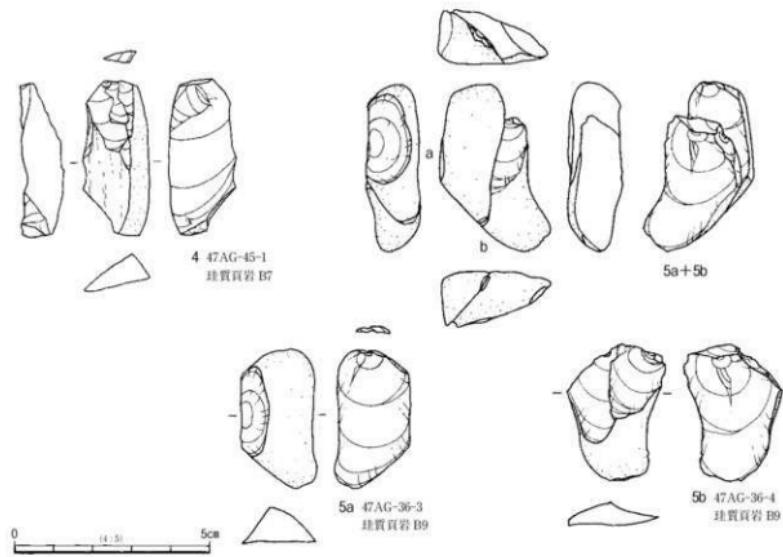
5 a + 5 b · 6 a + 6 b は珪質頁岩 B 9 の接合資料である。表面面が平滑で黄褐色 (10YR5/8)、内部が表面側から芯側に向かって明黄褐色 (25Y6/6) から暗灰黄色 (25Y5/2) に色調が変化する母岩である。5 a + 5 b は縦長剥片の接合資料であるが、背面中央に棱のある自然面を広く残しており、5 a は背面から継ぐ自然面を打面として作出されている。5 b 背面を打面とする 3 回の剥離の後、この剥離面を複剥離面打面として 5 b が作出される。6 a + 6 b の接合資料からは、横断面が逆三角形で上面がやや屈曲する平坦面の棒状亜角礫を石核素材としていることがわかる。6 a + 6 b の剥片剥離では、石核素材の長軸方向右側面を作業面として、平坦打面から打点を横に移動した 2 回の縦長剥片剥離が行われている。この剥片剥離との前後関係は判然としないが、素材裏面の自然面を打面として下面を作業面とする 2、3 回の剥片剥離が看取される。その後、作業面を正面に移動して、上面の自然面から幅広な剥片剥離が行われた。上面への打面設定の剥片剥離の後、この面を打面として素材の長軸方向を作業面とする 6 b が剥離されている。この剥離に先行して、左側面を作業面とする下面からの剥片剥離が看取される。6 a + 6 b の剥片



第29図 第4ブロック母岩別分布



第30図 第4ブロック出土石器1

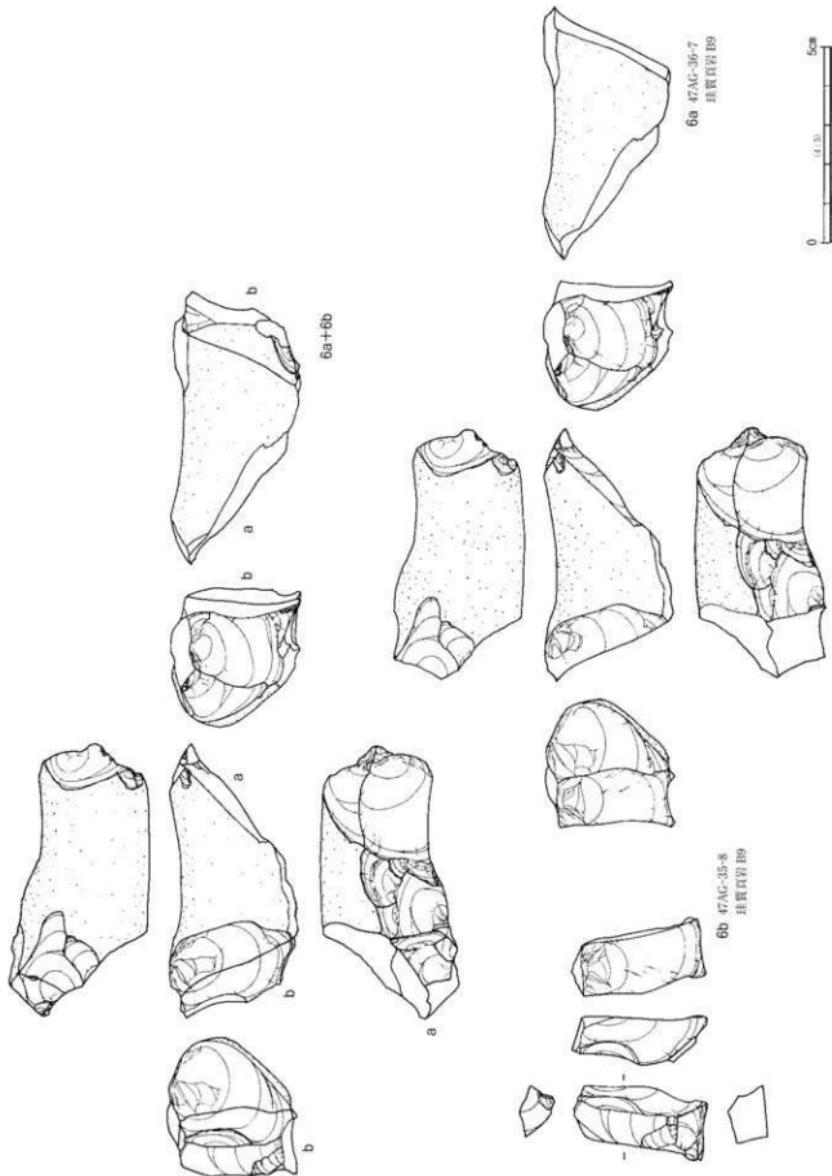


第31図 第4ブロック出土石器2

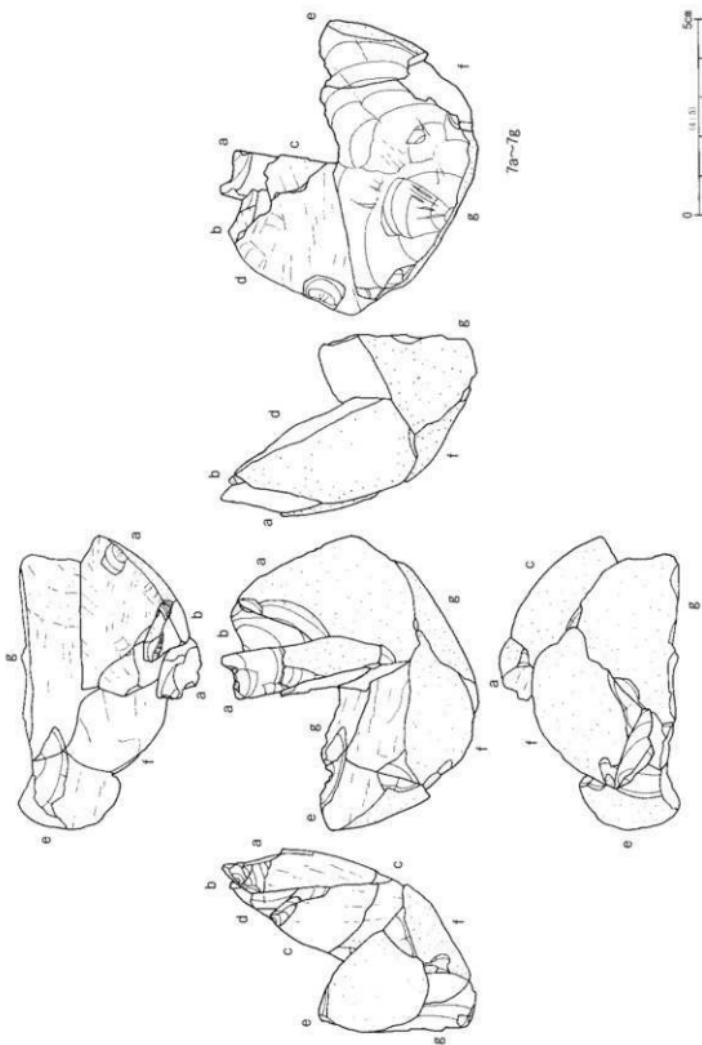
剥離工程から見て、6a 残核の右作業面の剥片剥離に先行して数回の剥片剥離があるが、5a+5b の剥片剥離は棒状素材の頭頂部上面から右側面を作業面とした、初期の剥片剥離である可能性が高い。

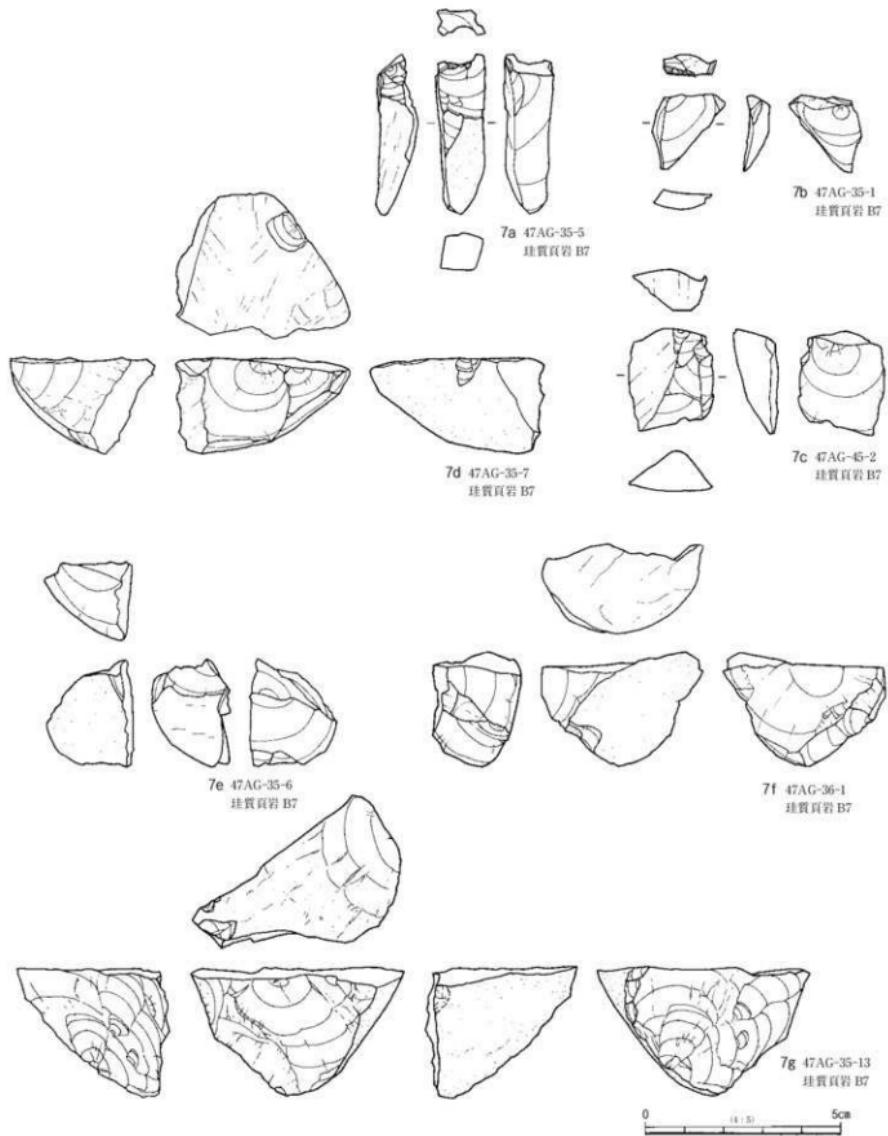
7a～7g は珪質頁岩 B7 の接合資料である。自然面は暗褐色 (7.5YR3/4) で、内部が表面側で明黄褐色 (2.5Y6/6)、内側で黄灰色 (2.5Y5/1) の母岩である。径 7 cm～8 cm の不整形円礫を石核素材としており、接合図上下横断面の節理方向を利用した加撃で原石が分割されている。これにより原石は、上側の半截礫 (7a～7d) の個体と下側の半截礫 (7e～7g) の個体に分かれることになる。7a～7d の接合個体をみると、接合図の裏面と左側面には節理状の平坦面が認められ、剥片剥離作業に先行して半截礫の裏面側節理で分割後、左側面の節理方向で分割している。結果として、形状が 1/4 円の平坦な節理面をもつ分割礫を石核原形としている。この平坦な節理面を打面として、節理面状の右側面と円弧状となる礫面に挟まれた角を頂点とする作業面で剥片剥離が進行する。打面調整状の短い剥離の後 7a が剥離され、正面で打点を右に移動して 7b の背面を主要剥離面とする剥離が 1 回あり、さらに同一方向に打点を後退して 7b の剥片が作出される。7b は左側面を剥離時の衝撃で欠損したと把握できる。同一方向に打点を後退して打面調整状の 1 回の短い剥離の後、左方向に打点を移動し 7c が剥離されている。同一の打面から左右に打点移動しながら同一の作業面で縦長剥片を剥片剥離する手法と把握できる。7e～7g の接合個体を見ると、下側半截礫は接合図裏面下端方向からの平坦な剥離により 2 分割され、形状が半円の平坦な節理面をもつ分割礫を石核原形としている。まず平坦な剥離面を打面として、接合図上面で打面調整状の幅広剥離が行われ、接合図裏面の平坦な剥離面を打面として、正面方向に側面の自然面を切り取る

第32図 第4プロック出土石器3

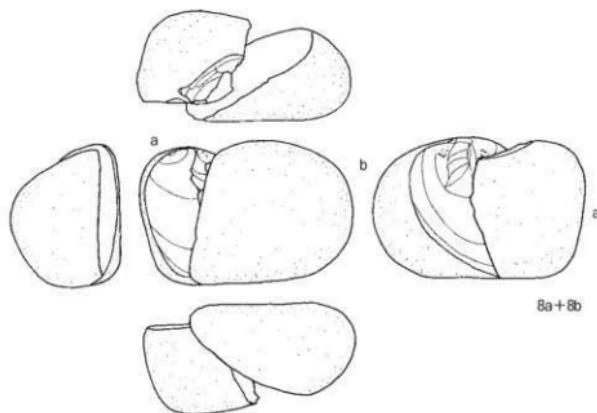


第333図 第4ブロック出土石器4

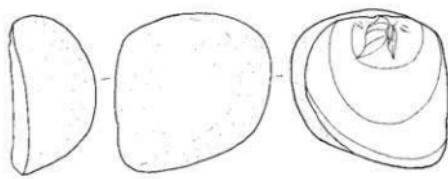




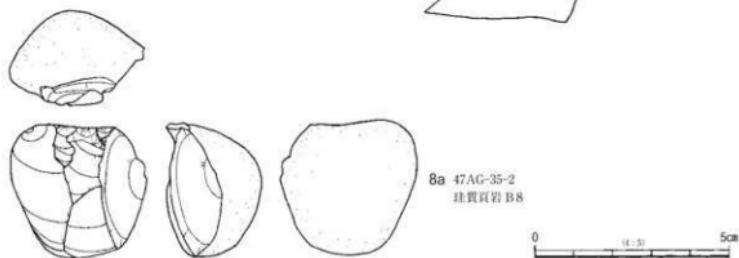
第34図 第4ブロック出土石器5



8a+8b



8b 47AG-35-14  
珪質頁岩 B8



8a 47AG-35-2  
珪質頁岩 B8



第35図 第4ブロック出土石器 6

ように剥片剥離され7 eが作出される。半截された節理面を打面として、弧を描く礫皮面を作業面として幅広で分厚い7 fが剥片剥離される。その後、7 fの左側面の7 eが剥がされた剥離面を打面として、器体の側縁を切り取るような剥離が行われている。このことから7 fは石核と考えられ、7 gから7 fの剥離は、器種生産のための剥片剥離ではなく、石核素材作出のための剥片剥離と把握される。

8 a + 8 bは珪質頁岩B 8を母岩とする、石核と剥片の接合資料である。自然面が平滑で暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)、オリーブ褐色(2.5Y4/3)、内部が灰オリーブ色(7.5Y4/2)、灰色(7.5Y5/1)の小楕円礫を原石としている。楕円礫の長軸中央部を打点として、短径方向に向かって素材を斜めに分割するような剥片剥離で8 bが剥離される。8 bは背面自然面で分厚い剥片となっている。もう片方の分厚い剥片は石核素材となり、8 bの主要剥離面を作業面として、素材短軸(上面)を打面として左側から右側に打点を移動して2回剥片剥離が行われ、打点を素材の長軸(右側面)に転移し1回の幅広な剥片を剥離している。

## 第5ブロック(第36・37図、図版16)

出土状況 下層本調査区中央部で、ブロック群中央やや東側に位置しており、調査区北西側に広がる舌状台地の南西斜面部に当たる。北東側に第2ブロック・第3ブロック、北西側にやや離れて第1ブロック、東側に第6ブロックが分布する。ローム層の堆積状況は南北方向に傾斜している。

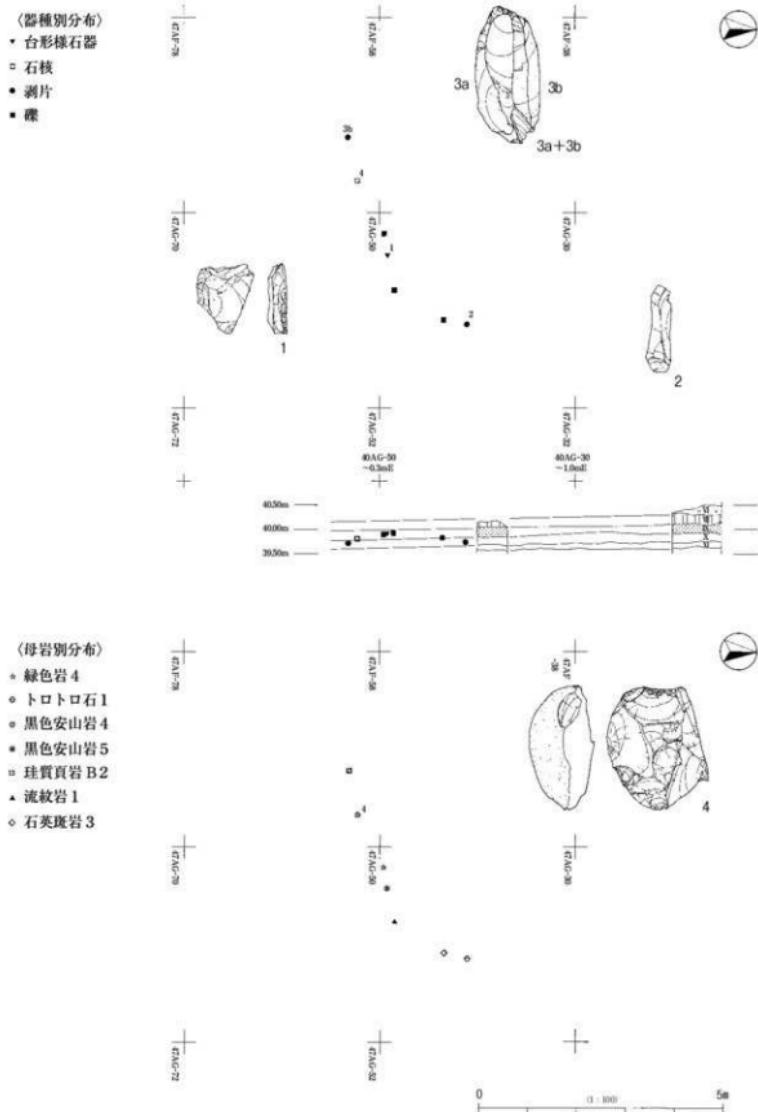
遺物総数は8点で、その分布は北東から南北方向を長軸として、1点ずつが離れた散漫な分布を示す。平面分布範囲は、47AF-59、47AG-40・41グリッドに位置し、南北2.4m、東西3.8mの北東-南北方向に長い楕円形状に分布する。垂直分布では約23cmの高低差がある。第36図の土層柱状断面ではIX層-X層に出土位置が投影され、出土層位もIX層-X層と考えられる。

母岩別資料 7母岩が確認できる。主要な母岩は珪質頁岩B 2(2点)が確認される。珪質頁岩B 2は第1ブロックで石刃状剥片を多く母岩消費していた母岩であるが、本ブロックでは石刃状剥片の接合資料が確認された。ブロック西端で出土した剥片と上層一括資料との接合であるため分布状況は不明である。黒色安山岩5は台形様石器で、ブロック中央部から検出され、トロトロ石1の剥片は北端で検出されている。

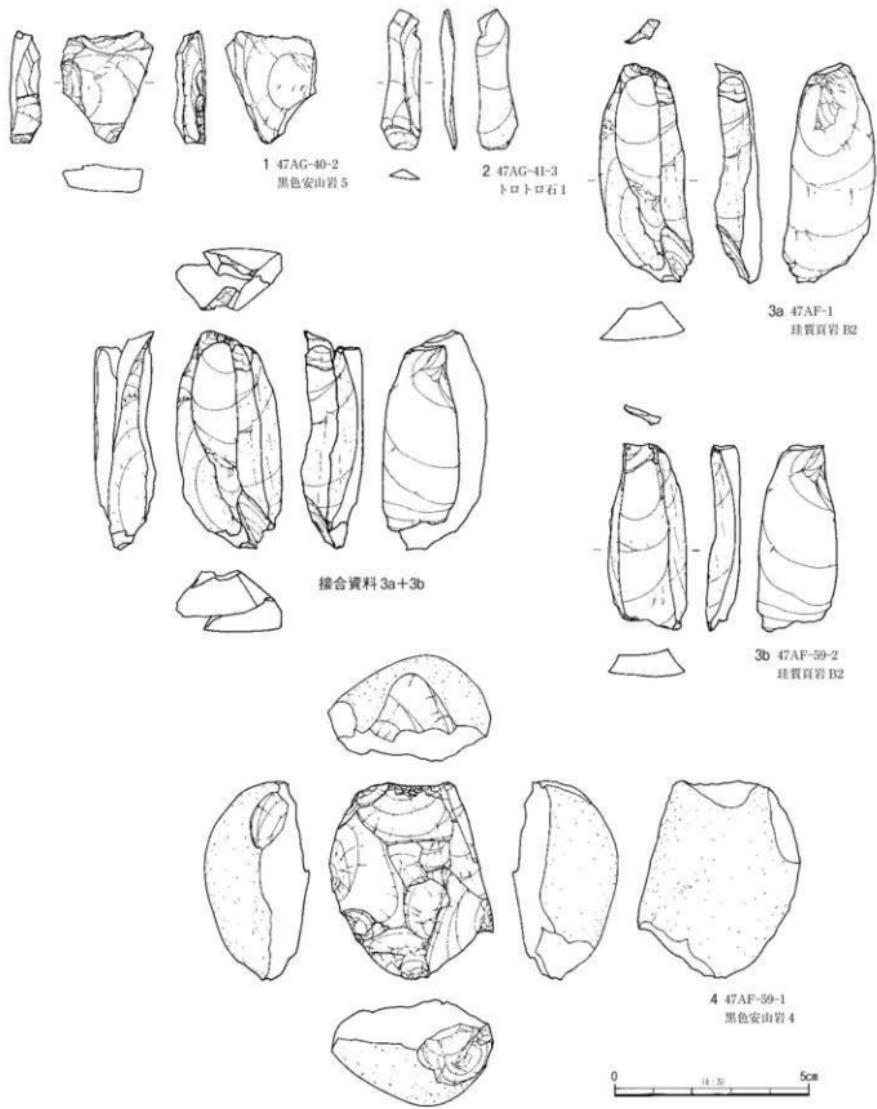
出土遺物 主要な器種は、台形様石器1点、剥片3点、石核1点であり、他は礫が3点となっている。1は黒色安山岩5の台形様石器である。剥片末端部を切断し素材を横位に用いており、平面形状が逆三角形状となる。器体側縁切断部に主要剥離面側からの細部調整が基部側に連続する。

2・3 a+3 bは剥片である。2はトロトロ石1の母岩を用いており、風化が著しく判然としないが上下からの剥離痕が見られる細身の石刃状剥片である。3 a+3 bは珪質頁岩B 2の接合資料である。節理面が赤褐色(5YR4/6)、明褐色(5YR5/8)で内部が灰オリーブ色(5Y5/3)～灰色(5Y5/1)の色調をした珪質頁岩B 2を母岩とする。3 a+3 bの接合状況を見ると、3 a背面には両側縁に平坦な節理面を残し、背面中央部には両側縁に平行した稜をもつ剥離痕が認められることから、先行する1回の剥離(おそらく最初の剥離)が確認できる。節理面の平坦打面から打点をやや右側に移動して3 aが剥離されている。さらに打点を左に移動して左側節理面を切り取る1回の剥離が行われた後、打点を右に移動して3 bが剥離されている。結果として3 bの背面は、両側縁に平行した2つの稜をもち右側縁が節理面となる石刃状剥片となっている。この剥片剥離工程から、石核素材の平坦な節理面がなす角を作業面として、節理面を打面として打点を左右に後退しながら石刃状剥片を作出する手法と把握される。

4は黒色安山岩4を母岩とする石核である。原石を截断した楕円礫素材長軸の上下に打面を設定し、上



第36図 第5ブロック器種別・母岩別分布



第37図 第5ブロック出土石器

第8表 第I文化層第5ブロック組成表

岩種	母岩番号	石核	台形錐石器	剥片	礫	点数計	重量計(g)	点数比(%)	重量計(%)
トロトロ石	トロトロ石1			1 1.07		1	1.07	12.50	0.70
トロトロ石	集計			1 1.07		1	1.07	12.50	0.70
珪質頁岩B	珪質頁岩B2			2 20.55		2	20.55	25.00	13.38
珪質頁岩B	集計			2 20.55		2	20.55	25.00	13.38
黒色安山岩	黒色安山岩4	1 61.41				1	61.41	12.50	39.99
黒色安山岩	黒色安山岩5		1 5.75			1	5.75	12.50	3.74
黒色安山岩	集計	1 61.41	1 5.75			2	67.16	25.00	43.74
石英斑岩	石英斑岩3				1 7.03	1	7.03	12.50	4.58
石英斑岩	集計				1 7.03	1	7.03	12.50	4.58
流紋岩	流紋岩1				1 39.91	1	39.91	12.50	25.99
流紋岩	集計				1 39.91	1	39.91	12.50	25.99
緑色岩	緑色岩4				1 17.83	1	17.83	12.50	11.61
緑色岩	集計				1 17.83	1	17.83	12.50	11.61
総計		1 61.41	1 5.75	3 21.62	3 64.77	8	153.55	100.00	100.00

面からの縱長剥片剥離が認められる。その後作業面の周りを打点が巡るような求心的な剥片剥離手法により横長剥片が作出されている。

## 第6ブロック (第38~44図、図版17・18)

出土状況 下層本調査区中央で、ブロック群の中央南側に位置しており、調査区北西側に広がる舌状台地の南西斜面部に当たる。北側に第3ブロック、北西側に第5ブロック、北東側にやや離れて第7ブロックが分布する。ローム層の堆積状況は南方向に傾斜している。

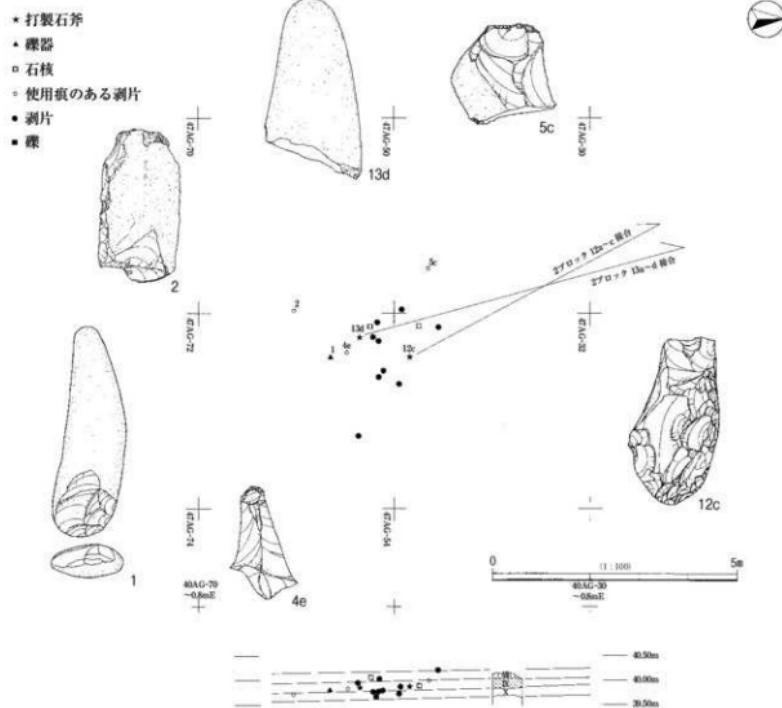
遺物総数は18点で、その分布は北西から南東方向を長軸として中央に集中部があり、その周間に1m程度離れて数点が点在している。

平面分布範囲は、47AG-41・42・52・53・61グリッドに位置し、南北3.0m、東西3.5mの北西-南東方向にやや長い楕円形状の分布を示す。垂直分布では約57cmの高低差がある。第38図の土柱柱状断面ではVI層-X層に投影されるが、遺物取り上げ層位や調査時の写真観察等から判断して、出土層位はⅩ層下部-X層上部に出土集中レベルが求められる。

母岩別資料 9母岩が確認できる。主要な母岩は、黒色頁岩1(9点)が集中部と北西端に離れて1点、珪質頁岩B4(2点)が集中部北側に分布している。黒色頁岩1の母岩には2つの接合資料がある。それぞれ第1ブロック、第1ブロック・第4ブロックとブロック間での接合資料が存在するが、いずれも剥片剥離工程の初期段階の剥片との接合であり、本ブロックでの母岩消費が顕著である。黒色頁岩3・安山岩5は、いずれも第2ブロックの接合資料で記載したもので、石斧製作途中で欠損した素材が本ブロックに搬入されたと想定される。珪質頁岩B2は石核であり、第3ブロックで検出された剥片と接合する。

出土遺物 主要な器種は打製石斧2点、礫器1点、使用痕のある剥片3点、剥片9点、石核2点であり、他は礫が1点となっている。

1はホルンフェルス7を母岩とするもので礫器とした。扁平細長礫の先端から素材を斜めに切り取るよう2回の平坦剥離が施される。その後、平坦剥離面の先端から右側縁にかけて細部加工が認められ、器体の縁辺部を円く整形している。第2ブロックで観察された接合資料の石斧製作の初期段階を示す資料のあり方から、小型棒状石斧の製作初期段階での未完成品と把握されるべきであろうか。2・4e・5cは使



第38図 第6ブロック器種別分布

第9表 第I文化層第6ブロック組成表

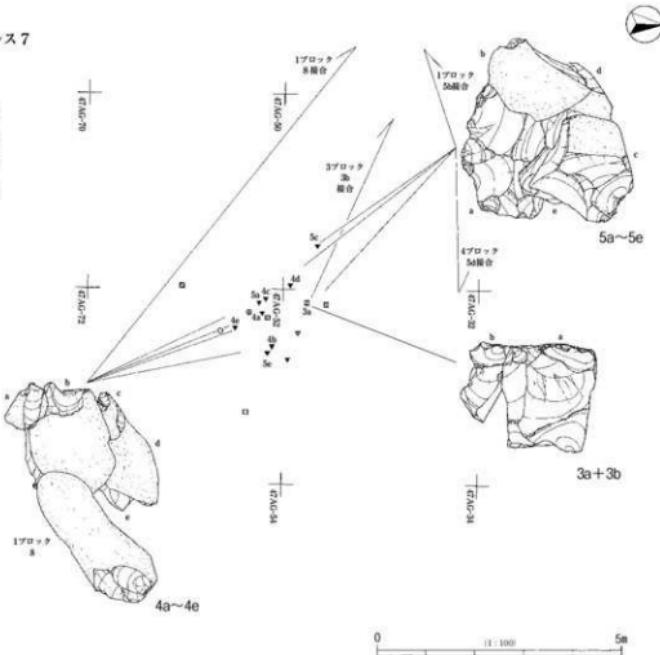
器種	母岩番号	使用度の ある剥片	石核	打製石斧	剥片	縁	擦器	点数計	重量計 (g)	点数比 (%)	重量比 (%)
石材								1	34.01	1	34.01
ホルンフェルス	ホルンフェルス7							1	34.01	1	5.56
ホルンフェルス	集計							1	34.01	5.56	10.01
安山岩	安山岩5			1	51.57			1	51.57	5.56	15.17
安山岩	集計			1	51.57			1	51.57	5.56	15.17
珪質頁岩B	B2			1	47.29			1	47.29	5.56	13.91
珪質頁岩B	B3	1	31.83					1	31.83	5.56	9.37
珪質頁岩B	B4				2	4.55		2	4.55	11.11	1.34
珪質頁岩B	B6				1	0.14		1	0.14	5.56	0.04
珪質頁岩B	集計	1	31.83	1	47.29	3	4.69	5	83.81	27.78	24.66
黒色頁岩	1	26.20	1	65.27	6	31.04		9	122.51	50.00	36.05
黒色頁岩	3			1	46.03			1	46.03	5.56	13.54
黒色頁岩	集計	2	26.20	1	65.27	6	31.04	10	168.54	55.56	49.59
石英斑岩	石英斑岩4					1	1.94	1	1.94	5.56	0.57
石英斑岩	集計					1	1.94	1	1.94	5.56	0.57
総計		3	58.03	2	112.56	2	97.60	9	35.73	1	34.01
								18	339.87	100.00	100.00

用痕のある剥片である。2は自然面が黄褐色(10YR5/8)、内部が明黄褐色(2.5Y7/6)の珪質頁岩B3の母岩である。背面が自然面で広く覆われる厚い縦長剥片の背面右側縁に、刃こぼれ状の微細剥離痕が連続する。

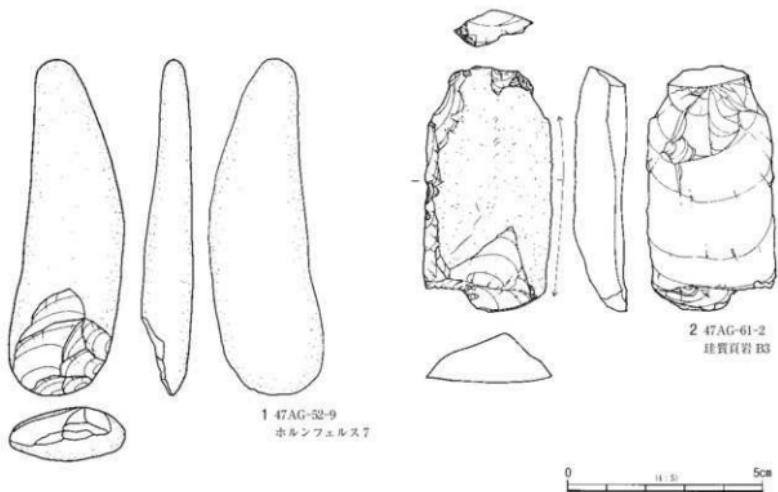
3a+3bは石核と剥片の接合資料である。自然面が明褐色(7.5YR5/6)で内部が灰オリーブ色(5Y5/3)～灰色(5Y5/1)の珪質頁岩B2を母岩とする。右側面が自然面で節理方向を利用した平坦な打面とし、正面と左側面を作業面とした剥片剥離が見られる。さらに左側面を打面として裏面方向に1、2回の剥離が行われ、同一打面から素材を切断するように3bが作出されている。結果として3aの石核は角柱状の残核となり、90°を基調とした打面転移により剥片剥離が進行する手法が看取される。

4a～4e+8は黒色頁岩1の接合資料である。自然面が平滑で風化した灰色(N6/1)、内部が灰色(N6/1)、新鮮な面が暗灰色(N3/0)の部位と、自然面が黒色(N2/0)、暗灰色(N3/0)で内部が黒色(N2/0)、暗灰色(N3/0)の部位がある母岩である。まず第1ブロックで検出された背面が自然面で覆われる縦長剥片(8)が剥離される。その後、対向する方向に平坦な打面を設け、同一打面から剥離が進行している。

- 安山岩5
- ホルンフェルス7
- ▼ 黒色頁岩1
- ▽ 黒色頁岩3
- 硅質頁岩B2
- 硅質頁岩B3
- 硅質頁岩B4
- 硅質頁岩B6
- 石英斑岩4



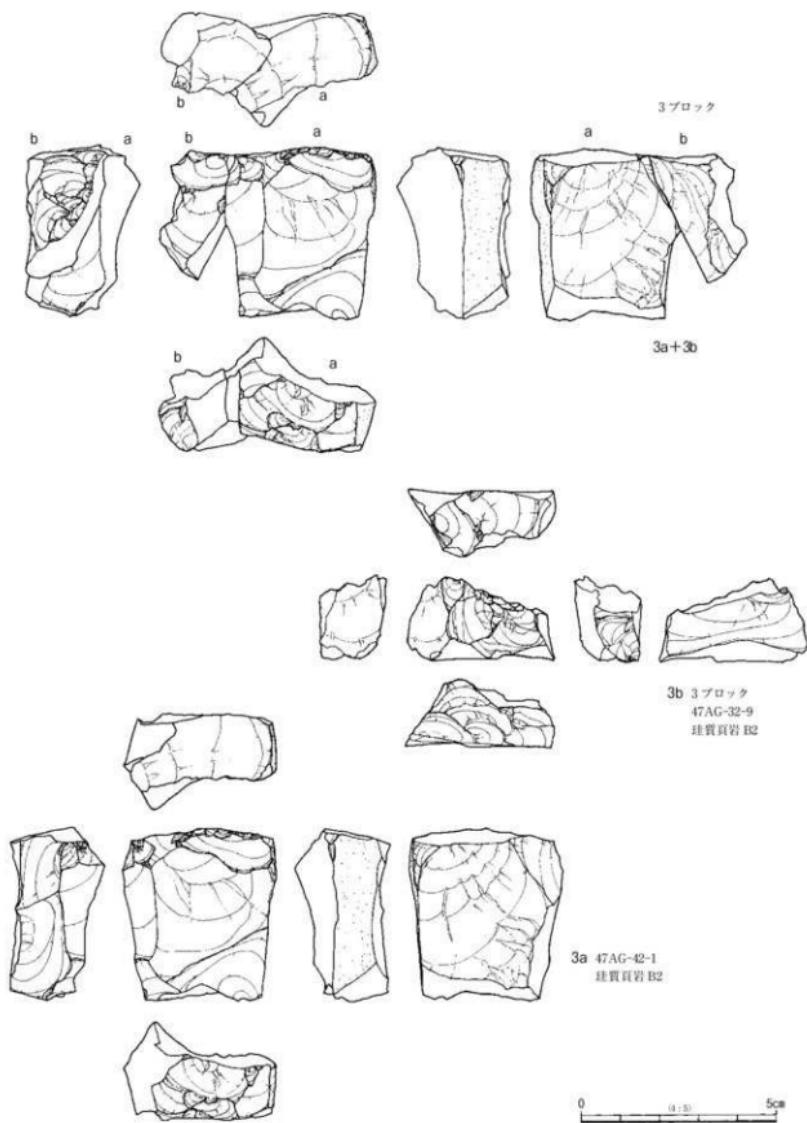
第39図 第6ブロック母岩別分布



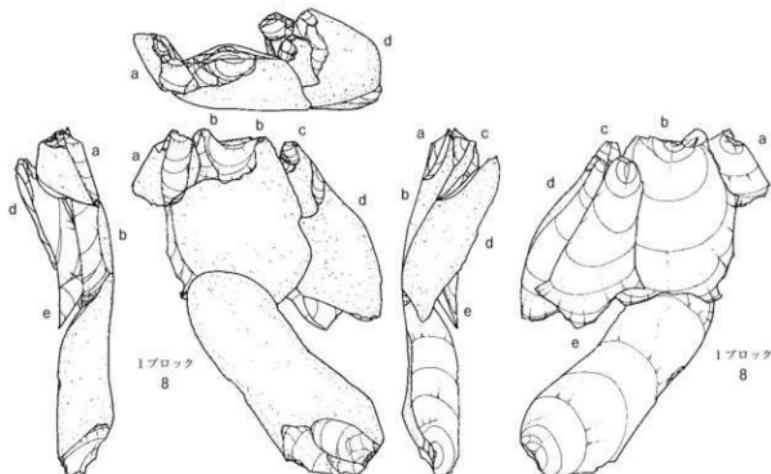
第40図 第6ブロック出土石器1

接合図正面から見て4a、4b、4c、4dの順に打点を右に移動して、連続的に剥片剥離が行われている。次に、打点を左に移動して1回の剥離後、打点を右に移動して先行する剥離の稜上から4eが剥離され、両側縁に平行する稜をもつ石刃状剥片が作出されている。一連の剥片剥離で作出された剥片は、4a、4cは打面の頭部調整と判断されるが、4eを除くと背面に石核素材の原礫面を残しており、初期段階の剥離工程と把握される。4eは使用痕のある剥片で、先端部に微細な刃こぼれが認められる。

5a～5eは黒色頁岩1と同一母岩の剥片と石核の接合資料である。接合図上部の平坦打面から正面を作業面として第1ブロックで検出された幅広剥片(5b)が剥離される。次に正面を打面として左側面を作業面とする5a(石核)を裁断する剥片剥離が行われ、第4ブロックで検出された厚みのある幅広剥片(5d)が作出されている。5aの石核では、5dの剥離面を打面として小口からの剥離が上面で見られる。その後、5a裏面の礫面を打面として、正面左側縁下半部から下端部にかけて縁辺を巡るように剥離が行われる。その際に打面の裏面右側縁には打面調整と判断される幅広急角度調整が認められ、この打面調整と正面右側縁から下端部にかけて求心的な剥片剥離が交互に進行していることが理解される。その後、裏面の礫面を打面として正面右側縁上半部から下半部にかけて、正面を作業面とした求心的な剥片剥離が連続し、右側縁下側からの剥片剥離で5eが剥離されている。5aではさらに右側縁下半部方向からの抉るような求心的剥片剥離が行われている。正面右側縁からの剥片剥離では、交互剥離的な打面調整は見られない。黒色頁岩1を母岩とした2個体の接合資料は接合面がなく判然としないが、少なくとも10cm以上の不整縁円礫を原石として、半截あるいは分割された石核素材から剥片剥離が行われていると把握



第41図 第6ブロック出土石器2

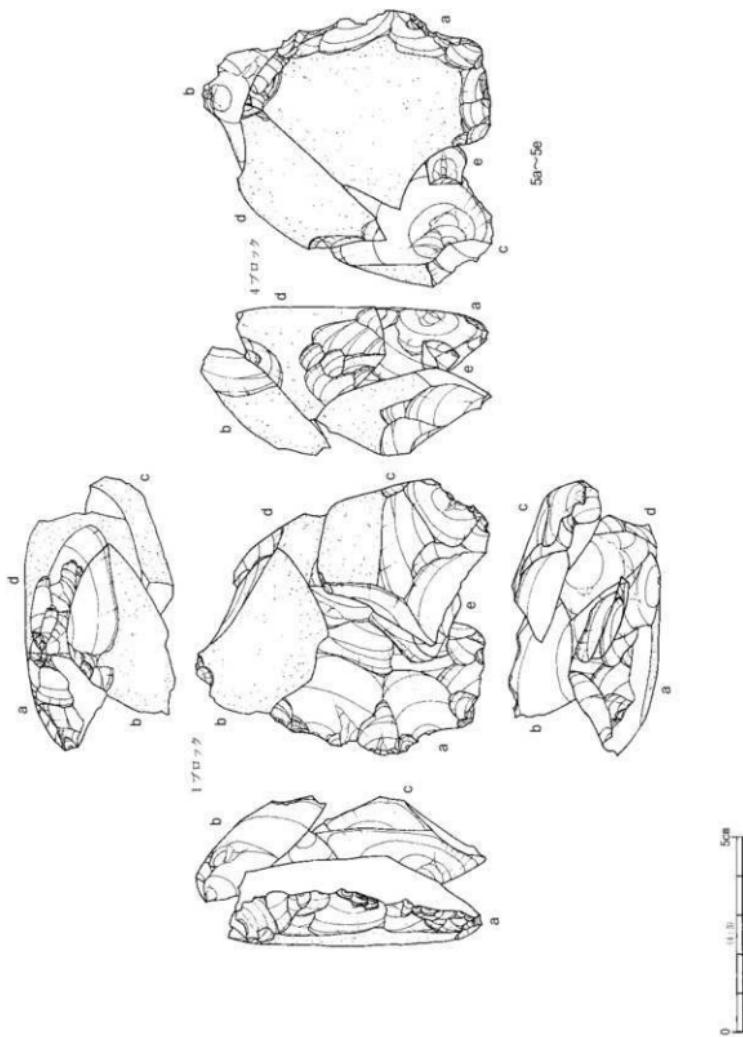


接合資料 4a~4e+8 (1 ブロック)



第42図 第6ブロック出土石器 3

第43図 第6ブロック出土石器4

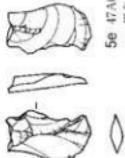


第44図 第6ブロック出土石器 5

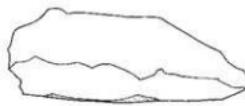
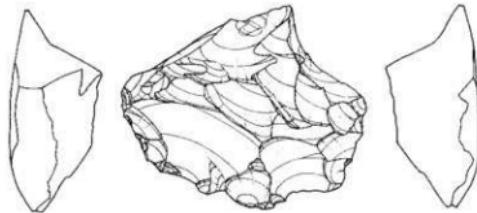
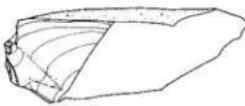
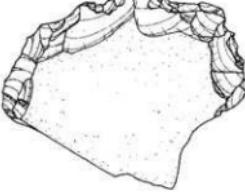


5a 47AG-32-1  
黒色頁岩 1

4ブロック  
47AG-36-6  
黒色頁岩 1

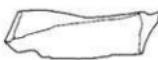
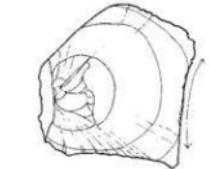
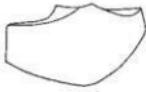


5c 47AG-41-1  
黒色頁岩 1



5d 47AG-38-11  
黒色頁岩 1

1ブロック  
47AG-36-6  
黒色頁岩 1



される。

#### 第7ブロック（第45~47図、図版18・19）

出土状況 下層本調査区東側で、ブロック群の中央東側に位置しており、調査区北西側に広がる舌状台地の南西斜面部に当たる。北東側に第4ブロック、北西側に第3ブロック、南西側にやや離れて第6ブロックが分布する。ローム層の堆積状況は南西方に傾斜している。

遺物総数は8点で、南北方向を長軸として数点ずつ離れた散漫な分布を示す。

平面分布範囲は、47AG-34・43・44グリッドに位置し、南北1.75m、東西1.25mの南北方向にやや長い楕円形状に分布する。垂直分布では約64cmの高低差がある。投影すべき土層断面が、ブロックから8m以上離れているため、土層断面への投影図作成は断念した。遺物取り上げ層位は1点がVI層から、それ以外がIX層、X層からの出土で、標高40.00m前後のレベルにIX層とX層の境界があったと判断される。調査時の写真観察等から、出土層位はIX層下部～X層上部と判断する。

母岩別資料 8母岩が確認できる。珪質頁岩B4の母岩はブロック内で単独母岩であるが、第2ブロック（2点）、第3ブロック（1点）とブロック間での接合資料が存在する。珪質頁岩B4は石核であり、各ブロックで母岩消費した残核が本ブロックに搬入されたと考えられる。

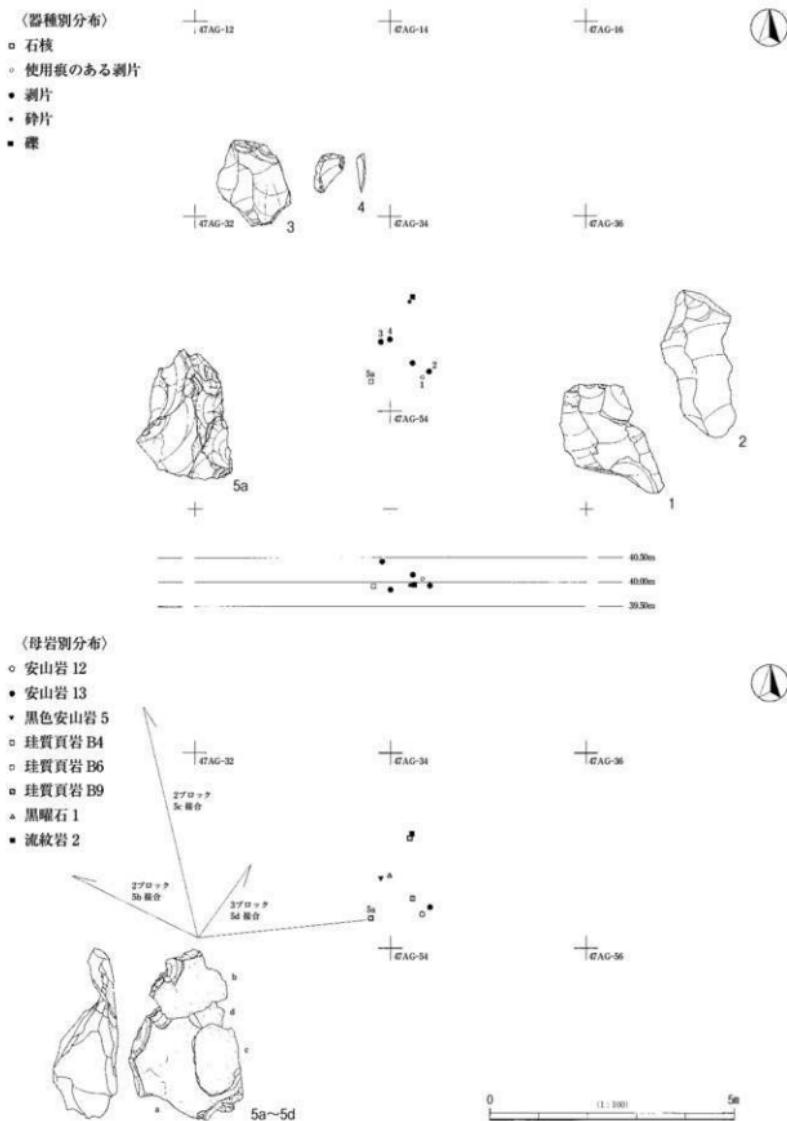
出土遺物 主要な器種は、使用痕のある剥片1点、剥片4点、碎片1点、石核1点であり、他は礫が1点となっている。

1は使用痕のある剥片である。平坦打面を持ち背面に両側縁と平行する2つの稜がある。器体長軸が打面方向から斜めにずれる。右側縁下端部に微細な剥離痕が見られる。

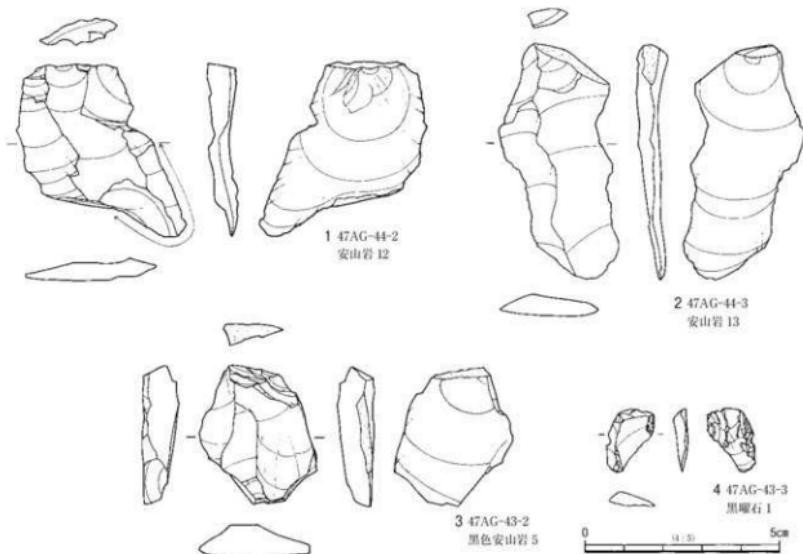
2～4は剥片である。2は平坦打面を持ち背面に両側縁に平行する1つの稜があり、器体長軸が打面方向から斜めにずれる。1・2は同種の剥片剥離手法で剥離された石刃状剥片であると把握される。1は内部が灰オリーブ色（5Y6/2）、新鮮な面が灰色（N4/0）の安山岩12を母岩とし、2は自然面・内面が灰白色（7.5Y7/1）の安山岩13であり、母岩は異なるものの類似した石材で、単独母岩として当ブロックに搬入されており、特異なあり方を示している。3は黒色安山岩5を母岩として、打面・右側縁に自然面が見られ、階段状の頭部調整が顕著な縦長剥片である。4は内部が透明で黒灰色が縞状に入る黒曜石1である。石材は信州和田岬周辺産と思われる。背面には左側面と上面にポジティブ面があり、裏面も主要剥離面がポジティブであることから、剥片素材の背面側縁から斜めに切り取るように削出されている。主要剥離面

第10表 第I文化層第7ブロック組成表

石材	母岩番号	破片	使用痕のある剥片	石核	剥片	礫	点数計	重量計(g)	点数比(%)	重量比(%)
安山岩	安山岩12		1 8.45				1	8.45	12.50	9.28
安山岩	安山岩13				1 7.27		1	7.27	12.50	7.98
安山岩	集計		1 8.45		1 7.27		2	15.72	25.00	17.26
珪質頁岩B				1 36.61			1	36.61	12.50	40.20
珪質頁岩B6	1	0.04					1	0.04	12.50	0.04
珪質頁岩B9					1 4.28		1	4.28	12.50	4.70
珪質頁岩B	集計	1 0.04		1 36.61	1 4.28		3	40.93	37.50	44.95
黒色安山岩	黒色安山岩5				1 9.35		1	9.35	12.50	10.27
黒色安山岩	集計				1 9.35		1	9.35	12.50	10.27
黒曜石	黒曜石1				1 0.39		1	0.39	12.50	0.43
黒曜石	集計				1 0.39		1	0.39	12.50	0.43
流紋岩	流紋岩2					1 24.67	1	24.67	12.50	27.09
流紋岩	集計					1 24.67	1	24.67	12.50	27.09
总计		1 0.04	1 8.45	1 36.61	4) 21.29	1 24.67	8	91.06	100.00	100.00



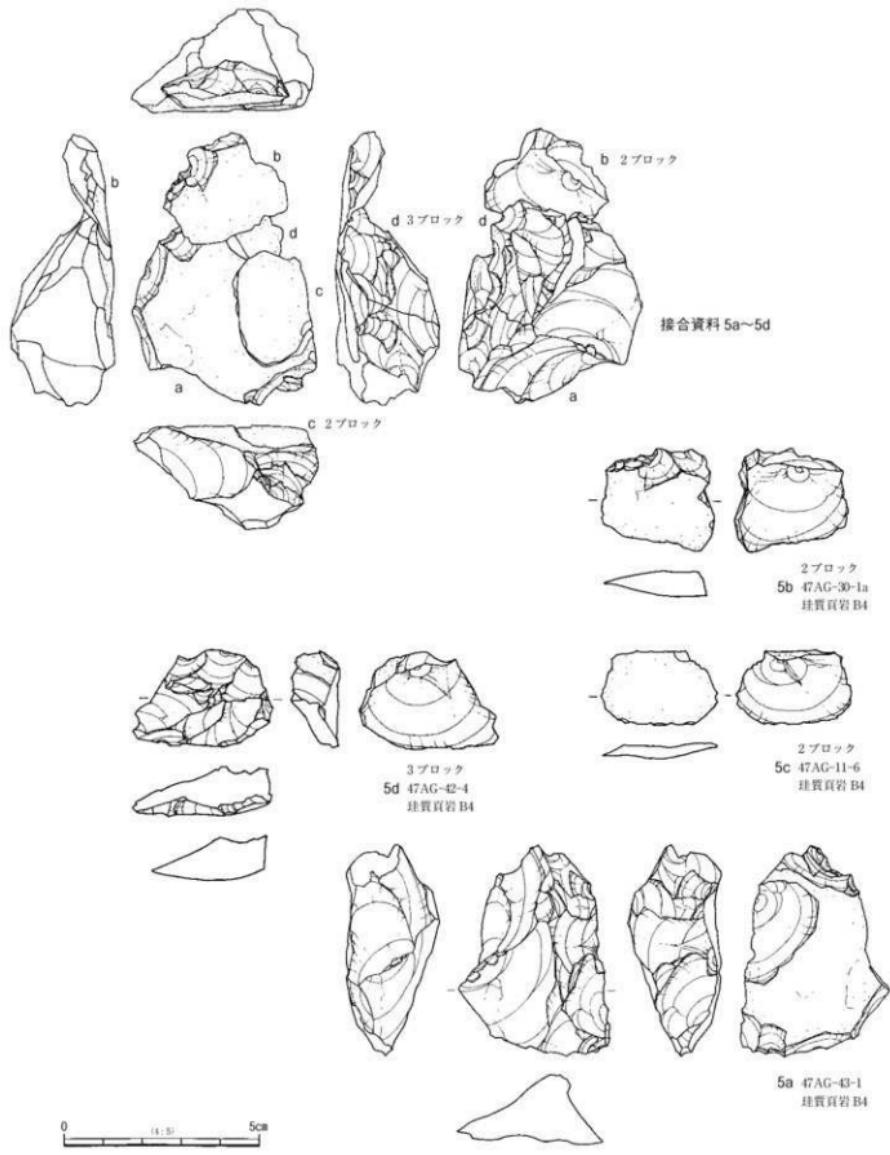
第45図 第7ブロック器種別・母岩別分布



第46図 第7ブロック出土石器1

側には、剥離方向と対向する方向からの衝撃による端部の潰れと階段状剥離が見られる。このことから両極技法により剥離された剥片と理解できる。当ブロックの分布域で、他の遺物とレベル差なく検出されているため当ブロックに含めたが、第Ⅰ文化層において唯一の信州産黒曜石であり、また剥離手法に両極技法を用いていることから、第Ⅱ文化層の混在の可能性もある。

5 a～5 dは自然面が明褐色(75YR5/6)で、内部が疊皮面から黄褐色(10YR5/6)、灰オリーブ色(5Y5/3)、灰色(5Y5/1)に変化する色調で、灰オリーブ色と灰色がマーブル状に入る珪質頁岩B 4を母岩とする。接合資料を見ると、まず石核(5 a)の上面の平坦面を打面として、正面の自然面を剥ぎ取るような上からの剥離が施され、横長剥片(5 b)が作出される。同様に右側面の平坦面を打面として正面の自然面を剥ぎ取るような剥離が右から施され、背面が疊面となる横長剥片(5 c)が作出されている。この2点は第2ブロックから検出されている。数回の剥片剥離が行われた後、右側縁の疊面を打面として求心的な剥片剥離が行われ5 dが作出されている。5 dは第3ブロックから検出されている。その同じ方向から少なくとも1回の剥離が看取される。石核の5 aは右側縁側では求心的剥離手法が見られるが、左側縁側には石核素材のポジティブ面を広く残し、母岩消費のキャパシティを残している。この接合資料は当ブロックでの母岩消費の痕跡が見られないことから、第2ブロック、第3ブロックで剥片剥離が進行して、石核の5 aが単独で携帯され、当ブロックに搬入された可能性が高い。



第47図 第7ブロック出土石器2

### 第8・9・10ブロック（第48・49図、図版19）

第8ブロック～第10ブロックが検出された範囲は、下層本調査区南側に位置している。調査区北西側に広がる舌状台地の南西斜面部に当たっている。

下層調査での南北ライン土層断面の観察では、台地斜面部をカッティングして区画する中・近世溝のため、第2黒色体（VII層～IX層）が搅乱を受けている。また、この溝より南西の範囲では、VII層より上の立川ローム層（III層～VI層）が削平されていた。調査時の写真を見ると、台地南側斜面では、武藏野ローム層と判断される粘土質の灰褐色ローム層上部が数10cm軟質化しており、台地南側斜面線辺部でも、各ローム層を取りこむようにローム層が変質し軟質化していた可能性が考えられる（ただしこの場合、下層調査確認時に「IX層出土」、終了時の所見では「VII層～IX層出土」との記載があることから、軟質化は立川ローム層第2黒色帯までは及んでいなかったと思われる）。遺跡が所在する河岸段丘は、立川段丘（Tc面）に比定されている。また台地斜面部では、一部立川ローム層X層が確認できるものの、堆積は相対的に薄くなる傾向を示し、灰褐色で粘質の武藏野ローム層がその下部に堆積している状況が観察される。このような段丘線辺部では、X層、IX層を取りこむようにいわゆる「水付きローム」が発達することが知られている。先述のように、第2黒色帯下部（IX層）を取り込む「水付きローム」は観察されていないが、立川ローム層X層の薄さが段丘形成の堆積状況によるものなのか、「水付きローム」による変質なのかは判然としない。

なお、ここでは南側調査区の旧石器時代遺物を、第8ブロックから第10ブロックの3つのまとまりとして記載するが、これらブロックは平面分布の視覚的な最小単位ということ以外、意味のあるまとまりではない。また、各ブロック内遺物の散漫な分布状況を見ると、上層構造の削平などに加えて、微地形の傾斜を反映したローム層の二次堆積による水平移動等も考慮する必要がある。

出土状況 北側に第6ブロック、第5ブロック、北西側に離れて第1ブロック、北東側に離れて第7ブロックが分布する。ローム層の堆積状況は判然としないが、遺物の出土レベルから南西方向に緩やかに傾斜していると思われる。

各ブロックの遺物総数は、第8ブロックが5点、第9ブロックが5点、第10ブロックが4点で、1点あるいは数点が離れて散漫に分布する。

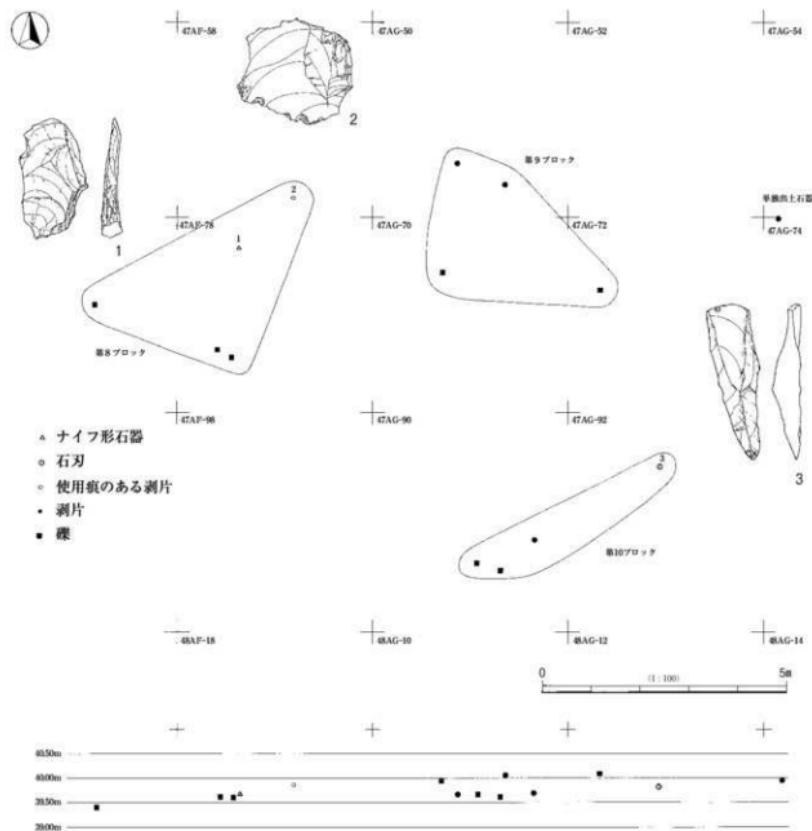
第8ブロックは、47AF-69・77・78・88グリッドに位置し、南北3.3m、東西4.1mの北東～南西方向に長い楕円形状に分布する。垂直分布では約42cmの高低差がある。第9ブロックは、47AG-60・61・70・72グリッドに位置し、南北2.6m、東西3.3mの東西方向に長い楕円形状に分布する。垂直分布では約40cmの高低差がある。第10ブロックは、47AG-92、48AG-01グリッドに位置し、南北2.1m、東西3.75mの北東～南西方向に長い楕円形状に分布する。垂直分布では約21cmの高低差がある。3ブロック合わせても垂直分布の高低差は約65cmであり、出土レベルの投影では南西方向に緩やかに傾斜して、同一層準で出土したものと考えられる。出土層位は判然としないが、VII層～IX層に求められる。

母岩別資料 珪質頁岩B4が第8ブロックで1点、第9ブロックで3点（2個体）出土している。この母岩は第7ブロックの石核と第2ブロック、第3ブロックの剥片が接合した母岩と同一母岩である。その他は単独の母岩である。黒色安山岩6は第8ブロック中央北側に分布し、ナイフ形石器の母岩となっている。安山岩14は第10ブロックの北東端に分布し、石刃の母岩となっている。

出土遺物 主要な器種は、第8ブロックでナイフ形石器1点、使用痕のある剥片1点、他は礫3点、第

9 ブロックで剥片3点、他は疊2点、第10ブロックで石刃1点、剥片1点、他は疊2点となっている。

1は単独母岩の黒色安山岩6のナイフ形石器である。幅広な縦長剥片を縦位に用い、素材の打面部を器体の基部に設定している。背面右側縁下半部で腹面からの急角度調整により基部側が抉入した縁辺を形成する。背面左側縁では中央部で器体を折り取るような加工が背面から施され、基部に向かって背面から急角度調整が認められる。2は珪質頁岩B4を母岩とする使用痕のある剥片である。背面の上面から右面上半部に先行する剥離面と素材打面の頭部調整が認められ、石核の打面部を輪切りにするような打面更新を行った剥片を素材としている。この素材からは單設打面から打点を横に移動して剥片を作出する剥離手法が見られる。背面の下端部に腹面からの刃こぼれ状の抉れた剥離痕と微細剥離痕が連続する。3は安山岩



第48図 第8・9・10ブロック器種別分布

14母岩の石刃である。平面形状が細身で先端が鋭角に尖り、主要剥離方向に対向する剥離により背面の稜がY字状を呈している。打面には細かな打面調整が顕著に行われ、打面を山形に整形している。背面右側面は橙色(5YR6/6)に風化しており、被熱赤化した剥離面が節理面状の平坦な縦面か判然としないが、この平坦な面を利用して剥離面に挟まれた鋭角な端部から石刃を作出する剥離手法が看取される。

第11表 第I文化層第8ブロック組成表

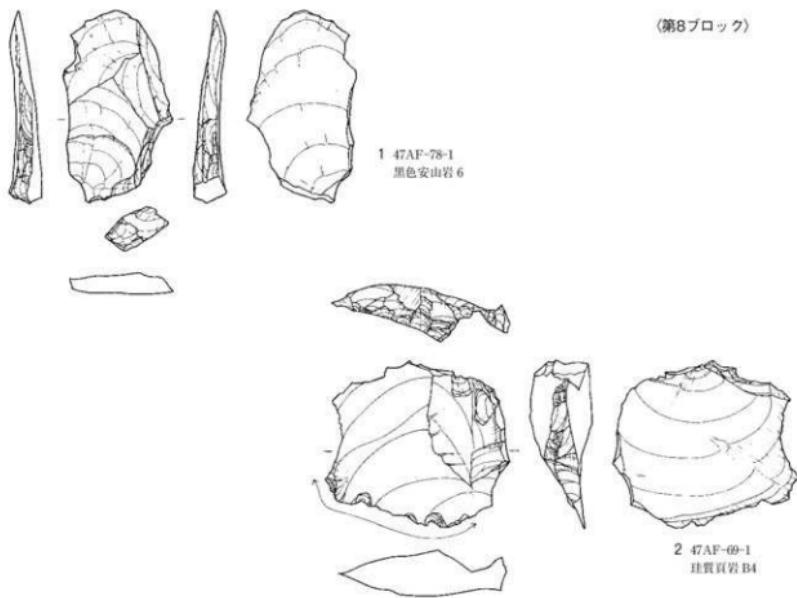
器種	母岩番号	ナイフ形石器	使用痕のある削片	縁	点数計	重量計(g)	点数比(%)	重量比(%)
石材								
珪質頁岩B	珪質頁岩B4		1 22.03		1	22.03	20.00	6.72
珪質頁岩B	集計		1 22.03		1	22.03	20.00	6.72
黒色安山岩	黒色安山岩6	1 9.88			1	9.88	20.00	3.01
黒色安山岩	集計	1 9.88			1	9.88	20.00	3.01
砂岩	砂岩6			1 7.22	1	7.22	20.00	2.20
砂岩	砂岩7			1 57.81	1	57.81	20.00	17.63
砂岩	砂岩8			1 230.93	1	230.93	20.00	70.43
砂岩	集計			3 295.96	3	295.96	60.00	90.27
総 計		1 9.88	1 22.03	3 295.96	5	327.87	100.00	100.00

第12表 第I文化層第9ブロック組成

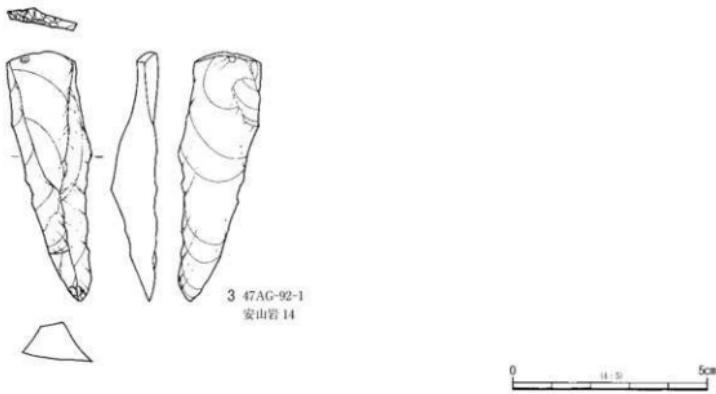
器種	母岩番号	削片	縁	点数計	重量計(g)	点数比(%)	重量比(%)
石材							
珪質頁岩B	珪質頁岩B4	3 3.05		3	3.05	60.00	1.45
珪質頁岩B	集計	3 3.05		3	3.05	60.00	1.45
砂岩	砂岩9		1 202.05	1	202.05	20.00	95.91
砂岩	集計		1 202.05	1	202.05	20.00	95.91
流紋岩	流紋岩3		1 5.57	1	5.57	20.00	2.64
流紋岩	集計		1 5.57	1	5.57	20.00	2.64
総 計		3 3.05	2 207.62	5	210.67	100.00	100.00

第13表 第I文化層第10ブロック組成

器種	母岩番号	石刀	削片	縁	点数計	重量計(g)	点数比(%)	重量比(%)
石材								
ホルンフェルス	ホルンフェルスB		1 42.96		1	42.96	25.00	63.42
ホルンフェルス	集計		1 42.96		1	42.96	25.00	63.42
安山岩	安山岩14	1 8.72						
安山岩	集計	1 8.72			1	8.72	25.00	12.87
珪質頁岩A	珪質頁岩A6			1 5.26	1	5.26	25.00	7.76
珪質頁岩A	集計			1 5.26	1	5.26	25.00	7.76
砂岩	砂岩10			1 10.80	1	10.80	25.00	15.94
砂岩	集計			1 10.80	1	10.80	25.00	15.94
総 計		1 8.72	1 42.96	2 16.06	4	67.74	100.00	100.00



(第10ブロック)



第49図 第8・10ブロック出土石器

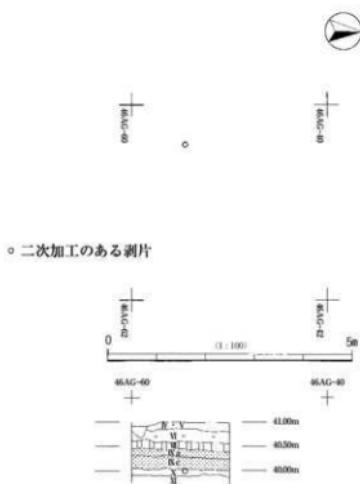
### 単独出土石器（第50・51図、図版19）

旧石器時代調査区以外のグリッドから石器が単独で検出されている。出土位置、出土層位が明確であり第I文化層と把握されるためここで扱う。

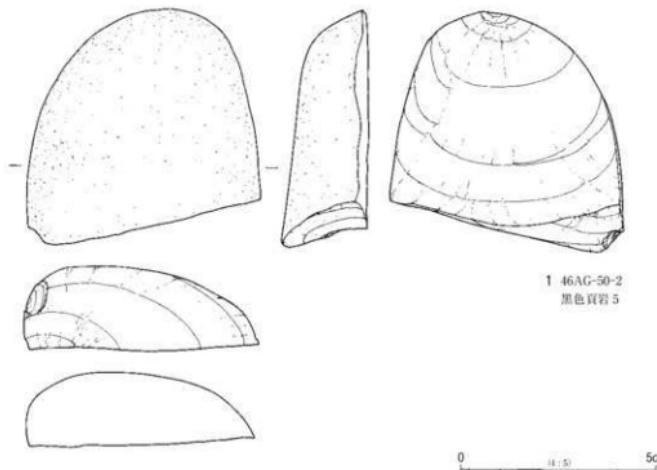
調査区の北端、ブロック群から北側に約10m離れて出土した。調査区北西側に広がる舌状台地の中央部に当たり、ローム層の堆積状況はほぼ水平である。

出土状況 46AG-50グリッド中央部分から単独で検出された。第50図の土層断面ではX層上面に投影され、遺物取上げ層位は「IX層下部～X層上部」となっている。出土層位はIX層とX層の境界付近と判断される。

出土遺物 1は二次加工のある剥片である。自然面が平滑な黒色頁岩5を母岩としている。扁平楕円礫の長軸方向から半截して素材を作出している。腹面右側縁からの加撃により、器体横断方向に欠損している。さらに自然面の背面左側縁からこの切断面に二次加工が施されている。扁平楕円礫を半截する剥離手法から、局部磨製石斧の原石から素材作出に関連した資料の可能性がある。



第50図 単独出土器種別分布



第51図 単独出土石器

#### 4 第Ⅱ文化層

##### 第11ブロック（第52・53図、図版19）

出土状況 下層本調査区北側で、ブロック群の北西端に位置しており、調査区北西側に広がる舌状台地の南西縁辺肩部に当たる。北東側に第12ブロック、東側に第13ブロックがやや離れて分布する。ローム層の堆積状況は南方向に緩やかに傾斜している。

遺物総数は6点で、その分布はブロックの南東端にまとまり、北西方向に1点が離れている。平面分布範囲は、46AF-99、46AG-90、47AG-00グリッドに位置し、南北1.2m、東西1.8mの北西～南東方向に長い楕円形状を示す。垂直分布では約20cmの高低差がある。第52図の土層断面ではVI層下面～VII層に投影され、出土層位はVI層下部～VII層上部に求められる。

母岩別資料 5母岩が認められる。チャート7の割れた礫以外はすべて単独母岩である。楔形石器は珪質頁岩B10を母岩とする。

出土遺物 主要な器種は、楔形石器1点、石核1点、剥片1点であり、他は礫が3点となっている。

1は楔形石器である。母岩は珪質頁岩B10で、暗緑灰色(7.5GY4/1)～緑黒色(7.5GY2/1)を呈している。色調が黒みを帯びるのは被熱の可能性が高い。厚い横長剥片を斜位に用いて両極剥離し、上下端部は線状打面となっている。主要剥離面の上下端部からの階段状剥離と細長平坦剥離が認められる。2は砂岩11の剥片である。自然面打面で背面に自然面を広く残す。3はチャート8母岩の河原転石を石材とした石核である。扁平楕円礫の片端部を裏面で小剥離の後、正面で横長剥片を剥離している。

第14表 第Ⅱ文化層第11ブロック組成表

器種	母岩番号	石核	剥片	楔形石器	礫	点数計	重量計(g)	点数比(%)	重量比(%)
石材					2	189.44	2	189.44	33.33
チャート									
チャート7									
チャート8	1	37.73					1	37.73	16.67
チャート 集計	1	37.73				2	189.44	3	227.17
珪質頁岩	珪質頁岩B10				1	5.01	1	5.01	16.67
珪質頁岩	珪質頁岩B10 集計				1	5.01	1	5.01	16.67
砂岩	付表11		1	22.71			1	22.71	16.67
砂岩	砂岩 集計		1	22.71			1	22.71	16.67
石英斑岩	石英斑岩5					1	27.71	1	27.71
石英斑岩	石英斑岩5 集計					1	27.71	1	27.71
総 計		1	37.73	1	22.71	1	5.01	3	217.15
							6	282.60	100.00
									100.00

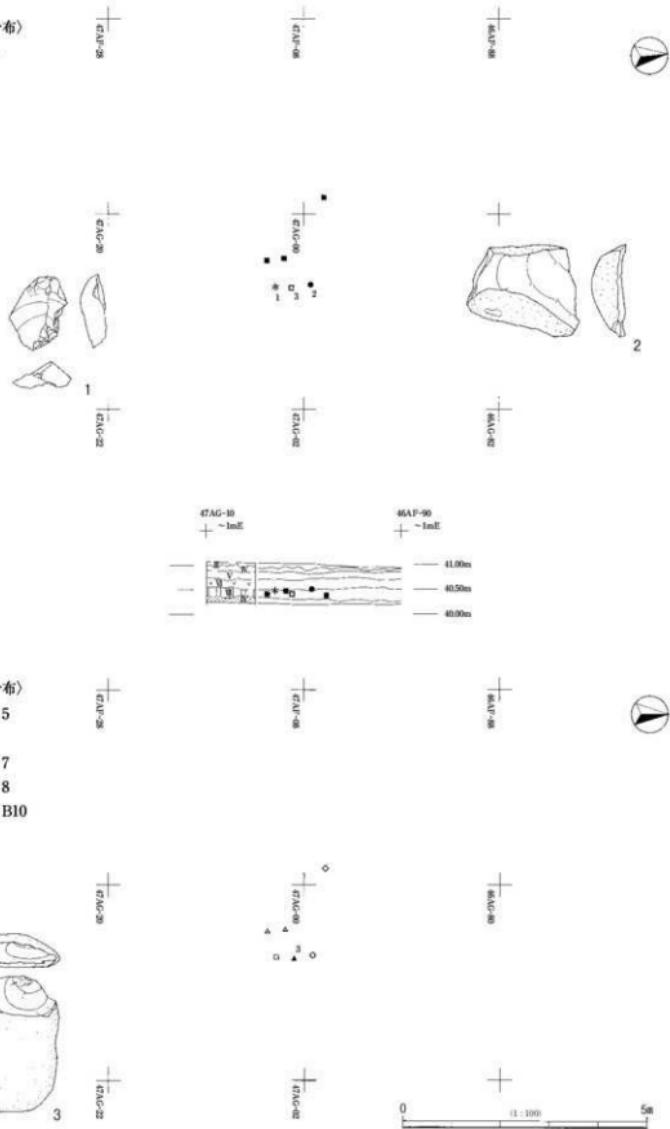
##### 第12ブロック（第54・55図、図版19）

出土状況 下層本調査区北側で、ブロック群の北端に位置しており、調査区北西側に広がる舌状台地の南西縁辺肩部に当たる。南西側に第1ブロック、南東側に第3ブロックが分布する。ローム層の堆積状況は南方向に緩やかに傾斜している。

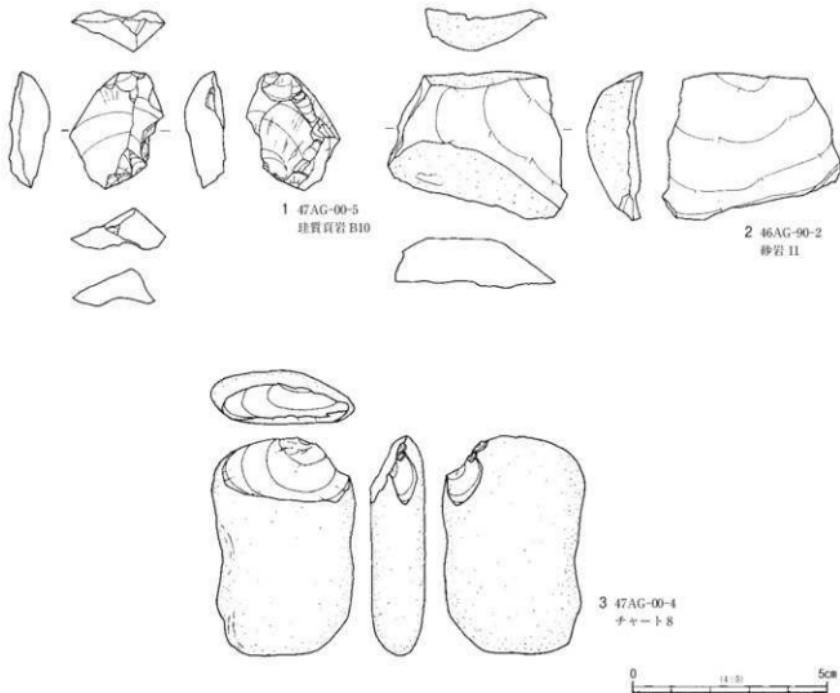
遺物総数は11点である。その分布は散漫で、西側に1.6m離れて石核が1点出土している。水平分布範囲は、46AF-71・72・81・82・83・92グリッドに位置し、南北3.1m、東西4.1mの西～東方向にやや長い楕円形状に分布する。垂直分布では約40cmの高低差がある。第54図の土層断面は、ブロック検出範囲の1m～3m西側に位置しているため、実際の層位より10cm～20cm低い値が反映されている。このため土層断面ではIV・V層～VII層上面に投影されるが、調査時の写真観察から判断して、本来の出土層位はVI層～VII層に求められる。

〈器種別分布〉

- 楔形石器
- 石核
- 刃片
- ◆ 磬



第52図 第11ブロック 器種別・母岩別分布

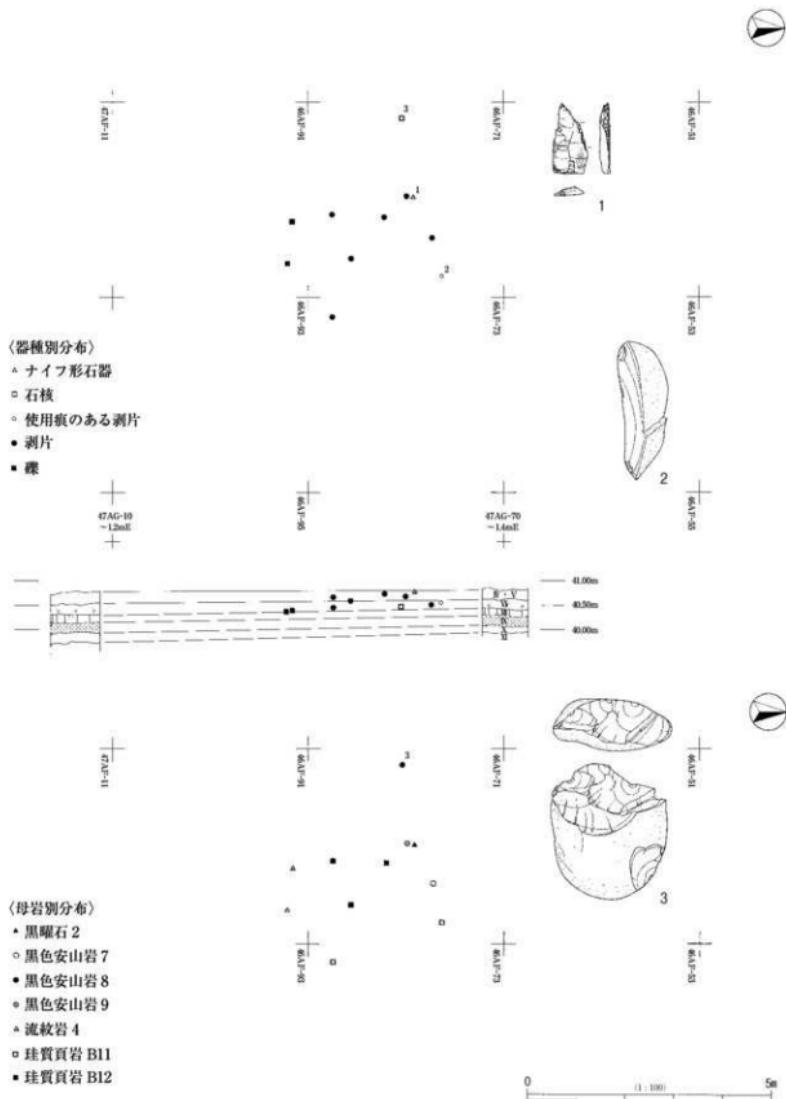


第53図 第11ブロック出土石器

**母岩別資料** 7母岩が認められる。主要な母岩は、珪質頁岩B12（3点）が中央部から、珪質頁岩B11（2点）が東側から、流紋岩4（2点）が南側から出土しており、他は単独母岩である。ナイフ形石器は黒曜石2を母岩としている。

**出土遺物** 主要な器種は、ナイフ形石器1点、使用痕のある剥片1点、石核1点、剥片6点で、他は礫2点となっている。

1はナイフ形石器である。母岩の黒曜石2は、透明な地に暗灰色（N3/3）が縞状に入り、信州和田岬周辺産と考えられる。基部を欠損するが、石刃状剥片素材を正位に用いて、斜めに先端部を折り取った部位に主要剥離面からのプランディングが連続する。背面の剥離構成を見ると、主要剥離方向と対向する剥離面で構成されることから、両設打面のある石核から剥片剥離されたことが理解できる。このナイフ形石器は、当ブロックで最も高いレベルで出土している。2は使用痕のある剥片である。母岩は自然面が平滑で色調は褐色（7.5YR4/6）、内部がオリーブ灰色（2.5GY6/1）の珪質頁岩B11である。背面右側に自然面

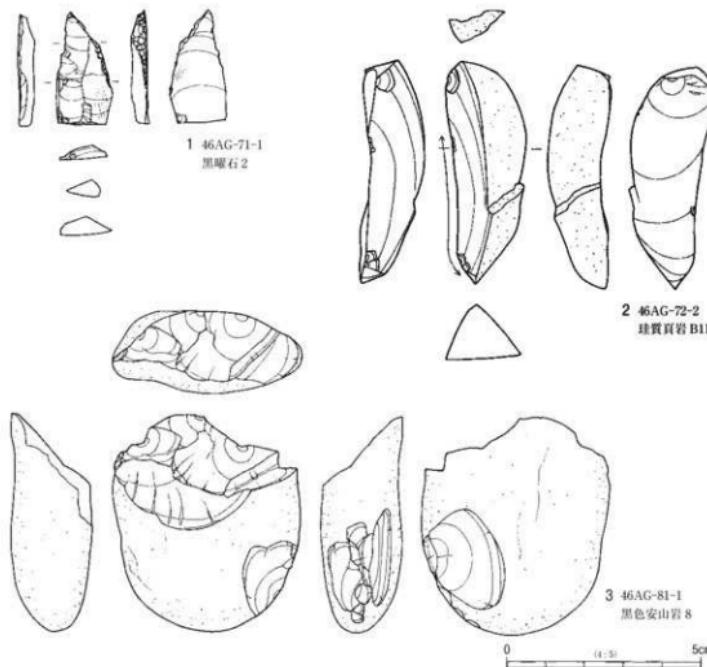


第54図 第12ブロック 器種別・母岩別分布

第15表 第Ⅱ文化層第12ブロック組成表

断面	母岩番号	ナイフ形石器	使用歴のある 剥片	石核	剥片	種	点数計	重量計 (g)	点数比 (%)	重量比 (%)
珪質頁岩B	珪質頁岩B11		1 14.48		1 3.94		2	18.42	18.18	11.13
	珪質頁岩B12				3 5.01		3	5.01	27.27	3.03
<b>珪質頁岩B</b>	<b>集計</b>	<b>1 14.48</b>			<b>4 8.95</b>	<b>種</b>	<b>5</b>	<b>23.43</b>	<b>45.45</b>	<b>14.15</b>
黒色安山岩7					1 2.36		1	2.36	9.09	1.43
黒色安山岩8				1 61.34			1	61.34	9.09	37.05
黒色安山岩9					1 1.51		1	1.51	9.09	0.91
<b>黒色安山岩</b>	<b>集計</b>	<b>1 61.34</b>			<b>2 3.87</b>	<b>種</b>	<b>3</b>	<b>65.21</b>	<b>27.27</b>	<b>39.39</b>
黒曜石2		1 1.67					1	1.67	9.09	1.01
<b>黒曜石</b>	<b>集計</b>	<b>1 1.67</b>				<b>種</b>	<b>1</b>	<b>1.67</b>	<b>9.09</b>	<b>1.01</b>
波紋岩4	波紋岩4					2 75.23	2	75.23	18.18	45.45
<b>波紋岩</b>	<b>集計</b>					<b>2 75.23</b>	<b>2</b>	<b>75.23</b>	<b>18.18</b>	<b>45.45</b>
総 計		1 1.67	1 14.48	1 61.34	6 12.82		21	75.23	11	165.50
										100.00
										100.00

を残す縦剥片の左側縁下部に細かな剥離痕と刃こぼれ状の微細剥離痕が疎らに認められる。なお、本ブロックで主要な母岩となっている珪質頁岩B12は、いずれも小剥片のため図化していないが、色調が緑灰色（7.5GY5/1）で、珪質頁岩B11よりやや緑色味が強いため別母岩としたが、同一母岩の礫芯部に近い剥片のため緑色味が強いことも考えられる。



第55図 第12ブロック出土石器

### 第13ブロック（第56～59図、図版19・20）

出土状況 下層本調査区北東側で、ブロック群の北東端に位置しており、調査区北西側に広がる舌状台地の南西縁辺肩部に当たる。北西側に第12ブロック、西側にやや離れて第11ブロック、南東側にやや離れて第14ブロックが分布する。ローム層の堆積状況は南西方向に緩やかに傾斜している。

遺物総数は22点で、その分布は3か所の密集部に分かれるように見える。それらは北東～南西方向に1m～1.5mの間隔をあけて分布し、中央部がやや密集している。

平面分布範囲は、46AG-93・94・95-47AG-02・03・04・12グリッドに位置し、南北4.0m、東西5.0mの北東～南西方向に長い楕円形状を示す。垂直分布では約90cmの高低差がある。第56図の土層断面は、ブロック検出範囲の4.5m～9.5m西側に当たるため、実際の出土位置より各層位が20cm～25cm低い。そのためⅣ層・V層～IX層に出土位置が投影されているが、調査時の写真観察から判断すると、本来の出土層位はVI層下部～VII層に求められる。

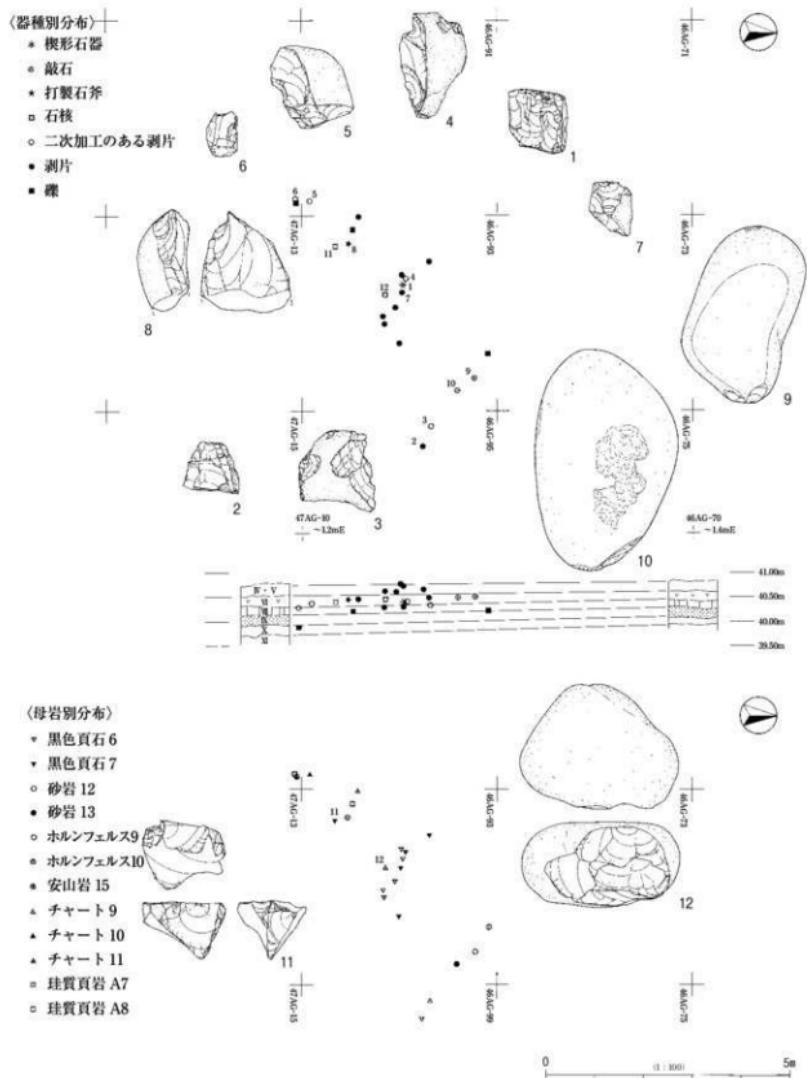
母岩別資料 12母岩が認められる。主要な母岩は、黒色頁岩6（6点）が中央部から北東端にかけて、黒色頁岩7（5点）とチャート11が中央部から南西側にかけて分布しており、他は単独の母岩である。黒色頁岩6からは、両極技法による楔形石器と各種剥片が生産されている。敲石は北東端に2点近接して出土し、いずれも砂岩12・13を母岩としている。

出土遺物 主要な器種は、楔形石器1点、二次加工のある剥片4点、敲石2点、打製石斧1点、石核2点、剥片9点であり、他は礫3点となっている。

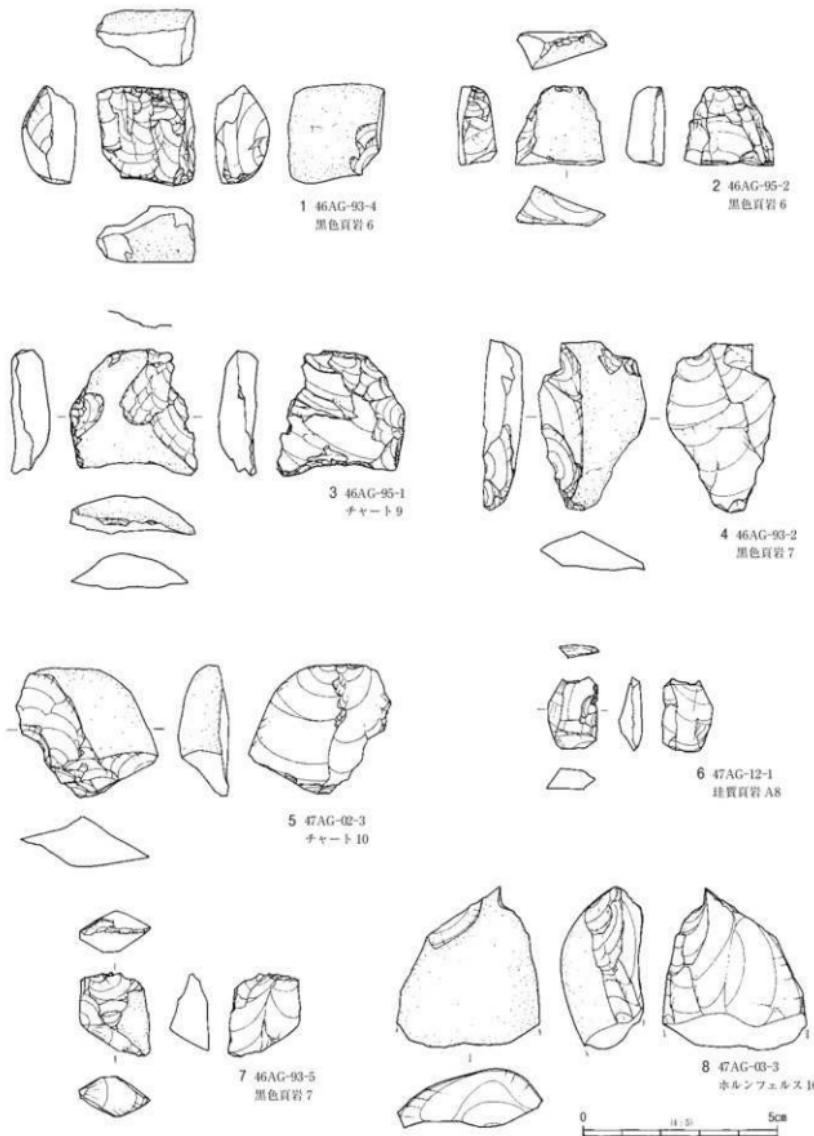
1は楔形石器である。母岩の黒色頁岩6は、自然面が平滑で暗灰色（N3/0）～灰色（N5/0）、内部は灰色（N6/0）で、新鮮な面は黒色である。おそらく右側面の平坦面を打面とする厚く幅広な背面自然面の素材を用いている。この素材の主剥離面側を正面として上下両極から剥離が行われ、上端では線状に、下端部では端部右縁に顯著な階段状剥離痕が認められる。3～6は二次加工のある剥片である。いずれも両極技法により剥離された剥片を素材とするものである。3は上下方向からの加撃の後、側縁に打点を移動しながら両極剥離が連続する。下端部には抉入した刃部と細部調整が認められる。4は浅黄色（25Y7/3）・にぶい黄色（25Y6/3）で新鮮な面は灰色（N6/0）・暗灰色（N3/0）の黒色頁岩7を母岩とする。下端部に潰れ痕と階段状剥離痕が見られ、背面左側縁に二次加工が認められる。5も下端部に階段状剥離が顯著で、背面左側縁に細部加工が見られる。6は黒褐色（7.5YR2/2）の色調を呈する「チョコレート頁岩」と呼ばれる良質な珪質頁岩A8である。背面右側縁に調整加工が連続する。主要剥離面左側の細部加工は、

第16表 第Ⅱ文化層第13ブロック組成表

岩種	母岩番号	石核	打製石斧	二次加工の ある剥片	剥片	敲石	楔形石器	礫	点数計	重量計 (g)	点数比 (%)	重量比 (%)	
チャート	チャート-10			1 11.96					1	11.96	4.55	1.41	
チャート	チャート-11	1 164.87			1 3.62				2	168.49	9.09	19.84	
チャート	チャート-9			1 8.57					1	8.57	4.55	1.01	
チャート	总计	1 164.87		2 20.53	1 3.62				4	189.02	18.18	22.26	
ホルンフェルス	ホルンフェルス チャート-10		1 30.51						1	27.87	4.55	3.59	
ホルンフェルス	ホルンフェルス チャート-9		1 30.51						1	27.87	5.00	3.68	
安山岩	安山岩-15								1	30.65	1 30.65	1.61	
安山岩	总计								1	30.65	4.55	3.61	
珪質頁岩A	珪質頁岩A7								1	1.70	1 1.70	0.20	
珪質頁岩A	珪質頁岩A8			1 1.44					1	1.44	4.55	0.17	
珪質頁岩A	总计			1 1.44					1	1.70	2 3.14	9.09	0.37
黒色頁岩	黒色頁岩6				5 17.08		1 10.45		6	27.53	27.27	3.24	
黒色頁岩	黒色頁岩7	1 16.06		1 10.71	3 4.45				5	31.24	22.73	3.68	
黒色頁岩	总计	1 16.06		1 10.71	8 21.53		1 10.45		11	58.77	50.00	6.92	
砂岩	砂岩12					1 165.87				1 165.87	4.55	19.53	
砂岩	砂岩13					1 343.32				1 343.32	4.55	40.43	
砂岩	总计					2 509.19				2 509.19	9.09	59.95	
总计	总计	2 180.95	1 30.51	4 32.68	9 25.15	2 509.19	1 10.45	3 60.22	221	849.15	100.00	100.00	



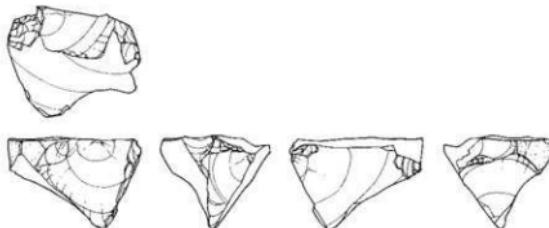
第56図 第13ブロック器種別・母岩別分布



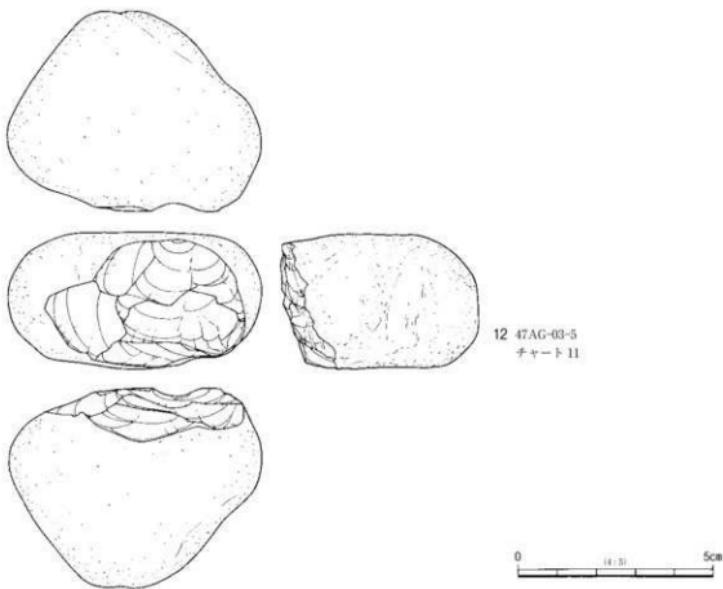
第57図 第13ブロック出土石器 1



第58図 第13ブロック出土石器2



11 47AG-03-4  
黒色頁岩 7



12 47AG-03-5  
チャート 11

0 (4:3) 5cm

第59図 第13ブロック出土石器 3

剥離後の調整加工のため二次加工と理解したが、リダクションによる刃部更新の削片の可能性もある。2・7は剥片である。2は下半部を欠損しているため剥片とした。上端部には階段状剥離痕と細長剥離痕が認められ、対向からの細長剥離が見られることから両極技法により生産されている剥片である。7は上端部に破碎による折れと腹面に細長い剥離痕が看取されることから、両極技法により剥離されたものであろう。8はホルンフェルス10を母岩とする。主要剥離面左側縁を斜めに切り取るように、長軸上下端部からの剥離が連続する。素材を台石などに挟んで固定し、両極剥離が行われたと考えられる。素材が折れているた

め判然としないが、側縁の切り取り調整の手法から、石斧製作初期の未成品と思われる。9・10は敲石である。いずれも砂岩製である。9はやや尖る下端部に敲打痕と剥離痕、上端部に敲打痕が観察される。10も上下端部に敲打痕と剥離痕が観察される。丸味のある正面には敲打痕とともに爪形状の刻み、平坦な裏面には敲打痕とともに浅いくぼみが観察され、台石の機能を併せもつ器種である。この台石に素材を固定して両極技法を行ったと考えられる。11・12は石核である。11は黒色頁岩7を母岩とした一般的剥片剥離による多面体の石核で、正面・右側面で剥離が行われている。上面の素材を分割した平坦な面では、左右端部方向を軸とした両極技法が認められる。12はチャート11を母岩とする扁平精円盤素材の石核である。正面右側縁から剥片剥離を行ったのち打点移動し、上面から幅広の剥片を剥離している。

#### 第14ブロック（第60・61図、図版20）

出土状況 下層本調査区東端で、ブロック群の東端に位置しており、調査区北西側に広がる舌状台地の南西縁辺肩部に当たる。北西側に第13ブロックが離れて分布する。ローム層の堆積状況は南北方向に緩やかに傾斜している。

遺物総数は6点で、北北西-南南東方向に1m~3mの間隔をあけて1点ずつが散漫に分布する。

平面分布範囲は、46AG-18・28・39・49・59グリッドに位置し、南北6.7m、東西3.0mの北北西-南南東方向に長い楕円形状に分布する。垂直分布では約39cmの高低差がある。第60図の土層断面ではIV層・V層~VII層に投影されるが、調査時の写真観察から判断すると出土層位はVI層~VII層に求められる。

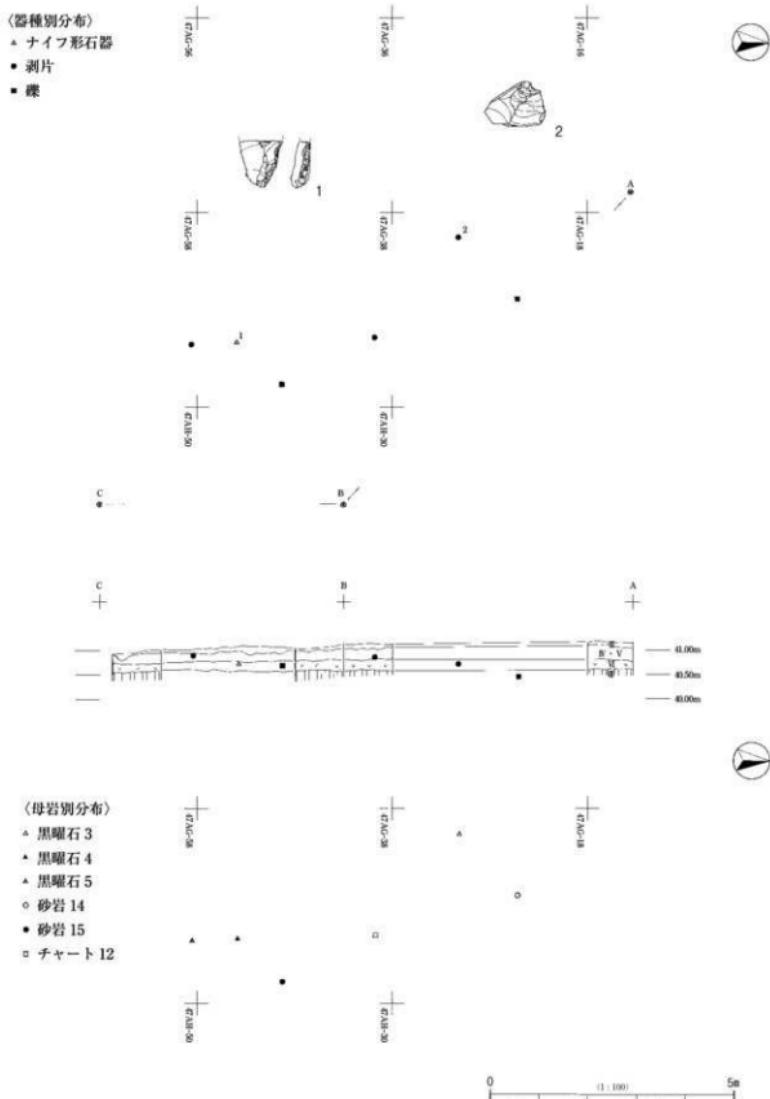
母岩別資料 全て単独母岩で、6母岩が認められる。そのうち黒曜石が3母岩あり主要な石材となっている。黒曜石4はブロックの南側に分布し、ナイフ形石器の母岩となっている。図示はしていないが、砂岩15を母岩とする長大な礫が南東端で検出されている。

出土遺物 主要な器種は、ナイフ形石器1点、剥片3点であり、他は礫2点となっている。

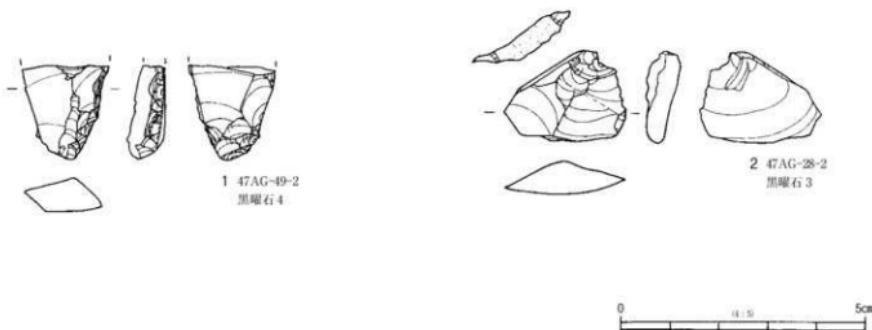
1はナイフ形石器である。内部が黒色半透明で径1mm程度の灰白色夾雑物を含む黒曜石4を母岩とし、信州和田岬周辺産と考えられる。主要剥離面方向を縱位に用いて剥片素材の打面部を基部に設定している。器体には両側縁に平行する稜があり、石刃状剥片を素材にしていると考えられるが、基部側で欠損しているため形態は不明である。基部は背面からの脚長の調整で切り取られている。右側縁基部側で腹面からのプランディング加工が連続し、左側面基部側では背面から幅広な細部加工が見られる。また、背面基部の稜には稜上調整が認められる。

第17表 第Ⅱ文化層第14ブロック組成表

器種	母岩番号	ナイフ形石器	剥片	塊	点数計	重量計 (g)	点数比 (%)	重量比 (%)
チャート	チャート12		1 7.54		1	7.54	16.67	0.50
チャート	集計		1 7.54		1	7.54	16.67	0.50
黒曜石	黒曜石3		1 1.99		1	1.99	16.67	0.13
	黒曜石4	1 2.19			1	2.19	16.67	0.15
	黒曜石5		1 1.97		1	1.97	16.67	0.13
黒曜石	集計	1 2.19	2 3.96		3	6.15	50.00	0.41
砂岩	砂岩14			1 249.88	1	249.88	16.67	16.67
	砂岩15			1 1235.00	1	1235.00	16.67	82.41
砂岩	集計			2 1484.88	2	1484.88	33.33	99.09
総 計		1 2.19	3 11.5	2 1484.88	6	1498.57	100.00	100.00



第60図 第14ブロック 器種別・母岩別分布



第61図 第14ブロック出土石器

2は自然面が平滑で暗灰色(N3/0)、内部は暗灰色半透明の地に灰色の筋が入る黒曜石3を母岩とする。器面はややざらついており、熱を受けた可能性がある。自然面と平坦剥離面に挟まれる端部を打点とした横長剥片であり、背面には主要剥離面方向に対向する剥離面が観察される。なお、本ブロックにはもう1点黒曜石材を用いた剥片が検出されている。小剥片のため図化していないが、暗灰色半透明の色調を呈している黒曜石5である。本ブロックで検出された3母岩の黒曜石は、いずれも信州和田岬周辺産と考えられる。

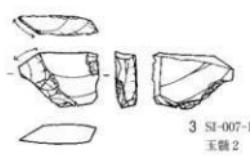
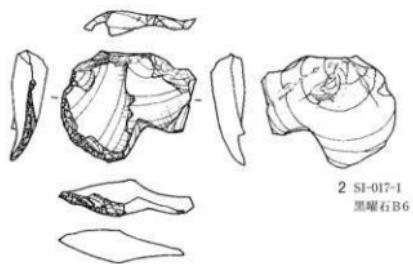
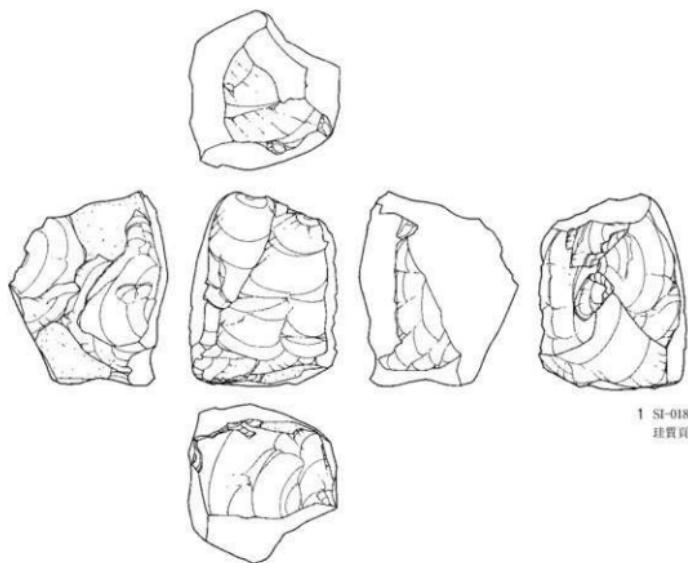
##### 5 その他の石器（第62図、図版20）

上層遺構から検出された石器のうち、旧石器時代の所産と考えられるものをここで扱う。

1は珪質頁岩B13を母岩とする石核である。平坦な自然面と節理面で覆われる亜角礫を石核素材としている。上面を打面として、打点を横に移動して2回程の剥離を行い縦長剥片が作出されている。この剥離との前後関係は不明だが、裏面の棱を打点とした打面と作業面を交互に転移する剥片剥離が見られ、横長剥片が作出される。その後、正面を打面として右側面を作業面とした1回の剥離が認められる。珪質頁岩Bの母岩による石刃状縦長剥片を企図した剥離手法から、明確ではないが第I文化層と同時期の所産が想定される。長さ50.0mm×幅38.0mm×厚さ41.1mm、重量87.18g。

2は搔器とした。内部は暗灰色半透明の地に灰色の筋が入る良質な黒曜石B6を母岩しており、おそらく信州和田岬周辺産と思われる。厚みのある幅広剥片の背面左側刃から下端部にかけて腹面からの精緻な急角度調整加工が連続し円刃に整形している。器体の右側刃下部は刃部を欠損するが、欠損後も下端には細部加工が見られる。この形態の搔器は、立川ローム層VI層以降の信州系黒曜石が多出する石器群に見られるもので、第II文化層と同時期の可能性がある。長さ28.0mm×幅34.0mm×厚さ90mm、重量5.96g。

3は玉髓2を母岩とする二次加工のある剥片である。器体上部を大きく欠損するが、背面両側縁には平坦剥離が見られる。腹面左側縁と上部切断面には背面からの微細調整が顕著である。長さ28.0mm×幅34.0mm×厚さ5.5mm、重量2.04g。



0 (4 : 5) 5cm

第62図 その他の石器

第18表 第I文化層属性表

ブロック	グリッド	遺物番号	柱記	器種	母岩番号	持因番号	長さ	幅	厚さ	重量	X	Y	Z	層位	備考	
1	47AF-1B	2	■	■	ホルンフェルス1		40.5	25.2	7.9	11.87	-66722.840	19819.710	39.711			
1	47AF-19	1	■	■	石英斑岩1	14#12	89.5	70.5	56.0	446.73	-66723.600	19819.850	40.215		赤化、 タル付箇	
1	47AF-25	1	■	■	安山岩1		39.2	20.4	10.5	12.73	-66724.300	19811.700	39.480			
1	47AF-27	1	■	■	ホルンフェルス2		19.7	17.7	14.1	4.49	-66724.560	19815.400	39.870			
1	47AF-28	1	■	■	黒色真岩1	13#8	64.9	32.0	10.1	18.03	-66724.580	19817.880	39.835			
1	47AF-29	1	■	■	ホルンフェルス3	13#10	68.0	58.0	14.5	82.43	-66724.120	19819.720		IV		
1	47AF-29	2	■	■	石英斑岩2		27.4	23.6	12.4	10.19	-66725.380	19819.850	39.865			
1	47AF-29	3	■	■	チャート1		31.3	26.2	17.5	18.30	-66724.580	19819.850	39.810			
1	47AF-37	1	■	■	局部磨製石岸調整剝片	緑色岩1	15#13c	28.5	39.0	9.0	8.81	-66726.430	19815.240	39.908 IX		
1	47AF-37	2	■	■	珪質真岩B1		18.6	14.2	4.1	0.73	-66726.430	19814.060	39.780			
1	47AF-38	1	■	■	珪質真岩B2	12#5	36.0	24.8	9.0	6.64	-66727.900	19817.300	39.865			
1	47AF-38	2	■	■	使用痕のある剝片	珪質真岩A1	12#1	40.5	23.5	7.0	4.59	-66727.500	19816.940	39.785		
1	47AF-38	3	■	■	安山岩2		17.6	11.6	3.3	0.68	-66727.940	19816.600	39.782			
1	47AF-38	4	■	■	砂岩1		21.5	14.7	6.6	2.38	-66727.860	19816.230	39.570			
1	47AF-38	5	■	■	珪質真岩B2	12#4	49.5	28.5	11.0	10.16	-66727.160	19817.120	39.899			
1	47AF-38	6	■	■	珪質真岩B2		39.2	26.1	9.2	5.71	-66726.820	19817.050	39.835			
1	47AF-38	7	■	■	黒色安山岩1	12#7	57.9	33.0	13.0	16.42	-66726.620	19817.540	39.820			
1	47AF-38	8	■	■	砂岩2		19.6	16.7	10.7	4.62	-66726.530	19817.000	39.748			
1	47AF-38	9	■	■	緑色岩2		26.6	21.7	10.8	10.15	-66727.110	19816.900	39.700			
1	47AF-38	10	■	■	珪質真岩B2		26.6	29.5	13.7	4.86	-66726.440	19816.510	39.870			
1	47AF-38	11	■	■	黒色真岩1	44#5b	40.0	46.5	9.8	13.03	-66727.880	19817.370	39.781			
1	47AF-39	1	■	■	珪質真岩B3		41.8	32.4	9.8	9.22	-66726.750	19818.580	40.070 IX			
1	47AF-39	2	■	■	局部磨製石岸調整剝片	緑色岩1	15#13b	24.0	31.5	7.0	5.64	-66727.760	19818.640	39.848		
1	47AF-39	3	■	■	珪質真岩B2		22.4	41.6	11.9	10.82	-66727.120	19819.180	40.018			
1	47AF-39	4	■	■	局部磨製石岸調整剝片	ドライ1	16#14b	34.5	34.5	6.0	5.61	-66726.900	19818.440	39.840		
1	47AF-39	5	■	■	局部磨製石岸	ドライ1	16#14a	85.5	64.5	23.5	159.97	-66727.040	19818.170	39.787		
1	47AF-39	6	■	■	局部磨製石岸	緑色岩1	15#13a	78.0	53.5	17.0	73.06	-66726.960	19818.030	39.801		
1	47AF-39	7	■	■	使用痕のある剝片	黒色安山岩2	12#3	29.0	35.5	22.0	13.70	-66726.960	19819.020	39.818		
1	47AF-45	1	■	■	安山岩3		69.5	28.5	25.4	56.65	-66729.020	19811.200	39.356		赤化	
1	47AF-47	1	■	■	珪質真岩B2		34.4	20.4	7.9	3.47	-66728.960	19814.780	39.626			
1	47AF-48	1	■	■	珪質真岩B2		36.0	38.8	19.0	17.17	-66728.200	19817.960	39.845			
1	47AF-48	2	■	■	珪質真岩B2	12#2	51.5	20.5	14.0	9.23	-66729.170	19816.470	39.752			
1	47AF-48	3	■	■	使用痕のある剝片	珪質真岩B2	12#6	44.0	19.5	12.0	7.16	-66728.900	19817.080	39.707		
1	47AF-48	4	■	■	砂岩3	14#11	112.0	86.0	25.5	341.81	-66728.550	19817.060	39.689			
1	47AF-48	5	■	■	剥片	黒色安山岩3	13#9	32.0	47.8	9.2	13.86	-66728.450	19816.940	39.750		
1	47AF-57	1	■	■	チャート2		43.1	23.7	11.9	19.14	-66730.820	19815.680	39.540			
2	47AG-01	1	■	■	チャート3		37.6	28.5	23.0	28.76	-66720.970	19823.920	40.172 VII			
2	47AG-02	1	■	■	チャート4		159.0	83.3	71.0	1035.00	-66720.580	19824.070	40.428 V			
2	47AG-02	2	■	■	打製石斧	ホルンフェルス4	22#10c	60.5	52.5	21.5	56.57	-66721.260	19824.340	39.972 IX		
2	47AG-10	1	■	■	安山岩4		13.7	9.3	7.2	0.68	-66722.920	19821.710	40.012 VII			
2	47AG-11	1	■	■	打製石斧調整剝片	ホルンフェルス4	22#11	18.8	26.1	3.5	1.58	-66722.130	19823.400	40.032 VII		
2	47AG-11	2	■	■	局部磨製石岸調整剝片	緑色岩1	19#26	27.4	21.7	5.3	2.63	-66722.920	19823.400	39.864 IX		
2	47AG-11	3	■	■	打製石斧	ホルンフェルス4	21#10a	48.0	35.0	13.0	18.00	-66723.100	19823.950	39.930 IX		
2	47AG-11	4	■	■	使用痕のある剝片	珪質真岩A2	19#21	47.5	34.0	12.5	14.18	-66723.880	19823.950	39.885 IX		
2	47AG-11	5	■	■	剥片	黒色真岩2	15.0	21.0	3.6	0.98	-66723.260	19823.040	40.558 V			
2	47AG-11	6	■	■	剥片	珪質真岩B4	47#5c	19.0	29.5	5.3	2.31	-66723.900	19822.650	40.426 V		
2	47AG-11	7	■	■	剥片	珪質真岩A3	29.5	17.5	8.6	4.82	-66723.600	19822.860	40.433 V			
2	47AG-11	8	■	■	剥片	珪質真岩B5	26.7	23.7	6.5	1.85	-66723.300	19822.810	40.137 VI			
2	47AG-11	9	■	■	石核	王體1	20#29	52.5	91.0	51.5	332.20	-66723.120	19822.450	40.354 V		
2	47AG-11	10	■	■	剥片	珪質真岩B6		10.5	10.6	4.0	0.34	-66722.960	19822.010	40.272 VI		
2	47AG-11	11	■	■	局部磨製石岸調整剝片	緑色岩3	19#7	16.5	28.5	5.0	2.53	-66723.370	19822.600	40.300 VI		
2	47AG-11	12	■	■	打製石斧	ホルンフェルス4	22#10b	84.0	55.0	24.0	100.77	-66722.080	19823.650	39.890 IX		
2	47AG-11	13	■	■	剥片	珪質真岩B5	42.4	47.9	12.3	17.55	-66723.630	19822.850	39.864 IX			
2	47AG-11	14	■	■	泥炭1		37.6	29.9	16.9	22.09	-66722.220	19823.450	39.796 IX			
2	47AG-21	1	■	■	剥片	珪質真岩B6		21.0	36.2	9.8	6.41	-66725.040	19823.920	40.540 V		
2	47AG-21	2	■	■	打製石1		14.0	13.5	1.7	0.29	-66725.470	19822.700	39.935 IX			
2	47AG-21	3	■	■	剥片	ホルンフェルス5		13.1	22.7	10.1	3.13	-66724.960	19822.340	40.526 V		

ブロック	グリッド	遺物番号	柱記	器種	母岩番号	持因番号	長さ	幅	厚さ	重量	X	Y	Z	層位	備考
2	47AG-21	4		剥片	珪質頁岩B6		37.2	19.8	6.5	3.00	-66724.960	19822.570	40.247	VI	
2	47AG-21	5		打製石斧調整剝片	安山岩5	24回13b	22.5	24.0	7.0	2.53	-66724.360	19822.870	40.124	VII	
2	47AG-21	6		局部磨製石斧調整剝片	綠色岩4	19回6b	16.5	30.0	5.0	2.55	-66724.360	19823.150	40.025	VII	
2	47AG-21	7		剥片	トロロ石1		17.1	14.6	3.8	0.82	-66724.600	19823.180	39.906	IX	
2	47AG-21	8		剥削刀形石器	黑色頁岩3	23回12a	68.5	30.0	19.0	35.45	-66724.800	19822.160	39.800	IX	
2	47AG-21	9		打製石斧	安山岩5	25回13c	59.0	42.0	14.0	33.37	-66724.500	19822.730	39.890	IX	
2	47AG-21	10		剥片	トロロ石1	19回4	56.5	32.5	10.5	17.87	-66724.300	19822.480	39.884	IX	
2	47AG-21	11		打製石斧	黑色頁岩3	23回12b	27.5	21.0	11.0	7.54	-66724.360	19822.480	39.910	IX	
2	47AG-21	12	a	剥片	珪質頁岩B6		31.5	17.4	6.2	2.14	-66724.240	19822.370	39.904	IX	両極削離
2	47AG-21	12	b	剥片	安山岩6		10.8	15.6	3.2	0.41	-66724.222	19822.700	39.904	IX	
2	47AG-21	13		剥片	珪質頁岩A1	19回3	21.5	23.0	6.0	2.36	-66724.120	19822.600	39.900	IX	
2	47AG-21	14		打製石斧調整剝片	安山岩5	24回13a	35.0	43.0	11.0	14.58	-66724.040	19822.880	39.825	IX	
2	47AG-21	15		剥片	珪質頁岩B2	19回2	46.1	22.0	9.0	6.78	-66724.960	19822.660	39.728	IX	
2	47AG-30	1	a	剥片	珪質頁岩B4	47回6b	26.0	28.8	10.0	6.21	-66727.880	19820.130	39.800	X	
2	47AG-30	1	b	剥片	黒色安山岩5		26.9	14.2	5.8	2.16	-66727.880	19820.130	39.800	X	
2	47AG-30	2		剥片	珪質頁岩B5	19回5	54.3	58.2	17.5	37.23	-66727.140	19821.040	39.794	X	
2	47AG-30	3		剥片	黒色安山岩4		36.2	26.4	7.6	5.89	-66726.260	19821.940	39.967	X	
3	47AG-22	1		局部磨製石斧調整剝片	綠色岩3		13.1	15.8	3.0	0.88	-66725.690	19824.860	40.357	VI	
3	47AG-22	2		剥片	珪質頁岩B6		13.5	19.7	3.0	0.75	-66724.840	19825.340	40.390	VI	
3	47AG-22	3		磚	安山岩7		31.8	29.8	16.1	14.22	-66725.690	19825.770	39.997	IX	
3	47AG-23	1		剥片	珪質頁岩B6		23.3	23.6	5.4	2.34	-66725.560	19827.020	40.434	VI	
3	47AG-23	2		剥片	珪質頁岩B6		12.4	15.7	4.2	0.63	-66725.840	19826.920	40.177	VII	
3	47AG-32	1		剥片	トロロ石1	27回3	40.0	23.0	12.0	10.04	-66727.730	19824.050	40.014	IX	
3	47AG-32	2		剥片	安山岩8		15.5	18.3	4.9	0.75	-66727.600	19824.020	39.987	X	
3	47AG-32	3		剥片	珪質頁岩B3		34.7	30.6	9.0	9.25	-66727.720	19824.720	39.919	IX	
3	47AG-32	4		使用痕のある剥片	安山岩8	27回1	37.0	31.0	7.0	4.95	-66727.800	19825.190	39.924	IX	
3	47AG-32	5		剥片	珪質頁岩B2		44.7	28.4	7.8	4.54	-66727.580	19825.900	40.047	VI	
3	47AG-32	6		剥片	珪質頁岩B2		47.0	36.4	6.2	7.17	-66726.880	19824.950	39.844	IX	
3	47AG-32	7		剥片	黑色頁岩4	27回2	47.5	31.0	9.5	10.94	-66726.140	19824.780	39.830	X	
3	47AG-32	8		局部磨製石斧	ホルンブッシュル	27回4	57.0	64.0	18.5	81.14	-66726.420	19825.000	39.817	X	
3	47AG-32	9		剥片	珪質頁岩B2	41回3b	21.0	38.0	17.0	13.20	-66727.800	19824.460	39.760	X	
3	47AG-33	1		剥片	珪質頁岩B5		35.6	26.5	4.8	4.92	-66727.200	19826.540	39.972	X	
3	47AG-33	2		磚	珪質頁岩A4		14.8	3.9	4.0	0.33	-66726.700	19826.560	40.095	VI	
3	47AG-33	3		剥片	珪質頁岩B2		59.2	29.6	10.0	12.17	-66726.160	19892.716	40.425	VII	
3	47AG-33	4		磚	チーク5		22.0	14.8	8.5	3.58	-66726.900	19826.070	39.790	IX	
3	47AG-42	4		剥片	珪質頁岩B4	47回5d	25.0	35.3	12.5	8.02	-66726.280	19825.060	40.316	VI	
4	47AG-14	1		磚	砂岩4		23.6	14.2	6.2	2.15	-66722.420	19829.850	40.368	VI	
4	47AG-15	1		剥片	珪質頁岩B7		33.2	7.4	3.5	1.06	-66723.510	19830.240	40.342	VI	
4	47AG-16	1		剥片	珪質頁岩B4		32.8	24.5	13.2	8.34	-66723.800	19832.730	40.426	VI	
4	47AG-24	1		磚	安山岩9		60.7	48.5	13.2	53.27	-66725.510	19828.490	39.962	IX	
4	47AG-24	2		剥片	安山岩10		10.0	16.2	2.6	0.51	-66725.820	19829.420	40.615	V	
4	47AG-27	1		剥片	珪質頁岩B7		23.2	16.2	3.7	1.18	-66725.820	19834.460	40.458	VI	
4	47AG-27	2		剥片	安山岩10		26.8	20.9	6.9	3.23	-66724.730	19834.570	40.464	VI	2点で 1個体
4	47AG-35	1		剥片	珪質頁岩B7	34回7b	19.8	18.8	6.6	1.35	-66726.640	19830.800	40.237	VI	
4	47AG-35	2		石核	珪質頁岩B8	35回8a	33.9	34.4	24.3	29.82	-66726.600	19831.400	40.172	IX	
4	47AG-35	3		磚	チーク6		80.8	63.0	40.8	274.87	-66726.940	19831.360	40.214	VI	
4	47AG-35	4		磚	安山岩11		54.8	51.4	21.2	68.03	-66726.930	19831.570	40.216	VI	
4	47AG-35	5		剥片	珪質頁岩B7	34回7a	40.9	12.5	10.4	5.37	-66727.050	19831.710	40.235	VI	
4	47AG-35	6		剥片	珪質頁岩B7	34回7e	27.5	22.1	20.1	10.81	-66727.040	19831.190	40.384	VI	
4	47AG-35	7		石核	珪質頁岩B7	34回7d	24.9	44.9	36.8	36.27	-66727.220	19831.370	40.367	VI	
4	47AG-35	8		剥片	珪質頁岩B9	32回6b	34.0	19.5	12.5	7.82	-66727.380	19831.280	40.518	V	
4	47AG-35	9		剥片	珪質頁岩B7		22.1	15.6	3.6	1.13	-66727.760	19831.450	40.574	V	
4	47AG-35	10		剥片	珪質頁岩B7		28.2	19.3	6.1	3.31	-66727.870	19831.920	40.578	V	
4	47AG-35	11		剥片	珪質頁岩B7		30.3	41.5	9.0	7.24	-66727.420	19831.980	40.108	IX	
4	47AG-35	12		剥片	珪質頁岩B7		27.5	15.5	8.2	2.02	-66726.970	19831.990	40.336	VI	
4	47AG-35	13		石核	珪質頁岩B7	34回7g	33.0	54.0	39.0	42.24	-66727.340	19831.500	40.153	IX	
4	47AG-35	14		剥片	珪質頁岩B8	35回8b	40.9	40.1	21.9	37.55	-66726.900	19831.420	40.206	VI	
4	47AG-35	15		磚	安山岩11		52.2	43.8	23.7	50.33	-66727.420	19831.990	40.144	IX	
4	47AG-36	1		石核	珪質頁岩B7	34回7f	29.3	41.6	22.6	24.22	-66726.500	19832.040	40.426	VI	

ブロック	グリッド	遺物番号	柱記	器種	母岩番号	持回番号	長さ	幅	厚さ	重量	X	Y	Z	層位	備考
447AG-36	2			摩石	トロロ石2	30回1	93.0	53.5	37.0	224.40	-66727.760	19832.680	40.200	IX	
447AG-36	3			剥片	珪質頁岩B9	31回5a	35.2	19.5	10.9	6.37	-66727.200	19832.760	40.565	V	
447AG-36	4			剥片	珪質頁岩B9	31回5b	34.6	25.0	11.0	6.48	-66727.000	19832.640	40.238		
447AG-36	5			敲石	砂岩5	30回2	67.0	55.0	31.0	175.43	-66726.920	19833.200	40.206	IX	
447AG-36	6			剥片	黒色頁岩1	44回5d	35.5	47.5	21.0	29.54	-66726.100	19833.760	40.526	VI	
447AG-36	7			石核	珪質頁岩B9	32回5a	43.5	74.0	33.5	61.95	-66727.100	19832.940	40.156	X	
447AG-36	8			敲石	珪質頁岩A5	30回3	82.0	44.5	32.0	150.59	-66726.620	19833.220	40.174	IX	
447AG-45	1			剥片	珪質頁岩B7	31回4	39.9	17.1	11.1	6.15	-66728.070	19831.600	40.466	VI	
447AG-45	2			剥片	珪質頁岩B7	34回7c	28.3	22.5	10.4	5.46	-66728.010	19831.920	40.134	IX	
5 47AF	1			剥片	珪質頁岩B2	37回3a	56.0	24.0	12.5	12.50	-	-	-	上層一括	
5 47AF-59	1			石核	黒色安山岩4	37回4	51.0	41.5	27.0	61.41	-66730.440	19819.340	39.810		
5 47AF-59	2			剥片	珪質頁岩B2	37回3b	47.5	20.5	8.5	8.05	-66730.520	19818.460	39.739		
5 47AG-40	1			礫	流紋岩1	55.0	42.4	13.3	39.91	-66729.700	19821.540	39.950	VI		
5 47AG-40	2			台形棒石器	珪質頁岩5	37回1	29.0	23.5	8.5	5.75	-66729.840	19820.840	39.966	VI	
5 47AG-40	3			礫	綠色岩4	40.3	29.2	9.4	17.83	-66729.900	19820.420	39.935			
5 47AG-41	2			石英岩3		34.5	24.5	8.1	7.03	-66728.680	19822.160	39.845	X		
5 47AG-41	3			剥片	トロロ石1	37回2	36.0	10.5	12.5	1.07	-66728.210	19822.280	39.764	X	
6 47AG-41	1		使用痕のある剥片	黑色頁岩1	44回5c	40.0	42.0	12.5	20.54	-66728.310	19823.080	40.026	IX		
6 47AG-41	4			剥片	黑色頁岩1	42回4d	42.0	37.5	10.0	11.47	-66729.820	19823.920	39.884	X	
6 47AG-41	5			礫	石英岩4	19.0	17.5	6.2	1.94	-	-	-	複乱一括		
6 47AG-42	1			石核	珪質頁岩B2	41回3a	44.0	39.5	24.0	47.29	-66729.500	19824.240	39.856	X	
6 47AG-42	2			剥片	珪質頁岩B4	21.2	21.3	6.0	2.67	-66729.100	19824.270	40.206	VI		
6 47AG-42	3			打製石斧	黑色頁岩3	23回12c	69.0	37.0	16.0	46.03	-66729.680	19824.860	39.840	X	
6 47AG-42	5			剥片	黑色頁岩1	17.9	15.2	2.1	0.43	-66729.900	19825.440				
6 47AG-52	1			石核	珪質頁岩1	44回5a	63.0	52.0	25.0	65.27	-66730.500	19824.240	39.856	X	
6 47AG-52	2			打製石斧	安山岩5	25回13d	72.0	41.0	17.5	51.57	-66730.680	19824.460	39.855	X	
6 47AG-52	3			剥片	黑色頁岩1	42回4a	20.7	21.7	5.6	2.19	-66730.400	19824.490	39.788		
6 47AG-52	4			剥片	珪質頁岩B4	16.6	23.0	6.4	1.88	-66730.300	19824.570	39.787			
6 47AG-52	5		使用痕のある剥片	黑色頁岩1	42回4e	22.0	21.5	14.0	5.66	-66730.980	19824.800	39.877			
6 47AG-52	6			剥片	黑色頁岩1	44回5e	20.8	13.1	4.0	0.90	-66730.300	19825.300	40.027		
6 47AG-52	7			剥片	黑色頁岩1	42回4c	23.6	11.4	5.8	0.85	-66730.340	19824.180	39.674		
6 47AG-52	8			剥片	黑色頁岩1	42回4b	48.0	38.0	11.5	15.20	-66730.200	19825.160	39.790		
6 47AG-52	9			礫	ホルンフェルス7	40回1	85.9	29.7	13.4	34.01	-66731.300	19824.900	39.788		
6 47AG-53	1			剥片	珪質頁岩B6	10.8	8.3	2.0	0.14	-66730.720	19826.520	39.934			
6 47AG-61	2		使用痕のある剥片	珪質頁岩B3	40回2	62.5	34.0	14.0	31.83	-66732.040	19823.960	39.710			
7 47AG-34	1			鉢片	珪質頁岩B6	7.3	9.8	1.6	0.04	-66727.800	19828.300	39.976	X		
7 47AG-34	2			礫	流紋岩2	40.3	27.0	17.2	24.67	-66727.530	19828.360	39.924	X		
7 47AG-43	1			石核	珪質頁岩B4	47回5a	53.8	38.5	24.0	36.61	-66729.370	19827.600	39.927	X	
7 47AG-43	2			剥片	黒色安山岩5	46回3	35.6	30.3	9.9	9.35	-66729.560	19827.800	49.470	VI	
7 47AG-43	3			剥片	熏蒸岩1	46回4	16.2	12.5	3.8	0.39	-66728.510	19827.990	39.860	X	
7 47AG-44	1			剥片	珪質頁岩B9	39.0	18.7	9.7	4.28	-66728.980	19828.440	40.120	X		
7 47AG-44	2		使用痕のある剥片	安山岩12	46回1	44.5	43.4	7.9	8.45	-66729.300	19828.640	40.093	X		
7 47AG-44	3			剥片	安山岩13	46回2	60.2	30.8	8.1	7.27	-66729.150	19828.370	39.927	X	
B 47AF-69	1		使用痕のある剥片	珪質頁岩B4	49回2	44.0	58.0	16.0	22.03	-66733.600	19818.370	39.856			
B 47AF-77	1			鉢片	砂岩6	23.6	18.0	14.4	7.22	-66735.750	19814.330	39.430			
B 47AF-78	1		ナイフ形石器	黒色安山岩6	49回1	49.0	28.5	8.5	9.88	-66734.600	19817.260	39.652			
B 47AF-88	1			鉢片	砂岩7	48.2	36.4	21.7	5.781	-66736.700	19816.830	39.620			
B 47AF-88	2			鉢片	砂岩8	76.1	67.8	37.3	230.93	-66736.830	19817.130	39.622			
9 47AG-60	1	a	剥片	珪質頁岩B4	9.8	17.2	3.0	0.65	-66732.900	19821.760	39.686				
9 47AG-60	1	b	剥片	珪質頁岩B4	15.2	8.6	17.2	0.35	-66732.900	19821.760	39.686				
9 47AG-61	1			剥片	珪質頁岩B4	21.1	27.2	4.2	2.05	-66733.340	19822.700	40.054			
9 47AG-70	1			鉢片	砂岩9	69.8	53.5	38.6	202.05	-66735.140	19821.420	39.952			
9 47AG-72	1			鉢片	流紋岩3	24.7	17.9	13.5	5.57	-66735.500	19824.640	40.084			
10 47AG-92	1			石刃	安山岩14	49回3	64.0	21.5	12.0	8.72	-66739.100	19825.840	39.830		
10 48AG-01	1			鉢片	珪質頁岩AB	23.0	18.7	11.6	5.26	-66741.100	19822.130	39.650			
10 48AG-01	2			鉢片	砂岩10	36.2	21.3	10.4	10.80	-66741.220	19822.610	39.620			
10 48AG-01	3			鉢片	ホルンフェルスB	50.4	37.7	18.2	42.96	-66740.600	19823.170	39.718			
- 46AG-50	2		二次加工のある剥片	黑色頁岩5	51回1	61.0	60.0	22.0	10.639	-66710.930	19820.840	39.986	X下～X上		
- 47AG-74	1		剥片	珪質頁岩B7	30.3	19.0	8.5	2.84	-66734.280	19828.030	39.930				

第19表 第Ⅱ文化層属性表

プロック	グリッド	遺物番号	桂記	器種	母岩番号	神田番号	長さ	幅	厚さ	重量	X	Y	Z	層位	備考
11	46AG-99	2	■	礫	石英斑岩5		38.9	28.3	19.2	27.71	-66719.570	19819.680	40.347	2点個体	
11	46AG-90	2	■	剥片	砂岩11	53回2	37.9	46.6	14.3	22.71	-66719.830	19821.420	40.509		
11	47AG-00	2	■	礫	チャート7		83.1	40.9	31.4	145.62	-66720.400	19820.900	40.442		
11	47AG-00	3	■	礫	チャート7		56.2	33.0	25.8	43.82	-66720.730	19820.940	40.398		
11	47AG-00	4		石核	チャート8	53回3	56.1	36.8	13.8	37.73	-66720.230	19821.500	40.404		
11	47AG-00	5		楔形石器	珪質頁岩B10	53回1	30.5	24.1	10.8	5.01	-66720.570	19821.470	40.423		
12	46AG-71	1		ナイフ形石器	黒耀石2	55回1	29.1	14.8	4.4	1.67	-66715.830	19823.950	40.797	V	
12	46AG-72	1		剥片	黒色安山岩7		2.36	17.9	14.4	2.36	-66715.460	19824.750	40.512	V	
12	46AG-72	2		使用痕のある剥片	珪質頁岩B11	55回2	56.8	21.2	16.3	14.46	-66715.280	19825.530	40.546	V	
12	46AG-81	1		石核	黒色安山岩8	55回3	55.5	47.4	21.1	61.34	-66716.100	19822.340	40.470	V	
12	46AG-81	2		剥片	黒色安山岩9		18.2	21.6	4.3	1.51	-66716.000	19823.940	40.692	V	
12	46AG-82	1		剥片	珪質頁岩B12		22.1	13.4	7.1	2.01	-66717.500	19824.300	40.448	V	
12	46AG-82	2		剥片	珪質頁岩B12		15.6	12.9	1.7	2.01	-66716.460	19824.340	40.756	V	
12	46AG-82	3		剥片	珪質頁岩B12		18.9	15.9	4.1	0.99	-66717.120	19824.200	40.584	V	
12	46AG-83	1		剥片	珪質頁岩B11		30.6	18.4	10.9	3.94	-66717.500	19824.380	40.650	V	
12	46AG-92	1	■	礫	流紋岩4	50.3	47.1	26.5	59.72	-66718.420	19825.310	40.386	V 赤化		
12	46AG-92	2	■	礫	流紋岩4		44.8	24.4	12.6	15.51	-66718.330	19824.460	40.360	V 赤化	
13	46AG-93	1		剥片	黒色頁岩6		22.5	16.3	9.2	3.03	-66719.930	19827.230	40.750	V	
13	46AG-93	2		二次加工のある剥片	黒色頁岩7	57回4	43.3	27.5	10.5	10.71	-66719.860	19827.300	40.396	V	
13	46AG-93	3		剥片	黒色頁岩7		24.2	12.2	3.1	0.89	-66719.370	19826.960	40.476	V	
13	46AG-93	4		楔形石器	黒色頁岩6	57回1	25.5	25.0	14.0	10.45	-66719.920	19827.420	40.380	V	
13	46AG-93	5		剥片	黒色頁岩7	57回7	21.7	17.7	10.2	3.34	-66719.950	19827.570	40.305	V	
13	46AG-94	1		敲石	砂岩12	58回9	72.2	49.2	34.3	165.87	-66718.450	19829.320	40.490	V	
13	46AG-94	2		敲石	砂岩13	58回10	91.0	58.8	47.0	343.32	-66718.810	19829.570	40.470	V 巴石	
13	46AG-94	3	■	礫	ホルンフェルス9		45.5	37.2	12.5	27.87	-66718.916	19828.820	40.276	K	
13	46AG-95	1		二次加工のある剥片	チャート9	57回3	32.0	32.7	10.0	8.57	-66719.330	19830.300	40.310	K	
13	46AG-95	2		剥片	黒色頁岩6	57回2	20.5	23.0	10.0	4.61	-66719.520	19830.720	40.426	V 両極法	
13	47AG-02	3		二次加工のある剥片	チャート10	57回5	33.2	36.0	13.0	11.96	-66721.830	19825.720	39.972	K 両極法	
13	47AG-03	1		剥片	チャート11		19.9	24.8	7.4	3.62	-66720.830	19826.040	40.422	V	
13	47AG-03	2	■	珪質頁岩A7			20.0	12.9	7.3	1.70	-66720.940	19826.300	40.232	V	
13	47AG-03	3		打製石斧	カルンフェルス10	57回8	41.5	37.0	21.0	30.51	-66721.030	19826.470	40.443	V 未成品	
13	47AG-03	4		石核	黒色頁岩7	59回11	24.0	34.1	28.0	16.68	-66721.030	19826.650	40.384	V	
13	47AG-03	5		石核	チャート11	59回12	65.0	51.1	35.0	164.87	-66720.260	19827.630	40.415	V	
13	47AG-03	6		剥片	黒色頁岩6		18.3	21.8	5.8	1.67	-66720.040	19827.880	40.590	V	
13	47AG-04	1		剥片	黒色頁岩6		43.0	17.1	8.4	5.05	-66720.320	19828.080	40.590	V	
13	47AG-04	2		剥片	黒色頁岩7		9.2	15.2	1.5	0.22	-66720.000	19828.500	40.764	V	
13	47AG-04	3		剥片	黒色頁岩6		33.0	19.2	5.3	2.72	-66720.330	19828.070	40.264	V	
13	47AG-12	1		二次加工のある剥片	珪質頁岩AB	57回6	18.8	12.3	6.8	1.44	-66722.120	19825.080	40.290	V	
13	47AG-12	2	■	礫	安山岩15		50.8	25.2	14.1	30.65	-66722.090	19825.080	39.984	K	
14	47AG-18	2	■	珪質頁岩14			83.5	67.6	30.0	249.88	-66723.460	19837.750	40.471		
14	47AG-28	2		剥片	黒耀石3	61回2	18.7	25.1	7.0	1.99	-66724.640	19836.510	40.759		
14	47AG-39	2		剥片	チャート12		34.0	28.7	10.5	7.54	-66726.340	19838.580	40.862		
14	47AG-49	2		ナイフ形石器	黒耀石4	61回1	19.5	18.0	8.0	2.19	-66729.160	19838.640	40.748		
14	47AG-49	3	■	珪質頁岩15			191.0	72.2	59.9	1235.00	-66728.250	19839.530	40.696		
14	47AG-59	2		剥片	黒耀石5		18.8	23.3	9.2	1.97	-66730.090	19838.700	40.896		

### 第3節 繩文時代以降の遺構と遺物

本遺跡において検出された上層遺構は、大きく弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものと、中・近世に属するものに分けられる。遺構を種類別にみると、竪穴住居跡21軒、土坑36基、溝状遺構9条、ピット群1基となる（遺構番号に枝番を付けたものを含む）。本節ではこれら遺構についてまず掲載し、その後、遺構外から出土した遺物および上層出土石器をまとめて掲載した。なお、全体の遺構配置図は第6図、遺構一覧表は第1表、遺物の観察表は第20表～第25表として掲載した。

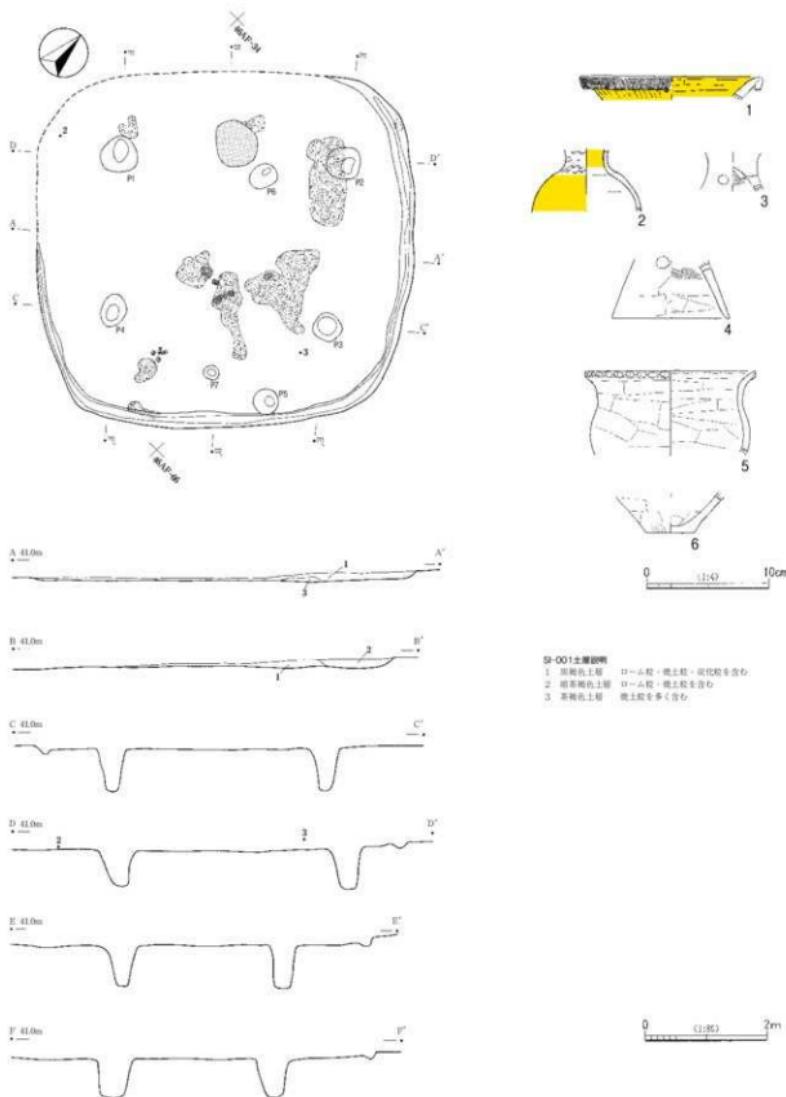
#### 1 竪穴住居跡

竪穴住居跡は21軒検出された。このうち、弥生時代後期の所産と考えられるものはSI-006、SI-010の2軒である。そのほかは概ね古墳時代前期に位置づけられると考えられる。なお、遺物が出土しなかったSI-005、SI-012についても、周辺の状況から古墳時代前期の可能性が高い。

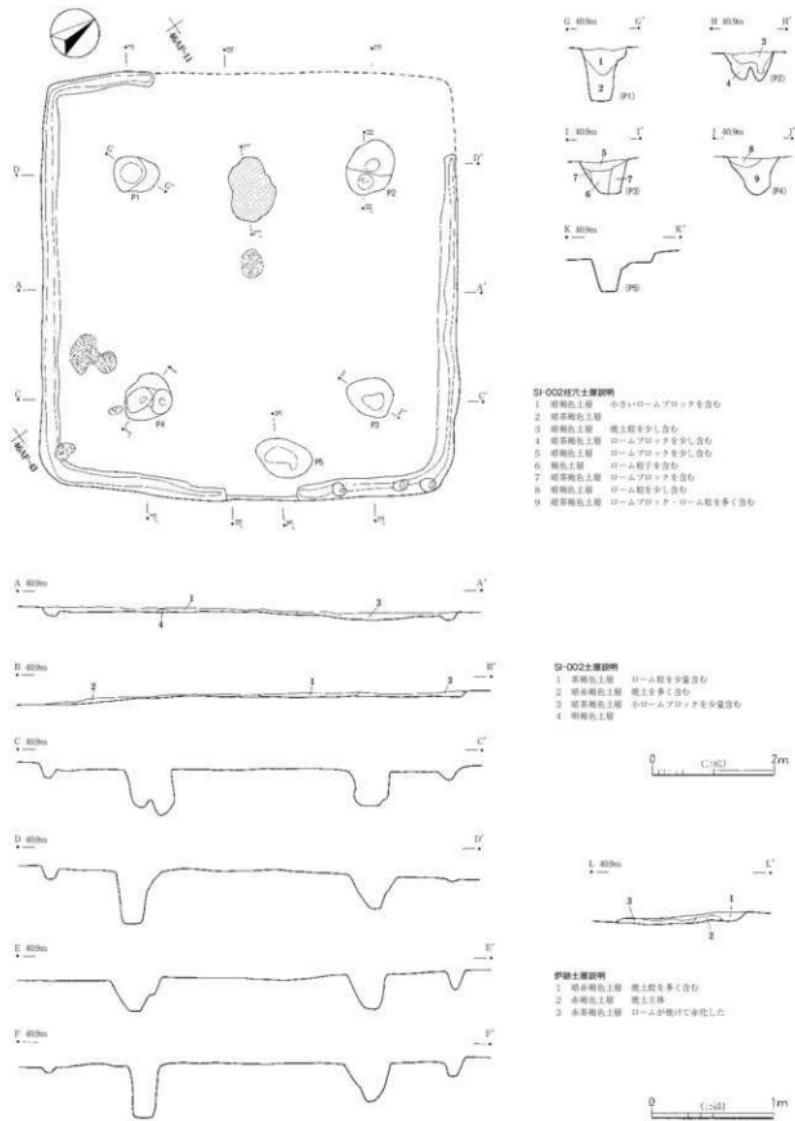
##### SI-001（第63図、図版5・21・24）

46AF-24・25・34～36・43～46・53～56・65グリッドに所在する。北西コーナー付近の壁は検出されなかったが、平面形は丸味のある隅丸方形を呈するとみられる。主軸方向は、N-44°-Wである。規模は長軸5.9m、短軸6.2mで、壁は緩やかに立ち上がり、検出面から床面までの深さは約15cmである。壁が残存している北コーナー部から南北部分にかけて壁溝が認められる。床面からは、炉1基とピットが7基確認された。炉は竪穴住居北西側から検出され、平面形は長軸78cm、短軸68cmの梢円形を呈する。断面は皿状にくぼみ、覆土は焼土を含む赤褐色土が主体である。床面からの深さは12cmである。確認されたピットは、主柱穴と考えられるもの（P1・P2・P3・P4）が4基のほか、貯蔵穴（P5）、入口ピット（P7）、補助柱穴（P6）と考えられるものが各1基であった。ピットの床面からの深さは、柱穴と考えられるもののうちP1が65cm、P2が68cm、P3が71cm、P4が68cmである。南壁際の貯蔵穴と考えられるP5は、平面が径44cmの円形で断面は漏斗状をなし、床面からの深さは23cmである。また、入口ピットと考えられるP7は深さ20cmで、補助柱穴とみられるP6は深さ57cmを測る。床面には、焼土と炭化材が分布し、住居廃絶後、廃材の焼却が行われていたと考えられる。竪穴住居覆土はローム粒・焼土粒・炭化粒を含む黒褐色土が主体である。

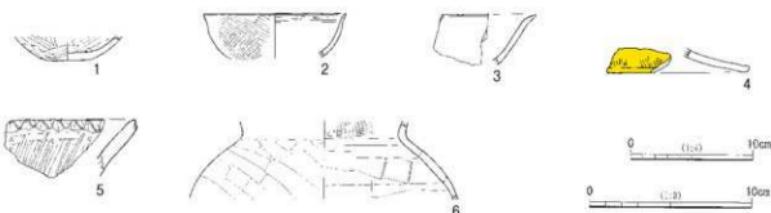
図示した遺物は6点で、このうち2は床面付近から、3は床面から若干浮いた状態で出土したほか、1と5がP7から出土している。その他の遺物は覆土中から出土した一括取り上げ資料である。1・2は壺である。1は口縁部破片で、復元口径は15cmである。折返しの口縁部には羽状縄文が施され、端部には布巻棒状工具による押捺跡が巡る。内面および頸部は磨かれ、赤彩されている。また、内面の一部にはスヌの付着が認められる。2は小型の壺胴上部の破片である。胴部は球形をなし、頸部には数段のS字状結節文が巡っている。外面は丁寧なミガキが施されている。また、外面胴部と内面頸部は赤彩されている。このほか内面胴部には、円形剥落が多数認められる。3・4は高坏である。3は脚上部の50%程が遺存し、坏部との接合部分が剥がれている。外面は被熱により器面が荒れており、内面はハケ調整が施されている。透かし孔が1か所認められる。4は脚下部の破片で、復元脚端部径は9.6cmである。外面はヘラナデの後、一部ミガキが施され、内面はハケ調整の後ナデが見られる。外面は二次被熱により器面が荒れている。透かし孔が1か所認められる。5・6は壺の破片である。5は胴上部の40%程度が遺存し、復元口径が14cm



第63図 SI-001と出土遺物



第64図 SI-002



第65図 SI-002出土遺物

の小型のものである。口唇端部には棒状工具による押捺列が巡り、胴部は外面・内面ともにヘラナデが見られる。外面口縁部と胴上部にススの付着が認められる。内面には円形剥落が見られる。6は底部の20%の破片で、復元底径は4cmである。外面はヘラナデの後ミガキ、内面はヘラナデが施されている。また、内面にはコゲが見られる。

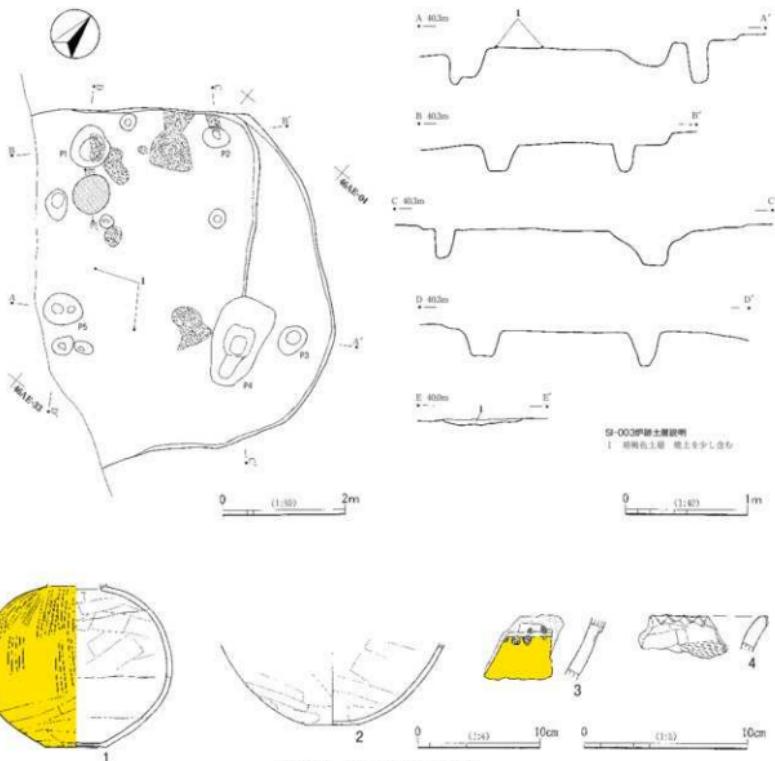
#### SI-002 (第64・65図、図版5・24)

45AF-92・93、46AF-02~04・10~15・20~24・31~34グリッドに所在する。北コーナー付近の壁は未検出であるが、平面形は方形を呈する。主軸方向は、N-48°Wである。規模は長軸7.0m、短軸6.8mで、残存する壁は僅かに立ち上がり、検出面から床面までの深さは約10cmである。壁が残存している部分には、壁溝が認められる。床面からは、炉1基とピットが5基確認された。炉は竪穴住居北西側から検出され、平面形は長軸105cm、短軸74cmの不整円形を呈する。断面は皿状にくぼみ、覆土は焼土を含む暗赤褐色土が主体で、床面からの深さは10cmである。確認されたピットは、主柱穴と考えられるもの(P1・P2・P3・P4)が4基、入口ピットと考えられるもの(P5)が1基であった。ピットの床面からの深さは、柱穴と考えられるもののうちP1が87cm、P2が57cm、P3が55cm、P4が75cmである。また、P2とP4は建て替えを行ったためか、補助的なピットを伴う。南東壁際のP5は入口ピットと考えられ、深さは56cmであった。床面には、焼土が若干分布していることから、竪穴住居廃絶後、廃材の焼却が行われていた可能性が考えられる。竪穴住居覆土はローム粒を含む茶褐色土が主体で、レンズ状に堆積していたものと思われる。

図示した遺物は6点で、2がP1とP4から、3がP3から出土した以外、すべて覆土中からの出土である。1は小型の壺底部片で、底径は3.2cmである。外面はヘラケズリの後ミガキ、内面はヘラナデが施されている。2は鉢口縁部の10%程度の破片で、復元口径は11.6cmである。外面はハケ調整、内面はハケ調整の後ナデが施されている。3・4は高坏である。3は坏部の口縁部付近の破片である。外面はナデ、内面は粗いミガキが施されている。外面には一部剥落が認められる。4は脚端部の破片である。外面はミガキ、内面はヘラナデが施されている。また、外面は赤彩されている。5・6は甕である。5は口縁部片で、復元口径は21.4cmである。口唇部にはヘラ状工具による交互押捺列が見られ、外面はナデの後ミガキ、内面はハケ調整後ミガキが施されている。6は胴上部の破片で、外面はヘラケズリ、内面口縁にはハケ調整が認められる。また、外面の頭部付近にススの付着が見られる。

#### SI-003 (第66・120図、図版5・21・24・28)

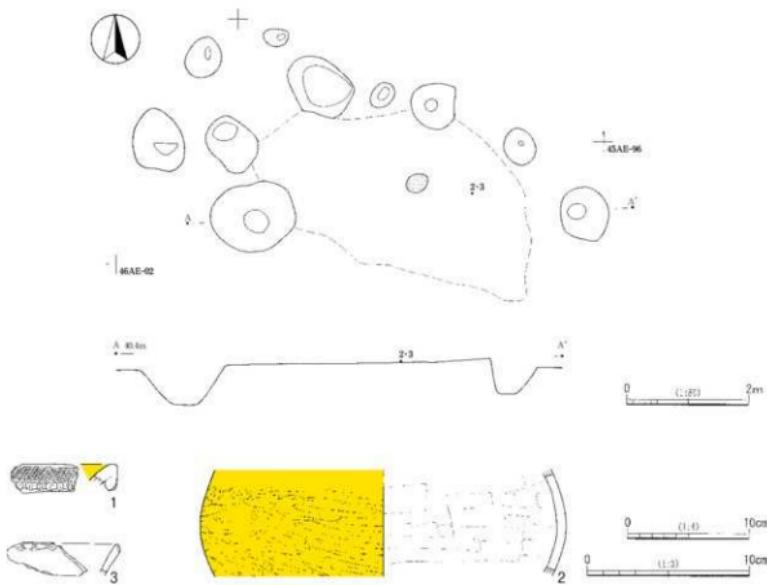
46AE-02~04・11~14・22~24・33グリッドに所在し、遺跡範囲の最北端に位置する。南側は傾斜地の



第66図 SI-003と出土遺物

ため、床面・壁等は検出できなかった。2軒の竪穴住居跡が重複していたと考えられるが、新旧関係などは明らかではない。平面形は隅丸方形のものと楕円形を呈するものがある。主軸方向は、N-47°-Wである。残存する規模は、長軸5.7m、短軸4.9mを測る。壁は北側から東側にかけて残り、立ち上がりは緩やかで、検出面から床面までの深さは約9cmである。床面からは、炉1基とピットが11基確認された。炉は竪穴住居西側から検出され、平面形は長軸67cm、短軸60cmの円形を呈する。断面は皿状にくぼみ、覆土は焼土を若干含む暗褐色土が主体で、使用頻度は低いようである。床面からの深さは10cmである。確認されたピットの性格は明らかではなく、明確に主柱穴と言えるものはない。ピットの床面からの深さは、P1が45cm、P2が46cm、P3が66cm、P4が63cm、P5が59cm、そのほかのピットは17cm～56cmである。隅丸方形の床面には、焼土が若干分布していることから、竪穴住居廃絶後、廃材の焼却が行われていた可能性が考えられる。竪穴住居覆土はローム粒を少量含む暗褐色土が主体であるが、堆積状態は不明である。

図示した遺物は5点で、このうち1は床面付近2地点から出土したほかは、覆土中からの出土である。1・2は壺である。1は底部から頸部にかけての破片で、胴部の50%程度が残っている。底部が小さく胴部は

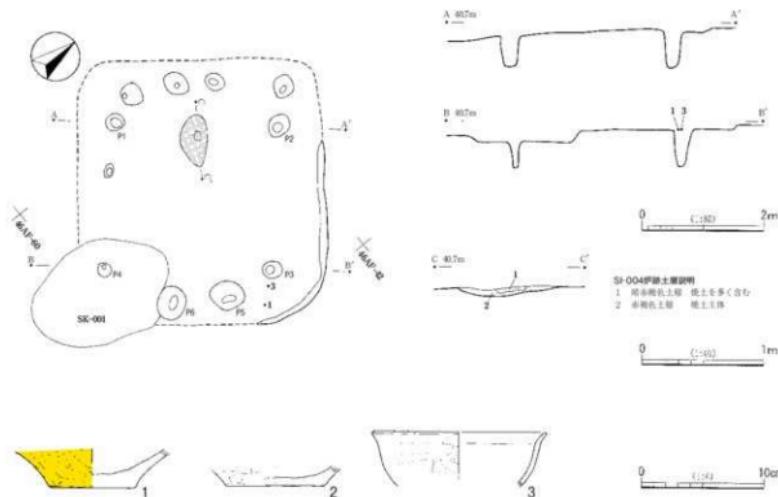


第67図 SI-003' と出土遺物

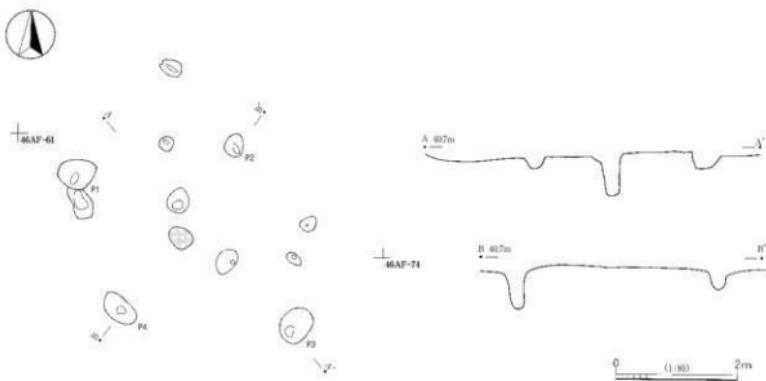
球形をなし、復元底径は5.0cmである。外面はヘラナデの後ミガキ、内面はヘラナデが施されている。また、外面は底部を除き赤彩され、内面底部付近には僅かではあるが円形剥落が認められる。2も底部が小さく胴部は球形を呈している。胴部の20%程度が残存しており、底径は4.2cmである。外面は粗いヘラケズり、内面はヘラナデが施されている。また、外面胴中位付近にはススが、内面にはコゲが認められる。3は鉢の口縁部付近の破片である。折返し口縁の端部には、布巻棒状工具による押捺列が巡り、外面胴部には赤彩の痕跡が僅かに残る。外面は剥落が著しく調整は不明であるが、内面はミガキを施している。4は壺口縁部片である。口唇端部には棒状工具による押捺列が巡り、外面はハケ調整の後ヘラナデ、内面はヘラナデが施されている。また、口唇部付近にはススの付着が認められる。このほか第120図3に示した石核が出土している。

#### SI-003' (第67図、図版21・24)

45AE-82~85・92~95、46AE-04・05グリッドに所在する。SI-003' はSI-003の北側に隣接して検出された。遺存状態が悪く、堅穴住居床面と思われる硬化面と炉、ピットが検出されたのみである。平面形態や主軸方位、規模は不明である。検出された内部施設は、炉1基とピット10基である。炉は硬化面のほぼ中央から検出され、平面形は長軸36cm、短軸30cmの円形を呈すが、掘り込みが浅く痕跡のみが確認される。10基検出されたピットは、大きさも不揃いで、深さも30cm~88cmと差が大きい。検出位置も硬化面の北側に偏っており、主柱穴を構成するものとは考えられない。堅穴住居覆土や堆積状態は不明である。



第68図 SI-004と出土遺物



第69図 SI-005

図示した遺物は3点で、このうち2と3は床面付近から出土している。1・2は壺である。1は口縁部片で、折返し部分には附加条縄文が、端部には棒状工具による押捺列が巡る。内面はヘラナデが施され、赤彩されている。2は胴部中央付近の破片で、粘土接合部分から剥がれたように壊れている。胴部の40%程度が残っている。外面は丁寧にミガキが施されて赤彩され、内面はヘラナデが施されている。3は壺口

縁部片で、口唇部には指頭による押捺列が巡り、外面・内面ともにヘラナデが施されている。また、外面にはススの付着が認められる。

#### SI-004（第68図、図版5・24）

46AE-49・59、46AF-30・31・40～42・50・51グリッドに所在する。SK-001と重複するが、遺構覆土の観察からSI-004の方が古いと判断される。東コーナー付近のみ壁が残存しており、平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方向は、N-52°-Wである。規模は長軸4.3m、短軸4.0mで、残存する壁は極僅かに立ち上がり、検出面から床面までの深さは約6cmである。壁溝は認められない。床面からは、炉1基とピットが11基確認された。炉は竪穴住居や西寄りから検出され、平面形は長軸85cm、短軸44cmの長楕円形を呈する。断面は皿状にくぼみ、覆土は焼土を多く含む赤褐色土が主体である。床面からの深さは7cmである。確認されたピットは、主柱穴と考えられるもの（P1・P2・P3・P4）が4基、入口ピットまたは貯蔵穴と考えられるもの（P5・P6）が2基、その他用途不明のものが5基であった。ピットの床面からの深さは、柱穴と考えられるもののうちP1が51cm、P2が60cm、P3が71cm、P4が40cmである。また、入口ピットまたは貯蔵穴と考えられるもののうちP5が35cm、P6が53cmである。その他のピットは18cm～76cmと不揃いである。竪穴住居覆土や堆積状態は不明である。

図示した遺物は3点で、このうち1と3は東側コーナー付近の床面上から、2がP2から出土している。1・2は壺底部片である。1の復元底径は7.0cmで、底部全体の70%程度が残存している。外面はヘラナデの後ミガキ、内面はミガキが施されている。また、外面は全体に赤彩されており、内面には円形剥落が多数認められる。2の復元底径は8.0cmで、底部全体の30%程度が残存している。外面はヘラナデの後ミガキ、内面はミガキが施されている。また、内面には円形剥落が多数認められる。3は口縁部がやや外反する鉢の破片で、口縁部の10%程度が残っている。復元口径は14.4cmである。外面はヘラケズリの後ナデ、内面はナデが施されている。また、内面胴部には円形剥落が多数認められる。このほか外側胴部にイネと思われる圧痕が1点見られる。

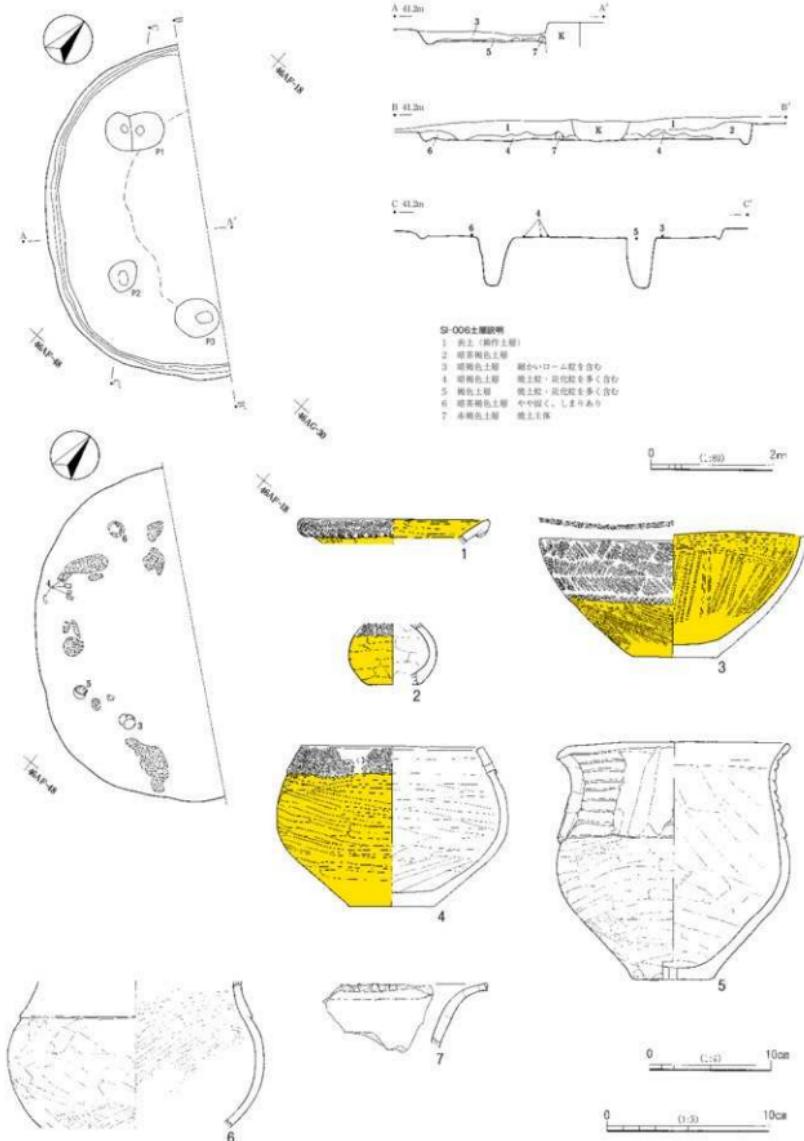
#### SI-005（第69図、図版5）

46AF-52・61～63・71～73グリッドに所在する。遺存状態が悪く、炉とピットが検出されたのみである。平面形態や主軸方位、規模は不明である。検出された内部施設は、炉1基とピット11基である。炉と思われる焼土範囲の平面形は、長軸20cm、短軸17cmの楕円形を呈すが、掘り込みが浅く痕跡のみが確認される。11基検出されたピットのうち、比較的規模の大きいP1～P4が主柱穴である可能性もあるが、判然としない。ピットの床面からの深さは、P1が32cm、P2が49cm、P3が32cm、P4が66cmである。その他性格不明のピットは、23cm～70cmの深さを測る。住居覆土や堆積状態は不明である。

遺構の遺存状態が悪いためか、遺物は発見されなかった。

#### SI-006（第70図、図版5・21・24）

46AF-17・27・28・37～39グリッドに所在し、調査範囲の北東側に位置するため、竪穴住居の半分ほどを調査したのみとなった。平面形は楕円形を呈し、主軸方向はN-51°-Wである。残存する規模は、長軸5.6m、短軸2.6mで、壁は垂直に近く立ち上がり、検出面から床面までの深さは約16cmである。壁溝は全



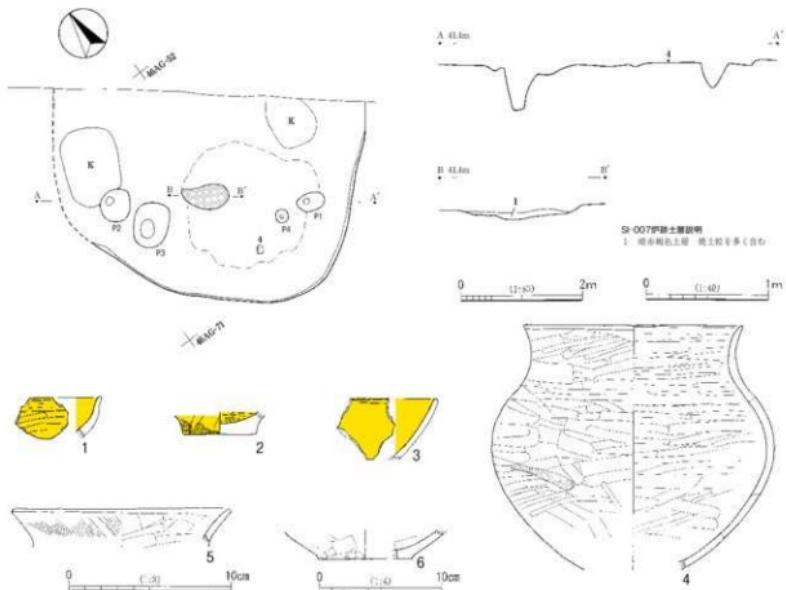
第70図 SI-006と出土遺物

周するものと思われる。堅穴住居中央部分の床が踏み固めにより硬化している。床面からは、ピットが3基確認された。ピットは、主柱穴と考えられるもの(P1・P2)が2基、入口ピットと考えられるもの(P3)が1基である。ピットの床面からの深さは、P1が73cm、P2が82cm、P3が33cmである。また、P1は柱の建て替えを行ったためか、隣接してもう1基ピットが存在する(深さ83cm)。床面には、焼土が広範に分布していることから、堅穴住居廃絶後、廃材等の焼却が行われていた可能性が考えられる。堅穴住居覆土は焼土粒・炭化粒を多く含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

図示した遺物は7点で、このうち3~6の4点は、壁に近い床面直上から出土し、遺物の遺存率も高い。1・2は壺である。1は口縁部の30%程度が残っており、復元口径は16.0cmである。口縁部折返し部分には羽状繩文が施され、端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。外面・内面ともにミガキが施され、施文部分を除き赤彩されている。2は底部から胴部にかけての破片で、胴部の30%程度が残っている。復元底径は4.1cmである。胴部は球形を呈し、上部には繩文と2段のS字状結節文が施され、下部はナデの後ミガキが施されている。内面は指によるナデが見られる。外面の施文部分を除いて赤彩されている。3・4は鉢である。3は口縁部がハの字状に開く大型の鉢で、堅穴住居南コーナー近くの床面直上から正位の状態で出土した。完形で口径22.0cm、底径7.0cm、器高10.4cmを測る。口唇部には繩文、口縁部には羽状繩文が施され、下部には3段のS字状結節文が巡る。外面・内面ともにミガキが施され、施文部分を除き内外面赤彩されている。底部周縁部が摩耗しているほか、内面底部も使用により摩耗している。4は口縁部が内傾し、胴部が球形をなす大型の鉢で、堅穴住居西側壁近くの床面直上から破片の状態で出土した。破片によってススの付着が認められることから、破片となってから火を受けたと考えられる。復元口径15.0cm、底径7.0cm、器高13.1cmを測る。折返しをなす口縁部にはS字状結節文を挟んだ羽状繩文が施され、端部には布巻棒状工具による押捺列が巡る。また、折返し部分には1か所の穿孔が認められるが、さらに左側にも孔の痕跡が認められ、2か所が対になる可能性がある。外面・内面ともにミガキが施され、外面は施文部分を除き赤彩されている。底部周縁部が摩耗しているほか、内面底部も使用により摩耗している。5は甕形の土器であるが、底部に焼成前穿孔が認められることから、当初より濾過器として製作されていたことがわかる。住居南コーナー付近から口縁部を若干傾けた状態で、床面より僅かに浮いた位置から出土している。口縁部の一部を欠損しているほか、ほぼ完形である。口径18.4cm、底径6.4cm、器高19.4cmである。器形は胴部がやや丸みを持ち、最大径は胴部中央部に位置する。頸部には9段の輪積み痕が残され、指による縦方向の輪積み痕の磨り消しが7か所認められる。外面胴部および内面はナデの後ミガキが施されている。このほか内面口縁部付近には白色物質の付着が認められ、底部周縁部分は摩耗している。6・7は甕である。6は口縁部と底部を欠失し、胴部のみ完形である。最大径が胴部中央部に位置する器形が想定される。住居北東コーナー付近の床面直上から出土している。頸部に輪積み痕を1段残し、外面胴部および内面はナデの後ミガキが施されている。7は口縁部の破片で、口唇端部には工具による押捺列が巡り、頸部には3段の輪積み痕が僅かに残され、表面をナデ消している。内面はナデの後ミガキが施されている。また、外面全体にはススが付着し、内面頸部下端にはコゲが認められる。

#### SI-007 (第71図、図版6・21・24)

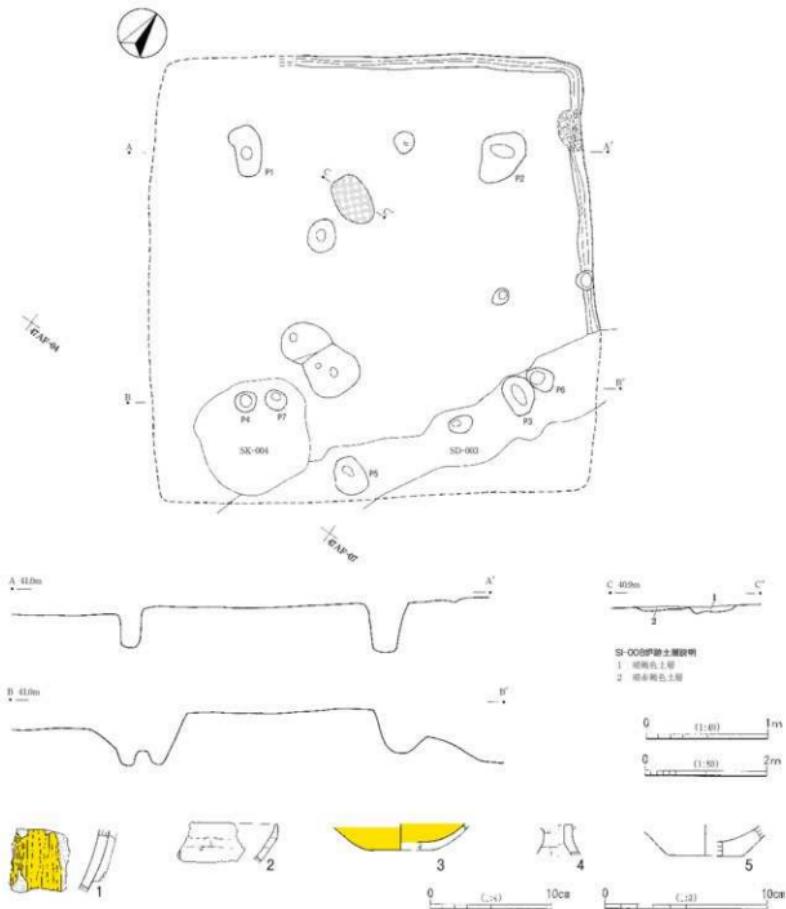
46AG-41・50~52・60~63・71・72グリッドに所在し、調査範囲の北東側に位置するため、住居の半分ほどを調査したのみとなった。北壁部分を中・近世の溝状造構SD-002に切られている。平面形は隅丸方



第71図 SI-007と出土遺物

形を呈し、主軸方向はN-50°-Wである。残存する規模は、長軸6.1m、短軸3.3mで、壁は僅かに立ち上がり、検出面から床面までの深さは約8cmである。壁溝は検出されなかった。竪穴住居南側の炉周辺の床が踏み固めにより硬化している。床面からは、炉1基とピット4基が確認された。炉は竪穴住居南西寄りから検出され、平面形は長軸78cm、短軸42cmの長楕円形を呈する。断面は皿状にくぼみ、覆土は焼土を多く含む暗赤褐色土である。床面からの深さは6cmと浅い。ピットは、主柱穴と考えられるもの（P1・P2）が2基、性格不明のもの（P3・P4）が2基である。ピットの床面からの深さは、P1が40cm、P2が74cm、P3が30cm、P4が20cmである。竪穴住居覆土の内容や堆積状態は不明である。

図示した遺物は6点で、4が南側コーナー付近の床面上、2が炉内から出土したほかは、覆土中からの出土である。1・2は鉢である。1は口縁部の破片で、胴部が球形を呈すると思われる。外面内面ともに丁寧なミガキの後、赤彩されている。2は底部片で、復元底径は6.0cmである。外面はハケ調整の後ヘラナデ、内面はミガキが施されている。外面内面ともに赤彩されている。3は高杯の口縁部片で、外面はヘラナデの後ミガキ、内面はミガキが施されている。外面内面ともに赤彩されている。4～6は壺である。4は南側コーナー付近の床面上から出土したものである。口縁部から底部近くの大型の破片で、全体の30%程度が残っている。最大径が丸みを帯びた胴部中央部に位置する器形で、復元口径は18.5cmを測る。外面内面ともにヘラナデの後ミガキが施されている。また、内面胴下部にはススが付着し、外面胴部に二次被熱による変色、口唇部には一部摩滅部分が認められる。このほか外面胴部に種子状の圧痕が見られる。5は口縁部の破片で、復元口径は17.6cmである。外面はハケ調整の後ナデ、内面はヘラナデが施されてい

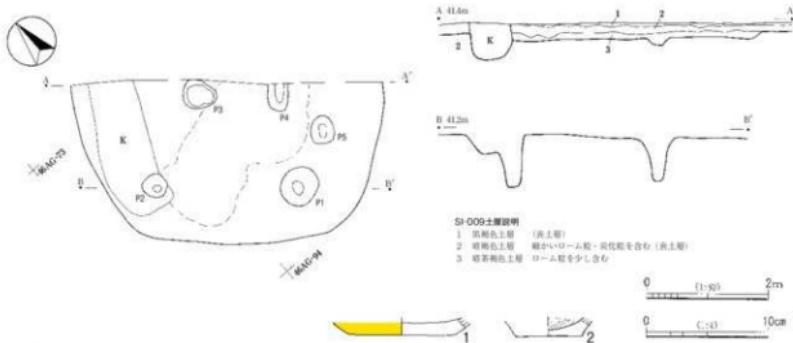


第72図 SI-008と出土遺物

るほか、外面は全体的にススの付着が認められる。6は底部の10%程度の破片である。復元底径は7.6cmで、外面内面ともにヘラナデが施されている。また、外面にはススが、内面にはコゲが付着している。

#### SI-008 (第72図、図版6・24・25)

46AF-55・56・64~67・73~78・83~88・94~97、47AF-05・06グリッドに所在する。東壁部分を中心、近世の溝状遺構SD-003に、南壁付近を中近世の土坑SK-004に切られている。北コーナー付近を除き壁は未検出であるが、平面形は方形が想定される。主軸方向はN-39°Wである。想定される規模は、長軸7.3m、



第73図 SI-009と出土遺物

短軸7.2mで、壁は僅かに立ち上がり、検出面から床面までの深さは約9cmである。壁が残存している部分からは、壁溝が検出された。床の硬化部分は確認できなかった。床面からは、炉1基とピット14基が確認された。炉は竪穴住居や西寄りから検出され、平面形は長軸84cm、短軸56cmの長楕円形を呈する。断面は皿状にくぼみ、覆土は暗褐色土で底面は熱を受け赤く硬化している。床面からの深さは3cmと浅い。ピットは、主柱穴と考えられるもの(P1・P2・P3・P4)が4基、入口ピットと思われるもの(P5)が1基、主柱穴(P3・P4)の補助的なピット(P6・P7)が2基、性格不明のものが7基である。ピットの床面からの深さは、P1が66cm、P2が73cm、P3が71cm、P4が68cm、P5が38cmである。また、P3・P4の補助的なピットと考えられるP6の深さが61cm、P7が73cmを測る。その他のピットの深さは23cm～64cmである。北コーナー付近の床面から、焼土が確認できることから、竪穴住居廃絶後、廃材等の焼却が行われていた可能性も考えられる。覆土の内容や堆積状態は不明である。

出土遺物は少なく、図示できたものは5点であるが、いずれも小破片である。また、5がP1から出土した以外、すべて覆土中からの出土である。1は壺口縁部の破片であろうか。棒状浮文が2本認められ、外面はミガキ、内面はヘラナデの後ミガキが施されている。外面は全体に赤彩されている。2・3は鉢である。2は口縁部の破片で、輪積み痕を3段残す。外面はナデ、内面はハケ調整の後ナデが施されている。3は底部の20%程度が残る。復元底径は5.6cmである。外面はミガキ、内面はナデが施され、両面とも赤彩されている。外面に種子状の圧痕が見られる。4は器台脚部の破片である。縱方向に透かし孔が開いている。外面はヘラナデの後ミガキ、内面はナデが施されている。5は壺底部で20%程度が残る。復元底径は6.0cmである。外面はヘラナデ、内面の調整は不明である。なお、内面は使用により摩耗している。

#### SI-009 (第73図、図版6・25)

46AG-63・64・73～75・83～85グリッドに所在し、調査範囲の北東側に位置するため、竪穴住居の半分ほどを調査したのみとなった。遺存状態が悪く、竪穴住居プランが確認できたのみである。平面形は隅丸方形が想定され、主軸方向はN-48°-Wである。残存する規模は、長軸50m、短軸2.6mである。セクション図の検討から、壁は緩やかに立ち上がり、検出面から床面までの深さは10cmが推定できる。壁溝は検出

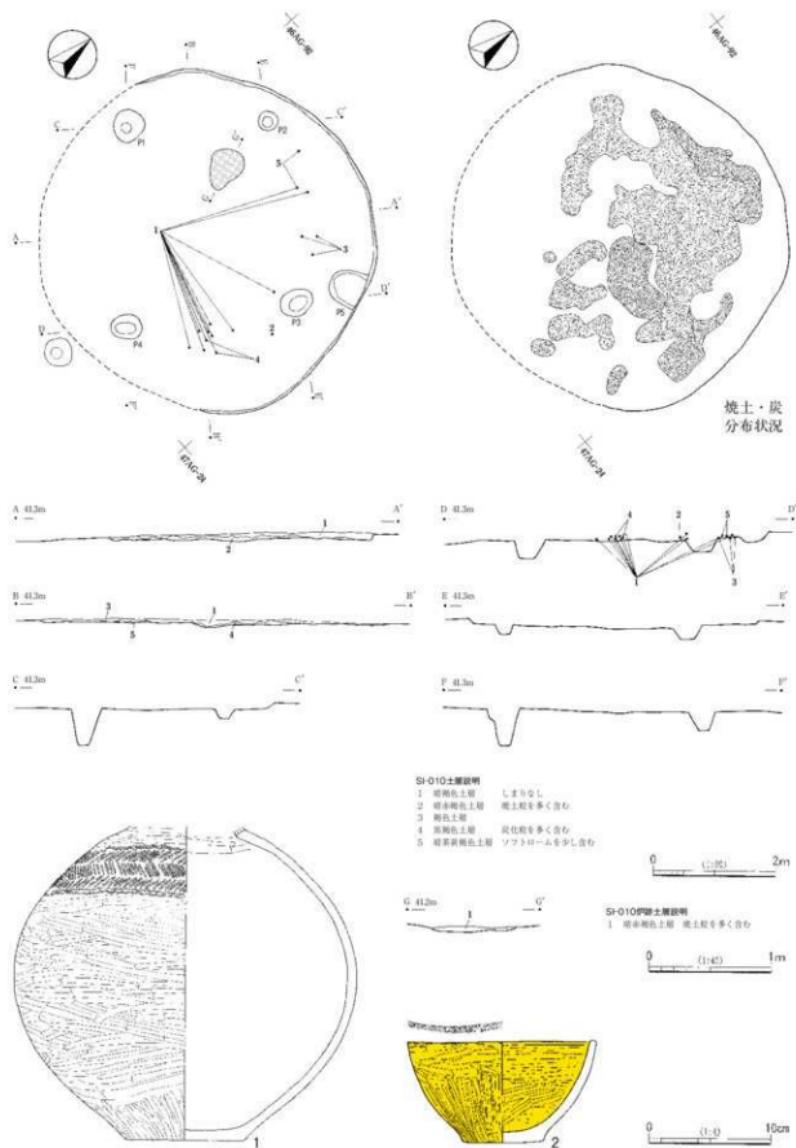
されず、西側から中央部分にかけて床面の硬化が確認できる。床面からは、ピットが5基検出された。このうち主柱穴と考えられるもの（P1・P2）が2基、性格不明のものが3基である。ピットの床面からの深さは、P1が74cm、P2が56cm、P3が17cm、P4が15cm、P5が74cmである。堅穴住居覆土はローム粒を少し含む暗茶褐色土の單一堆積である。

出土遺物は少なく、図示できたものは2点のみで、いずれも小破片である。1はP5からの出土である。1・2は壺底部の破片である。1は底部の25%程度が残り、復元底径は8.8cmである。外面内面ともにナデが施され、外面は底面を含めて赤彩されている。また、底部周縁部が摩滅し、内面の一部に器面の剥落が認められる。2は底部の10%程度が残り、復元底径は5.4cmである。外面内面ともにヘラナデが施されている。

#### SI-010（第74・75・120図、図版6・22・25・28）

46AG-91~93、47AG-01~04・11~14・22・23グリッドに所在する。南側半分ほどの壁は削平により未検出であるが、平面形は円形を呈すると考えられる。主軸方向は、N-19°-Wである。規模は長軸5.4m、短軸5.3mで、残存する壁は僅かに立ち上がり、検出面から床面までの深さは約11cmである。壁が残存している部分からは、壁溝は確認できなかった。床の硬化部分は確認できなかった。床面からは、炉1基とピット5基が確認された。炉は堅穴住居やや北西寄りから検出され、平面形は長軸68cm、短軸49cmの不整円形を呈する。断面は皿状に浅くくぼみ、覆土は焼土を多く含む暗赤褐色土で、底面は熱を受け赤化している。床面からの深さは4cmと浅い。ピットは、主柱穴と考えられるもの（P1・P2・P3・P4）が4基、性格不明のものが1基である。ピットの床面からの深さは、P1が60cm、P2が16cm、P3が23cm、P4が30cmである。また、東壁際から検出されたP5は深さが11cmと浅く、平面形も他のピットよりも大きめなため貯蔵穴の可能性がある。床面全体から、焼土と炭が確認できることから、堅穴住居廃絶後、廐材等の焼却が行われていた可能性が高い。覆土は暗褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈するものと思われる。

比較的依存率が高い土器がまとまって出土した。図示したものは8点で、このうち1~6が床面直上から出土している。また、1が示すように、破片が広範囲に拡散していることから、堅穴住居廃絶後に投棄された状況を示している。1は壺で、胴部から底部にかけて70%程度遺存している。底径は9.6cmで、球胴化した胴上部には3段の繩文と、これを挟むように上下に2段のS字状結節文が巡る。外面胴部はミガキ、内面はナデが施されている。内面の底面付近を中心に円形剥落が多数認められるほか、二次的に熱を受けて色調が変化している部分がある。2は鉢で、口縁部の一部を欠失するが、全体としては80%程度遺存している。復元口径15.8cm、底径6.8cm、器高8.3cmを測る。口縁部に繩文が施文されているほかは無文で、外面内面ともに丁寧にミガキが施され、赤彩されている。内面底部が使用により摩耗している。3・4は甕である。3は底部を欠失しているほかは完形で、口径は20.0cmである。口唇端部は工具による交互押捺列が施され、頸部には輪積み痕が6段残る。輪積み痕は縱方向にナデ消されているが、部分的で規則性はない。外面胴部はヘラナデ、内面はナデの後ミガキが施されている。外面胴上部にススが付着している。4は底部片で、底部の30%程度が残る。復元底径は8.0cmである。外面はヘラナデ、内面はナデが施されている。内面には全体的にコゲが認められ、底面は使用により摩耗している。このほか一部が二次被熱により色調が変化している。5・6はミニチュア土器で、5が鉢、6が甕である。5は胴部の一部が欠失しており、全体で70%程度遺存している。復元口径8.0cm、底径3.6cm、口縁部は水平ではなく、波状に上下し、器高は最も高い部分で5.0cmを測る。外面は丁寧なミガキ、内面はナデが施されている。6は口縁部の一



第74図 SI-010と出土遺物（1）

部と底部が残る。復元口径6.8cm、底径2.6cm、復元器高5.2cmである。口唇部には内外両方から交互に工具による押捺列が巡り、外面はハケ調整の後ナデ、内面はナデが施されている。このほか第120図8・10に示した敲石と砥石が出土している。

#### SI-011（第76図、図版6・22・25）

46AG-85・86・94～97、47AG-05～07グリッドに所在し、調査範囲の北東側に位置するため、竪穴住居の半分ほどを調査したのみとなった。中央部分を中・近世の溝状遺構SD-004に切られ、遺存状態も悪いことから平面プランを確認することはできなかった。主柱穴から推定される主軸方向は、N-49°-Wである。想定される残存規模は長軸4.7m、短軸2.5mである。セクションから判断される壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは約14cmである。壁溝は確認できなかった。南東コーナー付近から床面の硬化部分が検出された。床面からは、炉1基とピット5基が確認された。炉は住居や北西寄りから検出されたが、大半が調査区外になるため平面形・覆土等は不明である。ピットは、主柱穴と思われるもの（P1・P2）が2基、貯蔵穴と思われるもの（P3）が1基で、性格不明のものが2基である。ピットの床面からの深さは、P1が39cm、P2が42cmである。また、貯蔵穴と思われるP3は南東壁際から検出され、平面形は長軸60cm、短軸50cmの楕円形を呈し、深さは12cmである。その他のピットの深さは、33cm～43cmである。竪穴住居覆土は焼土粒と炭化粒を含む暗茶褐色土が主体である。

出土遺物は少なく、図示可能なものは2点のみであった。このうち1は貯蔵穴と思われるP3から出土している。1は鉢で、口縁部の一部を欠いているほか、ほぼ完形である。口径11.6cm、底径2.6cm、器高4.6cmで、丸みを帯びた器形を呈している。外面内面ともに丁寧にミガキが施され、赤彩されている。2は甕の口縁部片である。外面内面ともにハケ調整の後ナデが施されている。外面の口唇部付近にススが付着している。このほか口縁部外面の一部には、布の圧痕が認められる。

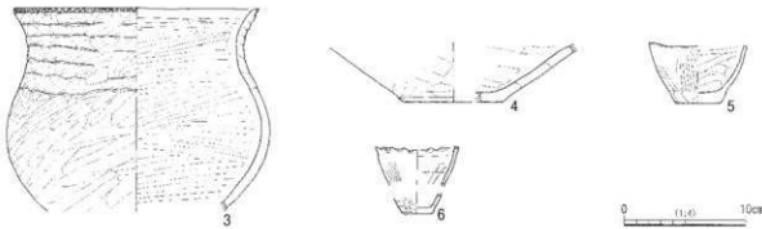
#### SI-012（第77図、図版6）

47AG-49・59、47AH-30・31・40・41・50・51グリッドに所在する。炉とピット1基が検出されたのみで、竪穴住居範囲としたものは暗褐色土の範囲である。暗褐色土の範囲は長軸3.7m、短軸3.6mを測り、隅丸方形状の平面形を示す。なお、この平面形に基づく主軸方向は、N-60°-Wである。炉は竪穴住居や北西寄りから検出され、平面形は長軸74cm、短軸58cmの不整円形を呈する。断面の形状や覆土の状態は不明である。ピットは、竪穴住居南東寄りから性格不明のもの（P1）が1基検出された。ピットの床面からの深さは20cmで、入口ピットの可能性も考えられる。

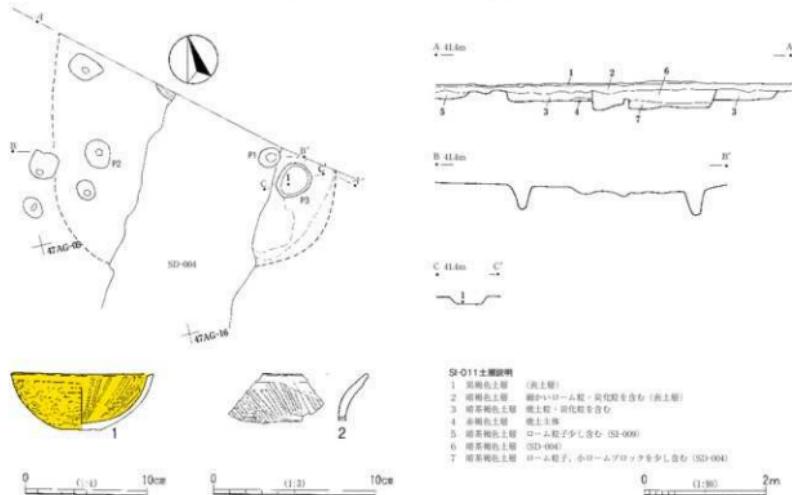
遺物は出土しなかった。

#### SI-013（第78図、図版6・22・25）

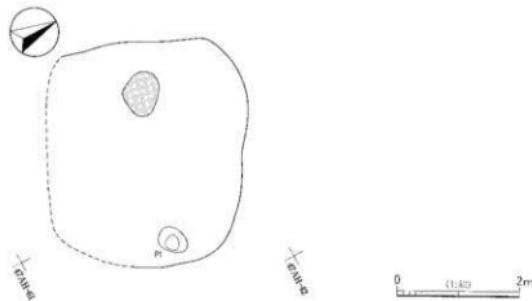
47AG-25～29・35～38・44～48・54～58・65・66グリッドに所在する。調査段階で竪穴住居跡として番号が付けられたものであるが、明確な住居平面プランや規則性のあるピット列等は認められない。ここでは調査段階の所見に従い、竪穴住居跡の項目で取り扱うこととする。SD-005とSK-007と切り合うが、出土遺物から本遺構の方が古いものと判断した。検出された遺構はピット25基のみで、炉などの施設は認められない。ピットの深さは22cm～74cmと様々である。なお、遺物が出土したP1の深さは30cmである。遺



第75図 SI-010出土遺物（2）



第76図 SI-011と出土遺物



第77図 SI-012

構覆土の状態等は不明である。

図示した遺物は4点で、このうち2~3がP1からの出土である。また、3はP1の覆土上層からの出土である。1・2は壺である。1は口縁部片で、復元口径は14.0cmである。折り返した口唇部は無紋で、外面内面ともにナデが施されている。2も壺口縁部片で、壺状の器形が想定される。復元口径は12.0cmで、外面内面ともにナデが施されている。内面に種子または植物の茎と思われる圧痕が認められる。3・4は甕である。3は口縁部から胴上部が50%程度遺存している。口縁部は受け口状を呈し、口径は8.0cmである。外面はハケ調整の後ヘラナデ、内面はヘラナデが施されている。また、外面の口縁部と胴部中央付近にススの付着が認められる。4は口縁部片である。復元口径は16.0cmである。外面はハケ調整の後ミガキ、内面はハケ調整の後ナデが施され、外面にはススの付着が認められる。

#### SI-014 (第79図、図版6)

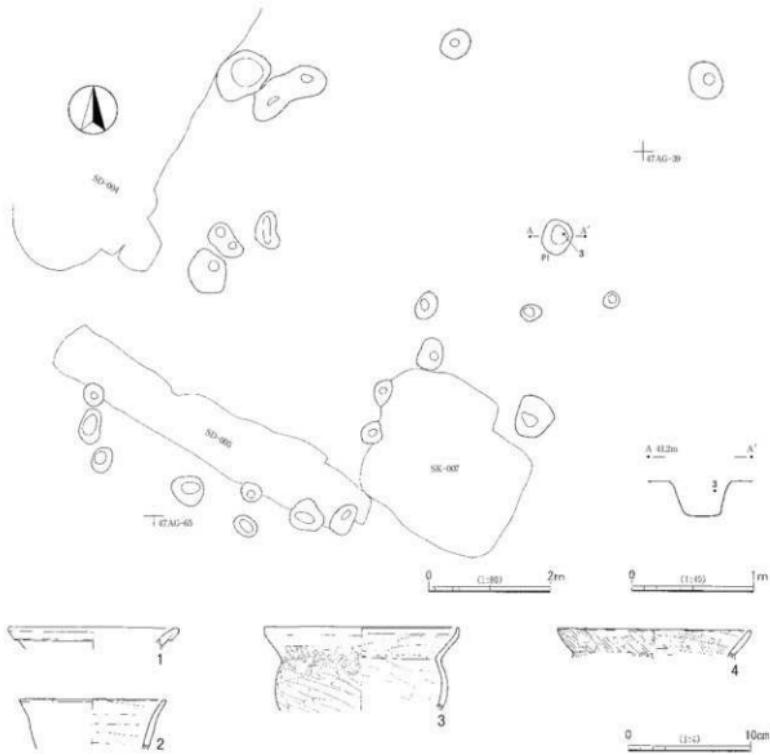
48AG-25・26・34~36・44~46・55・56グリッドに所在する。壁及び床の一部、炉、ピットのみが検出された。北東部分に残存する壁と床の範囲から、平面形は楕円形が想定される。主軸方向は、N-48°-Wである。規模は長軸4.8m、短軸3.5mで、残存する壁は僅かに立ち上がり、検出面から床面までの深さは約6cmである。壁が残存している部分からは、壁溝は確認できなかった。床面の東半分のはば全域が硬化しており、壁の残存していた周辺のみがやや柔らかかった。検出された内部施設は、炉1基とピット4基である。炉は中央やや北西寄りから検出され、長軸44cm、短軸35cmの楕円形をなし、掘り込みは浅く約3cmであるが底面は熱を受けて硬化している。ピット4基は検出位置に偏りがあり、主柱穴とするには問題がある。床面からの深さは、P1が40cm、P2が17cm、P3が12cm、P4が15cmで、浅く一定していない。遺構の遺存状態が悪いため、堅穴住居覆土の内容や堆積状況は不明である。

遺物は時期不明の土器器細片が出土したのみで、図示可能なものはなかった。

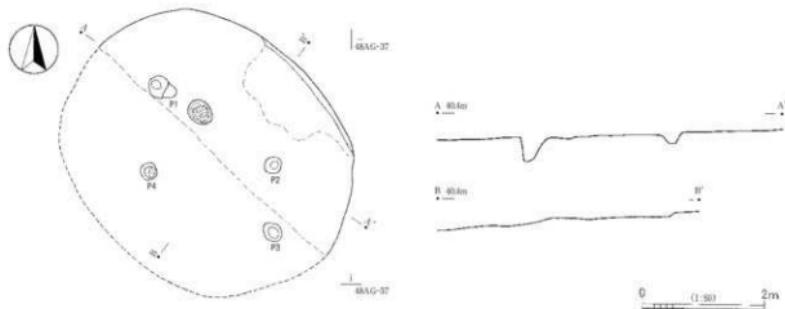
#### SI-015 (第80図、図版7・25)

47AF-87・88・96~98、48AF-07グリッドに所在する。斜面部のため南北側の壁は検出できなかった。平面形は長方形を呈し、主軸方向は、N-37°-Wである。残存規模は長軸3.2m、短軸2.8mである。壁は緩やかに立ち上がり、検出面から床面までの深さは約17cmである。壁溝は確認できなかった。床はそれほど堅緻ではなく、床面からはピット2基が検出されたのみで、炉は検出されなかった。ピットは堅穴住居北東壁際から2基が重なり合って検出された。床面からの深さは、北側のものが36cm、南側のものが35cmである。性格等は不明である。また、主柱穴に相当するようなピットは確認できなかった。堅穴住居覆土は黒褐色土と暗黄褐色土からなり、堆積状態はレンズ状を呈する。

出土遺物は少なく図示した可能なものは細片3点のみで、いずれも覆土中からの出土である。1は壺口縁部片で、復元口径は10.0cmを測る。折り返し部分には粘土紐の接合部分が認められ、ハケ調整の後ナデが施され、内面はナデが施されている。外面には赤彩の痕跡が残るもの、赤彩範囲は明確ではない。2・3は鉢である。2は口縁部片で、胴部がやや丸みを帯びる器形が想定される。外面はハケ調整、内面はハケ調整の後ナデが施されている。3は鉢と判断される。底部は完形で、底径は3.0cmである。外面内面とともにミガキが施されている。



第78図 SI-013と出土遺物



第79図 SI-014

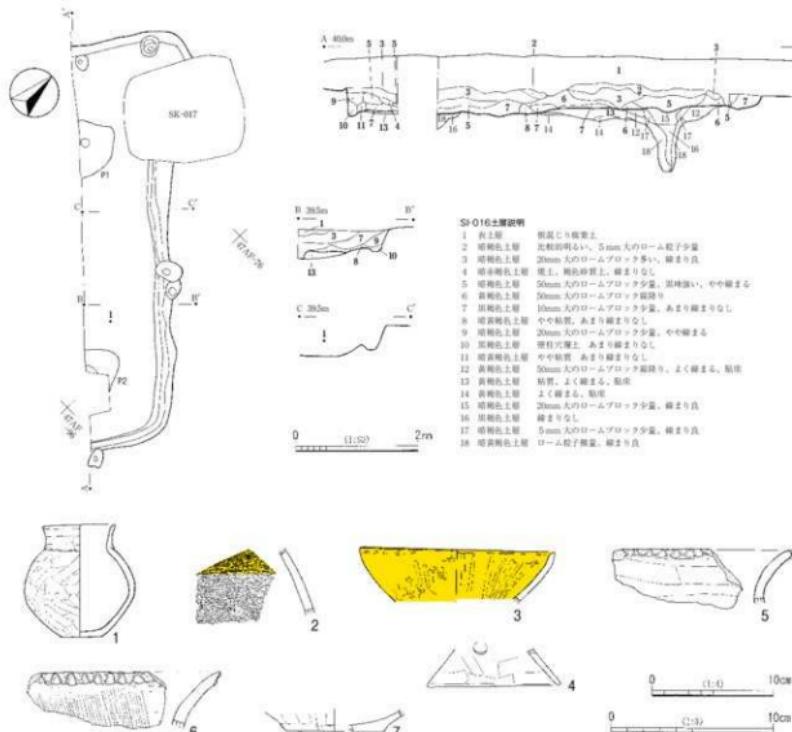
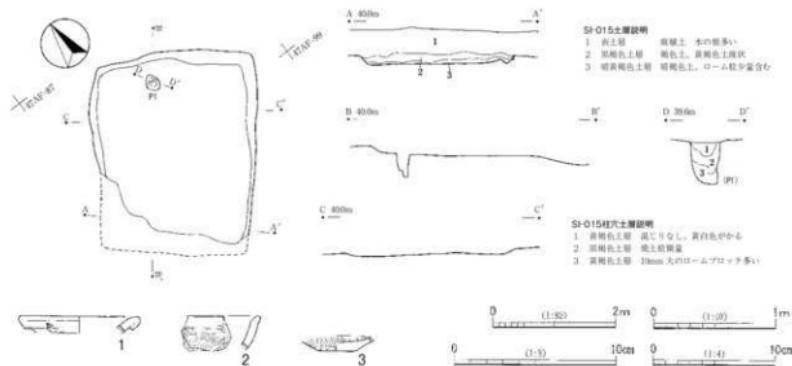
### SI-016 (第81図、図版7・22・25)

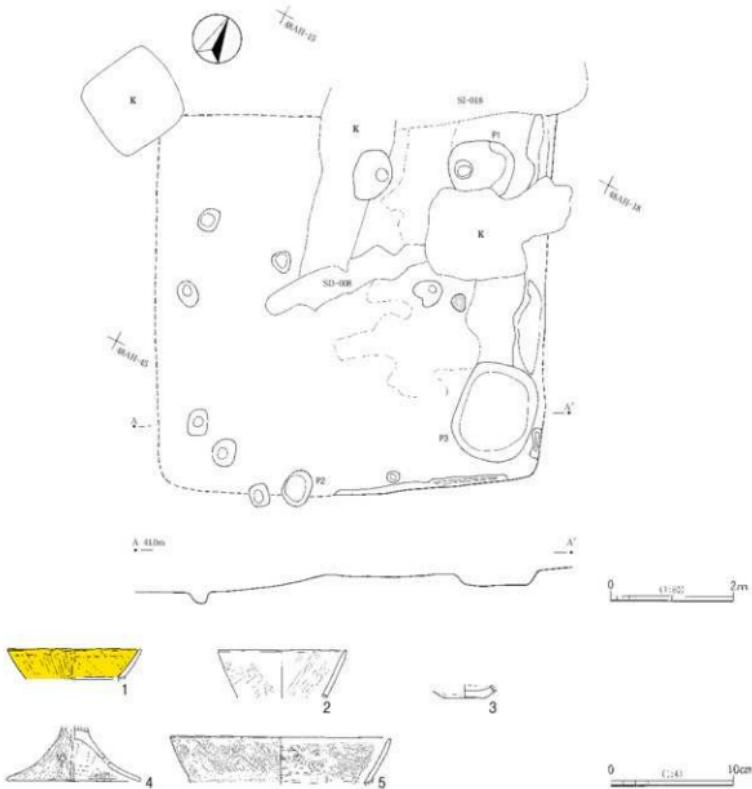
47AF-63~65・74~76・85・86・96グリッドに所在し、調査範囲の南西側に位置するため、堅穴住居の4分の1ほどを調査したのみとなった。北側コーナー付近を中・近世の土坑SK-017に切られている。平面形は方形を呈し、主軸方向はN-47°-Wである。残存する規模は、長軸6.9m、短軸1.5mで、壁は垂直に近く立ち上がり、検出面から床面までの深さは約40cmである。北コーナー付近を除いて壁溝が検出された。主柱穴の内側は貼床が施されている。床面からは、ピット7基が確認された。調査範囲から炉は検出されなかった。検出されたピットは、主柱穴(P1・P2)が2基と壁柱穴と思われるものが5基である。ピットの床面からの深さは、P1が86cm、P2は底面まで調査ができなかった。壁柱穴と思われる5基のピットは、7cm~56cmの深さがあり一定せず、検出箇所も等間隔ではなく、ばらついている。住居覆土はロームブロックを含む暗褐色土ないし黒褐色土が主体で、各土層がブロック状に堆積した状態やロームブロックを含有している所見から、人為的な埋め戻しが行われた可能性が考えられる。また、貼床部分はロームブロックを含んだ黄褐色土が主体で、堅く締まっている。

図示した遺物は7点で、1が覆土中層から出土したほかは、覆土中からの一括出土である。1・2は壺である。1は完形で、口径6.0cm、底径3.3cm、器高9.2cmを測る。底部は小さく、胴部が球形化し、口縁部は直立する器形である。頸部と胴部の境に輪積み痕を1段残す。外面は底部近くがヘラケズリ、胴部より上位がヘラナデ、内面はナデが施されている。なお、土器内の土を持ち帰り、箋別作業を行ったが、種子等は発見されなかった。2は胴上部の破片で、網目状撚糸文が施され、施文部分を除き赤彩されている。外面内面はナデが施されている。3は鉢の口縁部片で、口縁部の20%程度が残る。器形はやや丸みを帯びた胴部が想定される。復元口径は16.0cmである。外面はハケ調整の後ミガキ、内面はミガキが施され、外面内面ともに赤彩されている。二次的に熱を受け、器面が変色している部分がある。このほか外面口縁部付近にイネの圧痕が認められる。4は高杯脚部片で、透かし孔が1か所認められ、復元脚径は11.0cmを測る。外面内面ともに二次的に熱を受け、器面が荒れている。また破断面の多くが摩滅・風化している。外面内面ともにヘラナデが施されている。5~7は甕である。5は口縁部片で、口唇端部には押捺列が巡る。粘土の盛り上がり状態から、棒状工具を用いて最初に口唇上部を押捺し、後に押捺列の間を埋めるように口唇下部に押捺を加えたことが確認できる。また、口唇下部には押捺をしていない部分も認められる。外面内面ともにナデが施され、外面にはススが付着している。6も口縁部片で、口唇端部には押捺列が巡る。粘土の盛り上がり状態から、棒状工具を用いて5とは逆に最初に口唇下部を押捺し、後に押捺列の間を埋めるように口唇上部に押捺を加えたことが確認できる。外面内面ともにハケ調整の後ナデが施されている。7は底部の25%程度が遺存している。復元底径は8.0cmを測る。外面はヘラナデ、内面はナデが施されている。また、内面にはコゲの付着が認められる。

### SI-017 (第82図、図版22・25・26)

48AH-06・07・15~17・24~28・34~38・45~47グリッドに所在する。西側半分ほどの壁は削平により未検出であるが、平面形は方形を呈すると考えられる。主軸方向は、N-15°-Wである。隣接するSI-018と切り合うが、セクションの観察から本遺構の方が古いものと判断される。また、中・近世の溝SD-008に切られている。このほか搅乱が多く、遺構の遺存状態は悪い。残存する規模は長軸5.9m、短軸3.6mで、壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは約20cmである。壁が残存している部分からは、途切





第82図 SI-017と出土遺物

れながらも壁溝が認められる。竪穴住居東側から部分的に床の硬化が確認できた。床面からは、炉とピット12基が確認された。炉は中央やや北東寄りから検出され、長軸27cm、短軸18cmの楕円形をなし、掘り込みは浅く約4cmで小規模である。検出されたピットは、主柱穴と思われるもの(P1)が1基と貯蔵穴(P2)1基、性格不明のものが10基である。P1は規模から考えて主柱穴と想定したが、対をなすものは確認できなかった。ピットの床面からの深さは55cmである。P3は東コーナー付近から検出されたもので、長軸157cm、短軸126cmで、断面は逆台形をなし、深さは23cmを測る。貯蔵穴と考えられる。その他のピットは、不規則な位置から検出され、深さも11cm~60cmと様々である。竪穴住居覆土はローム粒を少量含む暗褐色土が主体であるが、堆積状態は不明である。

図示した遺物は5点で、4がP2から出土したほかは、覆土中からの出土である。1~3は壺である。1は口縁部片で、壺状の器形が想定される。復元口径は11.0cmで、外面はヘラナデの後ミガキ、内面はナデが施されている。外面内面ともに赤彩されている。2も口縁部片で、器形は壺状を呈すると思われる。

復元口径は10.6cmで、外面はハケ調整の後ミガキ、内面はナデの後ミガキが施されている。二次的に熱を受けて色調が変化している部分がある。3は底部のみ完形で、小型の壺が想定される。底径は3.2cmである。外面はヘラケズリ、内面はナデが施されている。4は高坏で、脚部の90%程度が残る。脚端部径は11.0cmで、透かし孔が3か所認められる。外面はミガキ、内面はハケ調整の後ナデが施されている。5は甕口縁部片である。復元口径18.0cmである。外面内面ともにハケ調整が施されている。頸部破断面の観察から、土器形成後頸部を補強するために、内外両側から粘土を継ぎ足したことが見て取れる。

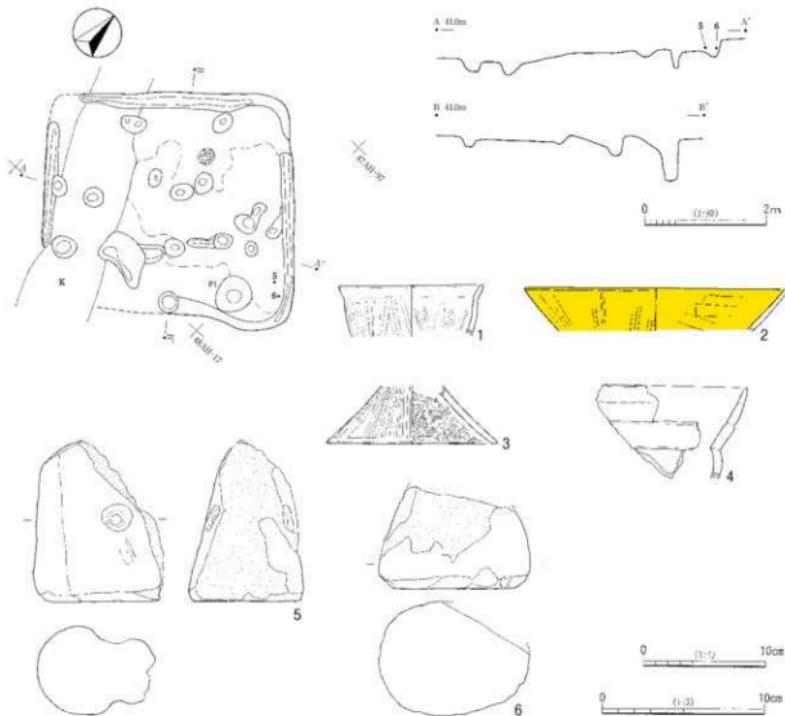
#### SI-018 (第83図、図版7・22・23・26)

47AH-95~97、48AH-04~07・15・16グリッドに所在する。平面形は方形を呈し、主軸方向は、N-43°-Wである。隣接するSI-017と切り合うが、セクションの観察から本遺構の方が新しいものと判断される。規模は長軸4.1m、短軸3.9mで、壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは約16cmである。壁溝はコーナー部分を除いた部分から検出された。竪穴住居中央部から東側にかけて、床が踏み固めにより硬化している。床面からは、炉とピット20基が確認された。炉は中央やや北東寄りから検出され、長軸28cm、短軸24cmの円形をなし、掘り込みは浅く小規模である。検出されたピットのうち、P1は長軸66cm、短軸56cmで、断面は逆台形をなし、深さは45cmを測る。検出された位置や規模から考えて貯蔵穴と考えられる。その他のピットは性格不明で、深さも10cm~28cmと様々である。竪穴住居覆土はローム粒を少量含む暗褐色土が主体であるが、堆積状態は不明である。

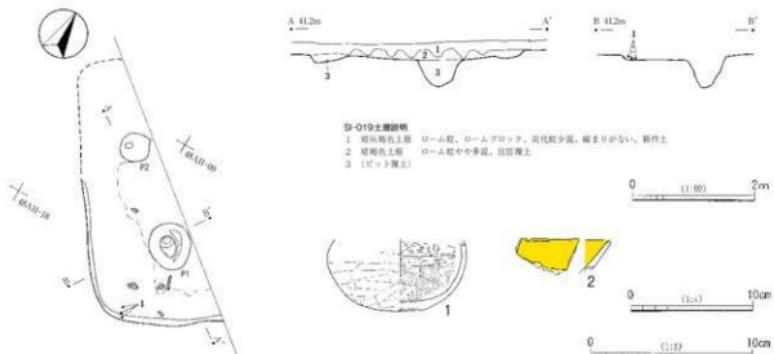
図示した遺物は6点で、5と6は東コーナー付近の床面上直上から出土したほかは、覆土中からの出土である。1は鉢の口縁部片で、口縁部の50%程度が残る。口径は11.8cmで、胴部の丸みが少なく、器高が比較的高い器形が想定される。外面内面ともにナデの後ミガキが施されている。2・3は高坏である。2は坏部の破片で、復元口径は21.6cmである。坏部が直線的に開くタイプが想定される。外面はミガキ、内面はナデの後ミガキが施され、外面内面ともに赤彩されている。二次的に熱を受けて色調が変化している部分がある。3は脚部で、40%程度が残る。復元脚端部径は14.0cmで、外面はミガキ、内面はハケ調整が施されている。4は甕口縁部片としたが、肩部に丸みがあることから壺型の壺の可能性もある。口縁部には輪積み痕が3段残り、外面はナデ、内面はハケ調整が施されている。5・6は鳥帽子型の支脚で、本来は3点で一対をなすものである。5には持ちやすくするための指係りのくぼみがある。また、くぼみ周辺は表面の剥落が著しい。5は底部長径10.7cm、短径9.4cm、高さ13.2cm、6は底部長径12.4cm、短径9.4cmである。

#### SI-019 (第84図、図版7・23・26)

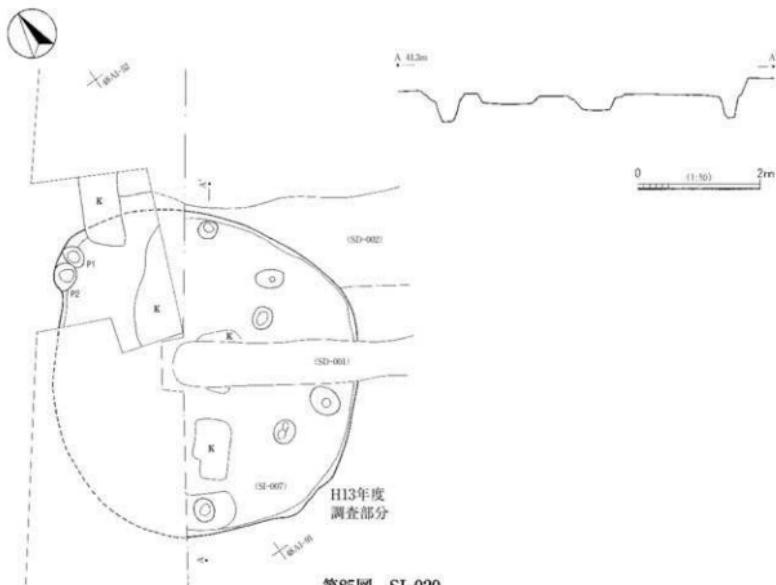
47AH-97・98、48AH-08・09・18・19グリッドに所在し、調査範囲の南東側に位置するため、竪穴住居の4分の1ほどを調査したのみとなった。平面形は方形が想定され、主軸方向は、N-30°-Wである。残存する規模は長軸3.2m、短軸1.8mで、壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは約12cmである。壁溝は検出されなかった。主柱穴周辺部分から竪穴住居中央部にかけて、床が踏み固めにより硬化している。床面からは、ピット2基が確認されたが、炉は検出されなかった。検出されたピットのうち、P1は主柱穴と考えられ、床面からの深さは51cmである。また、P2は主柱穴の可能性もあるものの、検出位置から別用途を想定した方が良いと考えられる。深さは36cmである。床面から炭化材が出土しているこ



第83図 SI-018と出土遺物



第84図 SI-019と出土遺物



第85図 SI-020

とから、堅穴住居廃絶後、廃材等の焼却が行われていた可能性が高い。覆土はローム粒を多く含む暗褐色土が主体で、堆積状態は不明である。

出土遺物は少なく図示可能な遺物は2点のみであった。このうち1は南コーナー部分の床面直上から破片がまとまって出土した。また、2は覆土中からの出土である。1は壺で、壺状の器形が想定される。胴中央部以下が完形で、底径は3.4cmを測る。外面はヘラケグリの後ナデ、内面はハケ調整の後ナデが施されている。内面胴部中央付近に粘土接合痕が認められる。2は高壺の壺口縁部片である。外面内面ともにミガキが施され、赤彩されている。外面にイネの圧痕が1か所見られる。

#### SI-020（第85図、図版7）

48AI-51・60・61グリッドに所在する。既存道路下に当たり、狭小な範囲での調査となった。隣接する平成13年度調査区から検出されたSI-007の一部と考えられる。平面形は円形を呈し、主軸方向は、N-31°-Eである。平成13年度調査部分を含めた規模は、長軸5.8m、短軸4.9mで、壁は斜めに立ち上がり、検出面から床面までの深さは約18cmである。壁溝は検出されなかった。今回調査分の床面からは、ピット2基が確認されたのみで、床面からの深さは、P1が22cm、P2が35cmであった。性格等は不明である。堅穴住居覆土の内容や堆積状況は不明である。なお、前回調査部分報告書によると、床面付近の覆土は暗褐色土であったとの記載が見られる。

今回調査部分からは遺物が出土しなかった。また、前回報告書においても、掲載可能な遺物は出土しなかった。

## 2 土坑

土坑は、36基検出された（遺構番号に枝番を付けたものを含む）。出土遺物の多くが古墳時代前期の土師器であったが、周辺からの混入品である可能性が高い。古墳時代前期の土師器以外に中世陶器や銭貨が出土した土坑（SK-007・009・012・016・019・024・025）もあり、多くが中・近世に属するものと思われる。

### SK-001（第86・120図、図版28）

46AF-50・51・60・61グリッドに所在する。SI-004と重複するが、覆土の状態から本遺構の方が新しいものと判断される。平面形は、長軸231cm、短軸166cmの橢円形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、検出面からの深さは15cmで、ほぼ平坦な底面の中央東寄りから、ピットが1基検出された。ピットの深さは底面から36cmである。土坑覆土は締まりのない暗褐色土が主体で、底面近くにはロームブロックを多く含む暗茶褐色土が見られる。

遺物は古墳時代前期土師器の小破片が少量出土したほか、第120図11に示した軽石製品のみであった。

### SK-002（第87図）

46AE-59・69、46AF-50グリッドに所在し、SK-001の西側で並ぶように検出された。平面形は、長軸132cm、短軸125cmの円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、底面は中心部に向かって擂鉢状にくぼみ、断面はU字型をなす。検出面から床面までの深さは26cmである。土坑覆土は締まりのない黒褐色土が主体で、底面近くにはロームブロックを少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物は古墳時代前期土師器の小破片が少量出土したのみで、図示可能な遺物はなかった。

### SK-003（第88図）

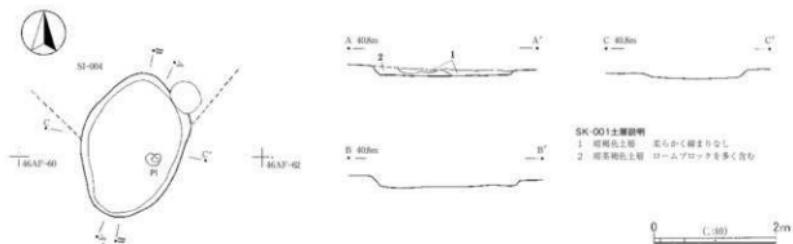
46AF-49、46AG-40・50グリッドに所在する。SD-002とSD-003に挟まれた位置から検出された。平面形は、長軸124cm、短軸123cmの円形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は箱形をなす。検出面から床面までの深さは36cmである。土坑覆土は締まりのない暗褐色土が主体で、底面近くにはロームブロックを少量含む暗茶褐色土が堆積している。

遺物は古墳時代前期土師器の小破片が少量出土したのみで、図示可能な遺物はなかった。

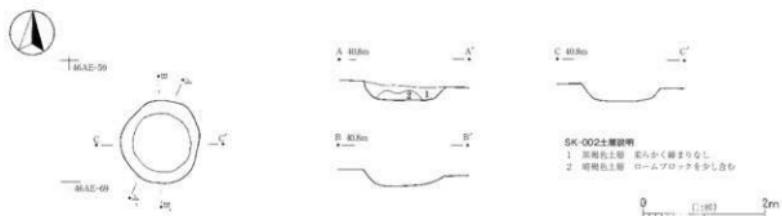
### SK-004（第89図、図版26）

46AF-95・96、47AF-05・06グリッドに所在する。古墳時代前期の竪穴住居跡SI-008と重複するが、覆土の状態から本遺構の方が新しいものと判断される。また、溝状遺構SD-003とも重複するが、新旧関係は判然としない。平面形は、長軸192cm、短軸176cmの不整円形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は逆台形をなす。検出面から床面までの深さは42cmである。土坑覆土はロームブロックを含む暗褐色土と暗茶褐色土で、堆積状態はレンズ状を呈している。

遺物は古墳時代前期土師器の小破片が僅かに出土したのみで、図示可能なものは2点であった。いずれも覆土中からの出土であるが、SI-008からの流れ込みの可能性が高い。1は鉢口縁部片で、胴部の丸みが少なく、器高が比較的高い器形が想定される。外面内面ともにミガキが施され、赤彩されている。2は甕



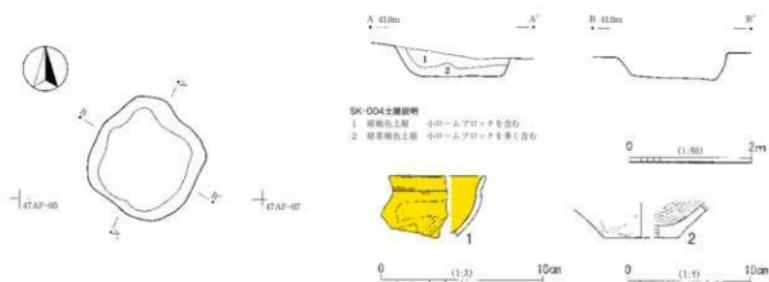
第86図 SK-001



第87図 SK-002



第88図 SK-003



第89図 SK-004と出土遺物

底部の30%程度が残っている。外面はヘラナデ、内面はミガキが施されている。また、内面にはコゲの付着が認められる。

#### SK-005（第90図）

47AG-29・39、47AH-20・30グリッドに所在する。平面形は、長軸176cm、短軸128cmの橢円形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は箱形をなす。検出面から床面までの深さは49cmである。土坑覆土は黒褐色土とロームブロックを僅かに含む暗褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。

出土遺物はなかった。

#### SK-006（第91図）

47AH-70・71・80・81グリッドに所在する。平面形は、長軸198cm、短軸130cmの橢円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面はU字型をなす。検出面から床面までの深さは49cmである。土坑覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土と茶褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。遺物は土師器の細片が僅かに出土したのみで、図示可能な遺物はなかった。

#### SK-007A・B・C・D（第92図、図版23・26・27）

47AG-46・47・56～59・67～69グリッドに所在する。4基の土坑がまとまって検出された。このうちSK-007AとSK-007Bが重複し、SK-007CとSK-007Dが重複している。新旧関係はSK-007AとSK-007Bでは、セクションの観察からSK-007Aの方が新しく、SK-007CとSK-007Dの新旧関係は不明である。

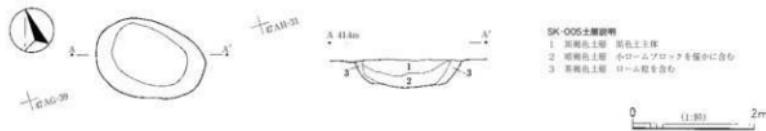
SK-007Aの平面形は、長軸224cm、短軸205cmの長方形を呈し、壁は垂直に近く立ち上がり、底面は中央部に向かってやくほみ、断面はU字型をなす。検出面から床面までの深さは56cmである。土坑覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。

SK-007Bの平面形は、長軸372cm、短軸178cmの方形を呈し、壁は斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は箱形をなす。検出面から床面までの深さは30cmである。土坑覆土はロームブロックを含む黄褐色土の單層である。

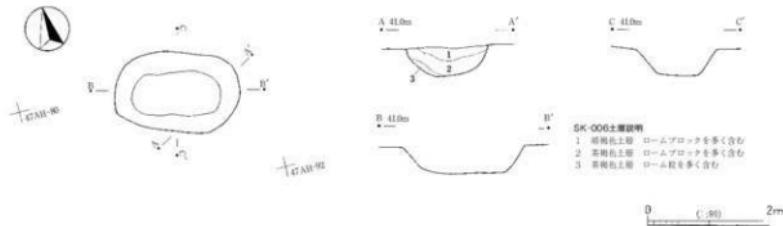
SK-007Cの平面形は、長軸210cm、短軸166cmの方形を呈し、壁は垂直に近く立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は箱形をなす。検出面から床面までの深さは48cmである。土坑覆土はロームブロックを含む黄褐色土であるが、堆積状態等は不明である。

SK-007Dの平面形は、残存する長軸242cm、短軸100cmの方形を呈し、壁は斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は箱形をなす。検出面から床面までの深さは51cmである。土坑覆土はロームブロックを含む黄褐色土であるが、堆積状態等は不明である。

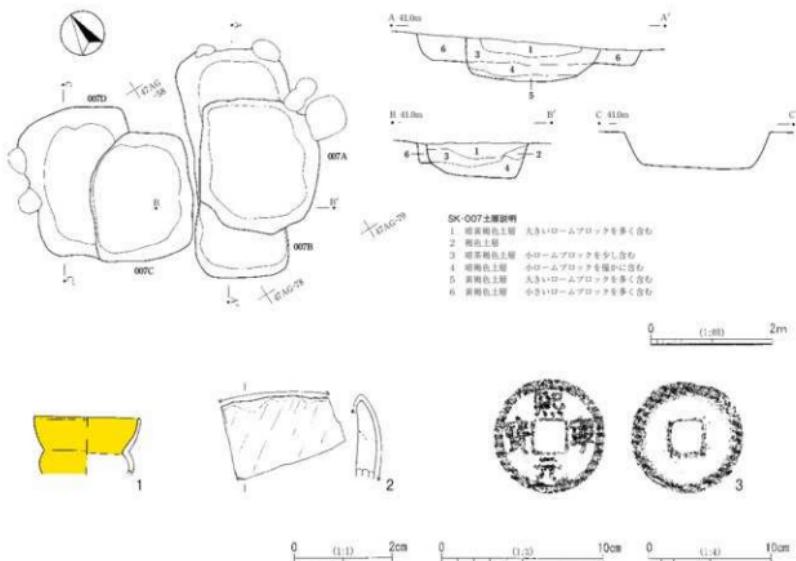
図示可能な遺物は3点で、いずれも覆土中からの一括資料であり、4基の土坑のうちいずれの構造に帰属するものは不明である。このほか図示できなかったが、古墳時代前期土師器と渥美系陶器の小破片が少量出土したほか、白色流紋岩質凝灰岩製の砥石が出土している。1は土師器壺の口縁部から胴上部にかけての破片で、全体の40%程度が残る。口径は88cmである。壺型を呈するもので、外面内面ともにナデが施され、外面全体と内面口縁部が赤彩されている。2は渥美系陶器の壺破片で、砥石に転用されている。破断面の一部と外面が使用により摩滅している。3は北宋銭の「熙寧元寶」である。書体は真書で、初鋤



第90図 SK-005



第91図 SK-006



第92図 SK-007A・B・C・Dと出土遺物

年は熙寧元年（1068年）である。

#### SK-008A（第93図）

SK-008AとSK-008Bは、検出された地点も離れており、本来独立した遺構番号を付けて報告すべきものである。しなしながら、発掘調査段階での遺構番号との整合性を保つため、本報告においても旧来の番号を使用することとした。

SK-008Aは、47AH-62・63グリッドに所在する。平面形は、長軸148cm、短軸145cmの円形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は逆台形をなす。検出面から床面までの深さは33cmである。土坑覆土の内容や堆積状況は不明である。

遺物は弥生時代終末期から古墳時代前期の甕と炉器台の細片が僅かに出土したのみで、図示可能な遺物はなかった。

#### SK-008B（第93図）

47AG-76・77・86・87グリッドに所在する。平面形は、長軸218cm、短軸155cmの長方形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は皿状をなす。検出面から床面までの深さは13cmである。土坑覆土の内容や堆積状況は不明である。

遺物は出土しなかった。

#### SK-009（第94図）

47AG-66・75・76グリッドに所在する。平面形は、長軸190cm、短軸54cmの長方形を呈する土坑に、長軸74cm、短軸40cmの長方形を呈する土坑が接続した形態をとる。本来2基の遺構であった可能性も考えられる。壁は垂直に近く立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は箱形をなす。検出面から床面までの深さは39cmである。土坑覆土の内容や堆積状況は不明である。

遺物は中・近世陶磁器の細片が僅かに出土したのみで、図示可能なものはなかった。

#### SK-010（第95図）

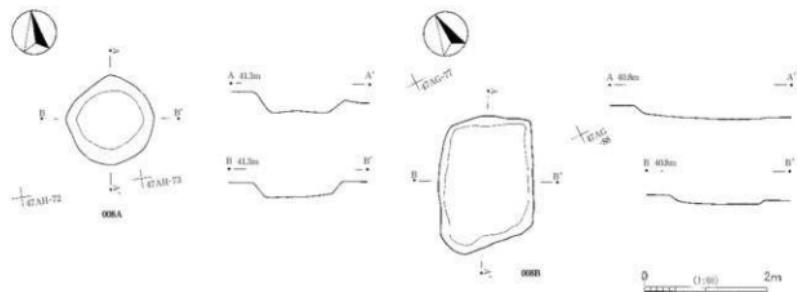
47AG-67・68・77・78グリッドに所在する。平面形は、長軸90cm、短軸62cmの不整形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、ピット状で断面はV字型をなす。検出面から床面までの深さは77cmである。土坑覆土の内容や堆積状況は不明である。

遺物は時期不明の土師器の細片が僅かに出土したのみで、図示可能なものはなかった。

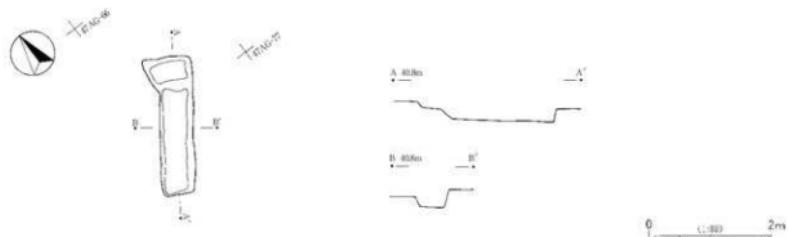
#### SK-011（第96図、図版7）

48AH-20・21・30・31グリッドに所在する。平面形は、長軸210cm、短軸120cmの長方形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は箱形をなす。検出面から床面までの深さは25cmである。土坑覆土は、焼土粒と炭化粒を少量含む單一層である。

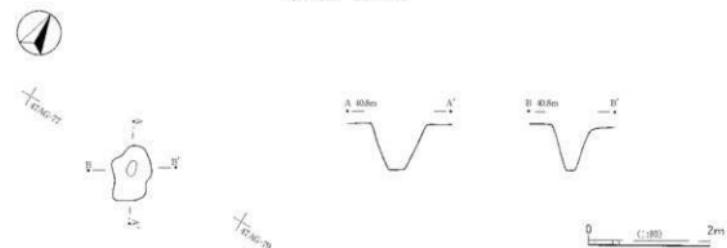
遺物は古墳時代前期土師器の細片が僅かに出土したのみで、図示可能なものはなかった。



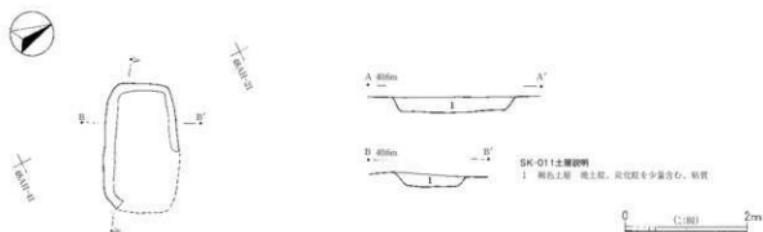
第93図 SK-008A・B



第94図 SK-009



第95図 SK-010



第96図 SK-011

#### SK-012 (第97図、図版7・8・26)

48AG-83・84・93グリッドに所在する。SD-006と重複するが、セクションの観察からSD-006の方が新しいものと判断される。また、SK-013Bと一部が重複するが、新旧関係は不明である。残存する平面形は、長軸216cm、短軸162cmの隅丸方形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は逆台形をなす。検出面から床面までの深さは23cmである。土坑覆土はロームブロックを多く含む褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。

図示可能なものは1点のみで、底面から若干浮いた状態で出土している。このほかは古墳時代前期土師器の細片が僅かに出土したのみである。1は石鍋である。全体の30%程度が残り、復元口径は21.0cmを測る。胴上部に鈎が作り出され、口縁部には孔が1か所認められる。外面にはススが著しく付着している。石材は透閃石岩と推定されるが、形態も含めこれまでのところ類例が認められることから、生産地や製作年代は不明である。

#### SK-013A・B (第98図、図版8)

47AG-72・73・83・83グリッドに所在する。2基の土坑がまとまって検出された。SK-013AとSK-013Bでは、セクションの観察からSK-013Aの方が新しい。また、SK-013BとSK-012とは一部が重複するが、新旧関係は不明である。

SK-013Aの平面形は、長軸210cm、短軸60cmの方形を呈し、壁は垂直に近く立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は箱形をなす。検出面から床面までの深さは26cmである。土坑覆土はロームブロックを含む褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。

SK-013Bの平面形は、長軸215cm、短軸175cmの方形を呈し、壁は垂直に近く立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は箱形をなす。検出面から床面までの深さは58cmである。底面の南寄りから、ピットが1基検出された。底面からの深さは、3cmである。土坑覆土はロームブロックを含む褐色土と黒褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。

遺物はいずれの土坑からも古墳時代前期土師器の細片が僅かに出土したのみで、図示可能なものはなかった。

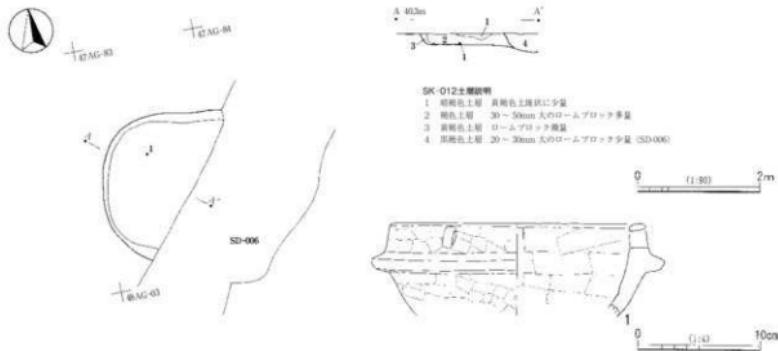
#### SK-014 (第99図、図版8・27)

47AF-58・59・67～69グリッドに所在する。平面形は、長軸290cm、短軸172cmの長方形を呈する。壁はやや斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は箱形をなす。検出面から床面までの深さは72cmである。土坑覆土は、ロームブロックを含む暗黃褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。

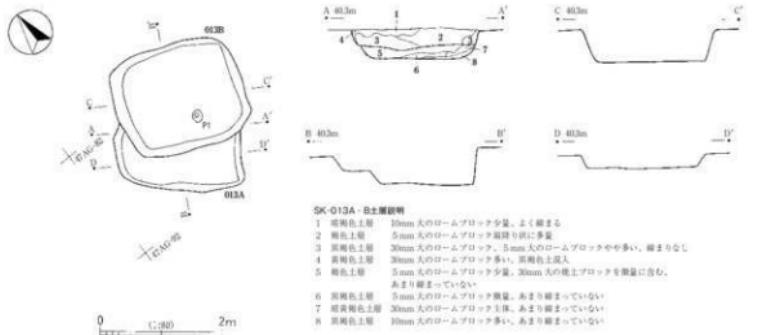
図示可能なものは1点のみで、覆土中層から出土している。このほかは古墳時代前期土師器の細片が僅かに出土した以外に、白色流紋岩質凝灰岩製の砥石が出土したのみである。1は鉄製品で、釘状のものが3点錆により付着した状態を示す。

#### SK-015 (第100図、図版8)

47AF-47・48グリッドに所在する。平面形は、長軸118cm、短軸96cmの楕円形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は皿形をなす。検出面から床面までの深さは19cmである。底面の南寄



第97図 SK-012と出土遺物



第98図 SK-013A・B



第99図 SK-014と出土遺物

りから、ピットが2基検出された。底面からの深さは、P1が14cmでP2が38cmである。土坑覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。

遺物は古墳時代前期土師器の細片が僅かに出土したのみで、図示可能なものはなかった。

#### SK-016 A・B・C（第101図、図版8）

47AF-36・45～47・55～57グリッドに所在する。3基の土坑が重複して検出された。セクションの観察から、SK-016C、SK-016B、SK-016Aの順で新しく構築されたことがわかる。

SK-016Aは、残存長軸168cm、短軸158cmの方形を呈し、壁はやや斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は逆台形をなす。検出面から床面までの深さは39cmである。底面の北東寄りから、ピットが1基検出された。底面からの深さは、15cmである。土坑覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。

SK-016Bは、残存長軸175cm、短軸126cmの長方形を呈し、壁はやや斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は逆台形をなす。検出面から床面までの深さは38cmである。底面の東寄りから、ピットが1基検出された。底面からの深さは、21cmである。土坑覆土はロームブロックを含む黄褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。

SK-016Cの平面形は、長軸170cm、短軸160cmの方形を呈し、壁はやや斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は箱形をなす。検出面から床面までの深さは39cmである。底面の北寄りから、ピットが1基検出された。底面からの深さは、35cmである。土坑覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。

遺物はいずれの土坑からも古墳時代前期土師器の細片が僅かに出土したのみで、図示可能なものはなかった。

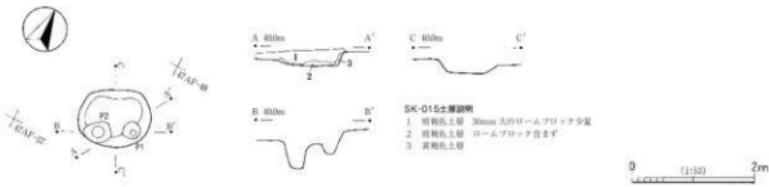
#### SK-017（第102図、図版7・26）

47AF-64・65・74・75グリッドに所在する。SI-016と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は、長軸196cm、短軸160cmの方形を呈する。壁は垂直に近く立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は箱形をなす。検出面から床面までの深さは60cmである。土坑覆土は、ロームブロックを含む暗黄褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。

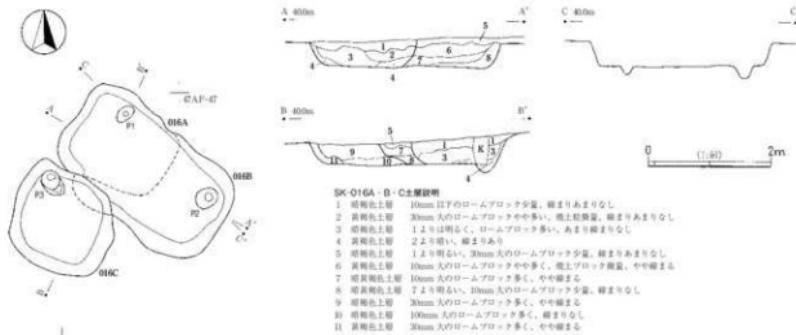
図示可能なものは2点のみで、覆土中層から出土している。SI-016からの流れ込みである可能性が高い。このほかは古墳時代前期土師器の細片が若干出土したのみである。1・2は土師器甕底部片である。1の底部は完形で、底径は5.8cmである。外面はヘラケズリ、内面はナデが施され、外面にはスヌの付着が認められる。2は底部の60%程度が残り、底径は6.0cmである。外面はヘラケズリが施されるが、内面底部は使用による摩耗が著しく、調整等は不明である。

#### SK-018（第103図、図版8）

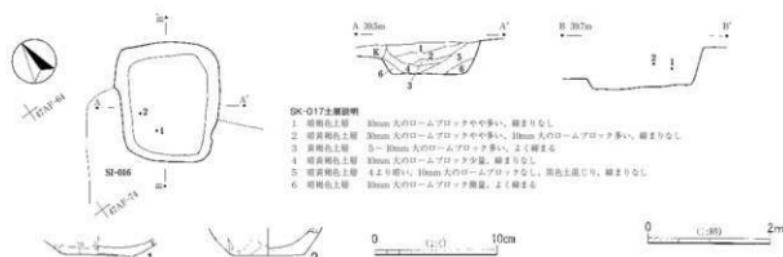
47AF-24・34・35グリッドに所在する。平面形は、長軸182cm、短軸145cmの方形を呈する。壁は垂直に近く立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は箱形をなす。検出面から床面までの深さは31cmである。土坑覆土は、ロームブロックを含む黄褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。



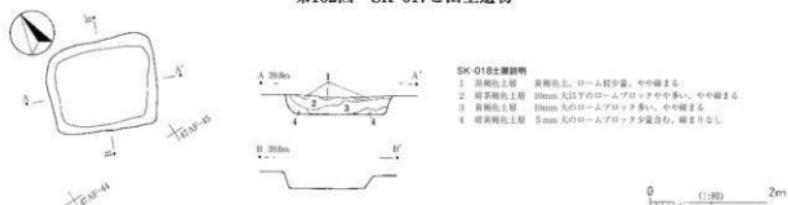
第100図 SK-015



第101図 SK-016A・B・C



第102図 SK-017と出土遺物



第103図 SK-018

遺物は古墳時代前期土師器の細片が僅かに出土したのみで、図示可能なものはなかった。

#### SK-019（第104図、図版8・26）

47AF-43・53グリッドに所在する。平面形は、長軸162cm、短軸138cmの方形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は皿状をなす。検出面から床面までの深さは15cmである。土坑覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土と焼土粒・炭化粒を含む黄褐色土からなり、堆積状態はレンズ状を呈している。

図示可能なものは1点のみで、覆土中からの出土である。このほかは古墳時代前期土師器と中・近世陶器の細片が若干出土したのみである。1は瀬戸・美濃系陶器の擂鉢である。外面内面ともに鉄軸が施釉されている。

#### SK-020（第105図、図版9）

47AF-23・24グリッドに所在する。平面形は、長軸97cm、短軸74cmの円形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、断面はU字型をなす。検出面から床面までの深さは39cmである。土坑覆土は、炭化材を多く含む黒褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。

遺物は出土しなかった。

#### SK-021（第106図、図版9）

47AE-18・28グリッドに所在する。SK-022、SK-023と重複するが、セクションの観察から、本遺構の方が新しいと判断される。残存長軸125cm、短軸103cmの梢円形を呈し、壁はやや斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は逆台形をなす。検出面から床面までの深さは36cmである。土坑覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。

遺物は弥生土器と古墳時代前期土師器の細片が僅かに出土したのみで、図示可能なものはなかった。

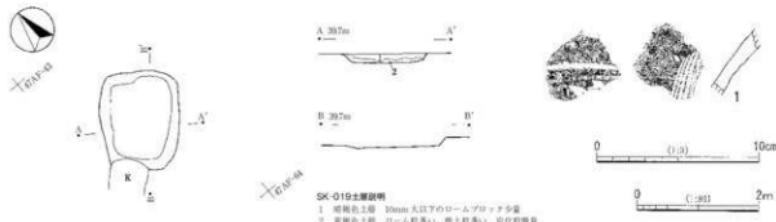
#### SK-022（第106図、図版9）

47AE-18・19グリッドに所在する。SK-023の床面精査時に検出されたもので、SK-021、SK-023と重複するが、セクションの観察から、本遺構の方が古いと判断される。残存長軸175cm、短軸105cmの梢円形を呈し、壁は僅かに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は皿状をなす。検出面から床面までの深さは23cmである。底面の東寄りから、ビットが1基検出された（P1）。底面からの深さは、35cmである。土坑覆土の内容や堆積状況は不明である。

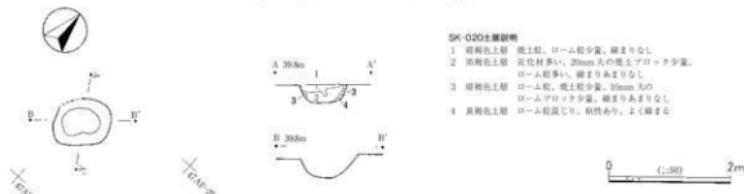
遺物は古墳時代前期土師器が僅かに出土したのみで、図示可能なものはなかった。

#### SK-023（第106図、図版9）

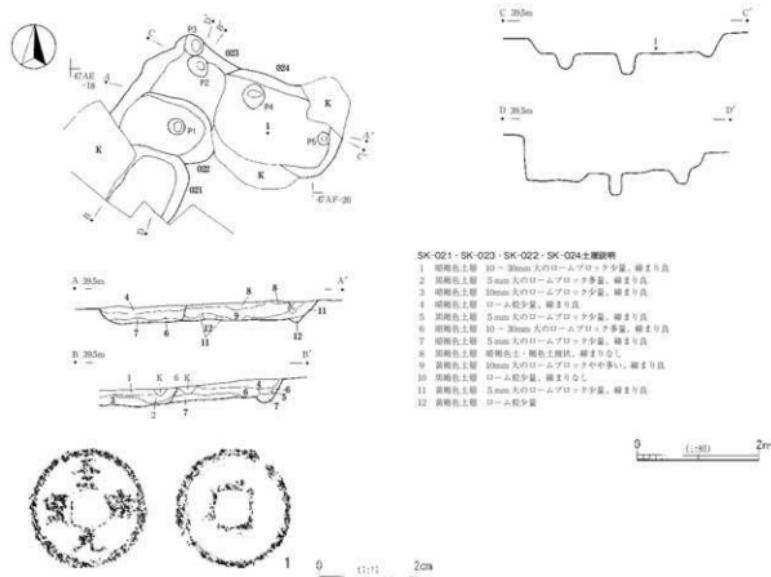
47AE-08・09・18・19グリッドに所在する。SK-021、SK-022、SK-024と重複する。セクションの観察から、本遺構はSK-022、SK-024より新しく、SK-021より古いと判断される。残存長軸135cm、短軸97cmの不整形を呈し、壁は斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は逆台形をなす。検出面から床面までの深さは25cmである。底面の北寄りから、ビットが2基検出された（P2・P3）。底面からの深さは、P2が18cmで、P3が22cmである。土坑覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を



第104図 SK-019と出土遺物



第105図 SK-020



第106図 SK-021・022・023・024と出土遺物

呈している。

遺物は古墳時代前期土師器が僅かに出土したのみで、図示可能なものはなかった。

#### SK-024 (第106図、図版9・27)

47AE-19、47AF-10グリッドに所在する。SK-023と重複するが、セクションの観察から、本遺構の方が古いと判断される。残存長軸213cm、短軸138cmの長方形を呈し、壁は斜めに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は逆台形をなす。検出面から床面までの深さは29cmである。底面の北寄りと東寄りから、ピットが検出された (P4・P5)。底面からの深さは、P4が40cmで、P5が12cmである。土坑覆土はロームブロックを含む黄褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。

図示可能なものは1点のみで、床面から若干浮いた状態で出土した。このほかは、古墳時代前期土師器が僅かに出土したのみである。1は北宋銭の「景德元寶」である。初鋤年は景德2年（1005年）である。

#### SK-025 (第107図、図版9)

46AE-97・98、47AE-07・08グリッドに所在する。SK-026と重複するが、セクションの観察から、本遺構の方が新しいと判断される。平面形は、長軸232cm、短軸172cmの長方形を呈し、壁は垂直に近く立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は箱形をなす。検出面から床面までの深さは102cmである。土坑覆土はロームブロックを含む淡褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。

遺物は古墳時代前期土師器と中・近世陶器が僅かに出土したのみで、図示可能なものはなかった。

#### SK-026 (第107図、図版9)

46AE-96・97、47AE-06・07グリッドに所在する。SK-025と重複するが、セクションの観察から、本遺構の方が古いと判断される。平面形は、長軸256cm、短軸174cmの長方形を呈し、壁は垂直に近く立ち上がり、底面はほぼ平坦で、断面は箱形をなす。検出面から床面までの深さは59cmである。底面南西寄りからピットが3基検出された (P1・P2・P3)。底面からの深さは、P1が12cmで、P2が12cmで、P3が13cmである。土坑覆土はロームブロックを含む暗黄褐色土が主体で、堆積状態はレンズ状を呈している。

遺物は古墳時代前期土師器細片が僅かに出土したほか、白色流紋岩質凝灰岩製の砥石が出土したのみで、図示可能なものはなかった。

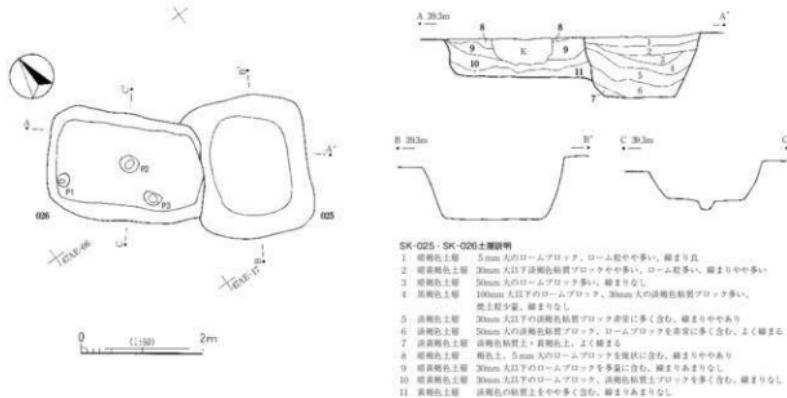
#### SK-027 (第108図)

47AH-80・81・90グリッドに所在する。平面形は、長軸160cm、短軸126cmの長方形を呈する。壁は僅かに立ち上がり、断面は皿状をなす。検出面から床面までの深さは10cmである。土坑覆土の内容や堆積状況は不明である。

遺物は出土しなかった。

#### SK-028 (第109図)

47AH-81・91グリッドに所在する。残存する長軸78cm、短軸74cmで、平面形は長方形を呈する。壁は垂直に近く立ち上がり、断面は箱形をなす。検出面から床面までの深さは6cmである。土坑覆土の内容や



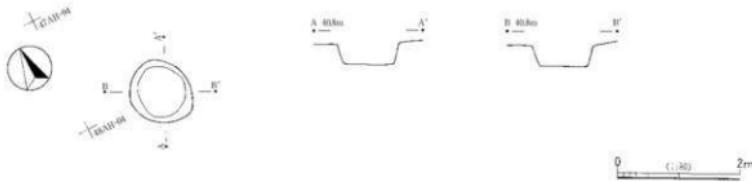
第107図 SK-025・026



第108図 SK-027



第109図 SK-028



第110図 SK-029

堆積状況は不明である。

遺物は出土しなかった。

#### SK-029 (第110図)

47AH-94・48AH-04グリッドに所在する。平面形は、長軸110cm、短軸98cmの円形を呈する。壁は垂直に近く立ち上がり、断面は箱形をなす。検出面から床面までの深さは36cmである。土坑覆土の内容や堆積状況は不明である。

遺物は出土しなかった。

### 3 溝状遺構

溝状遺構は9条検出された（遺構番号に枝番を付けたものを含む）。遺構は北東から南西に向かっているもの（SD-001・002・003・004・008）、北西から南東に向かっているもの（SD-005A・B）、コの字型・L字型に曲がるもの（SD-006・007）に大別することができるが、いずれの溝状遺構も土地を区画する機能を有していたものと考えられる。

#### SD-001 (第111図)

45AE、46AE、45AF、46AFグリッドに所在する。斜面に沿うように北東から南西に向かって検出された。残存する溝の長さは15.2m、幅は120cmである。断面形は緩いU字形で、検出面からの深さは23cmである。覆土はロームブロックを含む暗茶褐色土が主体をなし、レンズ状に堆積している。

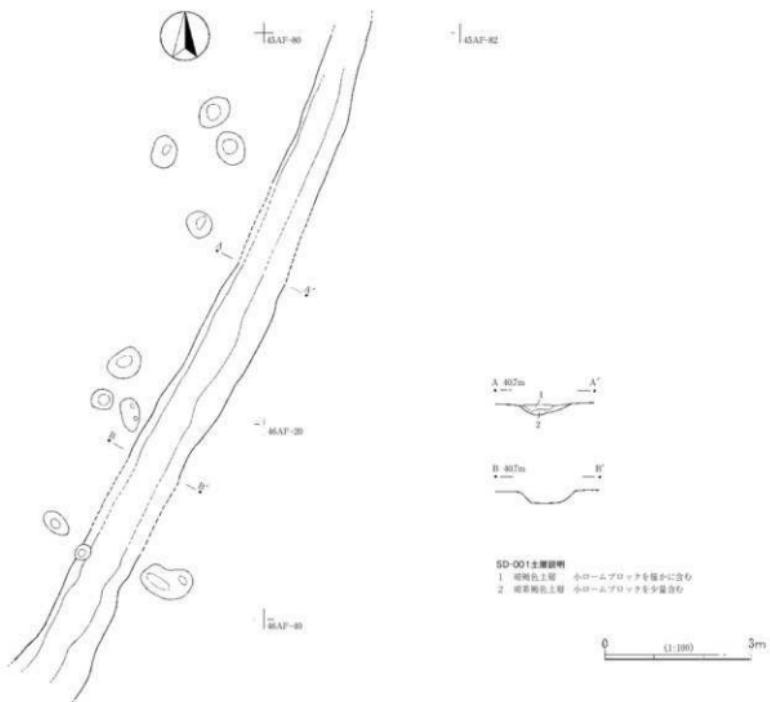
遺物は覆土中から、中・近世陶磁器と瓦が出土したが、細片のため実測できるものはなかった。

#### SD-002 (第112図、図版9)

46AF、46AGグリッドに所在する。SD-002とSD-003は並行している。斜面に沿うように北東から南西に向かって延び、古墳時代前期の竪穴住居跡SI-007を切っている。SD-002とSD-003は、同一の性格を持つ遺構で、一体のものと考えられる。検出された長さは8.7mで、幅は最も広い部分で120cmである。断面形は逆台形で、検出面からの深さは33cmである。溝底面にはやや大型のビットが不規則に並び、溝壁面には小型のビットが列状に並んでいる。柵ないし樹木痕跡であろうか。覆土の内容や堆積状況は不明である。遺物は覆土中から、古墳時代前期土師器が出土したが、細片のため実測できるものはなかった。

#### SD-003 (第112図、図版9・23)

46AF、47AF、46AGグリッドに所在する。SD-002とSD-003は並行している。斜面に沿うように北東から南西に向かって延び、古墳時代前期の竪穴住居跡SI-008を切っている。また、土坑SK-004とも重複するが、新旧関係は判然としない。SD-002とSD-003は、同一の性格を持つ遺構で、一体のものと考えられる。また、SD-003も2条の溝が重なった形状を呈しており、本遺構とSD-002を合わせて3条の溝で構成されていたと思われる。検出された長さは13.4mで、幅は最も広い部分で310cmである。断面形は逆台形で、検出面からの深さは52cmである。溝底面にはやや大型のビットが不規則に並ぶほか、溝壁面と溝延長線上には小型のビットが列状に並んでいる。柵ないし樹木痕跡の可能性が考えられる。覆土の内容や堆



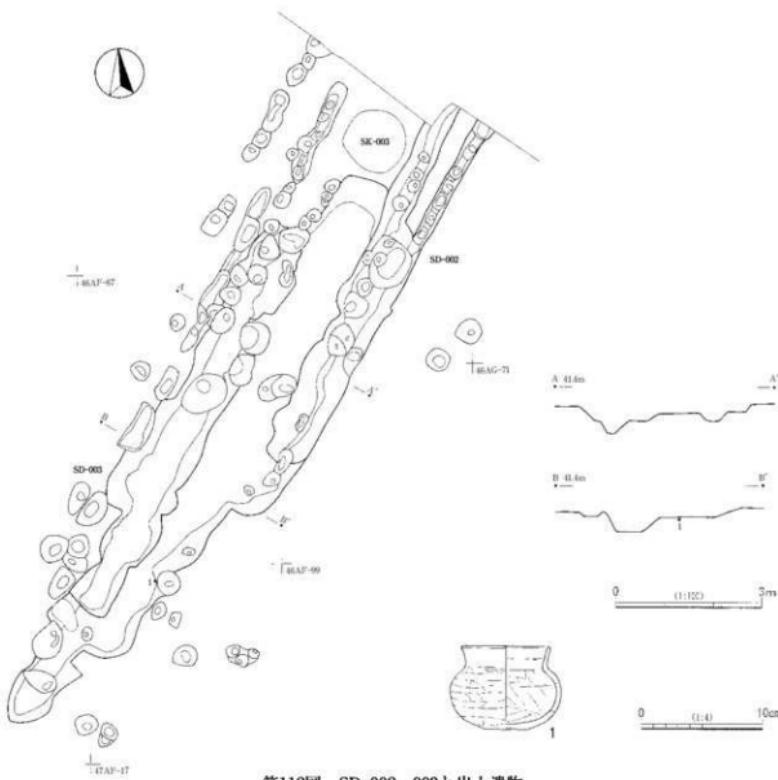
第111図 SD-001

積状況は不明である。

遺物は溝底面付近から1が出土している。竪穴住居跡SI-008の混入遺物の可能性も考えられる。このほか、覆土中から近・現代の陶磁器が出土した。1は培型の壺で、全体の70%程度が残っている。口径7.2cm、底径3.4cm、器高6.8cmで、外面はハケ調整の後ヘラナデ、内面はナデが施されている。また、外面肩部には布の圧痕が見られる。

#### SD-004（第113図、図版9）

46AG、47AGグリッドに所在する。斜面に沿うように北東から南西に向かって検出された。古墳時代前期の竪穴住居跡SI-011を切っている。残存する溝の長さは10.5m、幅は155cmである。断面形は皿状で、検出面からの深さは11cmである。北西側溝壁面には小型のビットが列状に並び、さらに北西側にも溝に並行して同様のビット列が検出された。柵ないし樹木痕跡の可能性が考えられる。また、南西端部付近には、長軸50cm～70cm、短軸40cm～60cm、深さ11cm～14cmの小型で長方形のビットが3基検出された。溝覆土はローム粒・ロームブロックを含む暗茶褐色土の単純層である。



第112図 SD-002・003と出土遺物

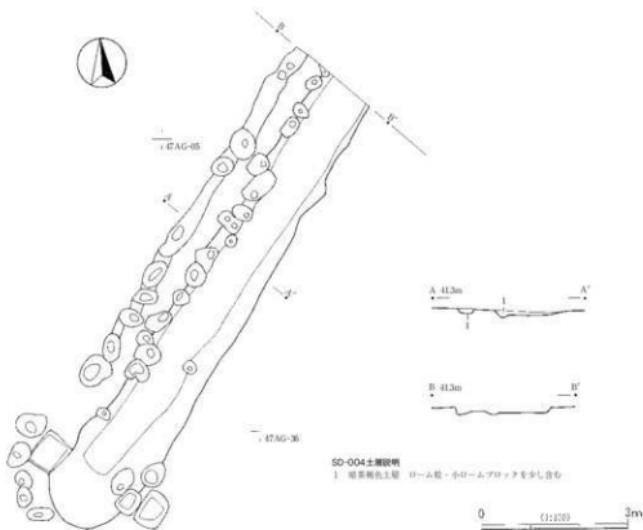
遺物は覆土中から、近世瓦質土器が出土したが、細片のため実測できるものはなかった。

#### SD-005A・B (第114・115図、図版26)

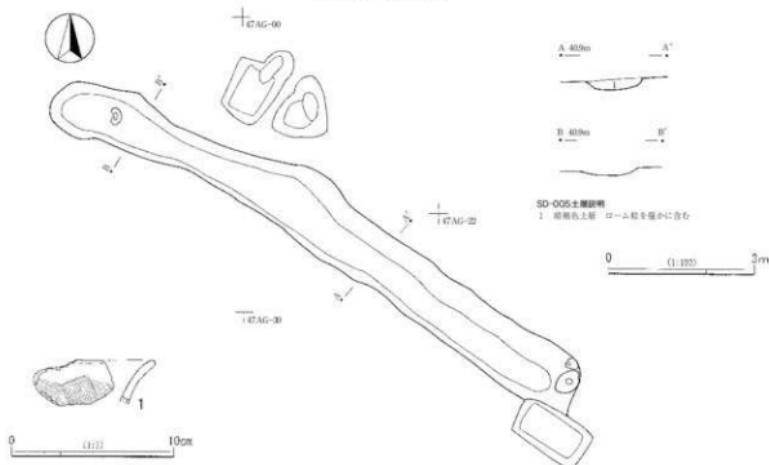
47AF、47AGグリッドに所在する。斜面等高線に沿うように北西から南東に向かって検出された。2条の溝からなり、SD-004の南西端部付近で、A・Bに分かれれる。機能的には同一のものと思われる。

SD-005Aの長さは12.3m、幅は140cmである。断面形は皿状で、検出面からの深さは19cmである。北西端部に1基(深さ29cm)、南東端部に2基(深さ12cm、29cm)のビットが検出されたほか、溝北側に長軸125cm、短軸100cm、深さ23cmの方形ビット1基と深さ11cmと38cmの2基のビットが見られる。また、南東端部には長軸160cm、短軸90cm、深さ37cmの方形ビット1基が検出された。この方形ビットは、SD-004の南西端部付近で検出された方形ビットと位置的にも主軸方向的にも類似している。溝覆土はローム粒を僅かに含む暗褐色土の単純層である。

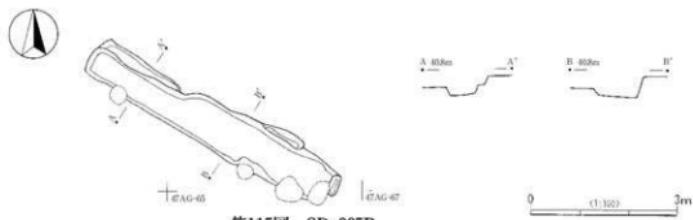
図示可能なものは1点のみで、覆土中からの出土である。このほかは、古墳時代前期土師器が僅かに出



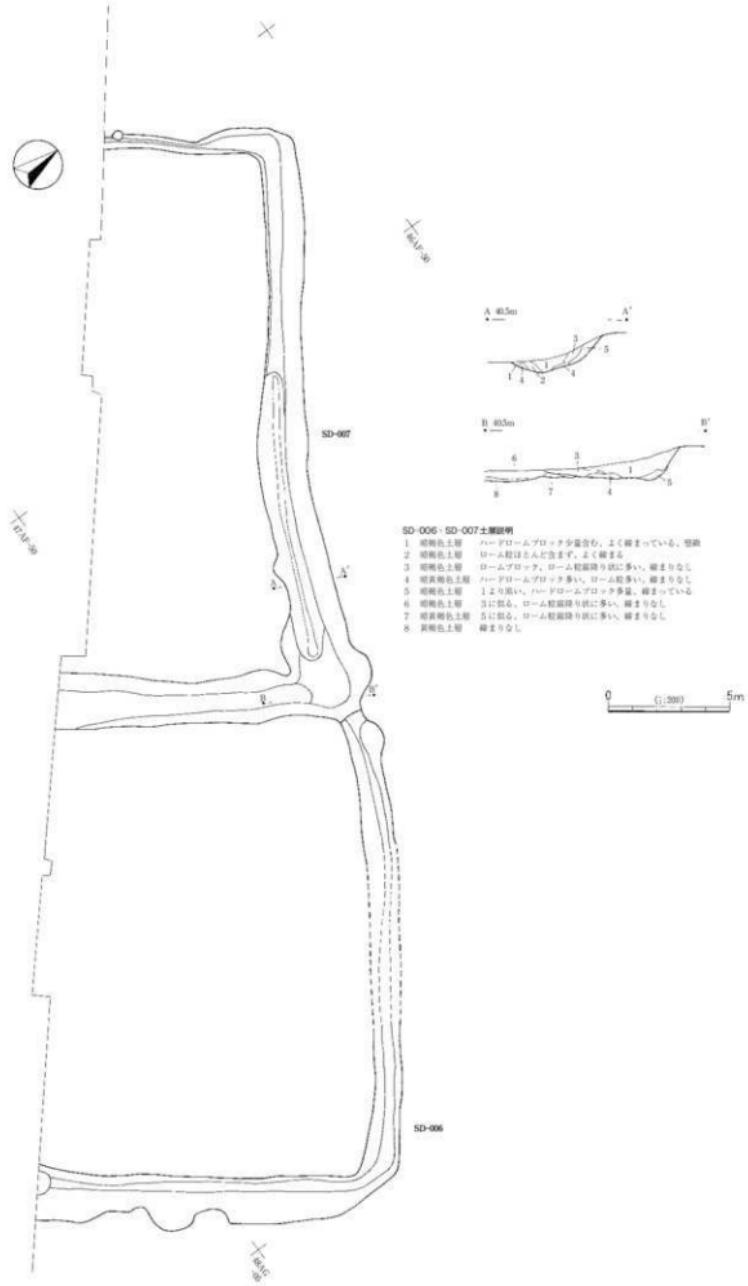
第113図 SD-004



第114図 SD-005Aと出土遺物



第115図 SD-005B





第117図 SD-008

土したのみである。1は堀口縁部片である。外面はハケ調整の後ナデ、内面はハケ調整が施されている。SD-005Bの長さは5.8m、幅は112cmである。断面形は箱形で、検出面からの深さは37cmである。北東側溝肩部に沿うように浅い溝が検出された。覆土の内容や堆積状況は不明である。

SD-005Bからの出土遺物はなかった。

#### SD-006（第116・120図、図版9・28）

47AF、47AG、48AGグリッドに所在する。コの字形に周囲を区画する溝である。北コーナー部分でSD-007と重複し、セクションの観察からSD-007の方が新しいと判断される。残存する溝の長さは45.4m、幅は230cmである。断面形は皿状で、検出面からの深さは34cmである。溝区画内の幅は18.5mである。覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

遺物は覆土中から、弥生土器、古墳時代前期土師器、鉄軸灯明皿、砥石が出土したが、図示可能なものは第120図1の火打石のみであった。

#### SD-007（第116図、図版9）

46AE、46AF、47AFグリッドに所在する。L字形に周囲を区画する溝である。南端部でSD-006と重複し、セクションの観察から本遺構の方が新しいと判断される。残存する溝の長さは30.2m、幅は210cmである。断面形は皿状で、検出面からの深さは57cmである。溝区画内の幅は22.0mである。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積している。

遺物は覆土中から、古墳時代前期土師器、近世陶磁器、白色流紋岩質凝灰岩製の砥石が出土したが、細片のため実測できるものはなかった。

#### SD-008（第117図）

48AHグリッドに所在する。古墳時代前期の堅穴住居跡SI-017の調査時に検出されたもので、SD-002、SD-003、SD-004と同様の方向性と形態をなしていることから、新たに溝として報告することとした。北東から南西に向かって延び、SI-017と重複するが、遺構の形態、同様遺構の内容から判断して、本遺構の方が新しいと判断される。残存する溝の長さは2.7m、幅は41cmである。断面形は逆台形で、検出面からの深さは29cmである。覆土の内容や堆積状況は不明である。

出土遺物はなかった。

#### 4 ピット群

##### SX-001 (第118図、図版26)

47AG、47AHグリッドに所在する。29基のピットがまとめて検出されたが、建物を構成するような規則的な配置は認められない。深さも13cm～66cmとまちまちである。それぞれのピット覆土の状態も判然としない。

図示したのものは1点のみで、このほか古墳時代前期土師器と中世陶器の細片が出土しているが、いずれの遺物もどのピットに伴うものかは不明である。1は常滑系陶器の捏鉢の口縁部片である。復元口径は30.0cmである。

#### 5 遺構外出土遺物 (第119図、図版23・27)

ここでは、グリッド等から出土した遺物および遺構の時期に伴わない遺物について掲載する。それぞれの出土場所は第119図の遺物番号の下および第20表～第23表に示した。

図示した遺物は21点である。1・2は縄文時代早期、3～5は弥生時代後期末から古墳時代初頭、6～11は古墳時代前期、12～14は古墳時代後期、15は奈良・平安時代、16～21は中・近世にそれぞれ比定される。なお、18～21は金属製品である。

1・2は縄文時代早期条痕文系土器で、いずれの胎土にも纖維が含まれている。1は外面内面ともに斜め方向の条痕が施され、2は外面では縱方向、内面では横方向の条痕が施されている。

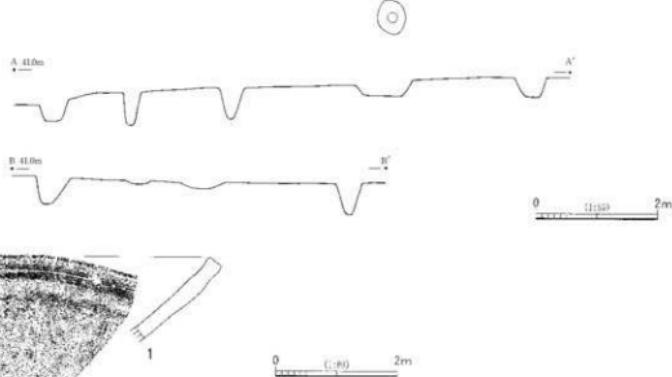
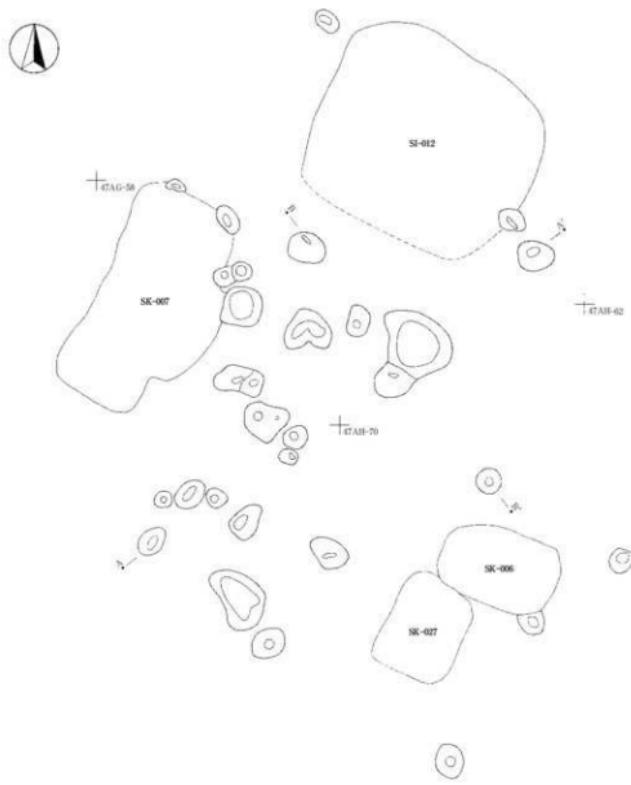
3は壺口縁部片で、口縁部の20%が残り、復元口径は14.0cmである。口縁部の折返し部分の粘土が剥がれている。口唇端部には縄文が施文され、外面はミガキ、内面はヘラナデが施されている。4・5は鉢口縁部片である。4は口縁部の折返し部分と胴上部には縄文が施され、折返し端部には縄文原体による押捺列が巡る。また、内面はミガキの後、赤彩されている。5は口唇端部に附加条縄文が施され、外面内面ともにミガキが施され、赤彩されている。

6は鉢で胴部の30%程度が残り、底径は3.0cmを測る。壺状に口縁部が開く器形が想定される。底部は上げ底ぎみで、外面内面ともにミガキが施され、赤彩されている。外面は二次的に熱を受け、器面が荒れている部分がある。7は器台の受け部片で、復元口径は9.0cmを測る。外面内面ともにナデが施され、赤彩されている。8の器種は判然としないが、特殊器台の受け部であろうか。外面内面ともにミガキが施されている。9は甕底部の30%程度が残り、復元底径は6.6cmである。外面内面ともにハケ調整が施されている。外面底部には木葉痕が認められ、葉脈の数から少なくとも2枚の葉が敷かれていたことが推定できる。10・11はミニチュア土器の甕底部で、いずれも底部は完存する。10の底径は2.6cmで、外面内面ともにナデが施されている。11の底径は4.0cmで、外面はヘラケズリ、内面はナデが施されている。

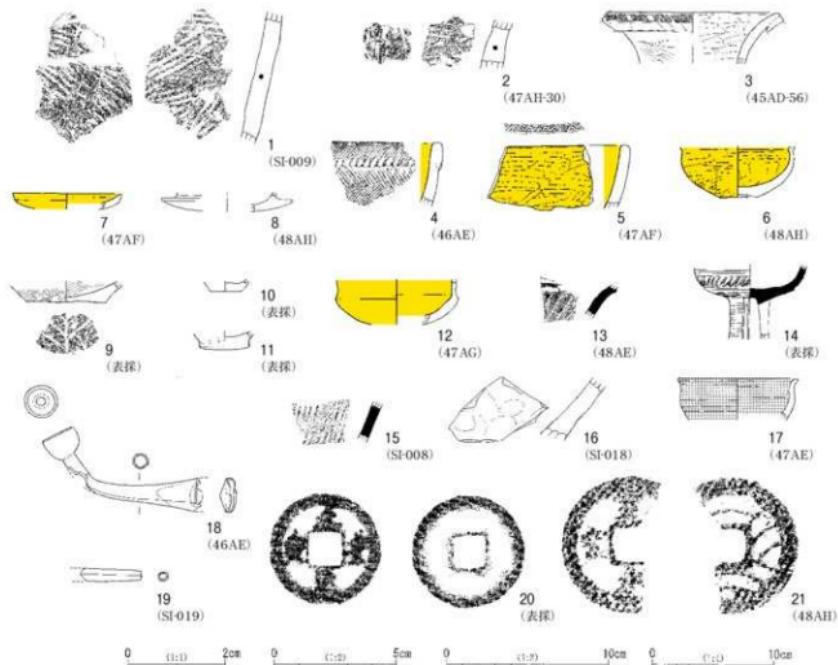
12は壺である。二次的に熱を受けたため、器面が荒れている。外面内面ともにナデが施され、赤彩されている。13は須恵器の壺または甕の頸部片で、外面には波状文が施されている。14は須恵器高壺の壺下部から脚上部にかけての破片で、壺部には櫛描波状文が、脚部には3か所方形の透かし孔が施されている。

15は須恵器甕の胴部片である。外面には平行タタキ、内面はヘラナデが施されている。

16は常滑系陶器の捏鉢で、底部に近い部分の破片である。外面には指頭痕が残り、内面は使用により摩耗している。17は瀬戸系の天目茶碗の口縁部片である。復元口径は9.8cmである。18・19は煙管である。18は雁首で、19は吸口である。20・21は銭貨である。20は北宋錢の「元豐通寶」である。初鑄年は元豐元



第118図 SX-001と出土遺物



第119図 上層遺構外出土遺物（土器類・金属製品）

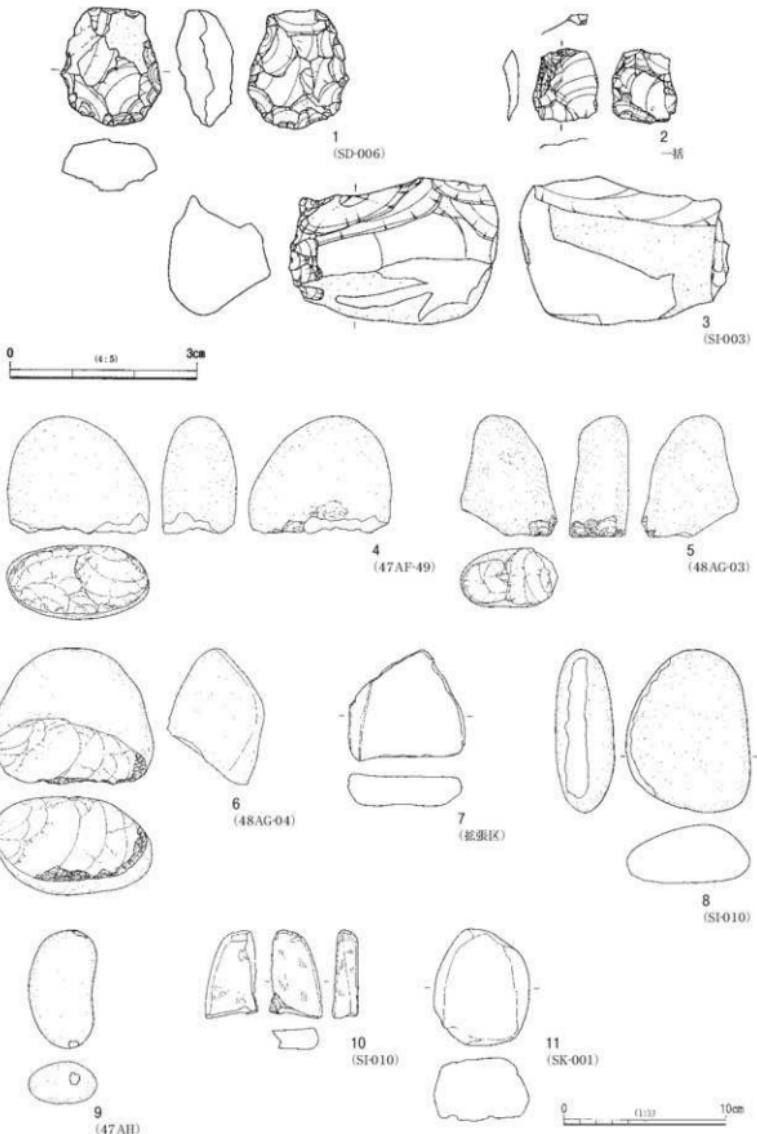
年（1078年）である。21は新「寛永通寶」の四文銭で、背文は十一波、初鑄年は明和6年（1769年）である。

#### 6 上層出土石器（第120図、図版28）

ここでは、上層調査において出土した石器について、まとめて掲載した。なお、図示したもののうち1・3・8・10・11が遺構からの出土で、そのほかのものはグリッド等からの出土である。それぞれの出土場所は第120図の遺物番号の下および第24表に示した。

1は中・近世の溝状遺構から出土した玉髓製の火打石である。直径3cmほどの円盤を素材とする。表面には求心的な剥離痕がみられ、特に全周には微細な剥離痕が認められる。2は黒曜石製の楔形石器である。薄いつくりの不定形剥片を素材とし、上下両端に微細な剥離痕が認められる。3は古墳時代の竪穴住居跡SI-003から出土した緑色凝灰岩製の石核である。原盤面を多く残し、剥離は上面及び片側縁に対し行われている。4～6はスタンプ形石器である。いずれも原盤の中位付近を打削し、平坦面を作出している。

4・5は平坦面から原盤面に対し微細な剥離で整形しているが、6は平坦面そのものに調整を施し形状を整えている。7は砂岩製の石皿である。側縁部に微細な高まりを有するが、ほぼ均一な器厚であり、ある



第120図 上層出土遺物（石器類）

いは砥石の可能性も考えられる。8・9は砂岩製の敲石である。このうち8は、弥生時代後期の堅穴住居跡SI-010から出土している。自然礫を素材とし、8は片側縁、9は上下両端に敲打痕が認められる。10は弥生時代後期の堅穴住居跡SI-010から出土したディサイト製の砥石である。欠損面以外はすべて研磨面であり、微細な研磨痕が顕著に認められる。11は中・近世の土坑SK-001から出土した軽石製品である。面的な整形が全面に対し行われている。穿孔を意図したくほみは皆無である。

第20表 捷載十器觀察表



第21表 掘載土製品觀察表

辨認番号	通稱番号	種類	基準	時期	測量 (cm) (厘米 - 1.1 倍系数)			形狀	胎土	陶成	備考
					長さ	幅	高さ				
第 30 回 5	SI-018	土製品	土器	古墳時代	13.2	10.7	9.4	褐色	砂粒、白色の骨灰質 (P)	x	鐵器時代
第 31 回 4	SI-019	土製品	土器	古墳時代	18.4	12.4	9.4	褐色	砂粒、白色の骨灰質 (P)	x	上記同様

第22表 掘載金属製品觀察表

辨認番号	通稱番号	種類	基準	時期	測量 (cm)			重量 (g)	備考	
					長さ	幅	厚さ			
第 30 回 1	SI-014	鉄製品	刀?	中世?	-	7.7	0.6	0.45	8.10	刀身部分
第 119 回 18	AS-001	鉄製品	刀?	近世	-	6.0	1.4	0.05	0.31	刀身
第 119 回 19	SI-019	鉄製品	刀?	近世	-	2.5	0.5	0.10	0.82	刀身部分

第23表 掘載銭貨觀察表

辨認番号	通稱番号	時代	基準	時期	形狀	外輪外径 (mm)		外輪内径 (mm)		内輪外径 (mm)		内輪内径 (mm)		重量 (g)	備考	
						前	後	前	後	前	後	前	後			
第 30 回 3	SI-007	平安中期	圓錐	平安	圓錐	25.8	23.7	19.6	19.7	7.8	7.8	6.3	6.5	1.25	0.65	2.67
第 120 回 1	SI-024	平安中期	圓錐	平安	圓錐	24.0	24.2	21.0	20.7	8.0	8.4	7.0	7.2	1.16	0.63	1.96
第 119 回 20	AS-001	平安	圓錐形	平安	圓錐	23.6	23.6	18.7	18.3	8.4	8.2	7.0	6.9	1.23	0.68	3.14
第 120 回 21	AS-001	平安	圓錐形	平安	圓錐	26.4	-	21.5	-	9.1	-	6.8	-	1.13	0.65	2.24

第24表 掘載石器觀察表

辨認番号	通稱番号	種類	石材	時期	最大計量 (cm)			重量 (g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
第 120 回 1	SI-006	火打石	玉髓	-	30.0	25.0	14.0	10.08	
第 120 回 2	-	火打石	青銅紅	-	2.0	16.0	4.0	1.32	
第 120 回 3	SI-003	石棒	純青石	-	37.0	52.5	36.0	72.08	
第 120 回 4	4746-49	スター?丁字形	石	-	72.5	88.0	46.0	400.61	複数
第 120 回 5	4840-03	スター?丁字形	石	-	75.0	88.0	37.0	211.89	
第 120 回 6	4840-04	スター?丁字形	石	-	83.0	98.0	57.5	582.81	
第 120 回 7	-	石棒	石	-	69.0	72.0	16.0	126.34	複数
第 120 回 8	SI-010	石棒	石	-	98.4	76.1	34.5	377.26	複数
第 120 回 9	4749	石棒	石	-	72.8	42.5	36.0	113.58	
第 120 回 10	SI-010	石棒	アマサイト	-	46.0	22.0	10.0	6.79	
第 120 回 11	SI-001	石棒	石	-	76.0	70.0	41.0	323.7	

第25表 掘載石製品觀察表

辨認番号	通稱番号	種類	石材	時期	形狀	測量 (cm) (厘米 - 1.1 倍系数)			重量 (g)	備考
						長さ	幅	高さ		
第 97 回 1	SI-012	石碑	透閃石岩	-	中 - 近世	(21.0)	-	(7.0)	16.01	共通文字

## 第3章 文脇遺跡

### 第1節 調査の概要

今回報告する調査地点は、平成23年度に千葉県教育振興財團によって調査が実施された地点（報告書既刊）に挟まれた範囲に位置する（第2図・第122図）。南北約860m、東西約1,500mに及ぶ広大な文脇遺跡の南東縁辺部に相当し、調査地点の東西両側には、幅約40m、深さ約4mの浅い谷があり、文脇遺跡の中心部分と東上泉遺跡との境をなしている。現況は宅地及び荒蕪地で、北側の宅地部分の標高は約39m、南側の荒蕪地の標高は約37mである。

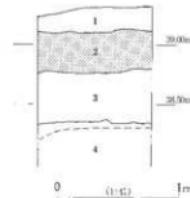
発掘調査は、令和元年度に千葉県教育委員会が実施した。遺跡コードは229-036であるが、文脇遺跡ではこれまで数次にわたる発掘調査が実施されたため、調査成果の混乱を避ける目的から調査年次ごとに枝番を付すこととしている。そのため今回の調査に当たっても枝番（8）を付け、遺跡コードを229-036（8）と表記した。

調査は、対象面積1,450m<sup>2</sup>に対して行われた。上層確認調査は、対象面積の10%程度を目途に、幅2mのトレンチを6本設定して行った。その結果、南側の荒蕪地に設定した第3～第6トレンチにおいては、発掘調査対象となる立川ローム層までの土層がすでに失われており、常緑粘土層の露出が明らかとなった。また、宅地部分に設定した第1・第2トレンチでは、立川ローム層Ⅸ層下部相当層まで削平されており、遺構は検出できなかった。このように上層確認調査においては遺構を確認することはできず、遺物も出土しなかったため、確認調査で終了することとした。

下層確認調査は、上層確認調査の結果立川ローム層が残存している宅地部分約250m<sup>2</sup>を対象に、2か所のグリッド（第1グリッド・第2グリッド）を設定して行ったが、遺物の出土が認められなかつたため、確認調査で終了することとした。

なお、図示したように今回の調査における基本土層は、第1トレンチ西側に設定した第1グリッドの土層断面を使用した（第121図）。土層の内容は次のとおりである。

- |           |  |
|-----------|--|
| 1層：表土層    | 碎石を多く含む。宅地造成時の整地層。   |
| 2層：暗褐色土層  | 赤色スコリア、黄褐色スコリアを多く含み、黒色粒子を若干含む。立川ローム層Ⅸ層に相当するものと思われる。  |
| 3層：褐色土層   | 上部は赤色スコリア、黄褐色スコリアを若干含み、黒色粒子を多く含む。下部に行くにつれて黄褐色粒子と白色粘土が見られるようになるが分層はできなかつた。立川ローム層X層に相当するものと思われる。 |
| 4層：暗黃褐色土層 | 白色粘土が斑点状に入り、粘性が強い。武藏野ローム層最上部層に相当するものと思われる。   |



第121図 文脇遺跡土層断面図



第122図 文賀遺跡確認トレンチ配置図

## 第4章 まとめ

### 第1節 旧石器時代

本遺跡では、出土層位が立川ロームX層上面～IX層にある第I文化層と、出土層位が立川ロームVII層上部～VI層にある第II文化層の2つの文化層が検出された。2つの文化層の石器群について、石材、器種、石器製作技術の関連から特徴を見ていく。

#### 第I文化層

第I文化層は、第1ブロック～第10ブロックが帰属する。石材構成は嶺岡山地産の珪質頁岩Bが主体を占め、これに安山岩、黒色頁岩、ホルンフェルス、黒色安山岩、緑色岩、砂岩が少量加わっている。

珪質頁岩Bでは、第1ブロック・第6ブロック珪質頁岩B2、第4ブロック珪質頁岩B7・B9の同一母岩資料、接合資料があり、母岩消費が集中的に行われている。亜角・不整形梢円礫の河床転石を原石としており、原石の平坦面、節理面を利用して分割した平坦面を打面に設定し、この平坦面を挟む稜線（小口方向）から左右に打点を移動し、直線的に後退して石刃状剥片などの継長剥片指向の強い剥片を作出する剥離手法が特徴的である。この剥片剥離手法では打面転移、打面更新、打面調整が行われず、剥片剥離面側の頭部調整により打角を調整して、同一打面から数回の剥片剥離で剥片作出が終了している。それぞれ単独製品であるナイフ形石器、台形様石器は、少量石材の黒色安山岩を石材として遺跡内での母岩消費が認められず搬入品として持ち込まれている。ナイフ形石器は継長剥片を素材として基部両側縁細部調整があり、平面形状は先端部が丸みを帯びて蝶状の台形様石器に近い。台形様石器は横長剥片素材の端部の切削面に細部調整が施され、平面形状は逆三角形状を呈している。台形様石器が検出された第5ブロックでは、台形様石器とは別母岩の黒色安山岩製の残核が存在する。この石核は求心的な剥片剥離手法が特徴的で、台形様石器の素材となる幅広剥片を生産する典型的な形態を示すが、同一母岩からの台形様石器は検出されていない。少量石材の緑色岩は局部磨製石斧の母岩となっている。第1ブロックの緑色岩1では局部磨製石斧と局部磨製石斧調整剥片の接合資料があり、刃部更新の器体リダクション過程で器体横方向からの抉り込む剥離により刃部再生することなく器体を遺棄している。緑色岩では局部磨製石斧調整剥片が他に2母岩あり、局部磨製石斧の小規模な刃部再生が行われていたことが看取される。他には局部磨製石斧と考えられるドレライト石材の接合資料とホルンフェルス石材の資料が存在するが、いずれも器体刃部側を大きく欠損し、器体の基部側を遺棄している。ホルンフェルス、黒色頁岩、安山岩からは石斧類（打製石斧）の製作過程を示す接合資料が第2ブロック・第6ブロックに存在する。ホルンフェルス製の打製石斧は扁平長梢円礫を素材とした長撮形の形態を示す。黒色頁岩、安山岩の資料は棒状礫、扁平礫を素材とし、石斧としてはやや細身の特異な形態をしている。いずれも研磨痕が認められないため打製石斧としたが、石斧製作初期段階で器体が分断されており石斧未成品なものである。打製石斧の石材となっているホルンフェルス、黒色頁岩、安山岩は万田野・長浜層産の構成石材と考えられ、河川の氾濫等で開析、集積された河床礫、河岸段丘形成礫層からの供給が想定され、遺跡近傍で採取が可能であったと考えられる。ただし、現況の万田野・長浜層の礫層でも石斧類で利用されるホルンフェルス、黒色頁岩、安山岩類の構成割合は少なく、石斧製作に適した素材形態の長身梢円礫・扁平礫はさらに希少であったと思われる。そのため石斧という機能に合致した石材であれば、多少形態的に適合しない細身や棒状の素材でも石斧製

作を試みたのではないだろうか。そうした意味では本文化層の石斧製作は試し割り的な製作と評価される。

第Ⅰ文化層はこれら諸要素をもつ石器群である。産出層位はX層上面～IX層に及び、IX層下部（第2黒色帶下部）に集中している。器種組成では黒色安山岩製の台形様石器、基部整形のナイフ形石器と局部磨製石斧が特徴的に検出されている。また、嶺岡山地産の珪質頁岩により石刃状剥片が生産されていることも特徴的である。

台形様石器と局部磨製石斧を指標とする時期のまとまった石器群では、現在までのところ千葉県内において最南部で検出された石器群と評価できる。当該期の石器群が多数検出されている下総台地北部の遺跡と石材利用の面などから一概に比較することはできないが、第Ⅰ文化層の石器群は千葉県下で環状ブロック群が盛行する時期（IX層下部段階）と位置付けておく。

## 第Ⅱ文化層

第11ブロック～第14ブロックが帰属する。石材構成は黒色頁岩、チャート、珪質頁岩Bが主体を占め、これに少量の砂岩、黒曜石、黒色安山岩、珪質頁岩A、ホルンフェルスが加わる。

主要な石材である黒色頁岩は小円礫を素材として楔形石器や両極技法による剥片を生産しており、チャートはやや大きめの円礫を素材として両極技法により剥片類を生産している。砂岩の石材では両極技法の石器群で特徴的に伴う凹石状台石と敲石を兼用した石器が検出されている。少数石材の黒曜石からは信州産と思われる良質な石刃・縦長剥片素材を用いたナイフ形石器が製品として搬入されている。第13ブロックには「チョコレート頁岩」とよばれる良質な頁岩が存在し、表裏面にポジティブ面が看取され、器体刃部を小口面から斜めに切り取り、刃部リダクションの削片と考えられる資料が存在する。また、ホルンフェルスを石材とした打製石斧未成品とした資料は、半裁縫側面に両端部からの細長剥離痕が看取され両極技法による剥離痕としたが、原礫面と分割面に挟まれた小口面からの剥片剥離とすれば剥片素材の石核とも考えられる資料である。

第Ⅱ文化層はこれらの諸要素を持つ石器群である。産出層位はVII層上部～VI層に及んでおり、VII層上部に集中するブロックとVI層に集中するブロックがあり、ブロック間で同一母岩資料がなく石材組成も混在することから、同時期に形成されていないことも考えられる。

小円礫素材から両極技法により楔形石器を生産する剥離技法は「遠山技法」に代表されるVII層段階に認められる石器群であり、刃部リダクションや小口面からの細長剥片剥離を示す資料からは「千田台技法」も看取される。さらに信州産黒曜石を石材とした石刃・縦長剥片素材のナイフ形石器はVI層段階で多出する資料である。第Ⅱ文化層は、こうした様相からVII層段階～VI層段階の幅のある時期を考えておきたい。

## 第2節 繩文時代以降

本節では、東上泉遺跡を中心に時代ごとの遺構検出傾向について、簡単にまとめることしたい。

今回の調査では繩文時代に該当する遺構は検出されなかった。遺物の出土量も少なく、早期条痕文期の土器片が数点出土したのみであった。平成13年度調査においては、陥穴5基、炉穴3基が検出され、遺物としては早期の燃糸文期、沈線文期、条痕文期と前期の土器が僅かに出土している。遺構の分布は希薄で、文脇遺跡や清水井遺跡など、沖積低地に面した平坦な台地上に立地する遺跡に共通する検出傾向を示している。これに対しても、東上泉遺跡の北東500mに位置する上用瀬遺跡では、標高が東上泉遺跡よりも40mほど高い尾根状の地形であるにもかかわらず、陥穴7基、炉穴77基が検出されており、繩文時代早期の遺

跡立地を理解する上で対照をなしている。

東上泉遺跡・文脇遺跡の中心的時代が、弥生時代後期から古墳時代前期である。今回の調査でも東上泉遺跡から21軒の堅穴住居跡が検出された。これら堅穴住居跡の時期を大別すると、弥生時代後期末葉2軒（SI-006・010）、古墳時代前期初頭1軒（SI-001）、前期前半11軒（SI-002・003・003・004・007・008・009・011・015・016・019）、前期後半3軒（SI-013・017・018）、詳細時期不明4軒となる。平成13年度調査分と合わせると、弥生時代後期末葉2軒、古墳時代前期初頭22軒、前期前半27軒、前期後半4軒、詳細時期不明32軒となる。東上泉遺跡では、遺跡範囲の北側部分のみで発掘調査が行われているため、遺跡の全体像が必ずしも明らかとなつたとは言えないが、これまでの成果から、弥生時代後期末葉になって集落が営まれ始め、古墳時代前期初頭から前半にかけて集落規模が拡大していく様子を見て取ることができる。このような集落の消長傾向は文脇遺跡においても確認することができ、弥生時代中期に出現した集落が、後期前半には一旦見られなくなり、後期後半になって再び集落が営まれ、大規模化するようである。近接する清水井遺跡から弥生時代後期前半の遺構と遺物が検出されていることから、東上泉遺跡においても沖積低地に面した遺跡南側に当該期の集落が存在する可能性も考えられるが、現段階では不明と言わざるを得ない。このような大規模化した弥生時代後期後半から古墳時代前期前半の集落も、いくつかのグループにまとめることが可能で、各グループ間には集落の展開しない空間が存在するようである。今回報告した文脇遺跡（8）はこのような場所に相当し、東上泉遺跡と境を接した空白地帯であったと考えられ、周辺の畠地においても、ほとんど遺物の散布は認められない。

このほかの遺構としては、土坑36基、溝9条が検出された。出土遺物が少ない中でも、中・近世陶磁器や北宋銭が出土していることから、遺構の時期は概ね中・近世の所産と考えられる。土坑は形態的に3つに分けることができる。方形・長方形のもの（SK-007A・B・C・D・008B・009・011・012・013A・B・014・016A・B・C・017・018・019・024・025・026・027・028）22基、円形・楕円形のもの（SK-001・002・003・005・006・008A・015・020・021・022・029）11基、不整形のもの（SK-004・010・023）3基である。このうち方形・長方形のものは、SK-007・014・024から北宋銭や釘状の鉄製品が出土しており、墓坑として使用されていた可能性が指摘できる。溝跡は北東から南西に向かうもの（SD-001・002・003・004・008）、北西から南東に向かうもの（SD-005A・B）、コの字型・L字型に曲がるもの（SD-006・007）に分けることができるが、いずれも畠地などの区画をなす溝で時期的にも近いものと思われる。なお、土坑との関連は不明であるが、SK-012がSD-006に切られていることから、溝跡の方が新しい可能性がある。

#### 【東上泉遺跡・文脇遺跡発掘調査報告書一覧】（上泉遺跡・上ノ山遺跡を含む）

- ・加藤正信 1991 「袖ヶ浦町上泉遺跡・永地遺跡」 財團法人千葉県文化財センター
- ・山本哲也 1992 「文脇遺跡」 財團法人君津都市文化財センター
- ・四柳 隆・加藤正信 1993 「袖ヶ浦市上泉遺跡」 財團法人千葉県文化財センター
- ・加藤正信・大谷弘幸 1995 「袖ヶ浦市文脇遺跡」 財團法人千葉県文化財センター
- ・中能 隆 1998 「上泉遺跡群上ノ山遺跡」 財團法人君津都市文化財センター
- ・渡邊昭宏 1999 「袖ヶ浦市上泉遺跡」 財團法人千葉県文化財センター
- ・光江 章・竹内順一 2005 「文脇遺跡第2地點」 財團法人君津都市文化財センター
- ・倉内郁子ほか 2007 「主要地方道千葉鴨川線埋蔵文化財調査報告書5—袖ヶ浦市東上泉遺跡・神野台遺跡」 財團法人千葉県教育振興財團
- ・土屋治雄 2008 「袖ヶ浦市花和岱塚・文脇遺跡」 財團法人千葉県教育振興財團
- ・高梨友子ほか 2017 「袖ヶ浦市文脇遺跡（中・近世編）」 千葉県教育委員会
- ・大谷弘幸ほか 2019 「袖ヶ浦市文脇遺跡（旧石器時代～奈良・平安時代編）」 千葉県教育委員会



# 写 真 図 版





遺跡周辺航空写真 (1 : 10,000)



H23年度調査区（南東から）



H23年度調査区（南から）

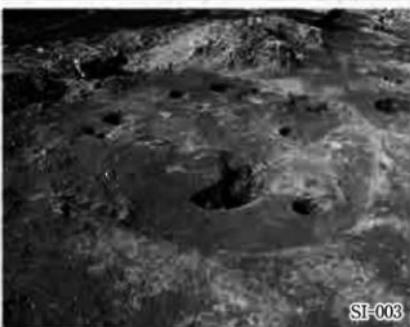


H23年度調査区全景（1）



H23年度調査区全景（2）





図版6

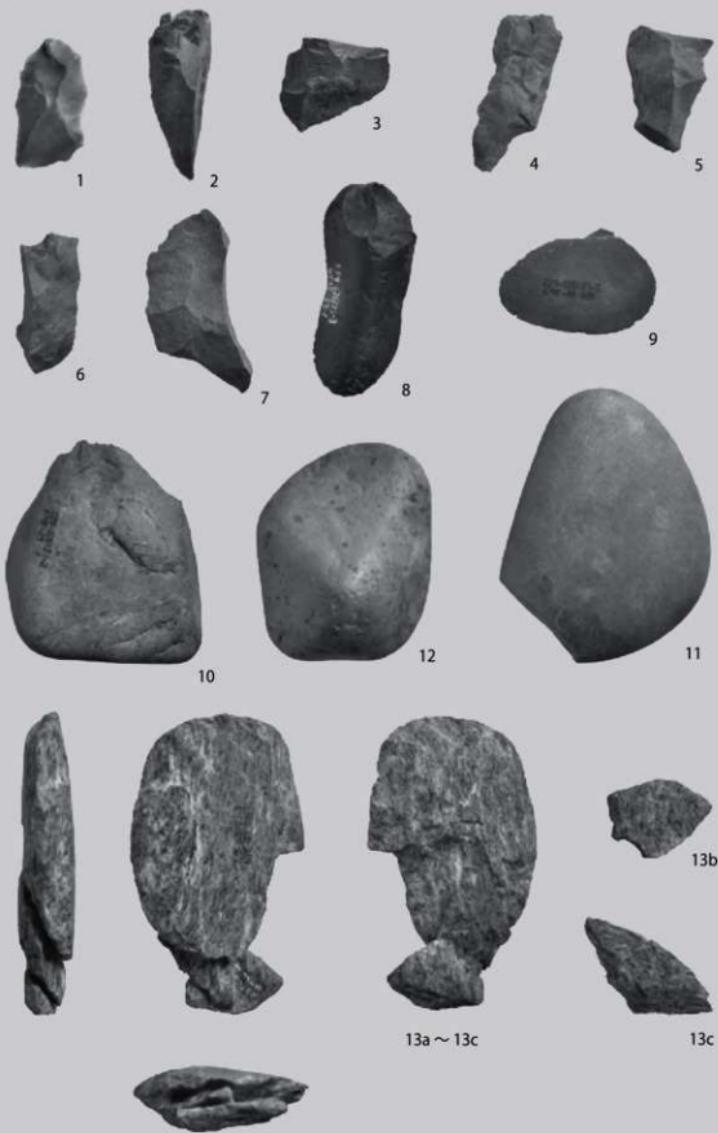








1 ブロック



旧石器時代石器（1）

1 ブロック



13a



14a + 14b



14a

2 ブロック



1



2



3



4



6



5



7

8



9



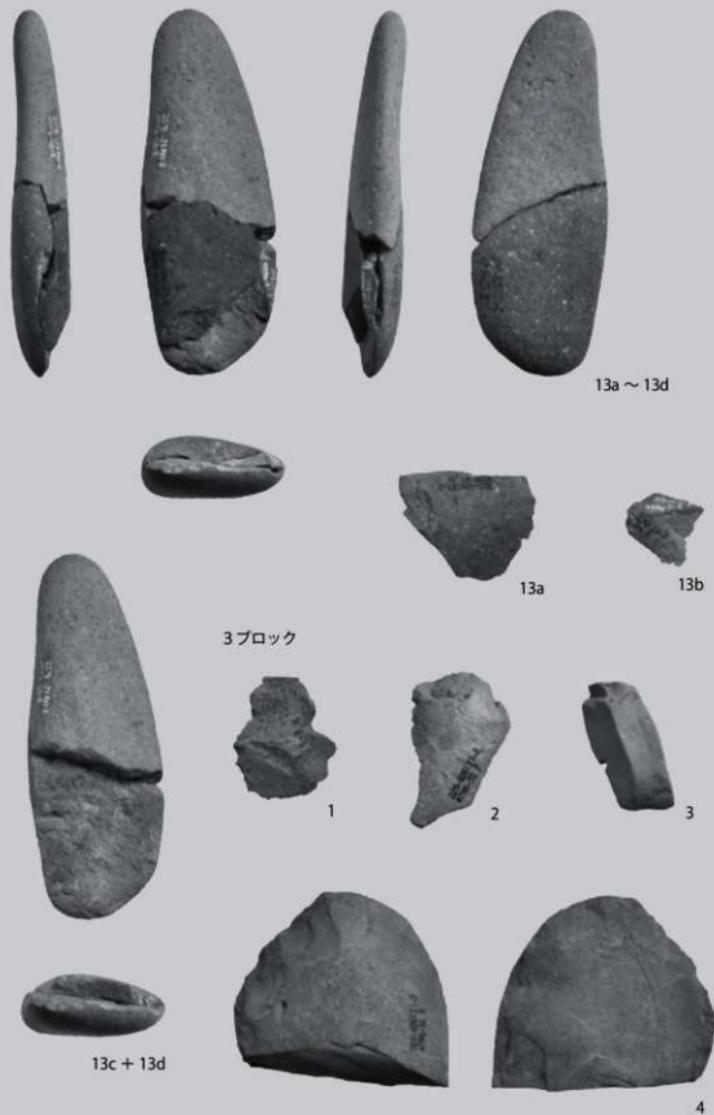
10a ~ 10c



旧石器時代石器（3）

2 ブロック





旧石器時代石器（5）

## 4 ブロック

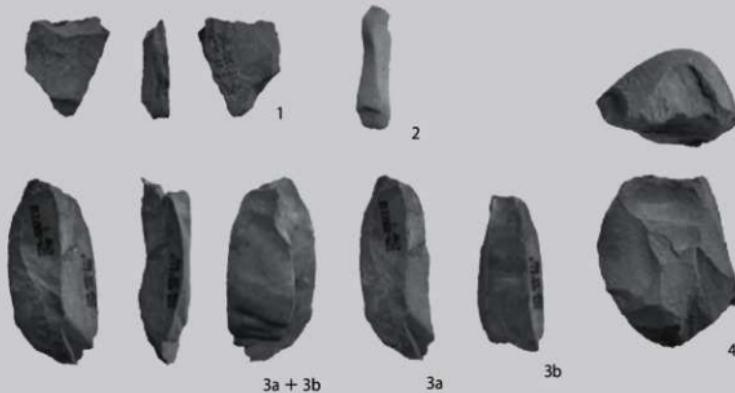


旧石器時代石器（6）

4 ブロック



5 ブロック



旧石器時代石器 (7)

6 ブロック



3a + 3b



1



2



3b



3a



4a～4e + 8(1 ブロック)



4a



4b



4c

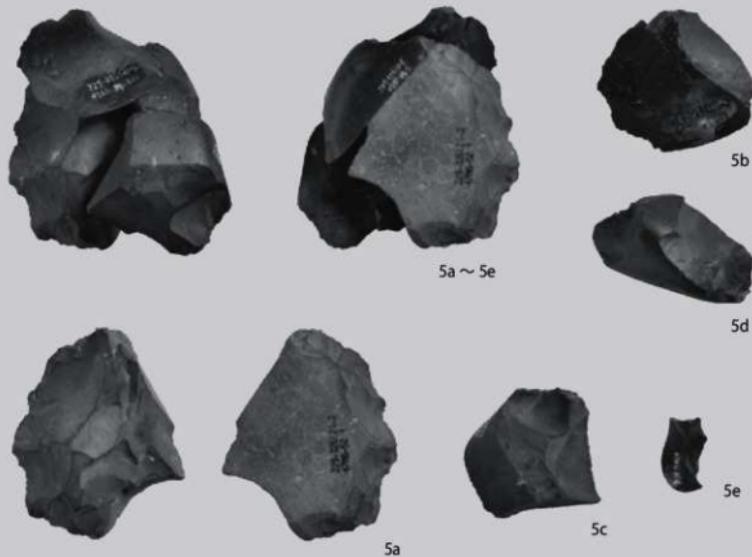


4d

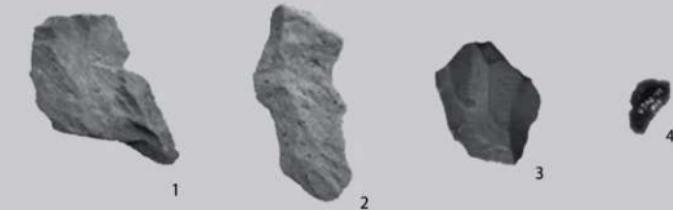


4e

6 ブロック

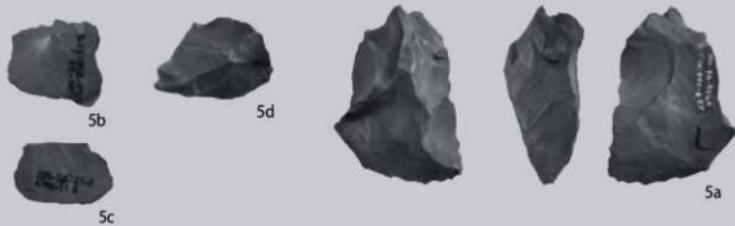


7 ブロック



旧石器時代石器 (9)

## 7 ブロック



## 8 ブロック



## 10 ブロック



## 単独出土石器



## 11 ブロック



## 12 ブロック

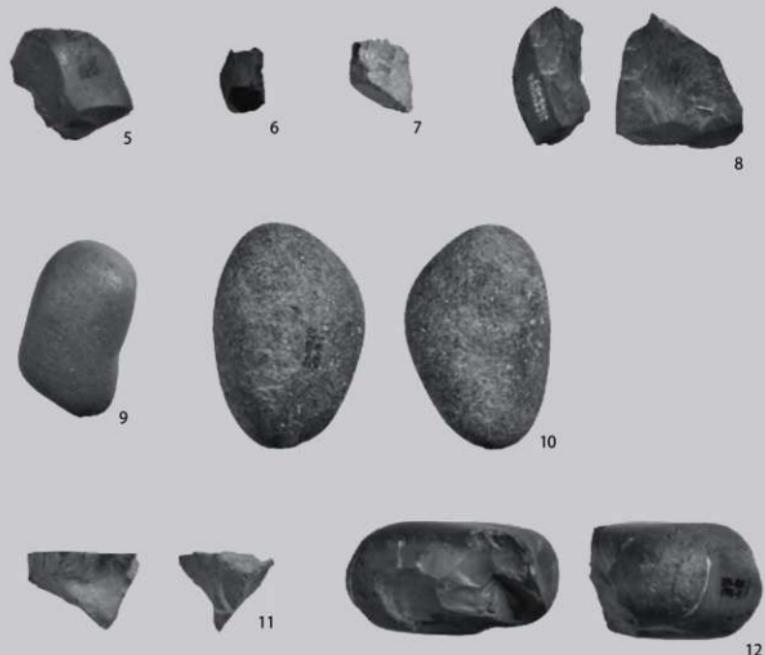


## 13 ブロック



旧石器時代石器 (10)

13 ブロック



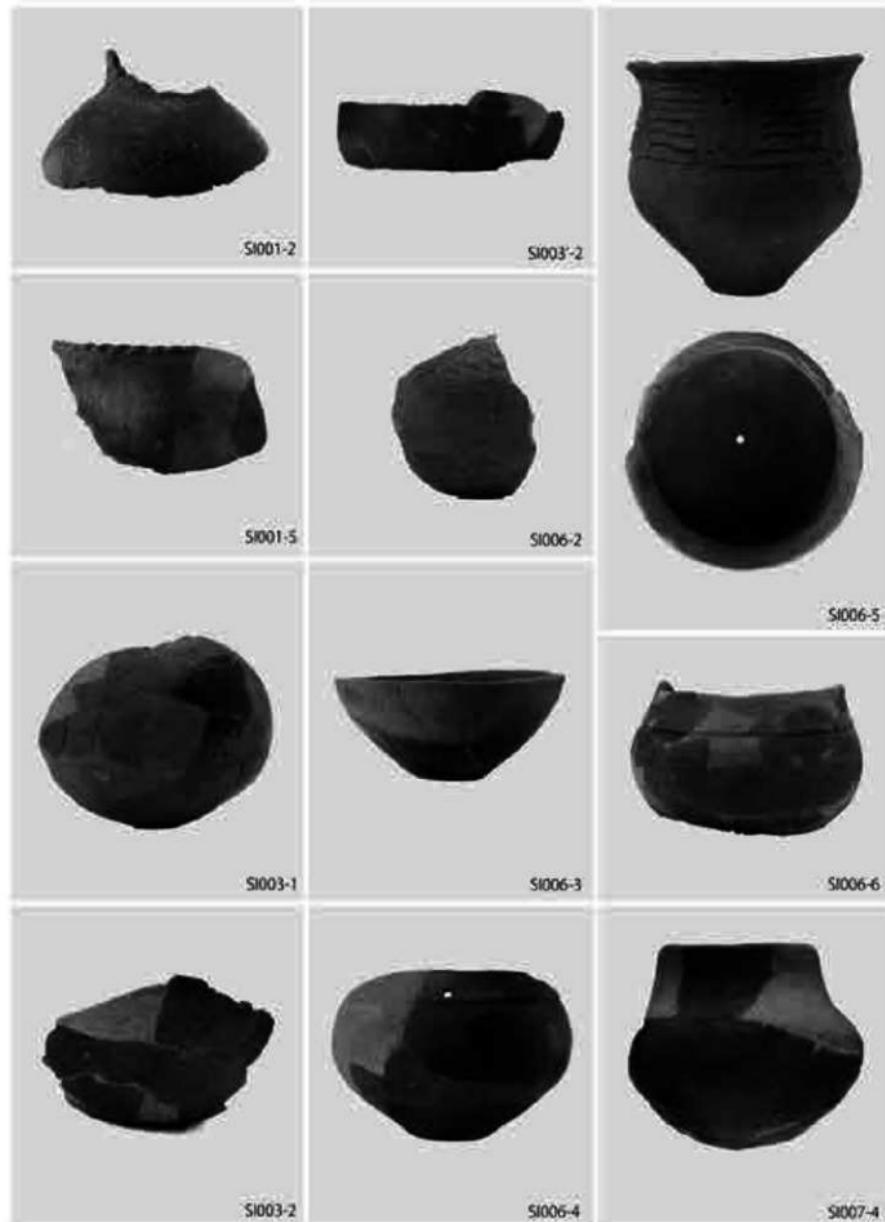
14 ブロック



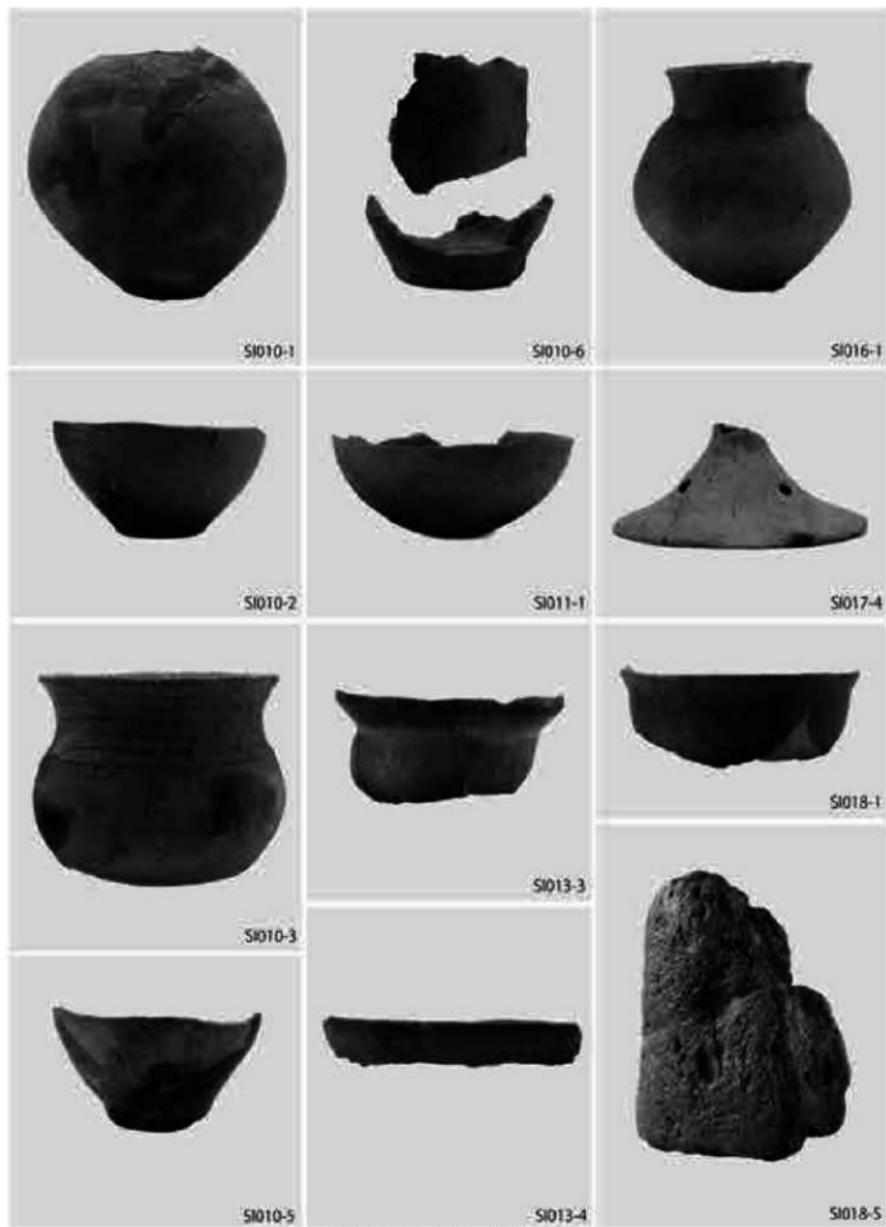
ブロック外出土石器



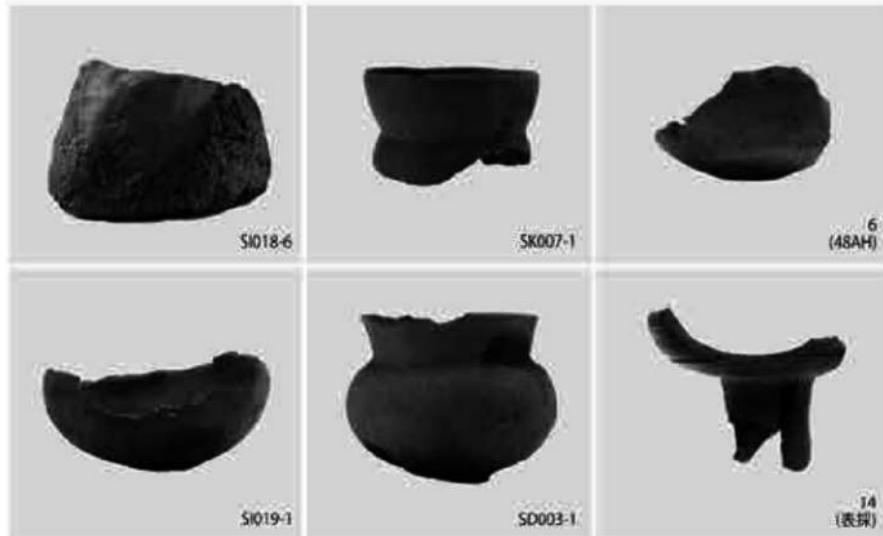
旧石器時代石器 (11)



上層出土遺物（1）～遺構出土～



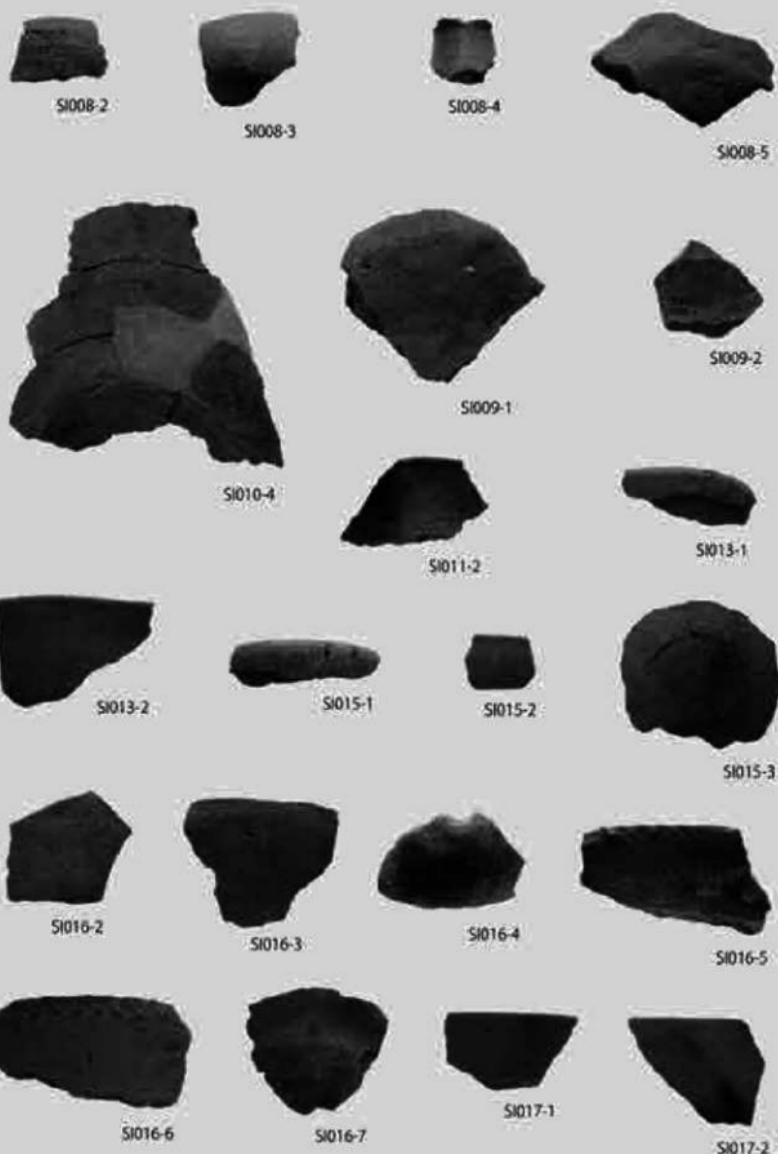
上層出土遺物（2）～遺構出土～



上層出土遺物（3）～遺構・遺構外出土～



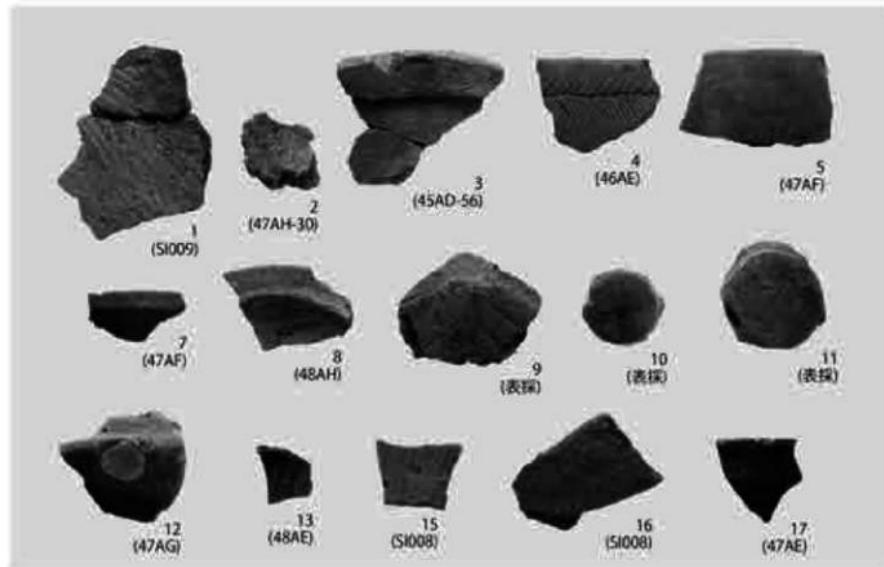
上層出土遺物（4）～遺構出土～



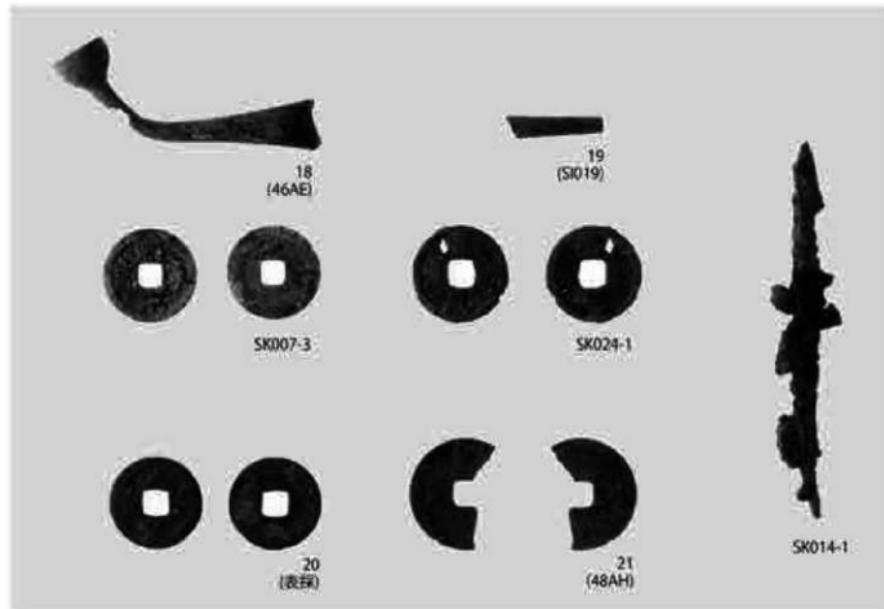
上層出土遺物（5）～遺構出土～



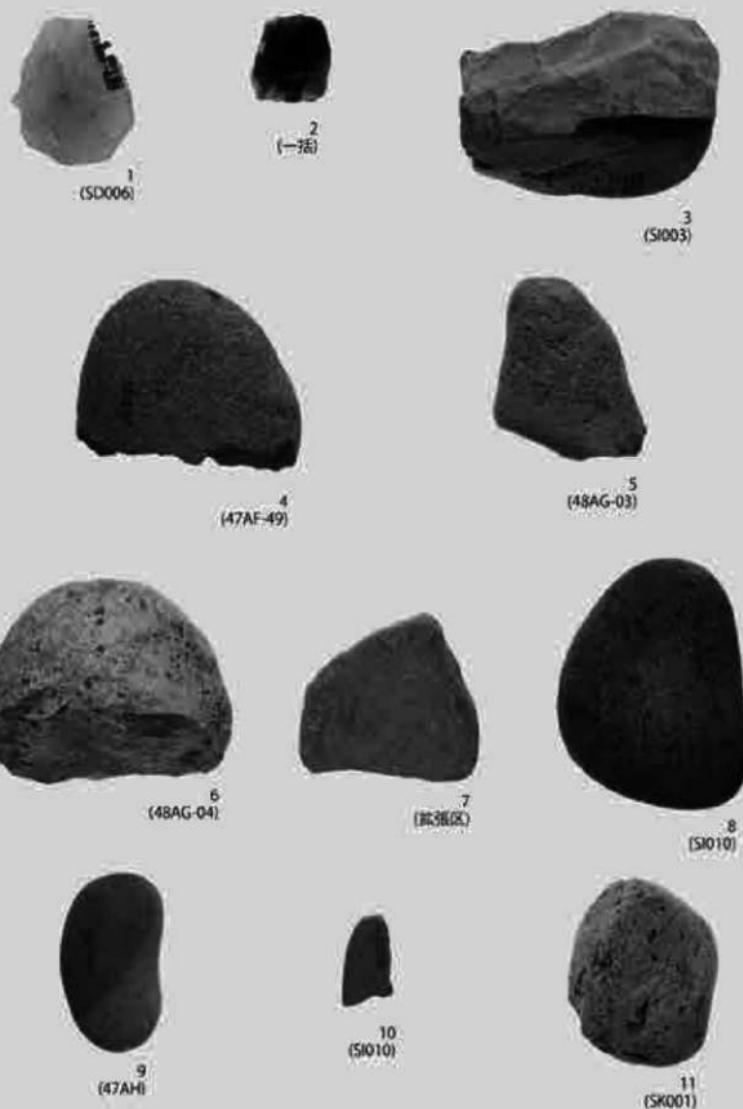
上層出土遺物（6）～遺構出土～



上層出土遺物（7）～遺構外出土～



上層出土遺物（8）～金属製品～



上層出土遺物（9）～石器～



第1 トレンチ（西から）



第6 トレンチ（北西から）



下層第1グリッド断面（南から）



## 報 告 書 抄 錄



千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第33集

**袖ヶ浦市東上泉遺跡・文脇遺跡**

—主要地方道千葉鶴川線（袖ヶ浦市高谷）県単道路改良事業  
埋蔵文化財発掘調査報告書3—

---

令和2年2月28日発行

編集・発行 千葉県教育委員会

千葉市中央区市場町1-1

印 刷 株式会社 弘文社

千葉県市川市市川南2-7-2

---



